
砂漠の薔薇

望月満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の薔薇

【Nコード】

N4037I

【作者名】

望月満

【あらすじ】

砂漠の薔薇を巡る旅の物語、第一弾。11人の少年少女らの旅の始まりと目的を描いた小説。

scene 1

——真実と虚構。信賴と裏切り。
それらはすべて、裏表——

*

*

*

桜が、舞った。

月光の光を浴びて輝く薄紅色の花弁は、瞬いた刹那あつという間に夜闇へと溶けてしまふ。

濃密な闇は、全てを吸い込んでしまいそうなほど深く、そして恐ろしい——。

「夜桜も、悪くないですね——」

吹きわたる風のように涼やかな声が、夜闇の静寂を突き抜けて凜と響いた。

「それに今日は、とても満月が美しいです」

涼やかな声の主はそう言つと、見ている者がうつとりするほど美しい微笑を整った顔に浮かべた。

夜の光を支配する月のように美しい蜜色の髪と、同色の瞳を持つ十代後半ほどの少女は、誰がどう見ても美少女というであろう顔立ちであつた。

その少女は、藍色の地に大輪の水色の花が描かれた振袖を、ふりそで金魚の尾を思わせる真っ赤な帯でしばって着ていた。その美しい蜜色の長髪は、シニヨンに結びあげられている。

少女が今いるのは、石を組んで造られた幅広い道。その隅に置かれた木造りのベンチの上に少女は座っている。石畳の道の両脇は、

ひしめき合うようにして咲く満開の桜の木に埋められているため、見晴らしはあまりいいとはいえない。桜は少し風が吹くだけで、連鎖するように枝々を揺らし大量の花弁を舞い散らせる。その度に、道は艶やかな薄紅色に染められてゆく。

「桜咲く春は、素敵な出会いがある……。そうでしたよね——？
海棠……」

少女は独り、天空を仰いだ。

この地全土を照らす月が、少女を見返していた。

美しく風に舞う桜が、少女の視界で踊っていた。

全てを覆い隠すほどの闇が、少女の瞳を淡い黒に染めていた。

*

*

*

——逃げて。生き延びて……。

たとえ、すべての希望が消えたとしても……。

私はずっと、貴方の味方だから。

満月の明るい夜。一人の少女が、木々の生い茂る森の中を走っていた。

「逃げる……。逃げる……」

絶え間なく荒い息を吐く少女は、自分に言い聞かせるように呟く。

「走れ……。走れ……。こんなところで、立ち止まるなあっ！」

絶叫と共に少女の足はスピードを増す。

しかし——

「っ！」

スピードが上がった足は限界に達していたのか、無情にもあつさりと縋れてしまった。そのまま少女は抗うこともできず、呆気なくその場に倒れる。

「くそっ……。立ちあがれ……。立て……。立つてくれ……。立たせてくれ……！」

土埃に汚れた少女は叫ぶ。

少女の声は、虚空に吸い込まれる。まるで周りの闇が、静寂を守らんとしているかのように。

そんな虚しい少女の叫びに答えたのは、

『ターゲット発見。ただちに生きたまま捕獲せよ』

茂みから出てきたヒトビトの、機械的な声だった。

「畜生……。もう、来やがったの、かよ……」

うつ伏せで倒れている少女は息も絶え絶えに呟くと、口を小さく開いて酸素を身体に取り込んだ。

機械的な声を発したヒトビトは、倒れている少女の周りをすばやい動きで取り囲み、虚ろな瞳で少女を見下ろした。その数、ざっと三十二人ほど。

荒い呼吸をつづける少女はヒトビトの視線も気にせぬまま、一度大きく深呼吸をした。

「……大丈夫。今なら暴走せずに、使える……」

色も大きさも違う約六十個の瞳で見つめられる中、少女は土で汚れた服もそのままにゆらりと立ち上がった。そして、自分の周りを取り囲んでいるヒトビトをその碧眼で^{へきがん}見渡し、

「光たちよ！ この者たちを切り裂きなさい！」

右手の人差し指をぴんと前に突き付けると、その張りのある声で鋭く叫んだ。

刹那——惨劇が幕を上げた。

s c e n e 1 (後書き)

s c e n e 2 (前書き)

残酷描写があります。お気を付け下さい。

scene 2

空気が、揺らぐ。

水面が風^{みなも}に吹かれて波紋を広げるように、その場の空気が揺らいだ。

それまで枝葉のざわめきを作りだしていた風は沈黙し、辺りは静寂に包まれる。

空気を揺らがせたのは、少女の周りを浮遊している無数の青白い？ヒカリ？の筋。

そのヒカリの正体は、不明。

次の瞬間――

ヒカリの筋が、一人の少女を取り囲む数十人のヒトの軀^{カラダ}を、まるで刃物で切るかのようにあっさりと引き裂いた。ヒカリは残像を残しながら、鮮やかに弧を描く。

そのヒカリは、神秘的でありながら、とても残酷。

蒼い尾を空に引きながら、次々にヒカリはヒトの軀を切り裂く。

一番若いモノで十歳そこそこ、最年長でも二十歳^{はたち}ほど。性別も体格や背丈もすべてがまちまち。

ヒトビトはヒカリによって、腹を切られて血を流し、腕がもがれ、目を抉^{えぐ}られ、両足を切断され、と色々な姿に変えられていた。皆に統一されている事といえば、真っ白い服装と、真っ赤な花を咲かせていることと、

――全く痛みを感じていない、ということだ。

人間の急所の一つである頸動脈^{けいどうみゃく}を切断されたり、軀を二等分にされたりして死んだモノも確かにいる。しかし――

生きているモノはみな、どんな傷を負おうと痛みを感じずに少女へと一歩一歩確実に迫っていた。

その姿は、まるでゾンビのようである。皆が着ている、真っ白な経帷子^{きよかたびら}が、余計に雰囲気を引き立たせている。

首から真つ赤な噴水を上げるモノの血が、少女とヒトたちに降り注ぐ。瞬く間に少女は、不気味な真紅に染め上げられた。

光の入っていない瞳孔の開いたような瞳を持つヒトはその目で少女を見据え、幽鬼の如くゆらりと迫ってくる。

「痛みを感じない兵士、か。気色悪い目やしやがつて」

少女は辛そうに顔を歪める。そんな少女の周りを、神秘的な蒼い光の筋が取り囲む。

「哀れだな。強大な力を得たいがために、？ほら吹きジジイ？に利用されてこんなモノにされちまうなんて……」

少女は呟くと、肺の中に空気を限界まで満たすかのように、大きく息を吸った。

肺を空気で一杯にした少女は、すつとヒトたちを見据え、

「ヒカリたちよ。残った者たちをまつ——！！」

？ヒカリたちよ。残った者たちを抹殺しなさい？と言おうとした。しかし、

「……っ！」

右脇を過ぎつた疾風と、右腕に走る焼けつくような痛みによって、それは妨害された。

疾風の正体は、少女の目の前から後方へと駆けたヒトだった。

そのヒトは、少女の数メートル背後に立つ十代半ば程の少年。手には食用ナイフほどの大きさの、殺人用小刀が握られている。その刀身は光の反射を防ぐために黒く塗られ、先からは赤黒い血を滴らせていた。

「く、そ……」

少女は顔を歪めながら、右上腕部を左手で押さえる。右腕と左手の間から、細く流れ出すのは赤黒く、鉄臭い液体。

少女の身体がぐらりと揺れ、足がふらつく。慌ててよろめく足を踏み止め少年から視線をそらした刹那、

「がはっ……！！」

先ほど少女を切りつけたヒトが背後から、少女の右腕に深く深い傷を付けた黒いナイフを投げたのだ。ナイフは少女の左脇腹を深く抉り取る。

「つく……」

少女の目には痛みによつて、うつすらと涙が浮かんでいた。その涙を拭う素振りも見せず、少女は鋭い眼光でヒトを睨みつける。

「ヒカリたちよ……。今すぐ、こいつらを抹殺しろおお!!」

なけなしの力を振り絞り、息も絶え絶えに少女は虚空へ向かつて叫んだ。

*

*

*

森の何処かで、梟が籠ったような鳴き声を上げた。

風が強く吹きわたり、森の葉をさわさわと揺らした。

ヒカリに抹殺されたヒトたちは全員、真っ赤な薔薇を咲かせながら地面に倒れていた。

「——もうすぐ、嵐のような出会いが始まりそうですね」

桜並木の下で、蜜色の少女は妖艶に微笑んだ。

「……い、てえ。くそつ。……このままじゃ、出血多量で……」

血に塗れた少女は口からも血を吐きながら、今にも倒れそうなほどフラフラとした足取りで、月の光さえとどかない暗黒の森の中を歩んでいた。

出会いの時はもう、すぐそこまで訪れている——。

s c e n e 3 (前書き)

古森凜様のアドバイスより、全体的に修正させていただきました。
古森様、ここで改めてお礼を言わせて頂きます。

scene 3

瞼^{まぶた}を閉じ、暗き虚空を仰いでいた蜜色の髪と瞳を持つ少女は、ふつと目を開けた。

淡く光を発する月は相変わらず、空に浮かぶ。

「——来ますね」

少女は呟くと、それまで座っていた木のベンチからゆっくりと立ち上がった。振袖特有の、長い袂^{たもと}が少女の動きに連動して揺らめく。その袂が、正位置におさまった時、ふいに葉と葉が擦れ合う小さな音が、少女の前方の茂みから上がった。音に反応した少女がそちらを見つめる中、音と共に現れたのは、

「っ……。た、すけ、て——くれ……」

血まみれの少女だった。

少女の足はふらりと力なく揺れ、そのままその身体をどん、と右側に立つ桜の木にぶつける。少女の息は荒く、目も生気がなく虚ろ。少女は力なく木に寄りかかったまま、下へと崩れ落ちてしまった。手触りの荒い茶色をした桜の幹に、少女の右腕から溢れる粘度の高い血糊^{ちのり}が、身震いをしてしまうような気味の悪い跡を付ける。華麗な美しい桜と幹に塗られた奇妙な赤は、アンバランスな色彩を放つ。「——とても大変な？ 出会い？ に遭遇してしまったようですね」

蜜色の少女は言葉と共に、血に濡れた桜の元へ向けてゆっくりと歩み出した。少女は、双眸^{めづほう}をスツと細めながら、倒れた少女を見つめる。女の子にしては短い栗色の髪と、滑らかな肌質をしていた。丈が長く生地の薄いぼろ布のような灰色のＴシャツと、七分丈の色あせた藍色のズボンをはいている。首には、ベージュのいたって綺麗な布が巻かれていた。

「見たこともない、服装ですね」

少女の傍ら^{かたわ}へ着いた振袖の少女は、倒れている少女の服装を首をかしげて物珍しそうに見回す。

「あつ。いけません、いけません。まずは、この子を助けなければ
いけません」

倒れてしまった少女は、どうやら気絶しているようだ。口から血
が溢れ、右腕と左脇腹からも血を流している。

少女は今すぐ助けなければ大量出血で死んでしまう可能性が大き
い、大変危険な状態であつた。

*

*

*

ヒトをすべてヒカリの筋で倒した少女は、ふらつく身体を無理や
り前に進ませていた。

「くっ……。本当に……。ボクは、ここで、終わる……。の、か」

少女は閉じかけの瞳で、前を見つめる。景色は歪み、頭の中で正
常に認識できない。

「——死にたく、ない。……。でも、も、う……。ダメ、か……」

少女がそう呟き、歩むことを、前に進むことを、助かることを、
生きることを、諦め^{あきら}めようとしたときだつた。

「……っ」

視界に、淡いピンクが小さく塗られた。そして、前方数メートル
先に美しく咲き誇る、桜の木々がその瞳に映し出され——

少女の記憶の中で、緑眼と金髪を持つ美少女が桜の花弁が舞う浜
辺で綺麗に微笑む姿が鮮やかによみがえつた。

*

*

*

「っー」

真つ暗な部屋に敷かれた雪のように白い布団ふとんの上で、飛び跳ねるようにして少女は起きた。そして、

「――っ痛う」

同時に横腹に走った激痛に暫し悶絶しほもんぜつし、両手で患部を押さえた。

「動いテはいけない、アルよ。安静二する、アル」

「!？」

少女の近くで唐突に声が上がった。機械的で、不自然な言葉遣いと声に、はっと少女は後ろを振り返る。そしてまた、

「っぐう……」

痛みに呻くこととなった。

「貴殿きでんは、生ト死の間を彷徨さまようホどの、大きな怪我を負っていた、アルよ」

そう言った声の主は、痛みに呻く少女の前へと歩いて来た。

肩甲骨けんこうかくくらいまで長さがある艶つややかなクリーム色の髪と、透き通る碧眼へきがんをした十歳くらいの少女だった。浅葱色あさぎをした紬つむぎを、紺色の帯しほで縛しばって着ている。

「そ、そうか……。ところで、お前は今までボクの枕元にずっといたのか？」

「そう、アルよ。それが、何、アルか？」

幼い少女は首をガクンと傾かしげ、布団の上で上半身だけを起こしている少女の瞳をじっと見つめる。布団の上の少女は、その視線をしっかりと受け止める。

視線をぶつけ合ったまま、布団の上に座る少女がゆっくりと口を開いた。

「――お前には何故気配きはいがない？」

その問いに、幼い少女は首を傾げたまま、すっと目じりを窄すぼませて笑顔を作った。

「それは――」

scene 4

「私が、アンドロイドだから、アルよ」

「あ、あんどろいど？」

かなり不可思議な発音で、その聞きなれない言葉を少女は言った。
「って、何だ？」

少女の問いに、アンドロイドの少女はにっこりとしたまま答える。
「アンドロイドとハ、人間を模して造られたロボットのコと、アルよ」

「……サイボーグの事か？」

「サイボーグとアンドロイドは違う、アル。改造人間は、人間の臓器の一部を使って造り出しタもの、アルね。人造人間は、身体すべてを機械などの人造物で造られたもの、アルよ」

「……まあ。そんなことは今はどうでもいい。それよりも、ボクを助けてくれたのは、お前か？」

「違う、アル。今から、貴殿を助けた主様を呼んでくる、アルよ」

「ぬ、主様……？　じゃあ、その人がボクを助けてくれたんだな」
立ちあがり、部屋を出て行こうとしていたアンドロイドは、少女の言葉にゆっくりと首肯する。そしてすぐ近くにある、優雅に舞う鷹が描かれた大きなふすまを静かに開けて出て行った。

ふすまを開けた瞬間、真っ暗な部屋に明るい白の光が細く差し込んだ。が、すぐに消える。

「一体、ここは……？」

部屋に一人取り残された少女は、ゆっくりと周りを見回した。

少女が今いるのは、畳敷きの広い部屋。大広間、と言っても良いであろう広さだ。

布団の上に座る少女の数メートル先の正面には、十数メートルにも及ぶ障子が連なり、背後には先ほどアンドロイドが出て行ったふすまが障子と対称になるようにして十数メートル並ぶ。装飾品は、

少女の右側の壁に掛けられた水墨画の掛け軸だけ。飾り気のない、しかし畳も障子もふすまも掛け軸も、高価な物ばかりを使っている広い部屋であった。

真っ白い障子の紙から透けて入ってくる光は、冴え冴えとして青白い。時間帯はどうやら、夜明け前ほどのようだ。

「見慣れない造りだな。それに、さっきの？ あんどろいど？ とかい奴の服装も珍しかったな……。まあ、無理もないか。此処はボクの国じゃない。——ここは、ボクには右も左も分からない外国なんだ」

少女は物悲しげにポツリと呟き、その真っ直ぐで美しい碧眼を閉じた。

暫く少女はそのまま、何かを思考しているようだった。やがてゆるりと瞼を開き、傷が痛まない程度の速さでゆっくりと振り返る。

刹那、

「傷の具合はどうですか？ 娘さん」

吹き渡る風のように涼やかな、凜とした声が光と共に現れた。

声の主——主様というらしい人物は、先ほどアンドロイドが出て行ったふすまから部屋に入ってきた。後光に照らされたその姿は、真っ黒なシルエツトでしか見えない。

「……お前が、主様とやらか？」

少女は光が眩しいのか、目を細めて主様を見つめる。

「そうです。——あ。光が眩しいですね？ 白胡。そちらの部屋の明かりを消してください。消したら貴方は下がっていいですよ」

「分かりました、アル」

パチン、と小さく指の鳴る音が響く。それと同時に、ろうそくの火が一瞬で吹き消されたかのように、ふっと隣の部屋の明かりが消えた。明かりが消えた部屋側から？ 白胡？ と呼ばれたクリーム色の髪を持つアンドロイドが、ふすまをゆっくりと閉めた。

「さてと。こちらの部屋の電気を付けても良いですか？」

主様の問いに、今までの出来事をぼうっと見ていた少女は、はっ

としたように答える。

「あ、ああ。ボクは、構わない」

「そうですか。では」

パチンツ。

軽やかな指の音と共に、二人の少女がいる部屋に柔らかな明かりが灯^{とも}った。

「……………っ」

暗闇に目が慣れていた少女は顔をしかめながらも、ゆっくりと目を光に慣らしていく。

やがて目が幾分か慣れた少女は、立っている主様を見るために視線を上げた。

「改めて、初めまして。私があなたを助けた者です」

少女の視線を受け止めた主様は、そう言った。そして、布団の上に座る少女が見上げなくてもいいように、体勢を低くし、畳の上に正座する。

少女はそんな主様を見、その美しさに暫^{しば}し呆^{あっけ}気にとられていた。

主様は夜桜と月を眺めていた、蜜色の少女だった。

「……………は、初め、まして」

主様の挨拶^{あいさつ}から僅かの間が空いた後^{のち}、少女はやつのことでそう言った。そして、

「………。ボクは、ボクの名前はシャノン。シャノン・アンヴィル。この国の東に隣接するアシュリー王国生まれだ」

シャノン、と名乗った少女は主様の蜜色の瞳を、自分の碧^{あお}い瞳でじっと見つめ返していた。

s c e n e 4 (後書き)

インターネットで調べたら、人造人間Ⅱアンドロイドになってるけど、人造人間って、ホムンクルスじゃないっけ？

scene 5

金髪金眼の主様はその整った顔をほころばせ、ゆっくりと口を開いた。

「私は、月倉^{つきくら}ユーフェミアと申します」

「ユーフェミア……？ ユーフェミアっていうのは、この国にもよくある名なのか？ ボクの国にもある名なんだけど……？」

眉を寄せたシャノンに、ユーフェミアと名乗った少女は微笑んだまま、首を横に振った。今は腰へ向けてストレートに下ろしている蜜色の髪が、さらりと揺れる。

「いいえ。違います。この国、瑞穂^{みずほ}の国で名を付ける場合は、主に漢字を用います」

「じゃあ、何であんたは名前がカタカナなんだ？ ……まさか？ ユーフェミア？を漢字で書くんじゃないやねえだろうな？」

「ええ。そうですよ？」

まるで「一足す一は二ですか？」という答えなど分かりきった問いに対し、平然と淡々と答えるようにしてユーフェミアは言った。

「……………」

しばしの沈黙。シャノンは顔をしかめて思考中。

「——というのは、冗談です」

「……………」。なあ、「冗談を真顔で言わないでくれ。本気^{マジ}で頭の中で？ユーフェミア？を漢字変換しちまったじゃないかよ」

シャノンの呆れた声に、クスクスとユーフェミアは笑う。

「私、貴女の国のアシュリー王国と、ここ瑞穂の国のハーフなんです。だから目と髪が金色なのです。金髪金眼は、そちらの国では少なくないでしょう？」

ユーフェミアの言葉に、シャノンはこくと頷く。

「確かに。ボクの国では、その色は珍しくない。ま、ボクみたいな栗毛の人にもいるにはいるけど」

シャノン^①は視線を上げて、その栗色の前髪を見つめた。髪が短い
ため、横から髪は見えない。

「そうなのですか。では、その碧眼^{へきがん}もそうなのですか？」

「ああ。蒼い瞳もボクの国ではよく——」

そこまで言ったときだった。

ふっとシャノンが発言を止め、警戒の姿勢をとる。瞬間的に身体
を緊張させたシャノンを見て眉をひそめたユーフェミアに、

「失礼！」

シャノンは急くようにして短く言葉を発し、ユーフェミアの背中
に腕を回すと、一気に布団の上に引き倒した。

「えっ！？ なっ——」

驚きと共にそう言ったユーフェミアの声に、風を切り裂く鋭い音
が重なった。

己の声をかき消したその音で事態を察知したユーフェミアは、黙
ってその場で息をひそめ、身体の動きの一切を停止させた。

「——大丈夫か？」

「ええ。私は大丈夫です。貴方は？」

「ボクも何とか。……傷がちよつと痛かったけど」

少しだけ顔をしかめたシャノンはちらりと視線を上げ、すぐ傍^{そば}
に設置された襖^{ふすま}を見た。

白く滑らかな手触りの生地を持つ襖には、鋭利な刃物が不気味に
白刃を煌めかせながら深々と突き刺さっていた。襖に刺さった反動
か、刃物はビブラートに似た音を小さく響かせながら上下に細かく
振動している。

シャノンは黙したまま慎重そうに、ふすまと対になって並ぶ障子
の方へと視線だけを動かした。

刃物が刺さっている反対側。そこには先ほどまでなかった大きな
穴が、一つだけあいていた。

「ユーフェミア。このままの体勢をキープしている。ボクは様子
を見ってくる」

「それは領けない話ですね」

「……ボクの身を案じているなら、必要ない。何故命を狙われているのかは知らないけど、自分を助けてくれた者を助けることは、おかしいことじゃないだろ」

「貴方はもっと自重しなさい。傷が痛むのでしょうか？ それ以上動けばどれほどの痛みに襲われるか分かっているのですか？」

必然的に、小声で二人は言葉を交わす。シャノン^{わす}は僅かに溜め息をつき、ユーフェミアの言葉に背いて自分が最初に言ったことを実行しようとした。――が、

「それに貴方が行かずとも、私を守護してくれる者くらいはいます」
ユーフェミアはうつすらと微笑んで、身体を動かした。起き上がろうとしているのだと察したシャノンは、先ほどのユーフェミアの言葉を信じ、すっと身を引いてユーフェミアが上体を起こせるようにした。

シャノンが布団の上で体勢を整えると共に、

「主様、ご無事ですか？」

女性のアルト声が、その場に響いた。

s c e n e 5 (後書き)

ユーフェミアの口調を変えたり、描写を足したりしたのでお手数ですが、a c t 0の最初から読みなおし頂けると嬉しいです。

s c e n e 6 (前書き)

ブハッ!!

やっと次話投稿ができます！

scene 6

声とともに、音もなく障子が開かれた。青白い光が、障子の隙間から部屋の中に滑り込む。

夜明け独特の涼やかな光とともに障子の向こうから姿を現したのは、

「主様を狙った敵は、抹殺いたしました。まだ刺客は数人いるかと思われませんが、すぐにでも退散するでしょう」

黒髪の少女だった。

艶めく長髪は、頭の高い位置で団子に結んでいる。わずかに憂いを帯びたような瞳も、スリムだが出るところは出ている身体を覆う服も、光を吸収しているかのように黒い。服は丈の短い無地の着物のようなもの。腰帯も黒く、容易に夜闇に溶け込めそうな服装である。

「……………」

シャノンはいきなり登場した少女と、その少女の服装を訝しむ。

少女は？くの一？の格好をしていたのだが、くの一など異国人のシャノンは知るはずもなかった。

「彩乃^{あやの}、ありがとうございます。シャノンさん、こちらは入江彩乃^{いりえ}です。彩乃は——私の守護をしてくださっている方です。彩乃。こちらはシャノン・アンヴィルさん。アシュリー王国出身だそうです。今は大きな怪我を負っておられますから、ここで休んでもらいます」

「あ、ども。シャノン・アンヴィル、です」

シャノンは布団の上で首だけをひょいっと動かして、小さくお辞儀をした。彩乃と呼ばれた少女はシャノンの姿を認めるや、洗練された無駄のない動きでその場に素早く跪^{ひざまず}いた。彩乃が背負っている刀から固い小さな音がたつ。

「この度は主様のお命をお守りいただき、誠にありがとうございます」

した」

「え、あ、いや……。別に、ボクは大したことはしてないっていうか……」

シャノン^{かしこ}は彩乃の大変畏まった態度に、しどろもどろになりながら答えた。困ったような表情をして、深々とお辞儀をしている彩乃を見つめる。

「とにかく、そんなに頭を下げないでくれ。本当に、そこまで礼を言われるほどのことはしてないし」

「いいえ。そのようなことはございません」

「……じゃあ、とにかく、頭を上げてほしい」

シャノンの言葉に、彩乃は頭をふっと上げた。サラリ、と漆黒の横髪が揺れる。

憂いを帯びてはいるが、強い意志を秘めた鋭い眼光をその瞳に宿す彩乃はシャノンの顔を一度見ると、また軽くお辞儀をした。上げた視線を、シャノンの寝ている布団を挟んだ向こう側に座っているユーフェミアへと移す。

「では、主様^{わたくし}。私はこれで失礼いたします」

彩乃はそう言ってまた礼をすると、シャノンの足元を通して襖^{ふすま}の方へ移動し、静かに襖を開くとその向こうへ消えた。

*

*

*

夜が完全に明け、光の溢れる朝が訪れる。
^{だいだい}橙色をした太陽の光は、その日の始まりを告げながら世界を照らし出してゆく。

日の光に染まってゆく世界。その中に周りを海に囲まれた、巨大な大陸と小さな大陸が点在していた。その中の南半球に位置する、小さな大陸の一つ。そこに瑞穂の国はある。

大陸には、横長に大陸の北半分を占領している瑞穂の国と、残りを縦に二分した領土の東にアシュリー王国、残りの西にユバーフィールド及びグリニッジ連合王国がそれぞれ位置している。

さらに瑞穂の国の三分の二の土地は、鬱蒼^{うつそう}とした巨大な森が占めていた。

その深い緑の中心にポツンと、凝視しているだけで目が痛くなりそうなほど鮮やかな薄紅が、四角く咲いている。鮮やかな薄紅の四角の中には、豪華絢爛^{こっけいんらん}な屋敷がどっしりと腰を据えていた。

そんな屋敷の中にある、障子や襖や木の壁に囲まれた小さめの広間。そこに一枚だけ敷かれた、白がまぶしい布団の上とその脇に、少女がいた。一人は茶髪碧眼。もう一人は金髪金眼だ。

「私は――ある宝石を、この建物の裏にある宝物庫で守っているのです。その宝石を狙って、宝石を守るために建物自体に結界を張っている私の命を奪うものが、度々やって来るのです。結界は、それを張っているものさえ殺せば、難なく解けてしまいますから。建物自体を破壊するという方法もありますが、それではあまりに労力がかかってしまいますからね」

金髪金眼の少女ユーフェミアの言葉に、茶髪碧眼の少女シャノンは絶句していた。

ユーフェミアはシャノンに返事を催促するようなことはせず、さきほど白胡が運んできた緑茶を、ゆっくりと啜^{すす}る。運ばれてくると同時にしかめつらをしたシャノンにもすすめていたが、アシュリー王国で一般的に飲まれている紅茶とは違った茶の色と、独特の味があまり気に入らなかったようで、口を一度つけたただけあとは飲むとしなかった。

「……つと。え？」

「はい？ 他に何か聞きたいことがあるのならば、質問してください。結構ですよ」

ユーフェミアは丁寧に正直にシャノンに対応していたが、反対にシャノンはユーフェミアの言葉に困惑していた。

「あ、え、いや……。そういうことじゃなくて……。まさか、きちんとボクの問いに答えてくれるとは思っていなかったから、拍子抜けしちゃって……」

ユーフェミアは、湯呑みをその白く長い指で包み込むようにして持ったまま、にこりと笑った。

「そうですか？ 私は？何故命を狙われているのか？？という貴女の問いに、素直に答えただけですよ？」

ユーフェミアは再度、湯呑みに口をつける。温かな緑の茶が、ユーフェミアの中へと消えてゆく。シャノンは、自分のために運ばれた緑茶を見つめる。静謐な水面には、薄く緑に色づいたシャノンが水面を見つめるシャノンを見つめ返していた。緑茶から上がる白い湯気は、舞っているかのように優雅に揺らめく。湯気とともに、茶の温度はどんどん外へと逃げていた。

「いや……。べつにイヤなら答えてくれなくてもいいって言ったし、なんか、ワケありそうだったから、まさか本当に答えてくれるとは思ってもしなかったし……」

「それにしても、そこまで驚くことでしょうか？ それとも——」
ユーフェミアはそこで、勿体ぶるかのよう^{もったい}に言葉を切った。

神秘的に閃く光を金眼に宿し、ユーフェミアはシャノンを静かに見据えた。

「失礼かもしれないですけど、もしかして——貴女の周りには、今まで素直な人がいなかったのではないですか？」

s c e n e 6 (後書き)

大変長らくお待たせして、申し訳ございません。

一応下書きのほうでは a c t 1、a c t 2 はできております。

ちなみに a c t 1 のほうは A 4 用紙 4 2 枚分、a c t 2 のほうは A 4 用紙 3 8 枚分あります。

現在 a c t 3 の 4 枚目を書き中です……。

scene 7

双方とも、しばし沈黙を破ろうとしなかった。

ユーフェミアは、桃色の艶やかな唇をうつすらほころばせてシャノンを見つめ、シャノンは視線を薄い緑の畳に落としている。

シャノンを見つめるユーフェミアの笑みは、どこか作り物めいた口元だけの笑みだった。煌めく蜜色の瞳は真剣そのものの眼差しで、シャノンを見据える。一方のシャノンは顔に影を落としているため、表情を読み取ることができない。

「――ボクは」

重く、陰鬱な沈黙を最初に破ったのは、顔を伏せたままのシャノンだった。シャノンはひどく緩慢な動きで顔を上げ、神妙なユーフェミアの瞳をまっすぐ見つめる。

「ボクは、ずっとずっと騙されてきた。家族に裏切られ、実験をされ、あげくに世界征服をもくろむ？ほら吹きジジイ？に、利用されそうになった。……だから？素直？とか？真実？とかボクにとって綺麗事ではないんだ。世の中は？偽善？と？虚構？で溢れ返っているしな」

後半は吐き捨てるように言葉を発したシャノンはそつと瞳を閉じ、自分を抱き込むように両腕を身体の前で交差させた。自分を抱くシャノンの手には、強い力がこもっていた。その肩は、微かに震えている。

再び、二人の間に沈黙という名の重圧が降り注ぐ。

沈黙の中、ふいにシャノンがゆっくりと蝶が羽を広げるように瞼を開けた。長くカールしたまつ毛の隙間から、紺碧の瞳がのぞく。同時に、するりと腕も身体から解いた。

沈黙を破ったのは、先ほどとは変わってユーフェミアだった。

「そつですか……。もうこれ以上話すことがイヤであれば、そのまま口をつぐんでください。私も、これ以上は詳しく問い質さないこ

とにしますので」

口を閉じたままのシャノンに、ユーフェミアは柔らかな声音でそつと語りかけた。

「うん。それでも……」

「それでも……？」

——逃げて。生き延びて……。

たとえ、すべての希望が消えたとしても……。

私はずっと、貴方の味方だから。

シャノンの頭の中に、そんな言葉を呟く小鳥のさえずりを思わせる綺麗な声が、鮮やかに反響する。

「それでもたった一人だけ、いつだってボクに真実を言ってくれた心優しい人がいた……」

言葉が過去形であることにユーフェミアは気付いたが、うつすらと微笑んだだけでそれについては何も言わなかった。その微笑みは、憂いを垣間見ることのできるものだった。

「一人だけ、ですか。では、今日からは二人になりますね」

「……は？」

シャノンは眉根をきゅつと寄せ、ユーフェミアを見て小さく首をかしげた。短い栗毛が肩の上で揺らぐ。

「分かりませんか？ とても単純なことです。今日から、貴女に真実を言う人が一人増えるということです。つまり、いつでも真実を貴女に告げる人の中に、私が仲間入りするということです。……あ、いえ、間違えました。きつと彩乃と白胡も私と同じだと思いますから、全部で三人と一体になりますね」

ユーフェミアは作り物めいた部分の一切ない、心からの笑みを浮かべた。

ユーフェミアの偽りの欠片もない、正真正銘本物の優しさ溢れる笑みと言葉に、シャノンは泣き出しそうに顔を大きく歪めた。涙を見られたくないのか、表情を隠すように下を向く。

「もしかして、うれし泣きですか？」

おどけたようなユーフェミアの口調に、シャノンは俯いたままプツと吹いた。

「ちげーよ。ボクが泣くワケないだろ。バツカじゃない？」

半泣き、半笑いの顔を上げたシャノンは、全く棘のない声音と口調で言った。

その顔は少し涙で濡れていたが、とても素敵な笑みを浮かべていた。

s c e n e 7 (後書き)

昨日は投稿できず、申し訳なかつたです。

音楽のほうをダウンロードしてしまして、それだけで一時間が潰れてしまいました。

ちなみにボカロの曲をとりました

鏡音リン&レン兄弟は最高ですね！！

ちなみに私は40?PとアゴアニキPと暴走Pが好きです

あとは「雷鳴アンプリファ」と「極楽鳥」に最近のはまっています！

「方向音痴」は反則級の超良い恋愛歌詞だと思います！！

ア、あとがきにふさわしくない全く別の話をしてしまつて申し訳ないデス……。

scene 8

シャノンがユーフェミアに助けられた日から、五つの夜と五つの朝が過ぎた。

約三日で怪我を完治したシャノンは、休養の床を貸してくれたお礼としてユーフェミアの数日間の護衛をすることと、まだ全快ではない身体の養生を兼ねてしばらくこの屋敷にすることになった。

そんなある白昼のこと。

北向きの暗い木造りの廊下を歩く、二つの人影があつた。一人は長い黒髪を結わずにそのまま垂らし、くの一の格好をしている彩乃もう一人は藍色の男物の袴はかまをはいた、ショートカットの栗毛のシャノン。

「ヒカリの力？」
チカラ

くの一の格好をしたアルト声の彩乃は、語尾を上げて疑問符をつけながら、横を同じ速度で歩くシャノンに問うた。

「そ。ヒカリの力」

「……って、何だい？ それ？」

彩乃の口調は、ユーフェミアと接するときのような仰々おごごしいものではなく、もつと親しい人と接するような砕けた口調だった。

彩乃は言葉を発しながら首を折り曲げて、横のシャノンを下からのぞきこむようにして見た。二人の身長は、どちらかといえば彩乃のほうが高い。シャノンは、平均身長が瑞穂の国より高いアシユリ一王国出身なのだから、彩乃より低いということは小柄な体型なのだろう。

シャノンは、彩乃の吸い込まれてしまいそうな漆黒の双眸に距離で見つめられ、わずかに顔を引き歩調を緩めた。が、彩乃の視線をその碧眼でしっかりと捉えて言葉を続ける。

「簡単に言つとヒカリっていうのは、ボクにしか見えなくてボクにしか扱えない鋭いナイフだ」

「……そりゃ、ちよつと都合が良すぎやしないかい？」

シャノンは緩めていた歩調を元の速さに戻し、彩乃は複雑な表情を浮かべながら顔を引いた。

少年のようにがさつなシャノンは、髪が乱れるのも気にせず乱暴な手つきで短髪の頭を右手で掻いた。

「つつたつて、見えんだから仕様がねえだろ。ま。そういう特別な力をもっているからこそ、ボクみたいな人のことを？ 神の愛娘？ つていうんだろーよ。……あ、もしかしたらボク以外の他の神の愛娘を探せば、同じようにヒカリが見えて扱える人もいるかもしれないな。ま、今のボクが知っているかぎりでは、そういう人はまだいないけど」

そう言ったシャノンは、周りに視線を泳がせた。今も彼女らの周りは、蒼く尾を引くヒカリに囲まれている。それまでシャノンを見つめていた彩乃も、シャノンにつられるようにして周りに視線を行き来させる。

「今もここにも、そこにも、あそこにもヒカリはたくさんいるぜ」

シャノンはヒカリと同じ色をした自分の瞳に見えている、神秘的な蒼いヒカリを指さしながらそう言った。しかし彩乃には、ただシャノンが何もない虚空を指さしているようにしか見えなかった。

「……そんなもの、あたしにや全く見えないねえ」

彩乃はその黒い大きな双眸を細めた。そんなことをしても見えないとわかつてはいるのだが。

「そうだろうよ。それで気に病む必要は全くないさ。……で、ヒカリについての説明に戻るぞ」

「ああ。続けておくれ」

「ヒカリはボクの命令に絶対従うんだ。相手を切れとボクが言えば切るし、殺せと言えば殺す。相手は見えない敵に向かっているわけだから、勝てるはずもない」

「……本当に、すごい力だねえ」

「ああ。……別に、ありがたくはないけどな。ヒカリは言わばボク

の手の延長だ。ヒカリを使って何かを切るということは、自らの手で相手を切っていることと同じになるんだ。つまり、切った感覚が生々しいくらい手に伝わってくるってことだ。生温かい血も、肉を切り裂く柔らかな感触も、全部が。ヒカリは銃みたいな働きをするけれど、銃ではなく剣だ」

張りのある少年の様な声と、少し年寄りくさい言葉使いの艶を帯びたアルト声が、長い廊下に響き渡る。

「でもその力を使えば、主様をお守りすることも容易いじゃないか。そう考えると、とても便利じゃないかい？」

「ざけんなよ。この力でボクがどれだけ苦しんだと思ってる？」

シャノンは口調も表情も一切乱さずに、言葉を発した。視線は前方に向けられたまま、動かない。

「……ボクは、この力をあまり使いたくはないんだ。まあ……この力に助けられたことも何回があるけど、時々ボク自身にも力を抑えられなくなる時があるんだよ」

「……………」

彩乃は、その言葉にふっと口をつぐんだ。シャノンも彩乃に合わせたかのように、口を閉ざす。

沈黙のまま、二人は昼間だというのに闇が降り注ぐ廊下を歩む。ギシギシと、時折廊下が二人の足下で悲鳴を上げる音だけが、嫌に大きく周りに響く。

「……………」

沈黙に耐えられなくなった彩乃が、何か気のきいた言葉をシャノンにかけようと小さく息をすい、言葉を発っそうとしたときだった。グギュルルル……？

「うっ」「あ？」

一瞬でシャノンの頬に、朱が広範囲へ広がる。言葉を発するため口を小さく開けていた彩乃はそのまま固まってしまった。自然と、二人の足が止まる。

先ほどより、やや気まずい沈黙が流れる。

「――ハラ、減ったな」

照れ隠しをするような、シャノンのはにかんだ笑みと言葉に、
「プツ。フフフツ。……ああ。昼餉^{ひるげ}がまだだったね。食^くべに行く
かい？　クククツ」

沈黙は笑いへと変わった。

s c e n e 8 (後書き)

……むむう。

一話分のタイピングだけで、一時間が潰れてしまう……。

一日一話がぎりぎりッス。

すいません。

scene 9

「シャノン。そんな馬鹿みたいになくさん食べてたら、太るよ」

「いいんだよ。ボクはヒカリを従えているだけで、体力を消耗するのは。これくらい食わなきゃ、身体が持たねーっつーの」

「ソウ、ソウ。たくさん食ベルコトは良いコト、アルよ」

食事をするための、明るい畳の広間。飾り気のないシンプルな内装のそこに、二人の人間と一台のアンドロイドの姿があった。

たくさんのご馳走が盛られた磁器や漆器をのせた、黒塗りのおぜん。その前に正座をして、同じく黒塗りの箸はしを持つ彩乃が座っている。その箸の持ち方は、まるでお手本のように綺麗な持ち方だった。その正面に、同じくおぜんの前にあぐらをかいているシャノンがいる。

二人のそばに置かれたお櫃ひつの隣。そこにはクリーム色の髪を持つアンドロイド、白胡が眩しいくらいにまっ白い割烹着かっぽぎを着て座っていた。

シャノンは白胡の意見に満足するかのように大きくうなずくと、行儀悪くその手に持った箸の先で彩乃を指した。

「そーだぞ。お前ももつといっぱい食べろ。ボクみたいに」

シャノンのまるで自分を褒めているような意見は、

「あたしゃいいよ。もともと小食なものでね。どこかの誰かさんと違って」

ご飯を口に運んでいる彩乃に、あっさりと一蹴されてしまった。

「む」

シャノンは半ば身を乗り出し、鋭い視線を彩乃に向けた。への字に曲がったその口の周りには、白いご飯粒がぽつぽつ。その姿は、少し幼くも見えた。

そんなシャノンの怒りに反応してか、彼女の周りを飛び交うヒカリが小さく震え始める。ヒカリの変化に、その場の空気がわずかに

揺らぐ。その微妙な変化に鋭く気付いた彩乃は小さく首をかしげて、自分を睨みつけているシャノンを見た。肩の上で、漆黒の髪がしなやかに揺れる。

「何だい？ 空気が揺らいだよ？」

「あつ、いや。その言い草が、ちよつと気に障っただけだ。そのボクの些細な怒りに反応したヒカリが揺れて、空気も一緒に揺れたんだよ」

おぜんからわずかに身を乗り出していたシャノンは、もといった場所へ身体をすんと戻す。と同時に、ご飯粒一つ残さず見事なまでにからっぽになっているどんぶりを、すつと白胡に差し出した。

「白胡。おかわり」

「了解した、アル」

白胡はシャノンが差し出したどんぶりを右手で受け取る。ロボットのものとは思えない、滑らかな肌の腕がシャノンの方へ延ばされると同時に、空いている左手はお櫃のふたを持ち上げた。粒が立った、艶やかな白米がふたの下から現れ、ほわんと白い湯気を上げる。

「……にしても、使いにくいな。この棒」

「棒、じゃなくて、箸だよ」

「そうそれ。こんな持ち難いもん……。ナイフとかフォークとか、スプーンはねえのかよ？」

まるで幼児が箸を使うかのように、二本の箸を？グー？で握っているシャノンはぐさぐさと、磁器に盛られた里芋の煮っ転がしを箸の先で刺し、蜂の巣状態にしながら文句を垂れていた。

「何言ってるんだい？ ナイフはあんたの国のアシュリーで大量生産されている殺人用の武器だろう？ それにその？ふぁーく？とやらも？すーぶん？とやらも、ここにはありやしないよ」

「……すーぶん、じゃなくてスプーン、な」

シャノンは、怪訝そうな顔をして間違った言葉を紡いだ彩乃へ向けて、小声でそつと訂正を入れた。

「さつ。食事も終わったことだ。腹ごなしに、刀の稽古といくよ」
食事が終わり、箸をおぜんの上に転がしたばかりのシャノンに、
さつそく飛んできた彩乃のそんなお言葉。

「はあ？ こんな状態で動いたら、食ったもんが腹から逆流してく
るっつーの」

呆れたような、信じられないというような視線と声を、シャノンは彩乃にぶつけた。

「おやおや。そんな品のないことをいうんじゃないよ」

「……オイオイ。言わせてんのは誰ダヨ」

身体を後ろに倒し、その身体を支えるようにして後ろに手をつけて座っているシャノンは、視線を右へ逸らして彩乃を視界から追いつ出した。

「何だい？ 何か文句があるのかい？」

立ってシャノンを見下ろしている彩乃は、ギロリとシャノンを睨みつける。

「イイエナンデモゴザイマセンアヤノサマ」

シャノンは、世界中を探してもこれ以上素晴らしい棒読みは無いんじゃないか、と思って疑わなくらいの棒読みとカタコト発音で、真つ平らに微塵^{みじん}の抑揚もなく言葉を発した。

「ふんつ。棒読みとカタコト発音はただけないけど、ま、いいとしようじゃないか。許してやるから、木刀持って外に出な」

彩乃はそう言うのと、くるりと身を翻^{ひるがえ}してシャノンに背を向ける。

シャノンは小さくため息。そんなシャノンのため息の音を鋭く聞き取った彩乃は、きつとシャノンを睨みながら振り返る。

「ため息をつくんじゃないよ！ それから、ちよつと失礼で辛辣な言葉かもしれないけど、あんたはここにおいてもらっているっていうことを忘れるんじゃないよ」

「……分かつてる。ボクは自分を助けてくれた人に恩をあだで返すようなことはしないさ」

シャノンは顔つきを引き締め、神妙な声と面持ちでそう言った。

「分かってんだったら、ほら、さつさと外に出た出た。何事も鍛錬を怠ってはならないよ」

彩乃はその顔に微笑を浮かべて、シャノンに急かすように言う。そして、この広間と廊下を仕切っている木戸のほうへ歩み寄り、横にスライドさせた。木戸は抵抗もなく簡単に開き、その向こうへあつという間に彩乃は姿を消す。

「貴殿モ行く、アルか？」

「……ああ。もちろんだ！」

シャノンはそう言うのと、畳につけている手に力を込め、ゆっくりと立ち上がった。

「よし！ 腹ごなしといくか」

宣言するかのように言うと、シャノンは彩乃と同じ木戸をくぐって広間から出て行った。

「……頑張る、アルよ。彩乃殿ハとツテも強い、アルよ」

広間には、空っぽになった食器類と、空っぽになった大きなお櫃と、割烹着姿の一体のアンドロイドが取り残される。

広間で正座をしているアンドロイドは、本物の頭髪のようなクリム色の作り物の髪を揺らして、愛らしい微笑みを浮かべた。

scene 9 (後書き)

今日は更新遅くてすいません！

午前中は眼科に行つてまして、待ち時間だけで軽く三時間はかかってしまいました……。

しかも、毎回ギリギリで免れていた眼鏡をとうとうかけなければならなくなつてしまいました……。

ま、でも私眼鏡萌えなんで、いいですけどね

私の大好きなマンガ「黒執事」の第二巻でセバスチャンが眼鏡をかけているイラストは、最高でした……♪

あ、ツインテールのシエル君もよかったですけど。

私、ツインテール萌えでもあるので。

つと。また全然関係のない話ばかりしてしまつて、申し訳ないです。超身勝手なダメ人間で申し訳ありません……；

石畳の桜並木。

桜は、柔らかく温かな春風にさらりと流される。風に揺れる桜の木々は、さわさわと心地よい音を奏でる。

空は目にしみるほど蒼い。そんな蒼穹に、白は米粒ほども塗られていない。

桜吹雪と快晴の下。

「手加減はしやしないよ」

「それはこっちのセリフだっつーの」

木刀を凜々しく構える、二人の少女の姿があつた。漆黒の闇を連想させる長い黒髪をポニーテールに結っている彩乃と、少女にしては短いが、艶^{つや}を帯びた栗毛を持つシャノンだ。

「先に相手の急所に木刀を構えたものが、勝ちだよ。心の準備はいかい？」

「とつく。そっちこそどーなんだよ？」

シャノンは不敵な笑みで彩乃を見つめる。が、彩乃は涼しい顔をしてシャノンを見返していた。

「あたしはいつだって、心構えをしているさ」

「あつ、そ」

シャノンはあつさりと彩乃の答えを流し、ぎりつと木刀を持つ手に力を込める。力を込めたその手は、汗でじつとりと湿っていた。

「っ……」

シャノンは、数メートル先に悠然と木刀を構えている彩乃を睨みつける。一方の彩乃も、その鋭い眼光をシャノンに向けている。その神経はまるで、シャノンを倒すことだけに注がれているようだった。

わずかな緩みも弛^{たゆ}みもなく、ぴんと張られた糸の様な彩乃の神経は、微塵の隙も見せない。

「……ふふん。ユーフェミアを守ってきただけある、って感じだな」
シャノンは冷静な様子で軽口をたたき、しかしそのこめかみからは冷や汗が伝っていた。ころなしに、シャノンの周りで踊る青いヒカリも怯えているように見えた。

「じゃ、あたしから行くけど、それでいいかい？」

「ああ。望むところだ。いつでもどうぞ」

シャノンは、右手を木刀から離して滑るような動きで手のひらを裏返した後、クイッククイックと指を折り曲げて、彩乃を挑発するように手招きした。そんなシャノンの言動には余裕が滲んでいるが、心情には余裕の欠片さえない。

「では……。いざ、参る！」

彩乃は中段に構えていた木刀を右手だけで持ち、風を切るように一度下へ斜めに振るう。木刀を振り下ろしきった後、それにすっと左手をそえる。

場の雰囲気が一気に変化する。

彩乃は場の空気や雰囲気を自分のペースに巻き込み、凜と閃く瞳でシャノンを見据えた。

風によって千切れた桜が、彩乃の顔のすぐ前を流れる。その花弁が石畳につくより速く、彩乃の足に力がこめられ、風を切りながら走り出していた。

さすがはくの一、と思い起こさせてくれるほどの勢いで彩乃はシャノンめがけて走る。木刀は右斜め下に構えられたままだ。

「はあああつー！」

木刀を中段に構えているシャノンのそばまで来た彩乃は、裂帛れっぱくの気合とともに右斜め下から足を踏ん張って勢いよく木刀を振り上げた。

木刀が、鋭い唸りを上げる。

「っ……」

唸る彩乃の木刀を自分の木刀で受け止めたシャノンは、眉間にしわを作って僅かに顔を歪める。

これが真剣であれば、澄みきったような鋭い良い音が尾を引くように長く辺りに響き渡るだろうが、今日はいにく木刀である。木刀同士がぶつかっても、小さく鈍く短い音が虚しく響くだけだった。シャノンはヒュッと、口笛のような息継ぎをします。同時に、全体重をかけるようにして彩乃の木刀を押し、自分は足に力を込めてバックステップで後ろへ飛び下がった。

「何だ……あの力。あの細い身体のどこにあんな力が……？」

木刀と木刀がぶつかったときの反動で、小刻みに震えるような衝撃がシャノンの腕に走っていた。まだ腕が痺れるのか、顔は思い切りしかめられている。

「戦闘時に、余計な考え事をするんじゃないよ！」

彩乃はシャノンを叱咤^{しった}し、

「たっ！」

木刀を上段に構え、再度シャノンに詰め寄った。今度は二人の距離も、先ほどより何倍も近い。

「つつ！」

彩乃の木刀はしなやかに上から下へ軌道を描きながら、シャノンが横向きに構えていた木刀にぶつかる。

ぶつかった反動で巻き起こった小さな風に、桜が乱舞する。同じように、彩乃の黒髪が風に揺らめく。

相手を刺し殺してしまいそうなほど鋭い彩乃の眼光が、シャノンの目を射抜いた。

s c e n e 10 (後書き)

ぬはっ！

今回からしばらくは、戦闘シーン満載にしたいと思います。

ううっ……。私は恋愛小説と戦闘シーンを書くことは超苦手なのデス……（A、）

齒をくいしばり、シャノンは柔軟に身体を仰け反らせた。ひらりとシャノンの身体が後方へ回転する。そのまま足に力を入れ、手を下にした格好で飛び上がる。手を地面へつける寸前、シャノンの踵かかとが上へ蹴り上げられた。シャノンは踵で、木刀を握る彩乃の腕を蹴ろうとしたのだ。

「っ！」

しかし、瞬時にシャノンの意図を読み取った彩乃は、すっと腕を後ろへ引いた。

「ちっ！」

踵が彩乃の手に当たらなかったことに小さく舌打ちをすると、シャノンは手に力を入れて飛び上がり、さらに後ろへと跳んだ。

少し体勢を低くして、見事に足を地面へ着地させたシャノンは、すばやく木刀を身体の前で構えなおす。

足元で起こった小さな風に、地に落ちていた桜の花卉がふわと舞う。

シャノンの額から、汗の雫が飛び散る。

「……このままじゃ、勝てねえ」

力量、俊敏さ、集中力、どれにおいてもシャノンが彩乃より勝るものは、ない。

勝利の女神は、彩乃に微笑みを向けていた。シャノンなど、眼中にもないだろう。

「——ふっ」

その時、ふいにシャノンの顔に不敵な笑みが広がった。彩乃は平然とそれを見つめる。

シャノンの薄い唇の上を、林檎りんごのように鮮やかな色の舌が走る。シャノンは唇を湿らせると、そっと囁きかけるように言う。

「ボクは、神の愛娘だ」

その瞬間、微笑を浮かべているシャノンに、勝利の女神がふつと振り返った。

「ヒカリよ！」

威勢の良い快活な声と表情で、木刀を構えているシャノンはずっと前に体重をかけた。栗毛が緩やかに揺れる。身体を前に傾けてたまま、シャノンはたんつと地を蹴り、走り出した。

その後を追うのは、無数のヒカリの筋。

「彩乃の持っている木刀を切り落とさない！」

シャノンの言葉に、彩乃ははっと目を見開く。

見えない敵が迫り来る恐怖。ヒカリに気配はなく、空気も全体的に揺らいでいるため、どこから襲ってくるのか、全く予想ができない。

100ミリ秒、瞼を開閉して瞬きをした彩乃が目を開いた瞬間に見たもの。それは、三分の二ほどを切り落とされてしまった自分の身体の前に構えていた木刀と、木刀があつた場所から自分の喉笛に突きつけられている、鋭く尖った木刀の先端だった。

切り落とされた中途半端な長さの木刀が、乾いた音を反響させながら石畳の上へと落下する。小刻みに石畳の上で揺れていたその木刀は、やがて完全に静止した。

「……こりゃ、驚いたね。まるで、？かまいたち？みたいだったよ」
彩乃は目を見開いて、乾いた声で呟いた。木刀が突きつけられている喉が、ゆっくりと上下する。

彩乃の眼光にも劣らぬ鋭い目つきで、シャノンは彩乃を睨みつける。

風がほとんど止んでしまった中。小さな薄紅色が一つ、二人の間をさらりとかけぬけた。刹那、シャノンの頬と目元がふつと緩んだ。
「やрийい。ボクの勝ちだ」

「……木刀と木刀の勝負に、特殊な力を使うなんて、ズルくないかい？」

「うっせえ。ズルくたって、勝ちが勝ちだ」

シャノンの顔が、いたずらっぽく輝く。屈託のない笑みをみせているが、まだ木刀は降ろさない。

「――ふう。分かったよ。仕様がなから、あんたの勝ちにしておいてやるさ」

彩乃は諦めたように息を吐くと、短くなった自分の木刀から手を離し、突きつけられているシャノンの木刀をつかんだ。そのまま、切っ先を喉元からそらす。

「あ。真剣だったら手え、バツサリだぞ。それ」

「まあ、そうだねえ。しかし、もうあんたとあたしの稽古は終わっ

――」

ふいに途切れるアルト声。静謐な夜闇を思い起こさせるような漆黒の髪が、儚げに揺れる。黒曜石のように美しい、燃える決意と憂いを浮かべた瞳が、力なく虚ろに閉ざされる。シャノンの木刀を握っていた手が滑るようにしてふっと離れる。

「――」

固い地面に身体をぶつける鈍い音。シャノンの視界から突如漆黒が消えてしまう。

――彩乃が、何の前触れもなく地面に倒れてしまったのだ。

シャノンは碧眼を大きく見開き、地面へと倒れる彩乃を見つめていた。蜘蛛の巣のように、彩乃の漆黒の髪は石畳の上に散らばっている。

「……おい。おい！」

シャノンは驚愕の表情を浮かべたまま、木刀を離して彩乃のそばへしゃがみ込んだ。そのまま彩乃の肩に手をかけ、その身体を大きく左右にゆする。

虚しいほど乾いた音が、石畳の上に木刀が落ちたことを告げる。

「何だよ……。彩乃。何で、一体、どうしちゃったんだよ!? 彩乃! 彩乃ッ!」

彩乃は黒い眼を閉ざしたまま、シャノンの声にこたえることはなかった。

s c e n e 11 (後書き)

えっ……と。

これからしばらく戦闘シーンが続くと書きましたが、下書きにはないエピソードを急きょここで盛り込むことにしたので、今回で戦闘シーンは一時中断です。

戦闘シーンは、自分でも落ち込んでしまうほどのぐだぐだっぷりです
ね。

何でこんなにも、私には文才がないのだろうと悩む今日このごろの作者です。。。

s c e n e 1 2

漆黒の瞳は、白く薄い^{まぶた}瞼に覆われたまま姿を現さない。シャノンの木刀を握っていた長く細い指は僅かに折り曲げられたまま力なく地面に横たえられ、ピクリとも動かない。

「何でだよっ……。彩乃！ おい！ 起きろよ！ 何、急に、倒れてんだよっ……。！」

シャノンは彩乃の身体を大きく揺らし、しかし頭の中では身体を揺らしたら危険なのではないか、という考えが渦巻いていた。

シャノンは蒼く澄んだ瞳を潤ませ、声を張り上げた。

「彩乃！ 目え覚ませよ！ このままっ……。死ぬんじゃ、ねえぞ！
！」

「馬、鹿……。だねえ」

ふいに、彩乃の唇が開く。その桜のように艶やかな唇をうすく開けたまま、彩乃は荒い呼吸を繰り返す。白い瞼が僅かに震え、緩慢な動きで持ち上げられる。黒曜石のように美しい瞳は憂いを色濃くしていたが、しっかりとシャノンを捉えていた。

「あたしは、そんなにヤワじゃ、ないよ……。こんな簡単に、死ぬわけ、ないだろ……。？」

「彩乃……。ば、馬鹿はどっちだよ？ 人に心配かけてんじゃ、ねーよ……。！」

シャノンは、今にも涙をこぼしそうなほど顔を歪めた。蒼い眼は風に揺らめく水面のように美しい。

「すまないね……。心配かけちゃって。ちょっと、意識がとんだだけだよ」

「意識がとんだだけって……。それ、大丈夫なのかよ？」

「大丈夫さ。あたしや、^{ガキ}子供のころから病弱なんだ。こんなこと、よくあることさ」

彩乃は微笑を浮かべ、シャノンを見つめた。シャノンは唇を噛み

締め、必死に涙を堪えようとしていた。涙に潤むシャノンの眼を見つめ、彩乃はポツリと呟く。

「あんたは本当に、どうしようもないくらい馬鹿だねえ……。泣きたいときは、我慢なんかしないで、思いっきり泣けばいいんだよ。そうやって、悲しみを流し落とせばいい。——って、これはあたしが昔言われた言葉なんだけどね」

はははっ、と彩乃は苦笑をもらした。シャノンはぎゅっと眼を閉じ、それまで自分の手を置いていた彩乃の肩に、顔を伏せた。小さな嗚咽おえつと鼻をすす吸る音が、シャノンからこぼれ出る。

「マジで、心配した……」

「……ああ」

「昔、ボクが住んでたところで……ボクの目の前を歩いていた浮浪者が、急に倒れたことが、あつたんだ……」

「……ああ」

「それで……そいつは、それっきり動かなかつたし……息もしてないみたいだった。……だから、彩乃も、このまま、動かなくなつて……息もしなく、なるんじゃないかって……めちゃくちゃ、恐かつた……」

「……ああ」

彩乃は視線を上へと上げた。淡いピンクに縁取られた蒼穹が、彩乃を静かに見つめ返していた。穏やかに凪いでいる春風が、彩乃の頬をなでる。

彩乃は鼻から空気を深く吸い込み、長く息を吐き出した。彩乃の腹部が大きく上下し、シャノンの身体も僅かに揺れる。

「……さて。シャノン。あたしの服を涙で濡らしてもいいけど、鼻水は付けないでくれよ」

プツとシャノンは吹き出し、彩乃も肩を震わせて笑った。

「つけてやりたいところだけど、止めておいてやるさ」

「ああ。そうしてくれると、ありがたいよ」

シャノンは顔を上げ、袖で乱暴に顔を拭ぬぐった。袖で拭われた顔は

赤らみ、頬がしつとりとしてはいたが、瞳はもう潤んでいなかった。
「よっこらせ、っ」と

彩乃はゆっくりと上半身を上げ、足を曲げて立ち上がった。黒髪や身体中に絡みついていた桜の花弁が、ゆるゆると回転しつつ地面へ落ちる。花弁は石畳の隙間に入り込んだり、そのまま散らばったり、風に乗って宙高く舞い上がったりと、自由に動き回る。

「プツ。よっこらせって、婆ばばくさいなあ」

「ふんっ。こうやって立ちあがったほうが、腰に負担がかからないんだよ」

シャノンは「ふうん……」と物珍しげに彩乃を見上げ、それから自分も「よっこらせ」と言って立ち上がった。

「さっそく、マネかい？」

「こっちのほうが、腰に負担がかからねえんだろ？」

にっこり笑って、シャノンは彩乃に視線を向けた。その瞳はきらきらと輝き、不安げな気配など微塵もなくなっていた。

「ま。そうだね。良いことはマネした方が——っ」と

彩乃の身体が不安定に揺れる。彩乃は足を数歩ふらつかせてから、すっとしゃがみ込んでしまった。

「彩乃——？　おい、大丈夫かよ？」

シャノンはやっと明るくなりかけていた瞳に、再び不安の影を落とした。彩乃の肩へ手を伸ばしながら、自分もひざまずく。

「あ、はは。大丈夫さ。ちよっとした、立ちくらみだよ。やだねえ。ちよっと、最近は身体が、弱って……っ！」

ふいに彩乃が息をのみ、ぐにやりと顔をゆがませた。

「へっ？　彩乃？　なっ……おい、何だよ。悪い冗談は、よせって……」

「つつ……。うつ……。くっ……」

シャノンは不安げに視線をあちこちへ巡らせ、瞳の陰りをさらに濃くしていく。彩乃は左目を両手で必死に抑えながら、うめき声を上げていた。その額から脂汗がにじみ出て、頬から顎あごへ伝い落ちる。

「一体、今日はどうしちゃったんだ？ 彩っ——」

「いつ！ うわああああああ！！」

シャノンの声は、彩乃の鋭い悲鳴にかき消されてしまった。

悲鳴が辺りにこだまする中、彩乃が抑えている左目の手の隙間から——

真っ赤な花弁がこぼれおちる。

scene 12 (後書き)

感想、批評、訂正など、何でも歓迎しております。

特に今は、下書きのほうをちゃんと書かないままに投稿しているの
で、表現があいまいになっていたり、字の間違いがあったりする可
能性大です。

本当に、情けない作者ですいませんね……。

14日の日曜日に中学を卒業して、春休みに入っているというのに、
のんびりだらだらあゝと過ごしていマス。勉強しろって感じす
よね。ハイ。

ですが、毎日が暇なので（だから勉強しろっ！）小説執筆のほうは
頑張りたいです！ PCは一日一時間ですが……！！

scene 13

「——っ!？」

シャノンの双眸が、大きく見開かれた。

真っ赤な花弁はボタボタと、桜の薄紅と石畳を真紅に染め上げてゆく。

「つつ……。う、あ……。はあ……。はあ……。くっ……」

彩乃の左目からこぼれ落ちる赤は、彩乃とシャノンにも飛び散り、二人をも赤くしていく。ツンとした生臭い鉄の匂いがシャノンの鼻孔を刺激した。

「——あ。これ……。花、じゃない。……。血、だ」

シャノンは呆然としたように、彩乃の眼からあふれる赤——どろりとした生温かい鮮血を、見つめ続ける。

赤い血だまりは彩乃を中心に、どんどん広がってゆく。地面を彩る。ピンクの花弁が赤に染められ、石畳が染められ、二人が染められ

「あああああああ——!!」

はっと、シャノンは我に返った。

彩乃は血の海に倒れこみ、喘ぐような荒い呼吸を繰り返す。

「彩乃……。彩乃! しっかりしろ!」

シャノンは血の海に両膝をつけた。地面に溜まっている血が飛び散る。シャノンは両手で彩乃の身体を引き寄せ、膝に抱きかかえた。

「はあ……。はあ……。はあ……。はあ……。シャ、ノン……」

「彩乃! 意識はあるな? 大丈夫か? あ、左、目は……。どうなつたんだ? 痛むのか? 呼吸は苦しいか?」

「虫、が……」

「えっ? 何だよ?」

「虫が、あたしの身体を……。内側から、喰いあさって、る……」

「虫……。? お前、何言って——っ!!」

その瞬間シャノンは、彩乃の抑えている指の隙間から見てしまった。あまりの驚きと衝撃に、喉が一瞬で渴き、押しつぶされてしまったかのように、声が出なくなってしまった。

「シャ、ノン……？」

「……あ、やの……。お前……。目が、左目が……」

「……目？」

彩乃はそつと手のひらを、左目から離した。太陽の光に、血を流していた目がさらされる。

彩乃の左目からは、もう血は溢れていなかった。が——
左の瞳が、まるで血の色を写し取ったかのように真っ赤になっていたのだ。

左頬にこびり付いた血の跡はまるで、彩乃が赤い涙を流したかのように見えた。

「——彩乃！」

その時、ふいにシャノンのものでも、もちろん彩乃のものでもない大声が上がった。二人の視線が、自然と声の方向——屋敷の門の方——へ移動する。

そこには、蜜色の髪をおろし、浅葱色あさぎの紬まとを纏った顔面蒼白のユーフェミアが立っていた。

「主、様……」

「彩乃！ どうされたのですか！？ 何故、このように……大量の血が……」

ふらふらと、不安定な足取りでユーフェミアが彩乃とシャノンの方へ歩み寄る。が、その足がはたと止まり、金色こんじきの双眸みはが大きく睜みはられた。

「彩乃……。その目は、まさか……」

「主様……。？ 寄生虫？ が、動き、出し、た、ようです——」

その言葉を最後に、ふっと彩乃は意識を手放した。シャノンの膝に、ずしりと重みが増す。

「っ……。彩乃？ おい！」

シャノンオッドアイは瞳を閉じてしまった彩乃の身体を、小さくゆする。が、その赤と黒の奇妙な目オッドアイが姿を現すことはなかった。

s c e n e 13 (後書き)

今日は投稿が遅くて申し訳ないですっっ!!
しかも何気に今回は短いような……。

scene 14

「シャノン。とりあえず、彩乃を寝室まで運びましょう。白胡！」

ユーフェミアは屋敷の中へ向けて、アンドロイドの名前を呼んだ。同時に、屋敷の中から走る音が響いてきた。シャノンは彩乃の腋わきに頭を通し、一緒に立ちあがる。ぬるりとした血に足を取られて、シャノンの身体がぐらりと一度揺れたが、なんとか持ち直した。彩乃はもちろん、シャノンの袴も顔も真っ赤に染まっている。

「おまたせしましタ、アルよー！」

屋敷の門の向こうから、駆けてくる白胡の姿が見えた。

「白胡。彩乃を寝室まで運んでください」

「了解シマシタ、アルよ」

白胡は、シャノンと彩乃のそばまで走り寄った。白胡は今、シャノンのものと似たような袴を纏まとっている。

「白胡。大丈夫か？」

「任せ口、アルね。私、何でも持てル、アルよ」

にこつと白胡は笑い、抱っこをせがむ小さな子供のように、シャノンへ両手を大きく伸ばした。シャノンは少し躊躇ためらいながらも、そつとしゃがんで彩乃の腋から頭を抜いた。

白胡は伸ばした両手でそつと彩乃を受け取り、軽々と抱きかかえた。白胡は身長が低いため、彩乃の足先は地面につくつかないかというギリギリの位置で浮いている。

「すげっ……」

シャノンの口から、思わず感嘆の声がこぼれた。再度潤み始めた蒼い瞳が、僅かに見開かれる。

白胡は苦も無く、確かな足取りで屋敷の方へ彩乃を運ぶために歩みだした。その後を追って、シャノンもふらつきながら歩く。シャノンの履はきいている血に濡れた草履のそこが、歩く度にビチャビチャと不快な音を立てる。

屋敷の門の前では、ユーフェミアが心配げな表情で二人と一体を待っていた。蜜色の瞳は陰り、もともと白い肌はさらに白さを増している。

彩乃を抱く白胡を追い抜き、シャノンは一足先にユーフェミアへと近寄った。

「ユーフェミア、大丈夫か？」

「はいっ？」

「いや、顔が超白いし……」

「え。ああ……。大丈夫ですよ。私は、本当に……」

ユーフェミアは不安げに顔を歪め、走ったわけでもないというのに肩で息をしていた。

——だれがどう見ても、大丈夫そうではない。

「肩、貸そうか？」

「……え？ いえ、そんな……」

「あ、そうか。血がつくのが気になるよな？ 血って、落ちないしなあ……」

シャノンは苦笑し、視線を下げて血にまみれた自分の身体を見渡した。ユーフェミアはとんでもないという風に、蜜色の目を大きく開き、首を横に振った。その姿は、少し子供っぽく見えた。

「違います。私……そんなに体調が悪そうに見えるのですか？」

「うん。そうだけど……？」

「そうですか。いえ私、シャノンが思っているほど悪くはないと思います。本当に、大丈夫ですから」

ユーフェミアがこくり、と力強くうなずいたところに、彩乃を抱いている白胡がたどり着いた。白胡は一度ユーフェミアの方へ視線を上げ、ユーフェミアが小さくうなずいた後で、また歩を進めた。

白胡が屋敷の門をくぐるまでの姿を瞳で追った後、シャノンはユーフェミアに視線を戻した。ユーフェミアもシャノンの視線を感じ、碧眼に向かい合う。

「ユーフェミア。さっき、彩乃は？ 寄生虫？ がどうか、言ってた

よな？　あと、虫が身体を喰いあさつてるとかどうとかも、言っていた」

「はい」

「その意味が、お前は分かるか？」

「——はい」

ユーフェミアは、しっかりとシャノンの蒼い瞳を見詰めたまま、ゆるぎない口調で肯定した。

「……そうか。——よければ、そのことについて説明してもらいたい。このままだと、彩乃が心配だし……」

「——分かりました。ではまず、屋敷の中に入りましょう。それから、貴女は湯浴みもされた方が良いでしょう」

「ああ、そっか。すまないな」

シャノンは門の方へと歩みだす。歩くたびに朱肉で判を押すように、石畳の上にシャノンの赤い足跡が付く。

シャノンが十数個ほどの赤い判を押した時、

「——うっ。あ、の、シャノン……」

ふいに、シャノンの遠い後方でユーフェミアの頼りなさげな声が上がった。シャノンは驚いて振り返る。てっきり、ユーフェミアは自分のすぐ後ろをついてきていると思ったのだ。

ユーフェミアは先ほどと寸分も変わらぬ場所に立ちつくしていた。

「——ユーフェミア？」

「やはり……肩を、貸していただけませんか……？」

「え？」

とさり、と軽い小さな音を立てて、ユーフェミアが膝を折った。

「——なっ！　ちよっ、ユーフェミア？」

シャノンは赤い足跡をつけた道を引き返し、ユーフェミアのそばに歩み寄った。両足に触れているユーフェミアの細い手は、小刻みに震えている。

「えっと……。足に、力が入らないみたいです……」

ユーフェミアは情けないような、助けてあげたいと相手に思わせ

るような笑みを浮かべて、シャノンを見上げた。シャノンは気の抜けたような笑みを浮かべ、すつと膝を折って跪いた。

「ほら。やっぱり大丈夫じゃなかっただろ？ 痩せ我慢なんてするなよ」

「ごめんなさい……」

ユーフェミアはシャノンの肩を借り、ゆつくりと立ち上がった。立ち上がりざま、僅かによるけたが、しっかりと地面に踏みとどまった。その姿を見て、シャノンは微笑む。

「では行きましょう、お嬢さん^{レディ}」

シャノンが冗談めかして、今はもう使われなくなってしまったアシュリー王国の言語で言う。が、

「はい……。——えっと、あの、？ れでい？ って、なんですか？」

ユーフェミアは真面目くさった顔でシャノンへ問い返した。

s c e n e 15

*

*

*

橙^{だいだい}色の炎が揺らめく。

彩乃の部屋は電気がなく、明りは蠟燭^{ろうそく}の炎のみ。部屋はこげ茶色の板張りの床で、広さは約十二畳^{じふに畳}ほど。中心に大きな木のテーブルがあり、その上と部屋の四隅と彩乃の横たわる布団の枕元に燭台^{しょくたい}がおかれ、蠟燭が夕焼け色の炎を放っていた。光は優しく、枕元に正座をしているユーフェミアと白胡、あぐらをかいているシャノンの姿を照らし、それぞれの顔に陰影をつける。

「……で、ユーフェミア。この、彩乃の病気は何だ？ 眼の色が変わる病気なんて、聞いたことねえぞ」

「そうですか。……私にも、この病^{やまい}の詳しいことは分かりませんが。けれど、病の進行のサインとして、こうして片目が血を流して赤くなることと、この病にかかった者が——？ 呪われし瞳の子？ と呼ばれることなどを、私は知っています」

「呪われし、瞳の子……」

シャノンの背筋に、ぞつと悪寒が走った。その病気がどんなものか分からないというのに、その名を聞くだけで嫌悪感が身体を駆け巡り、胃から食べ物を迫^せり上がらせる。

シャノンはこくりと喉を上下させて、唾を呑み下した。ユーフェミアは悲哀におぼれているかのような、苦しげで寂しげな顔をしている。

「ええ。呪われし瞳の子には、その名の通り子供しかなりはしません。しかも、発病するのは十代以下のときです」

「そんなに長い期間、彩乃は——。うん？ でも、待て。子供しかならないって言うけど、その病気にかかった子供が、大人になった

ら……？」

シャノンの尤^{もつと}もらしい問いに、ゆるゆると力なくユーフェミアは首を横に振った。

「呪われし瞳の子は、大人になるまでは——厳密に言う^{はたち}と二十歳になるまでは、生きられないのです……」

「っ……」

シャノンは無意識のうちに自分が眼を大きく睜^{みは}り、口を小さく開いて息をのんでいたことに気がつかなかった。胸の皮膚を突き破らんばかりに心臓は激しく脈打ち、シャノンの耳に鼓動が反響する。シャノンは喘^{あえ}ぐような苦しい息を繰り返し、ユーフェミアが心配げに声をかけるほどだった。

「えっ。あ。だ、けどっ……。今、彩乃の歳は……」

「——はい。彩乃は現在……十八歳です。今年の夏で、十九歳になつてしまうのです……」

「そんなっ……。じゃあ、彩乃はもう……いつ死んでも、おかしくないってことか……？」

シャノンは手を震わせ、恐怖に冷や汗を流しながら訴えた。ユーフェミアはまつ毛を伏せて木の床を見つめ、こくりと弱々しく頷いた。その肩と唇は震え、俯いているため表情は分からない。

ユーフェミアは視線を上げぬまま、小さく息を吸い込んだ。

「呪われし瞳の子の体内には、一匹の虫が棲^すんでいるそうです。その虫は長い年月を経て、宿主の身体を喰いつくし、最後には宿主の身体の内を、奪つてしまうのです。そうなつてしまった子供は、寄生虫に身体を奪われ、己の意思で動くことが不可能になってしまいます」

「——それで、その寄生虫は、宿主を、殺す、のか？」

シャノンの悲痛げな問いに、ユーフェミアは重たげに首を振る。

「いいえ。まだ、殺しはしません」

シャノンはユーフェミアの返答に眉をひそめた。

「じゃあ……。一体、何を……？」

「寄生虫は、狂っているとしたか思えない行動を、宿主にさせるのです。その中で、一番多いのは――殺人、です」

シャノン は再度息をのむ。眩暈を起こしそうなほど激しい動悸を抑えようと、短く空気を吸っては吐いてを繰り返した。

「寄生虫はしばらく宿主を操った後……宿主の片目から……孵化するの、です……」

シャノンの口の中に、すっぱい液が胃から迫り上がってきた。その液を吐き出したい気持ちを抑え、シャノンは静かにその液体を嚥下する。

ユーフェミアは消え入りそうなほど小さな声で、しかしはつきりと続ける。

「呪われし瞳の子が死ぬ間際は、眼を向けていられないほど、悲惨だと聞きました。血走った眼を見開き、腕や額から血管が浮き出し、訳の分からぬことを叫び続け、片目を掻きむしりながら、死んでいくそうです。そして、眼からみは孵かえった寄生虫は、宿主の赤くなる前の瞳の色と同じ色の、目をみは瞠るほど美しい羽をもつ、？蝶？だそうです」

s c e n e 15 (後書き)

さてさて。シリアスな雰囲気ぶっ壊して、ここで私の中のキャラクターの声のイメージを声優さんに当てはめたいと思います。

シャノン…沢城みゆきサン（超大好きな声優さんです！！ 第四回
声優アワード主演女優賞受賞おめでとうございますっ！！ C A N
A A Nと化物語をみて沢城さんに魅了されましたっっ！！）

ユーフェミア…能登麻美子サン（私が初めて好きななった女性の声
優さんです キノの旅のティーの声は、メチャぴっ तरीです！）

彩乃…水樹奈々サン（歌も、声も大好きです！！ ハガレンのラン
ファンの声は良すぎですw w）

白胡…竹達彩奈サン（けいおんのあずにゃんが可愛すぎました！！）

s c e n e 16

ユーフェミアが、ふっと口をつぐむ。シャノンは視線をあちこちに巡らせて、震える唇を開いた。

「信じられねえよ……。だって、いつも元気で、軽口ばつかたつき合って、フザケまくって、一回、広間の障子まで、破っちまって……。白胡にはめちやくちや二人で世話になったし、ボクが早く回復するように……。彩乃、気を使ってくれてたし……。今日だって、木刀で稽古をしようって言い出したの、彩乃だったし……。何で……。何で、だって……。だって……。ッ！」

シャノンはぎゅっと眼を閉じ、両手で顔を覆った。その蒼い瞳からはらりと、透明な熱い雫がこぼれ落ちる。はらはらはらと、涙は次から次へとこぼれ落ち、それを必死になってシャノンは拭う。拭う度に頬は濡れ、シャノンの手から逃れた雫は木の床に黒く丸い跡をつける。シャノンの口からうめき声の様な嗚咽おえつが漏れ、鼻水をすす啜る音がやけに大きく部屋に響く。

「シャノン——」

ユーフェミアが頭を上げ、肩を震わせているシャノンの頭にそっと手を伸ばそうとしたときだった。

「布団がふつとんだ！ アルよ」

幼い声が、部屋に大きく反響した。

ユーフェミアの手はぴくりと動きを止め、シャノンは「えっ？」という風に顔から手を離れた。

シンとした沈黙が降り注ぐ。大声の後の沈黙のため、余計にそれは静かに感じられた。

シャノンの涙はあまりの驚きに止まり、ポカンとした顔でユーフェミアとシャノンはくだらないシャレを言った、クリーム色の髪を持つアンドロイドを見つめる。

「ダジャレを言うノはダレジャ、アル。それは、私、アルね」

白子はニコニコと笑って、自分を見つめる二人をとても楽しそうに見る。

「……あ、の。白胡……？ 故障、でしょうか……」

ユーフェミアは遠慮がちに戸惑ったような視線を向けて白胡の名を呼ぶ。すると白胡は、すねたようにしょぼんと口を尖らせた。

「面白くなカッタ、アルか？ 私、二人にハ笑顔にナッテほシカッタ、アルよ」

白胡の言葉に、ユーフェミアはぱちくりと大きく瞬きをし、シャノンのはつと息をのんだ。

僅かな静寂の後、

「プッ。ハハハハハッ！ フハハハハッ！ ププッ！」

頬を濡らしたまま、ふいにシャノンが腰を折り曲げて大声で笑い出した。そのあまりの声の大きさに、びくりとユーフェミアは身体を震わせる。白胡はにこりと笑ったまま、愉快に笑うシャノンを見つめていた。

「クククッ。そうだよな、白胡。誰も、泣き顔なんて見たくないよな。うん。面白かったよ」

「ソう、アルか？ それは良カッタ、アル」

白胡はその美しい髪を揺らしながら、首を小さく傾けて笑った。そんな姿を見て、ユーフェミアも綺麗な微笑みを浮かべた。

たゆとう金髪がふわりと揺れ、ふいにユーフェミアの身体が白胡の方へ傾く。

次の瞬間。ユーフェミアは白胡の小さな身体を強く、そしてとても愛おしそうに抱きしめていた。それは、血の通わない冷たい身体だったが、その時ユーフェミアは確かに白胡の身体の中に温もりを感じていた。

「白胡……。ありがとうございます」

「それホドでモないデス、アルよ」

白胡はさらに楽しそうな、優しそうな笑みを口元に広げた。

橙色の炎が照らす中。三つの黒い影は壁で揺らめき、その中の二

つは重なり合っていた。

白胡を大切そうに抱くユーフェミアを見ながら、シャノンはその
と微笑む。が――

その手のひらは白くなるほど握りしめられ、小刻みに震えていた。

s c e n e 1 6 (後書き)

最近は一話が短くて本当にすいません……orz
でっ、でも、話の盛り上がりはまだまだ先ですよー!!

s c e n e 17

*

*

*

「シャノン殿、火ヲもう少シ弱めル、アルよ！」

「えっ？ わわっ」

シャノンは慌ててガスコンロの火を調節した。が、青い火は余計に大きくなる。

「それハ強めル方ダ、アル！ 逆、アルよ」

「マジッ!？」

シャノンはわたわたとしながら先ほどとは逆にひねる。とたんに火はふつと、中へすばまるようにして小さくなった。

綺麗な袴に着替え、白い割烹着を纏っているシャノンは、ふうつと額を拭う。シャノンとお揃いの割烹着を着た白胡は、シャノンを心配げに見上げる。

「シャノン殿。大丈夫、アルか？」

「えっ？ う、うん。ボクは大丈夫さ。これも、早く彩乃に元気になってもらうためだ。彩乃だって、ボクが怪我を回復している間は、こうやって白胡を手伝っていたんだろ？」

「ソウ、アルが……。彩乃殿は、料理ノ経験がアツた力らできタ、アルよ？」

「うっ……」

シャノンはぎくりと顔をひきつらせ、ひょいっと白胡から視線をそらした。白胡はじいっとシャノンを下から見上げる。

「失礼でスガ、シャノン殿ハ料理をシタコトがある、アルか？」

「あつ、あるに決まってんだろっ……!」

「デは、何故お粥もマトも二作レナイ、アルか？」

「それは……っつ、作ったことがないからだよ。それにボクの国の

主食は米じゃなくてパンだしな」

シャノンはどうだ！　と言わんばかりの顔で、自分の胸の辺りまでしか背がない白胡を見た。碧眼と碧眼がぶつかる。白胡はその作り物の碧眼に、疑うような光を灯してシャノンを見ていたが、ふつとその光を緩ませた。

「素直じゃない、アルね。でも、彩乃殿ノために、慣れナイ料理をスル心は良イと思う、アルよ」

白胡の言葉に、シャノンは耳と首まで真っ赤にさせて「うっ、うるせえよッ！」とそっぽを向いた。

「クスクスッ。あ……。できた、アルよ」

唐突に白胡が言った言葉に、シャノンは眉を寄せる。

「は？」

「鍋のフタをトル、アルよ」

「え？　あ、ああ」

シャノンは慌ててミトンに手を通し、淡い灰色をした石でできている小さな鍋のふたを取った。

ほわん、と鍋から一気に湯気が溢れだす。その中から現れた、銀に煌めくお粥。

「うおっ！　ちゃんとできてンじゃん」

「はい。私ノ中にハ、タイマーが入ってル、アル。ソのタイマーで、時間ヲ測ッテイタアル」

「へえ。そうなのか……」

「ハい、アル」

白胡はすらつとした手を伸ばし、カチンと小さな音を立てて火を消した。

「シャノン殿、クレぐレも落トシテはイケない、アルよ」

「分かってるって。ボクはそこまで慌てん坊じゃないよ」

「でハ、シャノン殿二任セタ、アル」

白胡は、ほかほかと湯気を上げるお粥とレンゲを置いた木のプレ

ートを、シャノンの方へ差し出す。シャノンはプレートの横についた小さな取っ手に手をかけて、そっと持ち上げた。規則的に上がっていた湯気が揺れ、ふわりと小さく不規則な動きをする。

「ンじゃ。さっそく持つて行くから」

「気をツケる、アルよ」

「はいはい」

シャノンは台所を出、薄暗い廊下へと足を踏み出した。

この廊下をまっすぐ行き、突き当りの二つのわかれ道を右に曲がった三つ目の部屋が、彩乃の部屋だ。

シャノンは手に全神経を集中させて、ゆっくりと廊下を歩む。ギシ、ギシと小さな音が足元から上がる。

左右が対になってある部屋を六つ行ったところに、左右に分かれる道はあった。廊下の正面には、太陽の光を屋敷の中に流し込む、三日月形の小さな出窓の様なものがあった。窓の前には、シンブルな白い花瓶に一本の桜の木がいけられている。桜の花弁は、太陽の光を浴びて透けて見える。

「えっと……。ここを、右に曲がった三つ目の部屋だな」

シャノンは慎重に爪先を右へ向け、すり足気味に歩く。

シャノンが足をすりながら進む音だけが、静かに響く。ちらりとお粥から視線を上げ、三つ目の部屋を確認した。その時、
「もう、イヤなんですっ!!」

彩乃の悲鳴のような大声が、シャノンの耳をつんざく。びくつとシャノンは震え、その振動は手からお粥をのせたプレートに伝わる。カチャン、と鍋とレンゲが触れ合う。

シャノンの足は、自然と止まっていた。その蒼く澄んだ眼は瞠られ、唇は強く噛み締められている。

逸る^は気持ちを抑えながら、シャノンはまたゆつくりと足を進める。ぼそぼそした、ユーフェミアの小さな声がその耳に届く。

彩乃の部屋の前までたどり着いたシャノンは、部屋の戸がわずかに開いていることに気がついた。そこから、橙色の淡い光が廊下へ漏れている。

良心がずくりと鈍く痛み、頭の中で自分を非難する声も上がったが、シャノンは部屋には入らず、戸に背を向けて二人の話を立ち聞きた。

「……何故、私はこうなってしまったのでしょうか……？ 主様をお守りしなければならぬというのに……。逆に、守られているなんて……。本当に……。ごめんね……。自分が、情けないよっ——」

彩乃の絞り出すような、悲痛な声。その言葉の最後は敬語ではなく地の言葉だったが、シャノンは違和感を覚えなかった。

シャノンは立ちつくしたままぎゅっと顔を歪め、瞼を伏せた。

「そのようなことは、ありませんよ。彩乃は私が秘宝の守り手となつてから三年間ずっと、その身を呈^{てい}して私を守ってくださいただじゃありませんか。それに、病は仕方のないことですよ」

シャノンは静かに身体を動かし、戸の隙間からそつと中を窺^{うかが}った。蝋燭の火で橙色に染まった、入口近くに敷いてある白い布団の上。そこに彩乃は横たわり、その左側の枕元にはユーフェミアが座っていた。そして――

彩乃は両目の上に右腕を乗せ、その隙間から大粒の涙をこぼしてい

た。

シャノンに驚きで、口を小さく開けていた。

この数日間、彩乃の涙など見たことがなかったのだ。眼から血を流したときでさえ、彩乃は消して泣いたりしなかった。

「本当に、自分がイヤになってしまします……」

「彩乃……」

ユーフェミアは悲しげにまつ毛を伏せ、彩乃の涙にぬれた顔を見つめる。シャノンはその光景を見てはいけなような気がしながらも、目を離せなくなっていた。

「——主様」

「はい。何でしょう？」

「一つ、お頼みしたいことがあります」

「はい。それは何でしょう？ 何でも構いませんよ？」

ユーフェミアは声音に僅かな喜びをにじませ、彩乃に優しく問いかけた。彩乃はそつと腕を眼から離す。その下から、不気味なほど美しい黒と赤のオッドアイが姿を現す。

「——もし、寄生虫にこの身体が奪われてしまい、私が狂いだしたときは……迷わず、私を殺してください」

「なっ……!!」

ユーフェミアは眼を見張り、唇を震わせた。先ほどまで浮かんでいた優しい笑みは一瞬でかき消え、再び不安と憂いが影を落とす。蜜色の瞳は鈍い光を帯び、彩乃のオッドアイは虚ろに天井を見つめる。

「そのようなこと……私には、できません。彩乃は、私に苦しみを与えるというのですか？」

「——そうかもしれません。けれど、そうしなければ、狂ってしまった私は……主様を殺してしまうかもしれません。私は、主様には死んでほしくないのです」

「けれどっ……そんな……」

「……大丈夫ですよ。主様は、白胡に？彩乃を殺せ？と命令されるだけでよいのです。白胡ならば確実に私を殺すことができるでしょう」

彩乃はユーフェミアを安心させるかのように、そつと微笑んだ。が、ユーフェミアは苦しげにうめき声を上げ、瞳から涙をこぼすだけだった。

「貴女は、私に殺人者になれと仰おつしやるのですか？」

「いえ。呪われし瞳の子の殺害は、法律で殺人とはみなされないと決められています」

ユーフェミアは固く眼を閉じる。彩乃は、ぼんやりと闇に包まれた天井を見続ける。

「……っ」

シャノンは、震えていた。身体中が震え、周りで揺らめくヒカリも小刻みに震え、それを抑えようとしても震えは一向におさまらない。シャノンはそのまま身体を戸の隙間から引き、そして、

「っ——！」

その手から、プレートのとつてを滑らせた。

するりと逃げるようにして、プレートはシャノンの指から離れてゆく。シャノンは何も出来ぬまま、ぎゅつと眼を閉じた。頭の中で、白胡とともにお粥を作っていた時の記憶が、走馬灯のように駆け巡る。

派手な音とともに石でできた鍋が割れ、シャノンと白胡が作ったお粥が廊下に飛び散る。

——と思いきや。

「っ——」

音は、シャノンが耳を澄まそうと聞こえなかった。先ほどまでと何ら変わりなく、廊下はしんと静まり返っている。

シャノンは恐る恐る眼を開け、

「！」

自分が眼にした光景を、信じることができなかった。

何とお粥が入ったプレートが、シャノンの腰のあたりの高さで浮いていたのだ。それは、見ている者を時が止まったかのように錯覚させる光景であった。

「えっ……。何で……」

掠れたような声で、シャノンはやっとそれだけ言葉にした。プレートは相変わらず、同じところに浮いたままだ。

シャノンが訝しみながらも、プレートを再度手にしようとしたとき、

「ほいっと」

シャノンの左から伸びてきた手にプレートが持ち上げられた。

「？」

シャノンは眉を寄せて首を左にひねる。そこには、

「温かいうちに、持って行った方がいいんじゃないかな？ それから、立ち聞きは感心しないなあ」

童顔の男性が、立っていた。

s c e n e 18 (後書き)

さて、今回は少し長かったですよ。

さてさて、新キヤラ登場で、異常に a c t 1 が長くなってしまいました w w

s c e n e 19

「——誰？」

シャノン首を傾げる。男性は小さく笑うと「まずは部屋に入らせてもらおうよ」と言っ、何の遠慮もなく部屋の戸を大きく開けた。

「誰ですか？」

ノックもなしに戸が開いたので、中にいたユーフェミアは驚いて顔を上げた。同時に、彩乃の虚ろな視線も入口の方へ泳ぐ。とたんに、

「父上！！」

見ている方が驚くような素早さで、がばっと布団から飛び起きた。
ここにち

「今日は。それから、久しぶり。彩乃、ユーフェミアちゃん」

男性——彩乃の父はにこにこ、いかにも無害な笑みを浮かべて、空いている左手を二人に向けてひらひらと振った。

彩乃の父はシャノンと同じような袴をはいていた、年齢は三十代後半なのだが、どう見ても二十代の前半にしか見えない。神と瞳は彩乃と同じ、黒色をしている。髪はとても長く、後ろで一つに束ねていた。漆黒の瞳には、フレームの薄い銀縁眼鏡がかかっている。

呆然とシャノンが彩乃の父である男性を見つめていると、ふいに彩乃の父はシャノンに木のプレートが無造作に渡した。

「——とっ！」

シャノンは慌てて、プレートのバランスを取ろうと手を動かしたが、

「あ、れ……？」

プレートはシャノンがバランスを取らずとも、シャノンの手の高

さで水平に浮いていた。

シャノンは眉をひそめて訝しみながらも、そつとプレートを取っ手を握った。すると、シャノンの手にずしりと重たい感覚が伝わる。レンゲがプレートの上で左右に揺れ、カタカタと小さな音を立てた。突如として現れた彩乃の父は、ゆつくりとした足取りでユーフェミアと彩乃に近付く。

「お久しぶりです、蓬^{よもぎ}さん。お元気そうで、何よりです」

ユーフェミアは両手をぺったりと床につけ、深々と最も丁寧なお辞儀をした。蓬、と呼ばれた彩乃の父は、屈託のない子供の様な笑みを浮かべてユーフェミアを見つめる。

「私はいつだって元気だよ。この森と屋敷が広くて、ここへたどりつくのにはなかなか骨が折れたけどね」

「すみません。大変、お疲れでしょう？」

「いやいや。秘宝を守るための森と屋敷だ。これくらい広いのが、妥当だよ」

蓬の足取りはゆっくりだったが、彩乃が寝ていた布団は入口近くに敷いているため、彼はすでに布団の右側の枕元に着いていた。そこに蓬はあぐらをかき、彩乃を挟んだ向かいに座っている、ユーフェミアを見る。

「相変わらず、ユーフェミアちゃんは美人だねえ。いや、三年前よりもっと美人になったかな？」

「父上」

彩乃が叱咤^{しった}するような声音でいい、蓬を睨みつける。蓬はその眼がオッドアイなことに驚きもせず、まあまあと彩乃を制した。

「大丈夫だ。彩乃も美人になってるよ」

「そんなことを、あたしは聞きたいんじゃないよ。……父上は何故、ここに来たんだい？」

「いや。そんなことは後でいいから。ほら、そのアシユリー人の女の子」

蓬は入口を振り返り、そこに立ちつくしているシャノンを見た。

「えっ？ あ、ボク？」

「そうだよ。君以外に誰がいるんだい？ 彩乃に、粥を持ってきたんだろ？」

「あっ」

シャノン慌てて歩を進めた。カチカチとレンゲが鍋に当たる乾いた音を響かせながら、シャノンは彩乃のそばへ来た。自分の隣に座る蓬に、シャノンはペコリと小さく頭を下げた。

「彩乃。これはボクと白胡で作ったお粥だからな。ちゃんと残さず食えよ」

「はいはい。分かってるよ」

シャノンはかがんで膝立ちになり、お粥をプレートごと彩乃に渡した。作りたての頃はせわしなく上がっていた湯気も、今では元気をなくしたかのようにすっかり薄くなっている。

彩乃は小さな三つ葉がそえられたお粥を、嬉しそうに微笑みながら見つめた後、プレートを布団ごしに自分の足の上に置いてその前で「いただきます」と手を合わせた。その姿を真剣にシャノンは見つめ、蓬とユーフェミアは顔を少しほころばせて見つめる。四人とも、無言のままだ。

レンゲを手にした彩乃は、自分をじつと見つめる三人をいちべつ一瞥し、

「あのねえ」と声を上げた。

「そんなに見られてちゃ、食べにくいんだけど……」

「あつ。ごめん」「すつ、すみません」「ああ。そうか」

シャノンは少し顔をしかめ、ユーフェミアは頭を小さく下げ、蓬は問題がやっと解けたという風に右手で左手を打った。

「それじゃまずは、アシュリー人のこの子にあいさつしておいた方が、いいかな？」

蓬はあぐらを正座に直してシャノンの方を向き、シャノンも慌てて蓬に向き合った。その後、少々苦戦しながらも礼儀正しく正座をする。

「私は入江蓬。彩乃の父親だ。よろしく」

蓬はすつと、シャノンへ手を伸ばす。

「あ。はい。ボクは、シャノン・アンヴィルと申します」

シャノンは名乗った後、蓬の手をそつと握った。蓬は握った手を小さく上下に動かすと、そつと解いた。

「——で。あの。思っただけですけど……」

「うん？ 何だい。シャノンちゃん」

「えつと……その、二つ聞きたいことがあるんです。一つは、どうしてこのお粥を置いた木のプレートを浮かばせることができたのか、ということです。もう一つは……どうしてボクが、こんな男みみたいな格好をしているのに一目で女の子だと分かって、さらにアシュリー人だということも分かったのか、ということです。ボクのような茶髪碧眼なら、ユバーフィールド連合王国にもいるのに、あなたはボクをアシュリー人だと断定しましたよね？」

シャノンの問いに、蓬は苦笑する。

「一気に聞かれても答えられないよ。だけど、一つ一つ順を追って説明しようか。——まず、私が物を浮かせることができたのは何故か？ それはね、シャノンちゃん。私が？ 魔術師？ だからだよ」

s c e n e 19 (後書き)

今回も結構長めでしたよ。

次回もできる限り頑張りたいです！！

編集をして、蓬の容姿を足しました。

s c e n e 2 0

「魔術……師？」

「そう。私は魔術を使って、この瑞穂の国で人助けをしているんだよ。だから——ほら」

そう言う蓬は、ぴんと右手の人差し指を突き出した。指の先にあるのは、お粥にそえられている一枚の三つ葉。シャノンがじつと三つ葉を見つめる中、蓬は突き出した指をぴんつと上に跳ねあげた。すると、

「わっ！ すっ、すげえ……」

それまでお粥の中心にそえられていた三つ葉が、蓬の指の動きに合わせてふつと宙に浮かんだ。

「これくらいは、簡単なことさ。重量が五十キロ以内だったら何でも持ち上げられる」

蓬はくるくると指を回して、三つ葉を彩乃の目の前で回転させた。シャノンは三つ葉を追って眼球を回し、お粥を静かに食べている彩乃はジャマそうに顔をしかめて、回り続ける三つ葉を見る。その眼が、キラリと閃いた。

「あつ。非道いじゃないかあ」

彩乃が三つ葉を、レンゲでお粥の上にはたき落したのだ。ベチャつという小さな音を立てて、三つ葉は鍋の淵に落下する。

蓬は、遊んでいた玩具おもちゃを取り上げられた子供の様な声を上げた。

「父上は子供かい？ それに、今は食事中だよ。あたしは」

「分かってるって。ちよつとしたイタズラな心が生じてしまつてね」

蓬は、無邪気な子供のように笑った。その笑みによって、童顔な顔がさらに幼くなる。

「すごいですね……。瑞穂の国は魔術が発達していると耳にしたことはありますが。やっぱり、魔術って何でもできるんですか？」

「いいや。何でもできるわけじゃないよ。何でもできるなら、こうして彩乃のように苦しむ人もいなくなるだろうからね」

彩乃はお粥から顔を上げ、揺らめく炎に照らされて顔の半分が陰になっている蓬を見る。シャノンとユーフェミアも、蓬の話を神妙に聞くようにその顔をじつと見つめていた。

「だけど、私たち魔術師は自分のできる範囲でもいいから、苦しんでいる人たちを一人でも多く助けなきゃいけないんだ。確かに昨今は、魔術を悪用するけしからん者もいる。だけど私は、魔術とは人を救うためにあるものだ、と信じているよ」

「父上……」

彩乃はふつと視線を、鍋の隅にある三つ葉に落とした。その眼が三つ葉を捉えると同時に、三つ葉の近くで煌めく一本の糸の様なものを見つけた。彩乃は眉を寄せながら不自然に見えないような動きで、そつと糸の周りのお粥と三つ葉をかきわけ。キラキラと光に反射する糸が姿を現し、それがシャノンの栗色の髪の毛であることに彩乃は気がついた。が、髪の毛が入っていることに気付いたときのシャノンの態度を彩乃は頭の中で想像し、結局このことをシャノンには告げないことにした。彩乃はそつと三つ葉を指でつまむフリをして、すつと髪の毛をお粥の中から抜くと三つ葉とともに、木のプレートの上に置いた。それから視線だけを上げてシャノンを一瞥し、その視線が自分の方に向いていないことを確認した。

「じゃ。次の説明。何故シャノンちゃんが、一目で女の子とを分かっつて、アシュリー人だということまで分かったのか。これはね、とても簡単なことさ。——人にはね？ 気？ というものの流れがあるんだ。その流れは、年齢、性別、人種、種族、人格、体格、感情、体調なんかで変わる。魔術師は、その気の流れを読む力を取得しているんだよ。だから、一目で分かったのさ」

「……それは、簡単なことなのですか？」

「ああ。魔術師にとってはね」

シャノンはいまいち分からないという風に、眉をひそめて首をかしげる。そんなシャノンに、

「君のそのヒカリのチカラだって、体力を使ったり暴走したりする
とはいえ、君にとって操ることは簡単だろ？ それと一緒にだよ」

蓬はニヤリとして言って見せた。はっと、シャノンは眼を見開く。
今も自分の周りをうろついているヒカリが、ふと鮮明に視界で踊り
出したような感覚に襲われた。

「……それも、気というやつで分かるんですか？」

「うん。ま、そのヒカリ自体は操れないし、見えないけどね。？神
の愛娘？は独特の気を放っているから、とても分かりやすい」

シャノンはニコニコと自分へ笑みを送ってくる蓬を見つめる。果
てしなく闇が続いているような深い漆黒の瞳からは、全く感情が読
めない。それは、相手に感情を読ませることを拒んでいるような瞳
だった。

s c e n e 20 (後書き)

今回はちよつと短いですつ。

でも、下書きの方ではこの件の話を書き終えましたよっ!!

scene 21

「——ところで蓬さん。先ほど彩乃も言っていましたけど、何故ここへおいでになられたのですか？　しかも、彩乃が身体を悪くした今」
ユーフェミアの問いに、蓬はユーフェミアに視線を移してふつと微笑んだ。

「ユーフェミアちゃん。それは私が魔術師兼時見だからだよ。だから、彩乃の病が進行すると知ってここへ駆けつけてきたんだ」

「時見、ですか」「なるほどね」「トキミ？」

ユーフェミアはパチパチと瞬きを繰り返して、彩乃は小さく頷き、シャノンには聞きなれない単語に顔をしかめた。

「ああ。ちなみにシャノンちゃん。時見とは、過去や未来を見ることができる人のことだよ。人名じゃないからね。まあ、私の力は本当に小さなものだから、何年も先のことは分からない」

蓬の言葉に、お粥を残り三口ほどまで食べた彩乃が、顔を上げる。

「じゃあ、あの日——あたしが……主様と秘宝の守り手になった日も、父上は結果が分かっていたのかい？」

「もちろん。結果を言ったら面白くないから、あえて結果を教えていなかったけどね」

彩乃とユーフェミアはへえと意外そうな顔をする。シャノンは三人の会話に付いていけず、頭上にハテナマークを作っていた。

「それよりも、彩乃。病の方は大丈夫なのか？　眼は痛まないか？」「ふふん。大丈夫だよ。あたしを誰だと思ってるんだい？」

彩乃の自慢げな言葉にシャノンは一瞬、先ほど彩乃がユーフェミアに弱音を吐き涙を流していた姿を思い出し、顔を曇らせた。その感情の変化に、蓬は気付いていたがあえて彼女をそつとしておいた。「この調子だったら、しばらくは大丈夫そうだな。では私は、この

あたりで御暇おいとまするでしょう」

蓬はよいしょ、と言って立ちあがる。それから三人を見まわし、
「それじゃ」と声をかける。

「では。お身体には十分お気を付けください」「じゃあね」「さようなら」

ユーフェミアは蓬が来訪してきたときと同じように、最も丁寧なお辞儀をし、彩乃はひらりと軽く手を振り、シャノンのちはペコリと頭を下げた。

三人にニコニコと笑っていた蓬は、ふいに「あ」と言って笑みを消した。

「言い忘れてた。ユーフェミアちゃん。シャノンちゃん。——頑張っ
てね」

「はい?」「?」

ユーフェミアはきょとんとして瞬きを繰り返し、シャノンは小首を傾げた。

再度子供の様な笑みを浮かべた蓬はそれだけ言つと、戸の向こうへ消えてしまった。

「……どういう意味だったんだ?」

蓬が出て行つてからしばらくの後、シャノンが語尾を上げて言つた。

「父上は時見だよ? きつと二人にはこれから何かがあるのさ」

彩乃はそう言つと、残りのお粥をすべて口の中へ消した。

屋敷の門をの前まで来て、

「あ、しまった。二人に海棠のこと言い忘れてた。……ま、いつか」

蓬は一瞬足を止めた。しかし、適当なことを言つとまたすぐに歩

き出し、立派にそびえる門をくぐりぬけた。そこで、

「今日八。彩乃殿ノお父様、アルね」

石畳にこびり付いた彩乃の血を、水が流れ出ているホースとブラシを使ってせつせと洗い落としている白胡に出会った。

蓬は足を止め、右手を白胡の方へ上げる。

「ああ。今日は。君は確か、白胡^{はっこ}ちゃんだったね」

「はい、アル」

「えらいねえ。大変だろう？ 血ってなかなか落ちないから」

「大変デも、これが私ノ仕事デす、アル」

白胡は屈託のない自然な笑みを浮かべた。

「白胡ちゃん。彩乃を、よろしく頼んだよ」

「了解しました、アル」

白胡はかわいらしい笑みを浮かべたまま、蓬に言葉を返す。蓬はそれを確認するように小さく頷くと、また歩み始めた。

s c e n e 2 1 (後書き)

さて、今回最後に出てきた「海棠」という名前。どこかで聞いたことありますね。確か、a c t 1のs c e n e 1辺りで……。

s c e n e 2 2

*

*

*

次の日の朝。

太陽の光に照らされた大地に、小鳥のさえずりが響き渡る。爽やかな春風は草木をさわさわと揺らし、心地よいメロディーを奏でる。蒼空あおぞらが広がるその日。まだ広間の布団の上で眠っている、栗毛の少女の姿があつた。

「うん……。やっぱり、彩乃には……木刀振り回してる方が、似合ってるってえ……」

少女、シャノンはそのような訳の分からない寝言を言いながら、寝相悪く大の字になって布団の上に寝転んでいた。

「……………」

そんなシャノンの姿を、枕元に立って見つめる影が一つ。影はしばらく無言でシャノンを見ていたかと思うと、白い何かの物体を持った右手をシャノンの顔の上に持ってきた。ニヤリと影は顔をほころばせ、すつと物体から手を離す。白いそれは重力に逆らわず、下へと——シャノンの顔の上へと落ちてゆく。ぴちゃん、とシャノンの顔にその白い何かを着地した。

刹那、

「——っ！！ 冷つてええええ——！！」

シャノンが、布団から飛び跳ねるようにして起きた。その顔から白い物体がとれ、布団の上に落ちる。

「プツ。ハハハハハ！ それは、寝坊したバツだよ」

シャノンの驚き様を見て、声高らかに笑った影はぴんつと右手人差し指をシャノンに突きつけ、左手を腰に添えた。

「はっ……？ あっ、彩乃！？」

「おはよう。シャノン」

影もとい彩乃は突きつけていた右手も腰に添え、にっと屈託なく笑った。シャノンはその無邪気な少女の姿を、呆気にとられて見つめる。相変わらず彩乃の瞳は不気味な赤と黒のオッドアイだったが、黒眼には生き生きとした光が浮かんでいた。赤眼は、その奥に底知れぬ闇を宿したように重く暗く沈んでいる。

「彩乃。もう起きて、大丈夫なのか？」

「もちろんだよ。さっ、早く起きて。朝餉^{あさけ}を食べに行くよ」

「おっ、おう！」

彩乃は軽く手を振って、大きく翼を広げた鷹の絵が描かれている襖の向こうへと消えていった。

「――さてと」

シャノンは視線を下げ、そこに落ちている白い物体を見る。それは、冷たい水をいっぱい含^{ふく}んだ白い無地のタオルだった。

「起こし方が悪趣味だっつーの」

シャノンは苦笑しながら、そのタオルを摘み上げた。タオルが落ちていた部分の布団は、僅かに水を吸って濡れていた。

「あーあ。ま、べつにこれくらいなら大丈夫だろう」

シャノンはタオルを持ったまま布団から立ち上がり、そのまま猫の鳴き声のような声を上げながら、大きく伸びをした。

きつく晒^{ひく}し布をまき、その上から白い前合わせの和服を着、紺色の袴をはいたシャノンは「よし！」と声を上げる。

「今日も一日頑張るか。……精一杯恩返ししなきゃな。そろそろ、ここでもオサラバした方が良いだろうし」

シャノンは憂いを帯びた顔と声でそう言い、すうつと大きく深呼吸をした。

食事をするための広間へつながる北の廊下を二人の少女が歩みながら、ふと一人が声を上げた。

「そっぴやシャノン。今日の朝、寝言で？彩乃には木刀を振り回してる方が似合ってる？とか何とか、言ってなかったかい？」

彩乃の言葉に、シャノンはぎよつと眼を見開く。

「えっ……！！ ウソッ！？」

シャノンは驚きで知らず知らず大声を上げた。その声が五月蠅いという風に彩乃は顔をしかめながらも、こくりと頷く。

「嘘じゃないよ。で、それはどんな夢だったんだい？」

良く言えば艶やかな、悪く言えば相手^{いたぶ}を甚振るような笑みを浮かべて、彩乃はニヤリとシャノンを見つめる。

「……………。あ、あれはなあ——」

シャノンが観念したように口を開き、夢のことについて語ろうとしたときだった。

「きゃあああああああ——！！！」

シャノンの声を遮るようにして、鋭い悲鳴が虚空を切り裂いた。

「っ！！ 主様っ！」

二人の目つきが瞬時に鋭くなる。同時に、彩乃はいつも背負っている日本刀をすらりと抜き放った。煌めく白刃が二人の前に姿を現す。

「シャノン！ あんたは屋敷の裏の宝物庫に行つてきな。あたしは主様のところに行く！」

彩乃は早口でシャノンに叫び、その言葉を言い終わらないうちに悲鳴が聞こえてきた方向へと疾風のごとくかけだした。

「ボクも行かなきゃ……」

シャノンはぎゅっとこぶしを握り締める。そのままくると振り返り、宝物庫があるであろう方向をきつと睨んだ。

s c e n e 23

*

*

*

木造のいたって目立たない、質素でこじんまりとした円形の建物。その建物の入り口である観音開きの扉の前に、全身に黒い服をまとった一人の人間が立っていた。背丈からして大人、体格からして女性であることが分かる。

女性は両開きの扉に厳重にかけられた鎖と、鎖を止めるための南京錠を漆黒の瞳でじっと睨みつけている。だらりと身体の横に垂らしている右手には、平穏な太陽の光に照らされて鋭く閃く両刃の**もろは**の太刀が握られていた。

どうやら女性は、建物にかけられた鎖を刀で断ち切ろうとしているようだ。

「……………。——っ」

女性は黒い布で覆われた口から大きく息を吸い、刀に両手をかけてすつと上段に構えた。漆黒の瞳を白い**まぶた**で閉ざし、精神を刀に添えた両手に統一させる。

そして、

「そうはさせねえぞ!!」

背後から響いた勇ましい声によって、精神統一はぶち壊された。すつと姿を現す、闇色の瞳。

「何者!!」

女性は振り返り、上段に構えていた刀の切っ先を後方に向ける。

「てめえに名乗る名なんてねえんだよ」

女性の後方には、爛漫の桜の木の枝に威勢よく立ち、鋭く女性を睨みつけている少年のような碧眼少女の姿があった。

「子供か」

女性は眼を細め、シャノンへ見下すような視線を投げた。木の上のシャノンは、女性の言葉に不敵な笑みを返す。

「子供だからって、甘く見んなよ。オバサン」

「口の悪いクソガキだな」

「そっちこそ、秘宝を狙ってるクソババアだ」

「私はババアと言われる歳でない」

「ボクだって、ガキといわれる歳じゃねえよ」

「私から見れば、お前はガキだ」

「そういうなら、てめえだってボクから見ればババアだ」

双方とも睨み合ったまま、似たような口悪い言い合いを繰り返す。しかしどちらも、相手に一歩たりとも勝ちを譲ったりしない。

「ああ。もうこれじゃ、らちが明かない。さっさと片付けるか」

シャノンはニヤリと自信に満ちた笑みを浮かべる。女性はシャノンの笑みを訝しく思い、眉をひそめた。

瞬間、

「ヒカリよ。あいつが持っている剣を切り落としなさい」

小声でシャノンは呟き、青い筋のヒカリは素早い動きで一斉に女性へ襲いかかる。

「っ！」

刹那に女性の身体に寒気が走る。自分の身に迫って来る何か。それを感じた女性は神経を尖らせ、剣を慎重に構える。しかし、

「？」

風が一阵舞っただけであった。女性は眉間にしわを寄せる。何も起きなかったことに対し、樹上の少女をあざ笑おうとしたその時。

——ふいに響く、乾いた音。はっと目を見開く女性。

「なっ！」

女性はそこで、自分の剣の刀身がなくなっていることに気がついた。女性は先ほどの乾いた音の発信源である、地面に落ちた刀身を一瞥する。

「どうだ！ ボクはクソガキなんかじゃない！」

「……いいや。立派なクソガキだ。？神の愛娘？などと、生意気な」
「！」

女性は木の上のシャノンを睨みつける。一方のシャノンは、驚きで口を開いていた。

「何故っ……。何で、あんたは、この力が神の愛娘のものだと、分かった……？」

「何故か？ フフッ」

女性は残酷に微笑みながら、しかしその瞳を鋭いナイフのように尖らせた。刀身のほとんどがなくなったが、まだ使いものにはなる剣を持っている右手を下におろし、そしてあるうことかそれをあっさりとは投げ捨てた。

今度はシャノンが訝しむ番となった。眉間にしわを寄せ、女性の行動を見つめる。

「教えてやろう。それは——」

刹那、女性の姿が霧のようにその場から何の前触れもなくふっと消えた。シャノンは眼前の光景が信じられず、はっと眼を見開く。

そして、

シャノンのすぐ目の前に現れた、女性。

「——私も、？神の愛娘？だからだ」

s c e n e 2 4 (前書き)

ごめんなさいっ！

今日はいろいろと忙しくて、遅い時間にならないと投稿できませんでしたっ！！

「なっ！」

女性は体重を前方にかけ、シャノンを後ろへと押し倒した。

さわりと風に揺れる、漆黒と栗色の髪。

呆氣にとられているシャノンは、簡単に後方へバランスを崩してしまった。そのまま小柄な身体は、背中から地へと落下を始める。

「！」

シャノンは自分を押し倒した女性の身体をつかんで一緒に地面へ落とすか、運が良ければ下敷きにしてやろうと頭をフル回転させて考えた。その考えを確信するより早く、シャノンの手は女性の身体を掴もうと伸びていた。が――

シャノンの前に、女性の姿はすでになかった。シャノンの両手が力強く、虚しく空を掴む。

「がはっ！」

シャノンはなすすべもなく、背中を石畳にぶつけた。女性を掴もうと必死になっていたため、咄嗟とっさに受け身さえ取れなかった。不幸中の幸いか頭は打たなかったが、しかし安息の余裕など全くない。

「なめるな。小娘」

「っ！」

仰向けに倒れているシャノンにのしかかるようにして、女性が再び突如現れる。その細長い腕がシャノンの方へ伸び、シャノンの白く細い喉を掴んだ。反動で、シャノンの頭が乱暴に石畳へ打ちつけられる。

ぎりぎりきりぎりと女性は容赦なくシャノンの喉を締め上げる。シャノンのか細い喉笛が苦しげにはねる。首筋を通る頸動脈の血が一瞬で止められる。視界がかすみ始め、頭がぐらぐらし、意識が朦おぼろになっなてゆく。

「私にはな、瞬間移動の力があるんだ。そして――」

女性は首をしつかりと掴んだまま、瞳を閉じかけているシャノンを軽々と持ち上げた。

「っぐ」

シャノンは小さく喘ぎ声を上げる。その身体は地から離れ、そして次の瞬間には、

——宙を飛んでいた。

いや。正確には、女性に投げ飛ばされたのだ。シャノンは背中から、秘宝を納めているという建物を突っ込んでゆく。

「がああああああっ！！」

壮絶な叫びとともに、シャノンは建物の入り口を木端微塵しつぽみじんに破壊した。

背中を溢れる鮮血で真っ赤に染めたシャノンは、人形のように建物の床の上を力なくごろごろと転がる。

「うつ……。ぐっ……」

木造の建物の木の床の上。そこにあるのは、痛みにとうちまわるシャノンの姿。栗色の毛に粉塵ふんじんをまぶしながら呻くシャノンの奥には、黒塗りの豪華絢爛な装飾が施された低い台の上に置かれた秘宝があった。秘宝は煌びやかで鮮やかな、美しい青や緑や赤をしているかと思いきや、味気のない黄土色をしていた。よほど秘宝を乗せている台の方が、価値があるように見えるほどだ。

もうもうと立ちこめる土煙りの中から、シャノンをやすやすと吹き飛ばした女性が姿を現す。女性は血だらけになって倒れるシャノンを冷ややかに、残忍に見つめる。

「私には、瞬間移動の力と怪力がある。小娘に勝ち目はない」

女性はニヤリと笑ってシャノンを見、無防備に晒された腹部を蹴り上げた。シャノンの身体は糸も容易く宙を舞い、壁に激突して静止した。本物の人形のように、何の抵抗もない。

「お前は破壊の力を持つか。しかし、それは命令せねば発動しない。それが、欠点だな」

シャノンは女性の言葉に何の反応も見せない。「フツ。くたばっ

たか」と女性が悠然と微笑を浮かべた、刹那、

「ジャア、ソノケツテンサエナクナレバ、ボクノハウガツヨイトイ
ウコトカ？」

地の底からわき上がってきたような、低く不気味な声が突如として響いた。その声に女性の笑みはかき消え、はつとした表情がその顔に浮かぶ。

「何者だ？」

すつと膝を折り、柔軟に身体を構えた女性は戦闘モードに入る。

同時に、床で力なく転がっていたシャノンの身体がマリオネットが糸を上へひかれて立ちあがるように、俯いたままユラリと立ち上がった。

「ボクハボクダ」

「違う。お前は、その小娘ではないな。先ほどと気配が全く違う。

……貴様、一体誰だ？」

？シャノン？の口元がニヤリと笑う。俯いていた顔をグラリと上げ、その瞳を女性に向けた。

「っ？ 赤……？」

女性の瞳に、明らかな困惑の色が浮かぶ。

？シャノン？の瞳は澄んだ碧眼ではなく、鮮血の様な残酷な赤に変わっていたのだ。

真紅の瞳を持つ？シャノン？は、その口元に悠然たる笑みを浮かべた。――刹那、

女性は右側前方から鋭い殺気を感じ、素早く身体を左へとずらした。とたんに、

「！」

右頬に、焼けつくような痛みを感じた。女性は？シャノン？に視線を投げかけたまま、恐る恐る痛む右頬を左手で触れる。

「……………」

乾いた左手が、べとりと濡れた。女性の額に、冷や汗が流れる。

「スコシ、ネライガズレタカナ？ ツギハ、ヨケラレナイヨ」

残忍な笑みを浮かべる？シャノン？は、女性を視線で突き刺すように見据える。歪につり上がったその口元とは対照的に、真紅の眼は全く笑っていないかった。

「くそっ……………」

女性は舌打ちとともに、霧のように姿をかき消した。次の瞬間には先ほど立っていた場所から五メートルほど離れた場所に、姿を現す。が、

「……！」

？シャノン？はその鮮血に染まったような瞳を、しっかりと女性の黒い瞳と合わせた。

――まるで、女性がそこに現れると分かっていたかのように。

「……………」

女性は今まで体感したことのない恐怖を、その身にひしひしと感じていた。

くすくすとも可笑しそうに笑う？シャノン？の瞳は、青白いヒカリを映し出す。まるで、この眼はしっかりとヒカリを見ることができていると証明しているかのように、赤い瞳の中で青いヒカリは

舞い続ける。

女性はゆつくりと舌で唇を湿らせた。

逃げ切れない、恐怖。満ち溢れる殺気への、恐怖。どこからどこを襲われるか分からないことの、恐怖。

女性は再度姿を消し、また違う場所に姿を現した。そして、

先ほどと同じように、？シャノン？と眼が合う。

ぎりつと奥歯をかみしめ、女性は再び移動しようとした。

——しかし、物事とはそう上手くいくものではない。

「！」

女性が瞬間移動しようとし身構えた刹那、何かに右足を払われた。そのままバランスを崩し、後ろへ倒れる。

痛みに顔を歪めながら女性は払われた足に視線を投げる。そこには、鋭いナイフで切りつけられたかのような細い線が走っていた。その傷口から、真つ赤な血が滴^{した}っている。

「何故だ……。先ほども今回も、何も命令は無かったはず……」

「アア。ソウダ。？カミノナムスメ？ノチカラ二八、カナラズケツテンガヒトツハアル。シカシ、コノチカラハ、ボウソウスルコトニヨツテ——ソノケツテンガナクナル。ツマリカンペキナハカイノチカラヲモツ、？カミ？トドウトウノソンザイニナルトイウコトダ」
不気味な声は倒れた女性に向けてそう言った。そのすきに女性は立ちあがそうとしていたが、

「っ！ 何故っ！」

足が、動かなかった。

まるで、足に筋肉の代わりに鉛をぎっしりと詰め込んでいるかのように、ピクリとも上がらないのだ。

「ムダナアラガイハヤメロ。ヒカリガオマエノカラダジュウヲトリカコミ、ウゴキヲフウジテイルンダ。ウゴケルワケガナイダロウ？」

ニタリと無邪気に笑って、？シャノン？はその瞳に女性の姿を映し出す。その瞳の中の女性は、身体中を青白いヒカリに束縛されていた。

「コレデオトクイノシユンカンイドウモムコウトナル。イマノオマエハ、タダノニンゲンダ」

「つつくしょう!」

女性はその瞳に憎悪と恐怖を浮かべて? シャノン? を見つめ、

「バイバイ」

にこやかに振る手と別れの挨拶とともに、心臓をヒカリに貫かれた。

噴水のように溢れる鮮血。鮮血を浴びながら優雅とも思える微笑を浮かべる? シャノン?。女性は眼を見開き、身体からくたりと力を抜いた。

女性にとどめを刺した? シャノン? は、

「っ……」

顔を伏せて眼を閉じ、ぐらりと身体を揺らした。そして、

「っ痛」

額を抑えながら、体勢を持ち直した。背中には、致命傷ではないがそれなりに大きな傷が広がっている。開いた瞳は広大に広がる空の色を映し出した海のように美しい、蒼。瞳の中で舞うヒカリの筋は、瞳の蒼によって保護色と化し見ることができない。

「……」

その瞳はまず、破壊された建物の入り口と内装を認識し、次に、

「っ……!」

心臓からゴポゴポと血をあふれさせている、一人の女性の死体を認めた。

「くそつ。また力が暴走しやがったのか……」

少女は敵を倒したことに對しての喜びの表情ではなく、力が暴走したことへの憂いの表情に顔をいびつに歪めた。

少女は、シャノンはゆっくりと深呼吸をするとすつと膝を折つてしゃがみ込み、女性の死体のそばへ跪いた。女性の漆黒の眼が見開かれたままの死に顔を一瞥し、そつと右手をその眼の上に添えた。そのまま手を下へずらすように滑らせ、女性の臉を降ろした。

「——とりあえず、秘宝は盗まれなかったし、良かったでしょう」
シャノンはずつと音もなく立ちあがり、ゆっくりと身体を反転させて後ろを振り返った。

——刹那、

「なっ！」

双眸をこれ以上ないほど大きく睜り、そこにあるものをまじまじと見つめた。

「う、そ……だろ。これって、まさか、そんな……」

そこにあったものは、黄土色をした独特の形の秘宝。
それは、

？砂漠の薔薇？——。

s c e n e 25 (後書き)

ふっふっふ。いよいよ a c t 1 も終焉に近づいてきましたよ。
どんな展開がまっているんでしょーねー」

「畜生……。畜生、畜生、畜生、畜生——！！」

壮絶な叫び声が、襖で何重にも仕切ることができる巨大な部屋に残響する。叫び声の主はまだ十代前半に見える、黒服をまとった一人の少年。その右腕には深く肉を抉られた傷があり、止めどなく血があふれていた。

左手で必死に傷口を抑える少年の数メートル先。そこには微塵の隙も見せない体勢で凜々しく刀を構えている彩乃がおり、その後ろに庇われるようにしてユーフェミアが立っていた。

「くそつ。何で、全然攻撃が当たらないんだああッ！」

少年は苛立たしそうに顔を歪め、天井に向けて叫ぶ。

「——無駄が多いんだよ。あんたの攻撃には」

彩乃は落ち着いた声で、少年の攻撃の欠点を指摘する。確かに、最初から少年の動きは大ぶりで、苛立ちに任せて武器を振るため隙ばかりの攻撃となっていた。

彩乃の言葉に、少年はさらに苛立ちを覚える——かと思いきや、

「——無駄。……。無駄、か。クククッ。ハハハハッ！ そうだ！

無駄だ！ こんなならだらと長い闘いは、無駄無駄無駄あッ！」

狂ったかのように声を張り上げ、血走った眼をぎょろりと彩乃に向けた。彩乃は怯むことなく、その視線を受け止める。

ニタリと気色悪く笑む少年は、苛立つほど緩慢な動きで懐へ手を差し込んだ。少年の言動を訝しく思いつつも、彩乃は何も言わずただユーフェミアを守るために刀を構え続ける。

やがて、少年の懐から手が引き抜かれた。小さな手の平が握りしめる物。それを見た刹那、彩乃は驚きで眼を見張り、彩乃の影から心配げに少年を見つめていたユーフェミアは息をのんだ。

少年の手に握られていたのは、筒状の茶色いものと、小さな赤い箱。

——ダイナマイトとマッチだった。

「少年。それを離せ」

彩乃は少年が取り出したものはただの棒きれだったかのように、ひどく冷静に言う。が、刀を握る手はじわりと汗ばみ、知らず知らず手に力をこめていた。

「うるせえ！　いーか？　オレがこいつに火をつければ——ドツカーン！」

少年は気が狂っているとした思えないほど、大声で下品に笑う。

「そうなりゃ、ここもてめえらもオレもバラバラだ。原型もとどめないくらい、バラバラさ！　ただの血と肉の塊に変わるんだあ！」

ゲラゲラと少年は笑い、彩乃は冷淡とも思えるほど落ち着いた瞳で少年を見据える。ユーフェミアは身体を震わせながら、ぎゅっと瞳を閉じた。

「少年。最後に聞く。それを離す気はないかい？」

「うるっせえんだよ！　誰が離すか！」

「——分かったよ」

彩乃は小さく息をつき、ずっと瞳に鋭い眼光をたたえた。心配げな表情で後ろから彩乃を見つめているユーフェミアをよそに、彩乃は走り出す体勢をとる。

彩乃が足の平に力を込め、少年へと駆けだそうと体勢を前方へ傾ける。その瞬間、

空が崩れてしまったかのような破壊音が、部屋にいた者たちの鼓膜を裂かんばかりに轟いた。

「ギイヤアアアア——！」　「なっ！」　「わあっ！　きゃっ！　なっ。え？　はい？」

少年はまるで世界の終わりを目の当たりにしたかのように絶叫し、頭を抱え込む。走り出そうとし、それを実行できなかった彩乃は驚きに眼を瞪る。彩乃の後にたたずむユーフェミアは、奇妙な悲鳴を上げながら視線を辺りにせわしく巡らせた。

地と空気を揺るがし、屋敷自体を小刻みに震えさせた巨大な破壊

音。それは――

秘宝を納めている、建物の方から聞こえた。

「――シャノン！」

彩乃は一人の少女の名を叫ぶ。その頭の中で、茶髪碧眼の少女が彩乃に太陽のように明るく笑みを向けた。

「くそっ」

悪態を一つつき、前方でダイナマイトを手から落として頭を抱え込んでいる少年へ走り寄った。力強く足は畳を蹴り、左手に作ったこぶしを後ろに勢いよく引く。徐々に近づいてきた少年との距離を確認し、彩乃はこぶしをまっすぐ少年の腹へ叩き込んだ。

「がはあっ！」

少年の身体は情けなく後方へ傾き、彩乃はさらにそのうなじに肘を叩きつけ、完璧に気絶させた。

うつ伏せに倒れた少年の上に足を乗せた彩乃は、

「主様は白胡を呼び、安全な部屋へ御逃げください。私はシャノンのいる宝物庫へ参ります」

ユーフェミアに早口で告げ、懷から細長い縄を取り出した。それを使って、手なれた動きで素早く気絶した少年を縛り上げる。畳の上に転がっているダイナマイトとマッチは回収して懷へしまい、動かなくなった少年を重くもなさそうに肩へ担ぐ。そのまま庭に面した廊下につながっている障子を開け、外へと目にもとまらぬ速さでかけだして行ってしまった。

部屋に独りで取り残されたユーフェミアは、

「――私だけのこのこと逃げるようなこと、できるわけありません」
そつと呟くと彩乃の後を追って、彩乃の走りの半分ほどのスピードでかけだした。

s c e n e 26 (後書き)

今回少々(というかかなり)手抜きで本当に申し訳ありません；

彩乃は、己の目で見たものが信じられなかった。

宝石を守っている建物が、木端微塵に破壊されていたのだ。もうもうと立ちこめる土煙りの中は、うかがい知れない。

建物は木できていたらしく、巨大な木の柱が積み重なるようにして横たわっていた。

「嘘、だろ……。建物自体に結界を張ってるんだよ……。？　そんな簡単に全壊できるようなものじゃないっていうのに……。秘宝は――」

立ちつくしていた彩乃は、はっと目を見開く。

「シャノン……？　シャノン！　シャノン！」

迷子のわが子を探すかのように、彩乃は不安げに瞳を揺らめかせながら一人の少女の名を呼び続ける。彩乃の声は虚しくこだまし、返事はなかなか返ってこない。

「くそつ。シャノン、死んでんじゃないよつ……」

肩で息をしながら彩乃が再度少女の名を呼ぼうとしたとき、

「彩乃……」

「シャノン！」

彩乃の名を呼ぶ、張りのある声が土煙りの中から上がった。彩乃ははっと声の方向を振り返り、はっと胸をなでおろした。

「シャノン。死んでないね？　怪我はしてないかい？」

彩乃はシャノンを助けに行こうと、倒壊した建物の中へ進もうとし、

「？」

止めた。土煙りの中に立つ、人影が見えたからだ。シルエットだけではそれがシャノンか敵かはつきり分らないため、彩乃はそれが敵であつても大丈夫なようにすつと身構えた。

「——シャノン？」

訝しむように彩乃はシャノンの名を呼び、オッドアイの双眸を細めた。

「彩乃……。ごめん」

シャノンの憂いを帯びた声とともに、疾風が通り過ぎ土煙りが流された。シルエットであつた人影が、はつきりと色を帯びる。

茶。蒼。薄橙。うすだいだい。赤。白。紺。そして——黄土。

「！」

彩乃は再度、自分の目を疑った。頭の中を、困惑が支配する。

そこには、服や肌を僅かに血で赤く染めたシャノンが立っていた。

——？砂漠の薔薇？を、その手にしっかりと持って。

*

*

*

静寂が、降り注ぐ。

死体は口を閉ざしたまま唇を持ち上げようとはせず、そこで唯一息をしているものでさえ、口を開かない。

穏やかな風が、建物の破壊された入口から吹きこむ。風は、建物の中に佇むシャノンの短い髪を小さく躍たたずらせた。

「どつする——」

シャノンは、目の前に置かれている砂漠の薔薇を忌々しげに見つめる。砂漠の薔薇はそんなシャノンには知らん顔をして、そこにひっそりとあり続ける。薔薇の花弁のような形状をした黄土色の地味なそれは、どう見ても宝石には見えない。

シャノンはぎゅっとこぶしを身体の横で握りしめた。

——シャノンは砂漠の薔薇を求めて、数日前旅だった。その旅の目的が、今日の前にある黄土色のそれを手に取るだけで達成できるが、砂漠の薔薇を手に取るという行為は、これを命をかけて守っているユーフェミアや彩乃を裏切ることと同意だ。その二人は、シャノンの命の恩人でもある。

しかし、

「でも……。ボクは……」

シャノンは俯き、ぎゅっと唇をかみしめた。その周りでは、ゆるゆるとヒカリが舞う。シャノンは俯いて表情を隠したまま、ゆっくりと口を開く。

「ボクは……、助けなきゃいけないんだ……。あの瞳には、あの綺麗な瞳にはこれ以上穢^{けが}れてほしくない……」

シャノンの頭の中で、澄んだエメラルドグリーンの瞳が嬉しそうにほころぶ。

艶めく茶髪が、ふわりと揺らめく。いつかこの建物自体が秘宝の結界だと話してくれたユーフェミアを思い出しながら、シャノンは口から酸素を大量に吸い込み、

「ヒカリたちよ！ 砂漠の薔薇の結界である、この建物を破壊しなさい！」

一かけらの躊躇も見せず、きつと前方を睨み据えて叫んだ。

シャノンの命令に必ず従うヒカリたちは、
一斉に嬉々として揺らめき、そして――

*

*

*

「シャノン。あんたは何を考えているんだい？」

真剣な声を発した彩乃の視線の先には、憂いを帯びた表情のシャノンが立ちつくしている。

「——ボクは。ボクは、砂漠の薔薇を手に入れなきゃならないんだ。大切な人を、助けなきゃいけないんだ……！」

シャノンは強い光を宿した瞳で言った。しかし、その声はわずかに震えていた。

彩乃はすつと双眸を細め、シャノンを見つめる。

「……シャノン。一体自分が何をしているか——」

分かっているんだろうね、と言おうとした彩乃の声を、

「本当は！」

シャノンの大声が遮った。

「本当は……、こんなこと、ボクだつてしたくない。これは、この行為は、彩乃と、ユーフェミアを裏切ることになる……」

シャノンは心底辛そうに顔を歪め、その瞳を潤ませた。

「なら、何故——？」

彩乃は、シャノンに近付けずにいた。目の前に立っている茶髪碧眼の少女は確かにそこにいて、それは自分の見知った人だというのに、突然その少女の存在が遠くなってしまったかのように彩乃は感じたのだ。

「ボクは、守らなければいけないんだ……。ボクには、大切な人がいる。その人は、今、とても苦しみ、笑いたくもないのに笑っている。瞳は穢れによどみ、日々生きていることで精一杯の生活をしているんだ……」

「——あんたがその大事な人を思う気持ちは、良く分かる。その人を守り抜きたいと思う気持ちも、よく分かる。けどね——」

彩乃は言葉を切り、鋭い眼差しでシャノンを見据えた。そして、「あたしだって、守らなきゃいけないんだよ!」「私も、守らなければならぬのです!」

「……っ?」

二つの声が、重なった。低いアルトと澄んだソプラノ。

彩乃の後方から響いたソプラノの声に、彩乃ははっと上半身を百八十度回転させる。彼女のすぐ後ろ。そこには——蜜色の美少女が立っていた。

「主様! 安全な場所にお逃げくださいと——」

「彩乃。これは、私の意思よ」

ユーフェミアは彩乃の発言を阻止すると、背筋をまっすぐにしてゆっくりとした足取りで堂々とシャノンの方へ歩み始めた。

ユーフェミアの行動に、彩乃とシャノンが目を見張る。

「主様!」「来るな!」

二人の叫びが重なる。しかし、どちらの叫びにもユーフェミアは答えず、淡々と歩を進める。

「シャノン。それを離してくれませんか? 私は、この瑞穂の国のためにも、それを守り抜かなければならないの」

「……断る。ボクも、これで——」

「では、貴女は私を裏切るのですね」

ぴしゃりとユーフェミアに言われ、シャノンはびくつと身体を揺らした。蜜色の瞳は鋭利な刃を持つ刀剣のように鋭い。

その瞳にシャノンは息をのむ。が、シャノンもすかさずにらみ返す。

「それ以上、ボクに近づくな。ボクの——ジャマをするなッ!」

「私も! 守らなければならないのです! 一度効力を発揮した砂漠の薔薇は、百年の時間が過ぎなければ再度力を発揮することはできません。それを、分かっていますよね?」

「そんなこと分かつてる！ でもッ……！」

ぎりつとシャノンは奥歯を噛み締め、顎を引く。ユーフェミアは、シャノンの張り詰めた言葉と態度を微動だにせず、ただ歩む。彩乃は勇ましいともいえるユーフェミアの背を見つめながら、ぎゅつと左手を握り締めた。

シャノンは、ユーフェミアの眼差しから逃げるようにして俯いた。その唇が、ゆるりと開く。

「……りたちよ。……を、……つけなさい」

その唇が小さく動き、悲しげな声を発した。刹那、

「——っ」

「主様！」

ユーフェミアのまつ白な頬に、赤い筋が一本描かれた。

ユーフェミアがわずかにひるんだすきに、シャノンは砂漠の薔薇を持つている右手を高く掲げた。そのまま、大きく息を吸う。

「シャノン！」「止めなさい！」

目を見開いた彩乃と、手を伸ばしたユーフェミアの言葉も聞き入れずに、

「砂漠の薔薇よ！ ボクの大切な人を——？彼女？を幸せにしてくれッ——！」

声の限り、大声で叫んだ。

——呆気なく、砂漠の薔薇は自壊した。

「なっ!」「え……」「っ——!」

シャノン は砂漠の薔薇を見上げて目を睜^{みは}り、ユーフェミアは呆然とし、彩乃は息をのんだ。

本当に、一瞬の出来事であつた。シャノンによって高く掲げられていた砂漠の薔薇が、呆気なく砂と化したのだ。

シャノンの右手の平から固い石の感触が消え、代わりにざらついた砂の感触が嫌味なほど鮮やかに伝わってきた。砂はさらさらとシャノンの手の中から儚く流れ落ち、床の上に黄土色の乾いた小山を作り上げた。

「何故……。え——。うそ、だろ……」

シャノンは泣き出しそうに顔を歪めると、糸が切れたかのようにふっと崩れるようにして倒れ、意識を失った。

*

*

*

ボクには、小さいころから青白いヒカリが見えていた。

でも幼いころのボクにとって、ヒカリというのは凶器ではなくただ綺麗で面白いもの、というだけの存在だった。

そんなボクを、近所の人たちは少なからず普通の子供とは思っていなかっただろう。人々がボクに向けるのは、異常な生物を見るかのような軽蔑の色を湛^{たた}えた冷たい視線だったから。ボクの生まれた

場所は小さな田舎でスラム同然の場所だったから、周りの人たちは？神の愛娘？という言葉もそれがどういう存在なのかも知らなかったのだ。神の愛娘であるボク自身、知らなかったのだから。

だからボクはずっと自分に変なのだ、イカれているのだ、ダメな人間なのだ、失敗作なのだ、ここで生きてはいけない存在なのだ、と思い込んでいた。周りの人たちが囁く言葉、ボクに向ける視線、ボクへの態度は、それらを物語っているかのようなだった。人々の視線が、声がボクの身体をその鋭い棘で貫いてボクを傷つけ、傷つけられたボクは陰鬱な毎日を過ごしていた。

だけど、ある日――

ボクを、希望の光がそっと照らしてくれた。

「逃げて。生き延びて……。たとえば、すべての希望が消えたとしても……。私はずっと、貴方の味方だから」

独りぼっちのボクに？彼女？だけは、とても優しくかった。彼女はボクにとって唯一の光芒であり、この命が滅びようと守り抜きたい存在だ。

「シャノン。あなたはこれから、この人と一緒に暮らすのよ。もう、戻ってきちゃ、ダメよ」

冷酷な母はそう言って、あのジジイにボクを売った。

家族との別れの日、ボクを見送ったのは父の冷たい視線と姉のいやらしい笑いだった。

「お前の力を使えば、世界を破壊し征服することなど、赤子の手を

ひねるより簡単なことなのだよ」

ジジイはボクの力を利用して、その悪趣味な考えを実行しようと思
企んでいた。

冬の寒い空気は、人の心までも冷たくさせるようだった。温か
いのは名も知らぬ、彼女の心だけ。

けれど――

もうここに、彼女はいない。ボクは旅立ち、彼女はあの街でボクの
帰りを待っているから。

彼女は今も、あの美しかったエメラルドグリーンの瞳を陰りで覆
っているのだろうか？

今も、あの作ったような笑みを浮かべて涙を堪えているのだろうか
か？

ちゃんと、健康に今日を過ごしているのだろうか？

彼女は――

ずっとずっと、ボクの味方でいてくれるのだろうか……？

*

*

*

「――ノン。シャノン。シャノン」

「――っ」

シャノンは重くのしかかっていた瞼を、ゆっくりと上げた。そし
て、

「っ」

そこにあつた顔を認識すると、すつと黙つたまま顔をそらしてしまつた。

今シャノンがいるのは、自分が寝起きしている広間の布団の上。鷹の絵は相変わらず、白い襖の上で優雅に舞うように飛んでいる。

「シャノン——」

「出て行つてくれ」

シャノンは顔をそらしたまま、そこにいた少女——彩乃に冷たく言い放つた。

「……全く。あんた、とんでもないことをしでかしてくれたねえ」

「そんなとんでもない奴の顔を、お前はわざわざ見に来たのか？」

「シャノン。あんた、寝ながら泣いてたんだよ。自分で分かっているかい？」

「っ……」

彩乃の思いがけないセリフに、シャノンは顔をそらしたまま目を見開いた。

確かに、起きた時から頬に湿つたような感覚はあつた。しかし、それが何なのかを考える前に、彩乃の視線をよけることにすべての意識が当てられていたのだ。

シャノンはそつと頬を右手で触れてみた。そこは確かに湿つており、目頭も熱い。

「何でっ……。だって、ボクは——」

言い淀むシャノンと、大仰なため息をつく彩乃。

「泣きたいのはこっちだよ。三年間も命をかけて守ってきた瑞穂の国の国宝である砂漠の薔薇が、まさか偽物だったなんて。主様も、大変傷ついてらっしゃる」

「そうだ——。ユーフェミアは？ 今、どうしてる？」

シャノンははつと上半身を起こし、彩乃を見た。彩乃はとても難しい顔をして、シャノンを見返す。

「主様は今、自室に籠っていらっしゃる。一応白胡がそばについているが、精神的ショックが大きくてどうなっていることが……」

「……本当に、申し訳ない。——ボクは……とんでもないことを……取り返しのつかないことをしてしまった……、だから、ユーフェミアに謝りたい。会っては、いけないのか？」

「シャノン。今は、止めておきな。とりあえず主様を一人にさせ、落ち着かせてやっておくれ」

「……………」

シャノンは押し黙り、その顔を苦悶に歪めた。

「——とにかく、今は身体を休めることを優先しな。あんだ、倒れてから二日も昏睡してたんだよ」

「二日、か……。ヒカリの力を使いすぎたんだろうな。一度、暴走したみたいだし……。ヒカリが暴走しちまったら、かなりの体力が消耗するからな」

「そうかい。……今も、そのヒカリは見えているんだね」

彩乃の問いにシャノンはゆつくりと、しかし強く肯定し「残念ながら」と僅かに俯く。

シャノンの周りには相変わらず、彼女にしか見えないヒカリが神秘的な弧を描いていた。その美しい凶器を恨めしげに見つめながら、シャノンは呆然としたように虚空を眺める。

「——ときにシャノン。あんだ、これからどうするつもりだい？」

彩乃の唐突な問い。しかしシャノンは、そう問われることが分かっていたかのように、しっかりと返答する。

「ボクは、体調が良くなり次第また旅に出る。——奴から、逃げるためにも、な。でも……旅立つ前に、一言ユーフェミアに謝っておきたい……」

シャノンは顔に影を落とし、唇を僅かに震わせた。手のひらが、清潔すぎるイメージを与えるまっ白な布団の上で強く握りしめられる。

「……そうかい。それで、あんだは——」

彩乃の言いかけた言葉は、

「シャノン。彩乃。……入っても、構いませんか？」

線の細い、しかし凜とした響きは損なわれていない、ユーフェミアのくぐもった声に立ち切られた。声が低く籠って聞こえるのは、

襖の向こうから響いているためだ。

「主様！ 何故、おいでになられたのですか？」

彩乃は慌てて鷹が舞う襖に向き直り、そう問うた。しかしユーフェミアは答えず、黙って襖の向こうから姿を現した。

「っ……。ユー、フェミ、ア……？」

シャノンはその前に立っていた人物が、金髪美少女のユーフェミアと同一人物には見えなかった。

疲れ切り、光を失って濁りきっている金の瞳。長い髪はストレートに下ろされ、ユーフェミアの顔を半分ほど隠してしまっている。頬はこけ、よく見ると目元は泣き腫らしていた。

シャノンはその変わり果てた姿に呆然とし、言葉を失った。

「シャノン、よかったです。ご無事で」

ユーフェミア、疲れたような笑みをシャノンに向ける。そんなユーフェミアの笑みに、シャノンは顔を歪めるしかなかった。

彩乃は跪いたまま、心配げにユーフェミアを見上げる。

「主様、具合は大丈夫なのですか？」

「ええ。もう、大丈夫です。彩乃、心配してくださってありがとうございます。そこで、あの、お願いがあるのですが……」

「はい。何なりと」

「では、私は少しシャノンと二人きりでお話したいのです。席をはずしてもらっても、いいですか？」

「しかし、それは――」

「いいですか？」

有無を言わせぬユーフェミアの強い口調と眼差しに、彩乃は躊躇いながらも襖から外へと出て行った。

「……………」

シャノンは口を閉ざし、何も言わない。ユーフェミアは静かに彩乃を見送った後、暗鬱^{あんうつ}に俯いているシャノンに向き直り、ゆっくりと口を開く。

「あの秘宝——砂漠の薔薇は、私が瑞穂の国のお偉い方々から直々にお守りするよう頼まれたものなのです。この秘宝はこの国の平和を保っている大切な国宝だ、という言葉とともに。確かに、この国は他国と違ってもう何十年も平和主義を通し続け、戦争など一切無縁の国となっています。ですから、この国の国民は全員、森の中に隠された秘宝が瑞穂の国の平和を守ってくれているのだと信じて疑いません。実際、私もそうと信じていましたしね。けれど——それは、間違いでした。この国の平和はこの国の人たちで、守つてきたのです。聞こえは素晴らしいのですけれど……もし、この国の住人が、秘宝がなくなつたと知れば……平和は保たれないとパニックを起こし、最悪他国が攻めてくる前にと、自ら戦争を、始めかねません……」

ユーフェミアは額に右手を当て、首を振った。その顔は、その表情は、その瞳は「もう限界だ」と切に訴えていた。

「ユーフェミア……。すまない。ボクは、本当に——」

シャノンは僅かにため息を落とし、苦しげに呻くような声を漏らした。その蒼い瞳は下を向いたままで、顔も憂いに歪められている。ユーフェミアはふっと顔を上げ、ため息をこぼしたシャノンを静かに見据えた。

「シャノン。そんなに落ち込まないでください。どんなに残酷でどんなに悲しく辛いことでも、これは真実です。真実とは、どんなにあがいても逃げ切ることなどできないものなのです。貴女がもしあのようなことをしていなくとも、いつかは突きつけられていただろう物事です。それから、シャノン。ため息についてはいけませんよ。ため息をつくとも寿命も縮んでしまいますし、幸せが逃げてしましますよ」

ユーフェミアの言葉に、シャノンのはっと顔を上げ何故かパチパチと瞬きを繰り返した。

s c e n e 3 1

「その言葉……ボクの母親と、同じだ」

シャノンの驚いたような言葉とともに、ユーフェミアも驚いたような顔をしていた。今まで信じていた事実を、ひっくり返されたかのような表情だ。

「そうなのですか。ため息は、この国だけの迷信だと思っていました。ところで貴女の母上様はどんな——あ」

そこではたと、ユーフェミアは自分の口元を手の平でおさえた。それは、人が口にはいけないことを口走ってしまった際、反射的にしてしまう行為。

ユーフェミアの言葉を聞いていたシャノンの表情が、まるで苦虫を噛み潰した様になっていたのだ。

「……いいよ。ユーフェミア。もう、あんな奴のことなんて、気にしていない。あんなの、母親なんかじゃないから。っていうか、母親だってボクが認めてないしな」

屈託なくシャノンは微笑んだ。口元は上へ引き上げられ、目元もすつと窄ま^{すぼ}っていたがその笑みはどこか哀愁漂うものであった。

悲しげなシャノンのムリした笑みを見て、ユーフェミアは口元から手を離し、俯いて小さく「ごめんなさい」と謝った。

「いいって。あ——そうだ。ついでに、ボクの話しよう。……ボクの家族と過去の話」

「！」

ユーフェミアは眼を見開き、シャノンを見つめた。

「シャノン……。どうしてっ——」

？どうして自分の傷を自ら深くするようなことをするの？？そう
ユーフェミアは問おうとした。しかし、シャノンの瞳を見てふっと
口をつぐんだ。

シャノンの蒼い瞳は、とても鋭い光を宿していた。まるで、殺し
合いをする敵を見据えるような鋭い瞳。

その瞳はユーフェミア方向を向いているが、ユーフェミアを見て
はいない。瞳が見据えるのは、彼女自身の過去。彼女が今まで逃げ
てきた、己の過去と今シャノンはまっすぐ向き合っているのだ。

「——」

ユーフェミアはうつすらと開けていた口をすっと閉じ、シャノン
の言葉を静かに待った。

——シャノン。あなたはこれから、この人と一緒に暮らすのよ。
もう、戻ってきちゃ、ダメよ——

遠い昔の思い出。鮮明にシャノンの心と頭と身体に染み込んで逃
れることのできない、母親の声。

「ボクは——」

冷たい冬は人の心までも凍てつかせる。

シャノンに向けられるのは、冬の空気よりもなお冷たい視線。

「——両親に、売られた。ボクの住んでいたアシュリー王国で人身
売買は法律で禁止されてるけど、ボクの住んでた地域では秩序なん
て言葉、意味をなしてなかった。ボクは——この力で多くの人を傷

つけこの力のせいで——たくさん傷つけられてきた」

シャノンも俯いて、力なくポツリポツリと語り始める。

——思まわしい、あの冬の日とその前後の日々の記憶を。

s c e n e 3 1 (後書き)

今回は、超短くて御免なさい；
次回からシャノンの過去の物語になるので、
ここで一区切りとさせていただきます。

アシュリー王国の西部地方は、他の地方と比べて貧富の差が激しい場所だ。西部地方の南側はスラム街、北側は歓楽街や豪邸が建ち並び金持ちの住むような地区になっている。

アシュリー王国は南半球にあるから、南側のスラム街の冬の寒さは尋常じゃなかった。凍死してもおかしくないほどの寒さが続き、毎日のようにスラムは雪の白で覆われる。貧しい人々は北側地区に赴いては盗みや人身売買、果てには売春をして生計を立てている。

——それほどにまで、皆が毎日を生きたことだけで精一杯なんだ。

そんな場所に、ボクは生まれた。神の愛娘として、生まれた。

神の愛娘とは名こそ立派だけど、ただ単に不思議な能力を持つて生まれた女の子のことをそう呼んでいるだけだ。その力は神から授けられた能力だとか言う人が多いことから、神の愛娘というらしい。世界の一部の地域では、神の愛娘を神として信仰する場所まであるそうだが、あいにくボクの住んでいたアシュリー王国の西部地方では神の愛娘の存在自体知られていなかった。

だからボクは、差別の対象となってしまうた。

人々はボクに冷たい視線をぶつけ、言葉をかけることさえしてくれなかった。

そんなボクにつけられた名は「悪魔の娘」だった。まったく、笑えるよな？ 世間では神の愛娘だと敬われる力なのに、ボクの力は「神」のものではなく「悪魔」のものだったんだ。

悪魔、悪魔とはやし立てられ差別されるボクを、無論家族もあまりよく思っていなかった。ボクには二つ上の姉がいるのだが、そちらばかりを親は可愛がりボクになど目もくれなかった。力のせいで誰にも愛されなかったボクだが、しかし力のおかげで人身売買をし

ている人たちや奴隷商人に売られることもなかった。こんな力を持った子供なんて、誰も買う気になんてなれないからな。

そんなボクにとって、冬は地獄に等しいものだった。まともな服なんか与えてもらえるわけもなく、ぼろきれに近い灰色のＴシャツと黒の薄い生地の手パン、それから唯一の防寒具である赤い毛糸のマフラーだけを身に付けていた。靴なんてものはなく、年中裸足で過ごしていた。まともな服を着ることさえままならないボクが、冬の寒さに耐えられるはずもなかった。

凍え、いつ自分は死ぬのだろうとそればかり考えていた冬。そんなボクにとって人生で十度目の冬。ボクは――？彼女？に出会った。

――あれは、特に寒さのひどい日のことだった。空は今にも雪を落としてきそうなほど真っ暗。太陽の光は分厚い雲に覆われて、一筋の光も地上には降り注がない。

そんな曇り空の下。ボクは街の中をトボトボと一人で歩いていた。むき出しの素足を冬の冷たい風が容赦なく刺してくる。裸足の足から伝わる石畳の冷たさには慣れてしまい、足の裏は寒いとも痛いとも感じなくなっていた。

「……う。さぶ、い」

口からはガチガチという歯が立てる音が漏れ、身体の震えは収まらない。寒さのあまりろれつも思うように回らない。口から洩れる息は白い煙となり、長く風に流れて儚いと感じさせるほど呆気なく消える。ボクは震える手で、首に巻いたマフラーを上へ引き上げた。

その日のボクは、暖を取りに行くために外へ出ていた。家の中に暖房器具なんてない。家自体、崩壊寸前の瓦礫の山同然の場所なのだ。暖を取りたければ、路地や広場で焚かれている火のところまで行かなければならない。そこでドラム缶の中で焚いている火に集団になって当たるのだ。が案の定、ボクはどこに行っても受け入れられない。ボクの家族である父と母と姉も、無論火にあたることはできない。

ボクはどこに行っても受け入れられないということを実感しながら、「もしかしたら」なんていう微かな希望だけを糧にフラフラと火を求めて独りで彷徨う。一見馬鹿馬鹿しくも思えるが、それほどにまで、身体が火を、温もりを求めているのだから仕様がな

「っ……。火……。どこ……。？」

フラフラと足は覚束おぼつかず、意識も朦朧としてきた。視界はぐらぐらと揺れ、歩行人たちにぶつかるボクは道行く人たちに鬱陶しがられ、突き飛ばされて地面に倒れながらも不安定に歩き続けた。人々の波がボクの行く先をジャマし、思い通りに歩いてくれない足がふらつき、ボクをまともに歩かせてくれなかった。ボクは酔っ払いのようにフラフラと歩き続け、火を求めて細い路地に入って行った。

と、その時――

ボクの視界の隅で赤い何かが躍った。

「……………。あ…………？」

ボクはその赤いものが何なのか気になり、それが躍る右側へと視線を移した。しかししばらくはそれが何か認識できなかった。虚ろな脳は見たものをきちんと処理せず、それを？赤く躍る何か？としか捉えられない。

しばらくそこに立ちつくしていたボクは、やっとその赤いものが何なのか、認識できた。

「――火だ」

ポツリと呟いた刹那、ボクの顔には満面の笑みがじわつと広がった。そしてもう一度、震える唇でその赤いものの存在をしつかりと確かめるように、そつと大切に呟く。

「火、だ…………」

s c e n e 3 2 (後書き)

さてさて。シャノンの過去の話に突入いたしました。
シャノンの言っている？彼女？の正体も分かります。
読者の皆様、毎回私の話を読んでいただき誠にありがとうございます。

火を目にしたボクは我を忘れて、火を求め駆け出していた。綺麗な白い石畳が後ろへと流れ、青白いヒカリたちがボクを誘導するように先へ先へと急ぐ。ボクの足は、先ほどまでの覚束ないものと同じとは思えぬほどしっかりと、地面を蹴って走る。

火があと少しのところまで迫り、まるでボクの行く手を阻むように設置されていた鉄格子の隙間を潜り抜ける。鉄格子と鉄格子の間の隙間は小さかったが、小枝のようにやせ細っていたボクには難なくその隙間を通ることができた。

ボクのすぐ目の前まで迫った揺らめく火は、とても温かった。凍った身体を温め、疲れを癒してくれる。

「温かい……。良かった。火があつて」

ボクは錆びついたドラム缶の中で煌々と火柱を上げる火の前で、膝を抱えて座り込んだ。ドラム缶ごしに伝わる炎の温度を感じながら、ボクはドラム缶に手をかざし暖をとる。周りには人っ子一人いない。火の勢いは良く、とても温かいのに人がいないなんておかしいことだ。けどその時のボクの頭には、おかしいと感じるような余裕なんかなかった。——ボクは、とても眠たくなっていたんだ。

「……ちよつとくらい、いいよね」

ちゃんと回りだした呂律で呟くと、ボクはこくんと頭を揺らした。景色が瞼によつて遮られ、炎がパチンと爆ぜる音も遠くなる。ボクは意識を闇の底に預け、深い眠りに身を落とした。

——どれくらい、眠っただろう。

身体の左側に、冷たい土の感触を感じる。ということは、ボクは身体の左を下にして、横向きの体勢で眠ってしまったらしい。その時は思いもしなかったが今思うと、よく寝る体勢を崩していたのにボクの身体は燃え盛る炎をその中に飲んでいるドラム缶にぶ

つからなかったものだかと、考えただけで少しひやつとする。

そうしてすっかりくつろいで泥のように眠っていたボクが、その時目を覚ましたのには理由がある。

「——つと。ちよつと。ねえ。もしもし。大丈夫？　ねえ、ちよつと」

ゆさゆさと身体を揺らされ、耳元で声をかけられたのだ。ボクはせわしなく揺れる身体と、耳朵じだを打つ声が鬱陶うつとうしくなり喉の奥で小さく呻く。

「う……ん？」

かすかに声を上げながら目をうつすらと開いた刹那、ボクは爽やかな花の香りを嗅いだような気がした。

「あ。良かった。死んでいなかったのね」

ほつとした響きを含む、柔らかで小鳥のさえずりを思わせる綺麗な声。かすむ視界の中に、しゃがみ込んでボクの顔を覗き込む少女の姿が捉えられる。まず印象的にボクの目に飛び込んできたのは、とても澄んだ驚くほど煌めくエメラルドグリーンの瞳だった。次に視界で躍ったのは、自ら光を放っているかのような金糸を思わせる美しい金髪。見たところ歳はボクと同じか少し上くらいに見える子だった。

「っ……」

ボクはしばらく呆然として、意識が何処かを浮遊していた。女のボクでも言葉を失ってしまうほど、少女は美しかったのだ。

「……えっと。その、大丈夫？　言葉、話せる、よね？」

少女は、言葉を一つ一つじっくりと選ぶかのように、区切り区切りに話す。少女の顔からして、どうやら戸惑っているようだった。

少女は心の底からボクを労わってくれるような表情で、心配そうにボクを見つめる。ボクは身体を起こし、その場に膝を抱える格好で座った。

「あ……。え。うん。大丈夫、よ。私は、大丈夫、だから」

あ。ちなみに言っていなかったが、その頃のボクの口調はまだ丁寧だった。どうしてこんな口調になってしまったのかは……。また話が進むうちに説明しよう。

ボクは少女の問いにしっかりと頷き、しっかりと少女を見つめ返した。自分で思ったより、しっかりした声で返事ができたことに、少し驚きながらも。

「そう。良かった」

少女はふつと微笑んだ。笑みを浮かべた少女はなお美しく、まるで職人がその生涯をかけて丁寧に作り上げた人形のようなだった。彼女の微笑みの前では、どんなに美しい花さえも色あせて見えてしまっただろう。

「あ……。えつと、その、心配してくれてありがとう」

彼女のあまりの美しさに、みすばらしい自分が少し恥ずかしくなりながらもボクはとりあえずお礼を言っ頭を下げた。少女は首を小刻みに、上品に振りその金系の様な髪を揺らした。瞬間にボクの鼻孔を、先ほど目を開けた時に嗅いだ花の様な香りが、ふわりとくすぐっていった。どうやらこの香りは彼女の身体から発せられる香りらしかった。

「ううん。そんな、お礼を言われるほどのことじゃないわ。それよりも、貴女は何故ここにいるの？」

「え？」

ボクは少女の問いに首をかしげる。だって、火を焚いていたから来ただけのことだ。それなのに、何故と聞く。

確かにボクは悪魔の娘だけど、少女はそんなボクを拒んではない。ということとは、ボクの力を知らないということだ。ボクのことを知っているのなら、何故問うのか分からなくもないのだが。

首を傾げ眉根を寄せたボクを、少女は右ひじを左手のひらで支え、

右手のひらを頬につけてきょとんと見つめる。パチパチと瞬きをした少女は、

「貴女、南側の子でしょ？　ここは、北側のバーンズ家の屋敷内よ」

きょとんとしたまま言った。

「ばーんずけ……？　ばーんず家……。バーンズ家えええ——！」

ボクは驚きのあまり、腰を浮かせて大声を上げてしまっていた。その声の大きさに、少女はびくつと身体を震わせる。ボクは驚きのあまり、ぽかんと口を開けたまま固まる。

少女があんぐりと口を開けたままのボクに声をかけようと、恐る恐る手を伸ばし口を開きかけた時だった。

「ちよつと！　今の声は何？」

ボクからは、大きなドラム缶に邪魔されて見えない前方の方から、大きな声が上がった。その声に、少女は瞬時に反応する。

「大変！　ちよつと、ごめん！」

そう言つと、少女はすばやく立ちあがりボクをどんつ、と押した。「うわっ！？」

ボクは困惑しながら、後ろへと倒れる。ボクの背に何かがざわつと当たり、そのままガサガサツという音とともに、ボクの身体は草むらの中に倒れこんだ。

s c e n e 34

「つつう……」

ボクは思い切り草むらの中に尻もちをついた。身体のいたるところに葉っぱがまとわりつき、お尻がじんじんと鈍い痛みを訴える。

ボクは右手で腰のあたりを擦りながら、あまりの痛みにさっきの少女にイラッとした。というか、ボクは何もしていないというのに突然突き飛ばした理不尽な少女の行動に憤りを感じていたのかもしれない。

草むらから出て行き、思い切り少女に文句を言ってやろうと腰を地面から浮かせたけど、

「ちよつと、一体何なの？」

明らかに少女のものではない声が上がリ、ボクは動きをパタリと止めた。そのまま、再度ゆっくりと地面に腰をおろし、なるべく息をひそめて草の隙間から外の様子を窺う。

「私には分かりません。向こうの路地の方向から上がった声でしたので」

「あ、そう。ならいいんだけど。あんた、まさかとは思っけど嘘ついてないでしょうね？」

「いつ、いいえ。とんでもございません」

先ほどの声の主である人物は、少女の前に立っていた。長身で茶髪を持つ女性だ。結構美人だが、目つきが厳しくそのためキツイ印象を受けてしまう。それに、金髪緑眼の美少女の前ではその美しさも半減しているように見える。

じつと少女と女性のやり取りを眺めていたボクは、そこで初めて少女の服装をちゃんと見た。今まで、その綺麗な顔にばかり視線を奪われ、服なんて見ていなかったのだ。

少女は黒いワンピースを身につけ、その上からフリルのあしらわれた白いエプロンをして、頭の上にはまたも白いフリルのカチューシャをしていた。――簡単にいえば、少女は？^{メイド}侍女？の格好をしていたのだ。そして、少女の目の前に立つ女性も。

「ちゃんと仕事しなさいよ。サボってたら、一週間食事抜きだからね。それから、バーンズ家を火事にするんじゃないわよ。そんなことしたら、どうなるか分かってるわよね？」

「はい。それは重々承知しております」

少女は、偉そうに怒りながら鋭い目で睨みつけてくる女性に大仰なほど丁寧なお辞儀を返した。深々と頭を下げる少女を見ながら女性性は、

「ちゃんと働きなさいよ。奴隷」

嘲笑するかのような口調で、吐き捨てるように言った。そのまま少女に背を向けると、つかつかと歩いて行ってしまった。女性の歩いて行く先には、白壁の豪華絢爛な家が立っていた。

バーンズ家。それは北側で最も裕福な貿易商を営む家庭である。父親と母親と、二人の息子に三人の娘が住んでいる。もちろん、侍女や執事や召使いもたくさんいるだろう。

が――

「奴隷って、何よ……？」

ボクの身体はいてもたってもいられなくなり、派手な音とたくさんの葉っぱういばら撒きながら、草むらを飛び出していた。

「ちょ、ちょっと！？奴隷？って、どういうことなの？」

ボクは、目の前で背を向けている少女に鋭い視線を向けながら言った。

「――どうということって、そのままの意味よ。私は奴隷なの」

少女のスカートとエプロンの裾が優雅に揺れる。少女はくるりと身体を百八十度回転させて、ボクを振り返った。

——ボクを振り返った彼女は、とても綺麗な微笑みをその美しい顔に浮かべていた。

「なっ……」

ボクは一瞬、その微笑みにたじろぎ、僅かに身を引く。少女は、笑みを浮かべたまま薔薇の花のように艶やかで美しい、子供にしては艶っぽい唇を持ち上げる。

「そんなに、珍しいことじゃないでしょ？　だって、こんなところなんですもの」

少女は、ふっと視線を上げる。ボクもつられるようにして視線を上へと、空へと上げていた。

空からは、白い綿の様な雪が降り始めていた。雪を落とす鈍色にひいろの空を見上げると、周りにそびえる巨大で豪奢じゅうしゃな家の上部も自然に視界に入りこむ。

ボクは双眸を細め、ずっと視線を少女に向けた。少女はまだ上を見上げている。

「私はもともと南側に住んでいたんだけど、奴隷として三年前ここに買われ、それ以来ずっとこの屋敷の庭で雑用をしているわ。——私ね、南側に住んでいた時は孤児みなしこだったし、今は奴隷だから？　名前？　っていうものを持っていないの。まあ、奴隷には名前なんて必要ないんだけどね」

空を見上げる少女の表情はうかがえない。しかし、ボクには少女が泣いているように見えた。声も、僅かに震えているような気がする。でもそれは、寒さのせいかもしれない。

「私は三年間、春夏秋冬関係なくこの庭で庭掃除や、こうして焼却の仕事なんかをこなしてきたの」

少女はすっと視線を下げると、そばの地面に置かれていた紙の束

を掴み火の中に放り込んだ。紙を飲み込んだ火は一瞬火力を増し、すぐに火の大きさをもとに戻す。

紙を燃やす火を見つめていたボクは、ちらりと視線を上げて少女をうかがった。少女はやはり口元をほのかに綻ばせていたが、どんなに口元が笑っていてもボクにはその目が泣き出しそうに見えた。

「——シャノン」

「え？」

ふいに上げたボクの言葉に、少女はドラム缶から顔を上げた。少し驚いたような表情で、少女はボクを見つめてくる。

「シャノン・アンヴィル。それが、私の名前よ」

「シャノン——。そう、貴女はシャノンというのね」

「ええ。私は——君にも自分の名前を持ってほしいと思ってる。それで、名前を持ったら私に名乗るの。名乗った相手に自分も名乗るのが、礼儀ってものでしょ？」

s c e n e 3 4 (後書き)

a c t 1が予想以上に長くなって唯今困惑中です；
いつになったらa c t 2に入れるのでしょうか…… o r z

s c e n e 3 5

ボクの言葉に、少女はしばらく驚いたように目を見開いていたが、やがてそれは微笑みへと変わった。精密に丁寧に作り上げられた美しい人形の様な、ですぎた美しさ。同姓のボクまで見とれてしまうような微笑みを浮かべた少女は、ふわりと花弁が開くように口を開く。

「ありがとう。それから——ごめんね、シャノン。やっぱり、私は名乗れない」

「っ……。何、で？」

ボクは顔を歪める。いざとなれば、勝手ながらボクが命名しようと思っていたのだが、少女の言葉を聞いてその気持ちは一瞬にして萎^なえてしまった。

「私はただの奴隷よ。奴隷には人権なんてないし、人間として生きることさえできない。だから、名前なんて無意味なの」

「そんなのっ……。だって、私は君のことをなんて呼んだら……」

「？君？で、いいよ」

少女は微笑みを浮かべたまま、あっさりと言った。口元は笑っているが、二つの瞳は笑っていない。真剣そのものの色を映し出すエメラルドグリーンの瞳。

「シャノン。私が奴隷だということを忘れないで。奴隷はあくまで所有物。所有物はいっ捨てられようと、いつ殺されようと文句は言えない。そんな私を、名前で呼んでほしくないの。物は物よ。貴女にとって地面に落ちている？石？は石でしかないでしょ？その石にいちいち名前をつけたりする？……要するに、私はそれと同じよ。私は？奴隷？どれいでしかない。それ以外の名前なんて、存在しないのよ」

ボクはしばらく、何も言うことができなかった。

彼女の言っていることは絶対間違っていると、身体中が全否定するのに何と言いつ返せばよいのか頭が考え付かないのだ。

そのまま少しの時間が沈黙とともに過ぎる。

視線を火の方へ投げたままの少女を見つめながら、やがてボクは大きく息を吸い込んだ。

「でも、それでも、名前くらいあっても——」

「シャノン。もし名前があつたら、私が消えてしまった時名前とともに私をはつきり思い出すかもしれない。けれど、名も知らぬ名もなき人だつたら私はやがて記憶から自然消滅するでしょう。だから、いいの。私の姿を誰の記憶にもはつきりと刻まれぬようにするために、名前なんていらないの」

少女はきつぱりとボクの瞳を見つめて言った。きゅつと口元を結んだ顔にはもう、笑みの欠片もない。

——そんな顔は、今にも泣き出しそうな表情のように見えた。

「……………。分かったわ。じゃあ？君？は君でいいよ。だけど、私は君が私の前から消えても絶対忘れたりしない。忘れたりなんか、できない」

勝手に人の土地に踏み込んでいたボクを見ても、追いついたりしなかった心優しき少女。その姿は、その美しさと優しさとともに永遠にボクの記憶から消えたりしない。それほどにまで、少女の存在はこの短時間の間にボクの中で絶対的なものとなっていた。

「シャノン…………。とても気持ちは嬉しいわ。でも——」

「ちよつと！」

少女の声を遮った、甲高い声。

その声に、さっと少女の顔が蒼くなつた。その声に、ボクも聞き

おぼえがある。それは――

「話声が聞こえると思えば、仕事をさぼって楽しくお喋りをしていたのね。良い御身分ですこと」

さきほどボクの叫び声を聞きつけてやってきた、目つきの鋭い女性だった。視線を屋敷の方向へ素早く走らせると、女性は腰を手に当て少女とボクを見下げていた。少女は顔面蒼白になり、小刻みに震えていた。一方のボクは、今にも意識を失ってしまいそうになっていた。目の前がぐらぐらと揺れ、ちゃんとした景色を見ることができない。頭の中はまさに真っ白になって、痛いような冷たさに襲われていた。

「そつ、その、これは……」

少女はもごもごと口ごもり、今にも倒れてしまっそうなほど蒼い顔をしていた。

――なんとか、しなきゃ。

真っ白になった頭の中でも、それだけは考えることができた。いや、逆にそれしか考えられなかった。白い空間の様な頭の中で真っ先に考え付いた解決策。それは、

自分だけ、さつさと逃げるということだ。

しかし、その考えは一瞬で抹殺された。この少女をおいて、自分だけのこのこと逃げるなどできるわけがない。

この事態は、ボクが招いたことでありボクの責任なのだから。

――しかし、どうしたらこの状況を切り抜けられる？

考えろ、考えろ。ボクは白一色で塗りつぶされてしまった脳をフル回転させる。

そんなボクの視界では、相変わらず浮遊する。ボクがどんなに思い悩もうと、ボクがどんなに悲しもうと、そこに傷つけるものとして、存在する――。

s c e n e 3 5 (後書き)

昨日入学式が済み、今日から高校生活スタートです

しかし……一時間かけて、息を切らしながら自転車登校はキツイ。

r
z

s c e n e 3 6 (前書き)

今回は短いです；

本当に御免なさい o y z

s c e n e 36

傷つける、もの——。

「！」

刹那、ボクの頭の中である考えが目まぐるしく閃いた。しかし、その考えは、とても危険なものだ。命がけ——しかも、ボクとこの少女の命がかかるとても危ない行動。

どうする……どうする、と頭は悩むが、でも——

もうこれしか、方法はない。

「——お前」

「はあ？」

震える少女の前に立つ女性は、ボクの方を向くといかにも軽蔑するような表情をした。

「今、お前の前には誰がいるか、答えろ」

ボクは慣れない命令口調で女性に言う。握りしめたこぶしに、大量の手汗が滲む。

「何言ってるの、アンタ？ 頭イカれてんじゃない——」

「ヒカリよ。女性の頬を切りなさい」

呆れたような、馬鹿にしたような声で女性は言葉を発した。が、ボクの声と同時に頬に赤い筋が入ったため、強制終了せざるを得なくなった。

「……っ！」

女性は、はっと目を睜^{みは}りその頬に右手の平を持ってきて触れた。ベトリ、と女性の手に赤い液体がつく。女性は恐る恐る右手を目の

前まで運び、その赤いものを信じられないという風に首を振りながら見つめる。

「もう一度、聞く。今、お前の前には誰がいる」

「あんた、ふざけた真似してると——」

「ヒカリよ。次は首を切りなさい」

またも、女性の言葉を遮断する。次は、首に赤い筋が走る。

女性は首に感じたであろう焼けるような痛み、ぎゅっと顔を歪める。

「な、によ……。一体、あんた——あ。ああ……。嘘、でしょ……。まさか——？ 悪魔の娘？」

「そうとも呼ばれている」

ボクは不貞腐れたように、言い返す。はつきり言ってボクはその呼び方が気に入らないのだ。まあ、誰でももし自分が悪魔だなんて言われたら、少なからず嫌な気持ちを抱くだろうと思うけど。

ボクはすつと驚きで視線を彷徨わせている女性を見据え、もう一度口を開く。

「もう一度聞く。今、お前の前には誰がいる？」

ボクは余裕を見せるように、にっこりと笑って女性に聞く。蒼くなつて震えていた少女は、呆氣にとられてポカンとし、今は女性の方が蒼くなつて震えている。

「どっ、奴隷の少女は、一人、います」

「何だ。分かつてるじゃない。じゃあ、その二つの傷はどうしたの？」

「こつ、これは——庭を歩いていたときに、木の枝で、引っ搔いてしまいました」

「うん。じゃ、この子は今まで何をしていたの？」

少し口調を和らげたボクは、少女を手の平で示して言う。

「この子は、ずっと、真面目に焼却の仕事を、こなしていました」
「そうよね。分かったなら行っていいよ。さっき言ったことはすべて真実だからね。嘘はついちゃいけないからね」

「はい」

女性は蒼白のまま屋敷へと踵を返した。そのまま早足で屋敷の中へと消えていく。

「――ふう」

ボクは女性の背を見送り、すぐに力を抜いた。平然を装っていたが、本当はとても緊張していたのだ。こちらにはヒカリがあるとはいえ、失敗してバーンズ家の人に事がバレたらボクも少女もただではいられなかっただろう。

「つと。ねえ。大丈夫？」

安堵したボクは、続いて少女に声をかけた。少女は先ほどからこちらに背を向けたまま、完全に硬直している。

「ねえ。ねえってば、大丈夫なの？」

「……つた」

「うん？」

「良、かった……」

scene 37

少女は震える声で吐息のような言葉を零した。かと思えば、ふいに足がなくなってしまったかのように、すっと地面に崩れ落ちてしまった。

「えっ。だっ、大丈夫なの？」

ボクは慌てて、少女のそばにしゃがんだ。少女はがくと上半身を前方に傾け、その身体を両手で抱いていた。少女の身体は、小刻みに震えている。

「殺されるかと、思った……。怖かった……」

ぎゅっと少女の手に力がこもる。その俯いた顔は影に覆われて見えないが、言葉を紡いだ唇は健康的で艶やかな赤を失い、身体と同じく小刻みに震えていた。

先ほどは自分は所有物にすぎなくて、いつ殺されてもおかしくないと彼女はあれほどにまできっぱりと言っていたけれど、死ぬことはそんな軽々しいものではない。もつと重くて、もつと複雑で、もつと恐ろしい、闇と戦慄の塊のような存在なのだ。

ボクは死に怯え、身体を抱き震える少女の姿をなすすべもなく虚ろに見つめるしかなかった。その肩に震えることさえ憚はばられた。ボクがその頼りなく薄い方に触れた瞬間、彼女は崩れ落ち壊れてしまいいそうなほど繊細に見えたから。

少女の姿は、飼い主に捨てられ路地で雨に濡れながら震える子猫を思わせた。

「——大丈夫よ。君のことは、私が絶対を守る。守って見せるから」
ボクはそんな言葉をかけるしかできなかった。それは、不可能な誓いになるかもしれない。この世に？絶対？なんてものはない。だから、ボクだっていざという少女のピンチに駆け付けられなくて、

少女を失ってしまうかもしれない。

——口先だけの約束なら糸も容易いことだが、その約束を果たすことは口で言う約束とは比べ物にならないほど難しいものだ。

「シャノン……。ありがとう」

けれど、ボクの言葉に彼女は震えながらも小さくしつかりとうなずき、礼を言ってくれた。少女は顔を上げ、ボクに微笑みを向けてくれた。

涙に潤んだその瞳は、はっとするほど美しく澄んでいた。その瞳を見た瞬間、ボクは約束を口先だけにはしたくないと切に思った。

それからボクと彼女は、たびたび会うことになった。

ボクがバーンズ家の屋敷に赴いて、少しの間二人で会話をするのだ。ボクは屋敷の人たちに存在がバレないように、木に登って身を隠しながら少女と会った。ボクたちはまるで、小さいころからの親友であるかのように、仲良く喋った。そんなボクたちの姿に、誰も気づきはしなかった。

ちなみに、あの目つきの鋭い女はボクたちのことを屋敷の者に報告しなかったらしい。つまり、？嘘？はつかなかったということだ。少女の方もボクの力を軽蔑したり、怖がりしなかった。ボクたちは、仲良く平穏な日々を送っていた。永遠に、こんな幸せな日々を送れるのだとボクは思っていた。

——けれど、現実残酷でそんな甘いものではない。

彼女と出会ってから六年後の冬。それは、その日は、唐突に訪れた。

「シャノン。この服を着なさい。あつ、マフラーも忘れずにね」

その日は——正確には、前日からイヤに母親がボクに対して優しくかった。

貧しい家は春夏秋冬関係なく、身体を洗いたければ川から汲んできた水を使わなければならぬ。給湯設備なんて贅沢なもの、この家には存在しないからな。だから、冬に身体を洗うときはかなり寒い思いをしなきゃならない。

だというのに、前日の夜はなんとか形を保っている湯船にあふれるほどお湯を張っていた。川から汲んできた水を火で沸かしたんだろうけど、水を沸かせるほどの火の元は不明だ。

さらに髪も身体も綺麗にシャンプーや石^{せっけん}で洗ってよいと言って、風呂に入る前にそれらを母から渡された。

ボクはその日、初めてシャンプーや石？というものを使った。それまではそれらがどんなものかということを知っていても、使ったことはなかったのだ。

風呂では何度も泡を目に入れたり、口に入れたりして大変な目にあつた。

けれどボクには母が優しくボクに接する理由が分からず、前日はずっと顔をしかめて生活しなきゃいけないくらいだった。

まつさらな、丈が長い灰色のＴシャツとジーンズで身を包み、幾つも解^ほれができている赤いマフラーをしたボク。普段と変わらないマフラーはボロボロなのに対して、まつさらな服はとても不釣り合いだ。

「よし。良いわ」

腰までの長さがある茶髪と淡い茶色の瞳を持つ母は、満面の笑みを浮かべてボクを見る。その隣では、肩にかかるくらいの金髪に濃い茶色の大きな瞳を持つ姉がクスクスと笑う。

——どうやらこの場にいる人間の中で状況を理解できていないのは、ボクだけらしい。

「お母さん。一体、コレは——」

？コレは何なの？？と問おうとしたのだが、不気味なほど重く響

いたノックの音に遮断されてしまった。家は三分の二が崩れた瓦礫同然の家のため、来客を知らせるベルなんて御大層なものはない。

「あつ。来た来た。はい。少々お待ちください」

母は眩いばかりに顔を輝かせ、ぼろきれの様なエプロンを翻しながら玄関へと走って行った。その場に、姉とボクは二人きりで取り残される。

「良かったわね。あんたのその力がやつと人の役に立つのよ。喜ばない」

「？」

姉のニヤリとした笑みとともに発せられた言葉に、ボクは眉を寄せて首を傾げる。全く、意味が分からなかった。

「ま。一生帰ってこないでね」

「何、言ってるの？ お姉ちゃん」

ボクはさらにぎゅっと眉間に深いしわを作った。姉はその美しい金髪を右手でなびかせながら、玄関の方を向く。姉が視線を投げた方向へ、ボクも自然に視線をやる。そこには――

「やあ。今日は。君が、シャノン・アンヴィルだね」

？奴？がいた。ほら吹きで、笑顔がキモくて、ボクを実験用のモルモット同然に扱いやがった、じじい。

けど――その時のボクの目には、長身で人のよさそうな三十代後半の男性としか映っていなかった。

s c e n e 38 (前書き)

今回、長い割に手抜きですorz
申し訳ないです…
ちなみに、最後の方微グロです。

「シャノン。あなたはこれから、この人と一緒に暮らすのよ。もう、戻ってきちゃダメよ」

母は、小さな子供を諭すかのような口調でボクに告げた。

——もう戻ってきちゃ、ダメ——

それは、もうすでにここは、ボクが十六年間過ごしてきた家は、ボクの帰る場所ではないということ。そして、家族はボクがここに帰ってくることを望んでいないということ。

「……………」

ボクは、黙ったまま冷気で満たされた部屋の中に立ちつくす。視界で、ちょうど外から帰ってきた金髪碧眼の父と、くすんだ金色の髪と灰色の目を持つ男が談笑を始めていた。二つの口が開いたり閉じたりしているのに、そこから声は聞こえない。ボクは無音の映像を見ているような感覚にとらわれた。

何故？ 何故、母は私に帰ってくるなど言ったの？ 意味が分からない。それに、この男は誰なの？ というか、この男とこれから暮らさなければならぬとはどういうこと？ 何故？ どうして？

——全ク、意味が分カラナイ

音のない世界を見つめながら、ボクは頭の中で様々なことを思索し続け、

「では。シャノン。行こうか」

突如として聞こえた、低い男の声によってそれは立ちきられた。見上げるといつの間にかボクの右隣に男が立っていた。呆然とボクは男を見つめ、男はボクと同じ目線になるようにしゃがんだ。男は笑ってボクを見つめる。が、一方のボクは笑うどころの話ではな

い。

困惑と不安でいっぱい胸を抱えたまま、ボクはちらりと視線を上げて玄関に立つ父とボクの左隣に立つ姉を見た。刹那、見なければよかったという後悔の念に胸を引き裂かれた。

父はその碧く冷たい視線を容赦なくボクにぶつけ、姉はいやらしくニタニタと笑っていたのだ。

ボクは冷水を浴びせられたかのように、身体がどんどん体温を失ってゆくを感じながらふっと視線を下げた。昨日母に渡されたまだ真新しい編み上げのブーツをはいた、ボクの足が視界に入る。

ボクはとんと男に背中を押され、そのまま前へと進みだした。男はボクの背を手で押しながら歩む。

男に押されるため、前へと運ばざるを得ない自分の両足。ボクは玄関をくぐり、外へと出た。

相変わらずの曇天空なのだろう。下を向いているため定かではないが、光の温かさを全く感じない。男の手のひらからボクの背に伝わる温度は冷たく、男の手の平の冷たさが良く分かった。

ボクは光沢の残るブーツの爪先を見つめながら、顔を歪めてきゅっと口元を結んだ。男もボクも黙ったまま、歩み続ける。コツコツと、ブーツが響かせる足音だけがやけに大きく聞こえた。

ボクは首に巻いている赤い毛糸のマフラーを、口元辺りまで引き上げた。それは癖に近い行為になってしまっている。そのため、寒くもないのにそうしてマフラーを上げてしまうのだ。

「シャノン。寒いのかな？」

「え？」

男は唐突にボクの顔を覗き込んできた。ボクはその言葉と行動に、少したじろく。歩調が遠慮がちなものになり、足が止まる。

「いや。マフラーを引き上げていたから、寒いのかと思って」

「あ、え、ああ。いえ。違うよ。ただの、癖です」

「そうか」

男が顔を引くと同時に、ボクは再び歩み始める。

数分後、ふいに男が「あ。見えてきた」と声を上げ、ボクは視線を上げた。

「ほら、シャノン。あれだよ」

ボクの視界に入ったのは、一台の黒い車だった。

「さ、シャノン。乗ってくれ」

男は少し歩を速め、ボクより速く車に着くと後部座席のドアを開けた。ボクは男に小さく頭を下げ、そこに乗り込む。無論ボクは車に乗ることなんか初めてで、しばらく物珍しげにしげしげと車の内装を見ていた。

「どうぞ。その座席に座っていてくれ」

ボクはおずおずと座席に座った。座席は思った以上に柔らかく、ボクの身体は大きく沈んだ。そのことに少し目を見張りながら、ボクはゆったりと背を背もたれに預ける。

「じゃあ。少し待っていてくれ」

男はそういうと、少々乱暴にドアを閉めた。目の前でドアを閉められたボクは、反射的に目をぎゅっと閉じていた。がすぐに目を開き、男の姿を目で追う。男は車の後部——つまり、トランクのほうに周りこむところであった。男はトランクを大きく開ける。開けられたトランクの上部が邪魔をして、ここからは男の姿が見えなくなつた。

数秒の後、男はまたも少々乱暴にトランクを閉めた。その振動で車は僅かに揺れる。今度は眼は閉じず、身体を揺らしながら男の姿を目で追う。男の手には、黒いキャリーバッグが握られていた。男はキャリーバッグを地につけて転がしながら、ボクたちが今まで歩いてきた道を引き返す。

——あ……。そうか。

その姿をぼうつと見ながら、ボクは唐突に理解した。

家族は、ボクを男に売ったんだ。

不思議とそう分かってても、小指の先ほどの怒りも湧き上がってはこなかった。逆に、よく得体も知れぬ力を持ったボクをあいつは買取ったものだな、と思うほどであった。

ヒカリは相変わらず、ボクの周りを浮遊する。いつそのこと、このヒカリで男の頸動脈を掻き切ってしまうおかしら？ いや、眉間か心臓をぶち抜いてもいいわね。それとも、指をすべて切り落としてから両腕を切り取り、腹をじわじわと傷つけて大量出血で苦しみながら死なせるという手もあるし。

ボクはそんな恐ろしいことを考えながら、自己嫌悪に駆られた。

何を考えているの、私は。どうだっていいじゃない。別に、あの男に恨みは無いんだし。家族も、殺したいほど恨んではない。男を殺して逃げたっていいけど、逃げたところで帰る場所もないじゃない。

——それなら、私はこのままでいよう。このまま男とともに暮らす。一体何が目的で男は私を買ったのかは知らないけど、別にそんなことどうだっていいわ。たとえただのロリコンであろうと、もうどうにでもなってしまうればいい。

もう、私の人生どうだっていいじゃない——。

「ごめん、ごめん。待たせたね。さあ、行こうか」

ボクがあれこれ思考している間に、かなりの時間が経っていたようだ。男がいつの間にか車へ帰って来、運転席に乗り込もうとしていた。

男はキーを回し、静かなエンジン音とともに車が動き出す。上下に細かく振動する車の中。ボクはむっつりと黙りこむ。男の方も、無駄に話しかけては来なかった。

車の振動音とタイヤが凹凸の激しい地面を転がる音だけが、盛大に音を発する。小さく揺れるボクは、窓の外へ視線を移動させた。窓ガラスは黒みがかり、外からは中が窺えないようになっていた。景色は黒ずんで見えるが、中からはちゃんと外が見える。

ふいに先ほどもまでのことが嘘のように振動が収まり、滑らかにタイヤが回転し始めた。窓の外の景色も、瓦礫の町並みから小奇麗な家並木に変化している。いつの間にか、北側へ来ていたようだ。

ボクは、シンプルだが高級そうなスーツやシックなドレスを着て歩く人々をぼんやりと眺めながら、ふいに首をかしげた。

綺麗に整備され、清掃の行き届いた街並みは前からやってきたか
と思えば、瞬く間に後ろへと流されてゆく。そんな目まぐるしい景
色を見つめながら、あれと思う。

景色の流れは普段より格段に速いが、ここは、この道は――

そう思い、僅かに双眸を見開いた刹那、

「！」

前方に、バーンズ家の豪華な屋敷の影が垣間見えた。同時に、視
力だけには自信があるボクの碧眼が屋敷の庭で掃き掃除をする少女
の姿も捉えた。見慣れた風になびく金髪。緑の目はさすがに見えな
いが、そこには生き生きとした美しい光をたたえるエメラルドグ
リーンの瞳が金糸の様な髪とともに煌めいているのだろう。

女性でも見惚れてしまうほどの美貌を持った、名を持たない彼女。
いつも作り笑いを悲しげに浮かべる、彼女。

「っ……！」

ボクは必死になって、窓に手を付けた。が、車なんか初めて乗
ったボクが窓の開け方なんか知るはずもなく、窓に指紋をつけただ
けでボクはそれを開くことはできなかった。

心臓が張り裂けそうなほど高く疼くように波打っているのに、窓
を開けることができず彼女に声をかけることさえできない。まるで
この薄い窓ガラスは、ボクと彼女の間を阻み仲を引き裂こうとして
いるかのようであった。

窓に張り付いたボクをよそに、車がバーンズ家の前を、彼女の前
をあつさりと通過する。黒いガラス越しに、ボクはまるでその姿を
目に焼き付けるようにして彼女を見つめた。

深い海の色を思い起こさせる瞳、純白に輝く雪の様な肌、まるで
太陽の色を写し取ったかのように一本一本煌めく、毛先が軽くウエ

ーブした髪。

ボクは彼女のすべてを食い入るように見つめる。が、彼女の方はボクになんて全く気付かず、せっせと掃き掃除をしていた。

彼女の瞳がこちらを見ず、地面の方を向いていることを確認した瞬間、ボクの心はずたずたに引き裂かれるような、ひどく重いもので押しつぶされるような、何とも形容しがたい感覚で覆われてしまった。その痛みにも似た感覚に胸を壊されてしまいそうで、ボクは両手で胸を力いっぱい抑えた。

——彼女と、さよならの言葉も交わさずに別れてしまった。

ボクは窓に乗り出していた身体をぼすんとシートに沈めた。反動で一度、シートから身体が上へと浮きあがる。

後方へと消えてしまった彼女へと思いをはせながら、ボクは憂鬱に瞳を濁らせた。視線は自然と下へ動く。身体が空っぽになってしまったかのような喪失感に襲われながら、ボクは口の中に鉄の味が広がるほど強く唇を噛み締めた。

「……どうしたんだ？」

バックミラー越しに運転席の男がボクを見、ふいに口を開いた。

「——別に、何でもないわ」

「何でも、はないだろ。とりあえず、その涙を拭きなさい」

男に言われ、ボクは眉をひそめた。——涙？

ボクは訝しく思いながらも、目の下へと右手を運んだ。右手は弾力のある頬に触れ、

「っ——」

僅かに湿った。

ボクは湿りを感じた手に困惑した。……気付かぬ間に、涙を流していたのだ。確かに瞼が熱く、鼻の奥がつんとしてはいたが。

「……………」

ボクは黙ったまま、乱暴に手の甲で涙をぬぐった。
彼女のいるバーンズ家は、すでに遥か後方へ消えていた。

s c e n e 4 0

*

*

*

鷹が舞う襖がある広間。ボクは話を一旦そこで区切った。

「……………」

重苦しい沈黙が、降り注ぐ。沈黙はそのまま、ボクたちを押し潰してしまいそうだった。

「そう、ですか……。貴女に、そのようなことがあったのですね」

沈黙を撃退したのは、ボクの正面に座るユーフェミアだった。ボクは自分の座っている布団をぎゅっと両手で握りしめる。

「そこまでは、まだ序の口さ。あの男のところに行ってから、まさに生き地獄だった。……聞いても、あまり気分の良い話じゃないから、聞かないことを進める」

「そうですか。……貴女がそういうのなら、止めておきます」

ユーフェミアは、ボクを労わるような口調でそつと言った。その顔は、しっかりとボクをの方を向くのは――

悲愴と辛苦だけが溢れる現実からさえも目をそらしたりしない、まったくつすくな瞳だった。

ボクは蜜色の光を真つすぐに放つその瞳が眩しくて、俯いてしまふ。

「……じゃあ、細かい内容は省略して話すから。――ボクはあの男には？その力は人を助けることに役立つかもしれない？なんて言わ

れてたんだ。でも実際は、そんなモンじゃなかった。ボクは、ボクのこの力は奴の野望によって、利用されかけたんだ――」

*

*

*

身体的ダメージがひどいと、ヒカリの力の大きさはどうなるのか？
精神的ダメージがひどいと、ヒカリの力の大きさはどうなるのか？
食べ物摂らなければ、ヒカリの力の大きさはどうなるのか？

その他諸々。たくさんの実験を、まるでモルモットのようにボクは試された。その辛さに、ボクは狂ってしまいそうだった。

あの男の家に着くや否、ボクは身体の芯まで凍りつきそうな地下室に閉じ込められた。そのまま次の日から、地獄の様な実験が始まったのだ。はい話、ヒカリで建物も男も粉々にしてやればよかったのだが、実験中と食事のとき以外は猿轡さるくわをかまされていたため、ヒカリに命令することもできなかった。運が良かったのか悪かったのか、実験の日々の中でヒカリが暴走することはなかった。

食事中にそつと命令することも考えたが、食事のときは必ずごつい形をした電気椅子に座らされて、少しでも声を上げたら電気を流された。

ここまで辛い日々が続くと、さすがに死にたいと考えたことは一度や二度ではない。しかし、ボクが死ななかったのは、絶対にもう一度？彼女？と会つと決めたからだだった。その思いだけが、ボクの生きる糧となり、ボクをしつかりと支えてくれていた。

時間は今までよりもゆつくりとボクの中で過ぎてゆき、実験が始まってから数か月が経ったころのことだ。

突然奴が、ボクの住んでいる地下室へ訪問してきた。

「シャノン。世界征服に興味はないか？」

男——その頃にはすでにじじいと言っていたし、口調もガサツになっていたが——にボクはそんなことを言われた。

「む？」

ボクは意味が分からず「は？」と返事したのだが、猿轡をしているために「む？」というくぐもった言葉になってしまった。

「世界征服だよ。世界のすべてが、私たちのものになる。世界を動かす権利を、この手に入れることができるのだ。すばらしいだろう？ お前の力を使えば、世界を破壊し征服することなど、赤子の手をひねるより簡単なことなのだよ」

「むんむむむむ、むーむむむん」

「そんなものに、キョーミはない」とボクはあっさりと言う。世界征服なんて馬鹿馬鹿しい。

ボクはじじいを呆れながら見つめる。しかし、ボクの言葉が通じなかったためか相手は高揚で一人顔を赤くしながら饒舌に言葉を続ける。

「痛みを感じないヒトの制作にも、成功したのだ。しかも、かなりの兵ばかりを集めた。あとはお前の力があれば良い」

痛みを感じないヒト。

その言葉に、ボクは顔をしかめた。人は生きている限り、痛みを感じるものだ。そんなもの、存在するはずがない。

「気になるか？ 良いだろう。我が兵を見せてやろう」

じじいは得意げな笑みを浮かべて鼻を高くし、ボクを閉じ込めている独房の様な地下室のカギを開けた。五月蠅く軋む音を上げなが

ら、格子の扉が開く。

「さあ。来い」

じじいをにらみつつも、ボクはすんなりと外へ出た。じじいは慣れた手つきでボクの手にはロープを結び、その先を持った。ロープは長いため、じじいがロープを持ってもボクとの距離は数メートルある。

——その時は、ほんの小さな好奇心からその痛みを感じないヒトとやらを見てみたい、と思ったのだ。それはどうでもいいことではあったが、ほんの少しの興味がボクの心を燦すように小さな火の粉を上げたのだ。しかし、後でボクは見なければ良かったと後悔することになる。いや、でも……これを見ていなければ、今でもボクはあの忌々しいじじいの家で実験をされ続けていたのかもしれない。だから、結果的にどちらが良かったのか、というところは今でもよくは分からないのである。

じじいに連れられて行きついたところは、ボクが閉じ込められている場所からそう遠くない部屋であった。部屋の扉は頑丈に南京錠がかけられている。

扉の前まで来たじじいは薄汚れた上着のポケットから鍵を取り出し、それを南京錠の鍵穴へと差し込んだ。鍵は重々しい音とともに、緩慢に回転する。じじいは何の躊躇いもなく扉に手をかけ、ゆっくりとスライドして開く。扉は獣の唸り声の様な低い音を上げる。扉が薄く開いた刹那、生温かい風が部屋の中から流れ出したような気がした。

扉はボクの心をもてあそぶかのようにゆっくりと開く。扉の隙間からは薄暗い中の様子が垣間見え、そして、

「っ……！！」

ボクはそこに立っていたものを見て、思わず息をのんでいた。

——そこには、天井へと延びる長細い円柱型をしたガラスの入れ物が、ずらりと数え切れないほどならんでいたのだ。真つ暗な部屋で発行するガラスには、経帷子きょうかたびらを着た人間が入っていた。一つの円柱に一人ずつ。性別も、年齢も体格もバラバラの人が入れられている。

そんな人たちからはたくさんの管が伸び、入れ物の中に満たされた水の様な液体の中に揺らめきながら浮かんでいた。

s c e n e 4 0 (後書き)

a c t 1、ついに四十話行きました！

……どうしてこんなに a c t 1 だけ長くなってしまっんでしょうか？

a c t 2 とか結構短いですよ……。

ボクは目を見開き、闇にそびえるヒトビトを呆然と眺めた。部屋
 がかなり広く奥の方までは良く見えないが、それは数にして五十を
 優に超えている。

「すばらしいだろう。これはすべて、痛みを感じないヒトだ。ちな
 みに、もとは普通の人間だがな」

その言葉にボクは驚いて、右斜め前に立つじじいを振り仰ぐ。じ
 じいはにたりと気色悪く笑っていた。ボクはそのできれば拝みたく
 はないキモい顔を、目を細めて睨みつける。

もとは普通の人間だ？ ふざけんな！ 普通だった人たちを、こ
 んな普通じゃない姿にしゃがって。痛みを感じないってことがどう
 いうことか分かってんのか！？ それはもう、人間として生きてい
 けないってことなんだよ！

ボクは思い切りボコリながら、じじいにそう言ってやりたかった。
 が生憎あいにく口も手も動きを塞がれているため、実際にはできないことだ
 ったけど。

「言えば、これらは魔術の科学の結晶、だな。魔術と科学があつて
 こそできたものなのだよ。魔術でこれらを操り、科学で常人より勝
 る力を与えている。まさに理想が現実化したようなものだ」

じじいは何がそんなに可笑しいのか、クツクツと笑い続ける。ボ
 クはじじいの笑い顔を見るだけで、吐き気が込み上げてきた。

必死に吐き気を抑えているボクを余所に、じじいは「そうだ」と
 指を軽快に鳴らす。

「一つ、試してみよう」

じじいは閃いたと言わんばかりに顔に喜色を灯す。

「？」

試してみるとという言葉の意味が分からないボクは、小首を傾げる。先ほどから身体中が、速くここから出たいと必死に訴えている。けれどボクの自由は今、この目の前の忌々しいじじいに握られているために逃げることは不可能だ。

じじいは身体の訴えと格闘するボクを尻目に、足音を高く響かせながら近くにそびえる一つのガラスケースに歩み寄った。ロープで繋がれているから、無論イヤでもボクとじじいは行動がともになる。数メートルの余裕を開け、ボクは突然何が起きても良いように神経をとがらせて身構える。

「これで良いか」

じじいは呟くや否、ガラスケースの下部に張り出している台の様な部分の上に広がる広いプレートに両手で触れた。と思えば、その両手がプレートの上でキーボードを叩くように動き出す。それは慣れたような、滑らかな手つきであった。

最後にじじいが、プレートの隅にある小さな赤いボタンを押す。と同時に、ケースの中の水の様な液体とヒトについていたたくさんの管が消え、最後にはガラスケース自体も空気に溶けるように消えてなくなった。

「！」

ボクは驚きに目を瞠る。すべてが消えたところに、ヒトだけが残される。そのヒトは、金髪が美しい十代半ばほどに見える少女だった。

ガラスケースから出てきた少女は、まるで全身に骨がないかのよう
に柔軟に身体を歪ませながら、強かに身体を床に打ちつけた。その
姿は、ふいに糸を切られた操り人形を連想させた。マリオネット本来なら、床
で身体を打つのはかなり痛いだろう。が、そいつはうめき声一つ上
げなかった。床に這いつくばるようにして倒れる少女の顔に、てら
てらと光る金髪が覆いかぶさる。

そのおぞましい姿を見つめ、全身にぞわりと鳥肌が立つ。

「さて。実験開始だ」

じじいは相変わらずニヤリと笑い、身にまとっている黒いスーツの懷に右手を差し込んだ。ボクはその手の動きをじつと見つめ、そこから取り出されたものを認めた刹那、驚きに双眸を見開いていた。じじいが懷から取り出したもの。それは、一丁の銃だった。

威力が凄まじいであろう大口徑に見えるそれは、ハンマーとレンコン状の回転式弾倉が確認できることからリヴォルバーだと察しが付く。

銃を見たボクの心臓は、口から飛び出しては来ないのだろうかと心配になるほど高く強く波打つ。体内は、心臓の音だけが五月蠅く支配する。

——こいつ、一体何をする気だ？

銃口は確実に、あのガラスケースから倒れながら出てきたヒトを狙っている。引き金に指をかけていないということは、まだ撃つ気は無いらしい。ボクはしかし、まるで自分が銃で狙われているような感覚に囚われていた。心臓は壊れてしまいそうな勢いで暴れ続け、額からは冷や汗が止めどなく流れる。視線は金髪のヒトから離すことができない。無理やり引き剥がそうと必死になるが、瞳が言うことを聞き入れてくれない。

ヒトは不安定に身体を揺らしながら、ひどく緩慢な動作で身体を持ち上げた。ボサボサの長い金髪が揺れ、たくさん並んだガラスケースから発せられる光にその病的にまで白い肌が反射する。ヒトは本当に操り人形のようにゆらりと顔を持ち上げ、そして、

「っ——」

ボクは小さくため息を漏らしていた。心臓は未だ早鐘を打つよう

に壮大な音を響かせている。ヒトは、その金髪の少女は——
とても、？彼女？に似ていたのだ。

金髪に緑色の瞳。発光する白い肌。美しさこそ彼女には劣るが、十分目の前の少女も美しかった。ただ、白い肌は不健康さをアピールするばかりで、緑の瞳は死んだ魚のように濁っていた。

不安定に揺れながらも時間をかけてゆっくりと、ヒトはしっかりと地面に足をつけて身体の揺れを抑えながら立つことができた。少女は不安定な動きとは反対に、濁りきった緑の瞳をこちらを射るように鋭くむけた。

『ゴ要件八、何デシヨウ』

小さく動いたその唇は、機械的な声を発した。

じじいはその問いに返答はせず、ただニタニタと気味悪く笑うばかり。じじいを極力見たくはないボクは、顔を歪めて少女を静かに見つめていた。

無音の時間が僅かに流れ、ふいにカチリという小さな音が静かな部屋にやけに大きく響いた。ボクにはそれが何の音なのか、その時は全く分からなかった。

ボクの困惑もお構いなしに、次の瞬間小さな音に連動するようにして、空気を揺るがす大きな発砲音が上がった。刹那、少女の白い足から真っ赤な鮮血が飛び散る。ぐらりと、小さく少女の身体が傾^{かし}いだ。

その時になって、やっとボクは理解した。さっきのカチリという音。あれは、じじいが持っていたリヴォルバーのハンマーを上げた音だったんだ、と。

s c e n e 4 1 (後書き)

申し訳ありませんが、明日は高校の行事である宿泊研修で一日家に
おりません。

ですので、明日の小説投稿はできません。
ご了承ください。本当に申し訳ないです；

そして、感想を下さったnakonoko様、素晴らしく感嘆ばかりが漏れてしまうような感想、ありがとうございました。
では、次は明後日にお会いしましょう。

s c e n e 4 2 (前書き)

昨日は投稿ができなくて申し訳ありませんッ！

何かと大変だったもの……で……ハイ。これは、ただのいいわけ

す；o y z

誠に申し訳ないですo r z

ヒトの足は、真っ赤な血をダラダラと流す。まっ白な肌に映える赤は、薄暗い部屋の中でさらに不気味さを増していた。しかし怪我を負っている当本人である少女は、眉ひとつ動かさない。

「っ……」

ボクは自分の目が信じられず、大きく見開いた双眸を閉じられずにいた。口からは、走ったわけでもないのに、ハアハアと荒い息が漏れる。猿轡をされていて、かなり息苦しかった。

「どうだ？ こいつらは、よほどのことがないかぎり死にはしない。大量出血で死ぬことも、出血量を抑える薬を投与しているからありえない」

じじいはニタニタと笑い、続いて二度じじいの腕が跳ね上がる。硝煙の臭いが立ち込める中、ヒトの左脇腹が血を撒き散らし、頭の左脇が深く抉られ金色の髪の毛が宙に舞った。

闇の漆黒と血の真紅と髪の毛の黄金が混ざり合い、絡み合う。硝煙の臭いと血の鉄のような生臭いにおいが鼻孔をつき、吐き気が込み上げる。ボクは胸を右手で掴み、ごくりと生唾を飲み込んだ。

撃たれた少女は二度身体を揺らす。脇腹を撃たれたときに身体をくの字に曲げ、頭を撃たれたときは顔をのけ反らせた。

普通の人ならばこのあたりで大量出血になって瀕死状態だろうが、しかし今ボクの目の前にいる少女は一向に死ぬそぶを見せない。

少女の後ろには真っ赤に染められた床が広がり、そこに僅かな肉片と金色の髪の毛が散らばっている。なくなった頭の部分と脇腹からは血がとろりと緩やかに流れる。

金髪は僅かに赤黒い血で染まっていた。まっ白な経帷子は、真っ赤な鮮血の色に染められている。

「……っ！」

ボクは顔を歪めて視線を床へと逸らしていた。目頭が、熱い。頬

が湿り、床に黒っぽい染みができる。

「おや、どうしたんだシャノン？ どうして泣く必要がある？ こんなモノに感情移入してしまうとは、何と愚かな」

ボクは、どんなに傷を負おうと倒れない少女の姿を見ることが耐えられなくなつたボクは、気付かぬ間に涙を流していた。我ながら、自分は強がつている割に泣き虫だと情けなく思う。でも――

あまりに残酷すぎる。それに、どうしても彼女の姿が重なつてしまふ……。彼女が、心優しい彼女が傷つくことだけは、許せない。

カチリ

ふんとため息をついた男が、再度銃を構える。不気味に黒光りする銃口が向いているのは……。金髪の少女の心臓。

はつと見開いたボクの瞳に、少女の緑の瞳が映る。

――その瞳は、彼女に似たその緑の瞳の奥には、悲哀を訴えるような色が浮かんでいた。

緑の瞳が涙に潤み、瞳だけが切に「タスケテ」と訴える。

「あ、ああ……。うああああああ――！！」

くぐもつた咆哮。唯一感情の残っているかのような、悲しげな少女の瞳を見たボクは叫び声を上げ、涙を飛び散らせながら床を蹴つてじじいとの数メートルの間を詰め、その反動に任せてじじいに思い切り体当たりをした。

「なっ！」

じじいはバランスを崩し、床に盛大な音を立てながら身体を強かに打ちつけた。その上に被さるようにして、ボクも勢い余つて倒れる。倒れた時の反動で、じじいの手からボクを繋いでいるロープと銃が離れる。

「うあああああ――！！」

猿轡によつて籠っている叫び声を上げながら、ボクは縛られた両腕をじじいで容赦なく殴りつける。自制が効かないほど怒りにまか

せてめちやくちやにじじいを殴りつけ、そして、

「っ——！」

思い切り、腹部を蹴り上げられた。そのままボクの身体は宙を飛び、鈍い音とともに一つのガラスケースに背中からぶつかる。頑丈らしいガラスケースはボクがぶつかった位じゃびくともせず、ぶつかったボクはズルズルと力なく足から床に崩れる。反対にぼんやりとする視界の中で、じじいはフラフラと不安定に揺れながらも立ちあがろうとしていた。

「全く。怪^けしからん奴だ。私に刃向かうな！ お前は私の言うことを黙って聞いていれば良い！」

じじいは声を荒げ、口を切ったのか血が混ざった唾液を床に吐き出した。その灰色の瞳はぎんとボクを睨みつける。ボクはフーフィーと荒い息を吐き続ける。ぶつけた後頭部が鈍く疼くように痛む。

「ここにいる奴らは全員、大きな力を得たいと自ら望んだ者ばかりだ。私はその願いを叶えたまでのこと。その何が悪い？」

「悪いに決まってる！ こいつらは自分がこんな姿になることなんて望んでいなかったはずだ！ それに、現にこの少女は泣いているじゃないか！」

もごもごとする口で叫ぶ。が、それは猿轡を通して全く理解不能な言葉になっていた。

ボクはじじいを鋭く睨みつける。じじいは先ほどまでボクを睨んでいたくせに何が可笑しいのか、クスクスと身体を揺らして笑い始めた。ボクが思い切り殴った頬は赤くなり、やはり口の中を切ったのか口の端からは血を流している。

「もういい。そろそろお遊びも飽きたな。もうこいつは使いものにならない——」

じじいはフラフラとしながらも、そばに落ちていたものを拾う。それは黒光りする、じじいが先ほどまで持っていた、リヴォルバー。『っ——』

『やめろ！』と叫びたかったが、生憎もう叫ぶ体力もボクにはな

かった。相変わらず金髪でボロボロのヒトは、同じ場所に立ちつくしていた。その闇と憂いを秘めているような瞳から、透明な美しい雫がこぼれる。

「——手っ取り早く、処分することにするか」

じじいの寒気が走るほどひやりとした冷酷な声が、消えかけの炎を吹き消すようにそっと呟く。ボクの口は思わず叫ぶために開いてしまったが、しかしそのまま声を発することはできなかった。

あっけない発砲音。消える少女の瞳。飛び散る肉片と血。揺れる少女の身体。

金髪緑眼が美しかった少女は頭の上を吹き飛ばされ、息絶えてしまった。

刹那、ボクの頭の中で熱い何かが弾けた——。

s c e n e 4 3

*

*

*

「——ボクの記憶は、ここで一旦途切れた」

「途切れた、ですか……？」

「ああ。ボクの中のヒカリの力がボクの意識を乗っ取って暴走したんだと思う。それ以前も、憤りが限界に達したり、意識がやばくなってきたりしたらヒカリが暴れたことはあったから予想はつく。……意識を失ったボクは、気が付いたら西部の北側の路地に倒れていたんだ——」

*

*

*

春の温かい風が、ボクを包む。風はボクの髪を揺らし、頬を優しく撫でてゆく。

「ん……」

ボクは小さく呻いた。瞼を上げようとしたけど、まるで瞼がそれを拒んでいるかのように上がってくれない。目を覆うだけの薄っぺらいただの皮膚なのに、それが今は何キロもの、何トンもの自重を持ち得ているかのようにだった。

臃だった意識が、ゆっくりと正常化していく。まず身体の左側が冷たいことに気がついた。ボクは身体の左側を下にして、固い地面の上に倒れているようだ。

とりあえず、ゆっくりと四肢を動かしてみる。手の方は腕も思う

ように上がったし、指も五本すべてがちゃんと動いた。足も踝くるぶしと膝の関節もしっかりと曲がったから、どうやら問題なさそうだ。あとは、この重たい瞼をどうにかするだけだ。

「う、ぐ……」

呻きながら、ゆっくりと少しだけ瞼を上げる。霞んではいるが頭は景色をしっかりと認識し、

「！」

認識した光景にボクは仰天し、中途半端にしか上がっていなかった瞼が一瞬で開ききった。

「そん、なっ……。どうして……？　嘘、だろ？」

ボクは啞然として呟く。

ボクが見る限り、ここはボクが数か月前まで彼女に会うために毎日通っていた北側の路地だ。

空は相変わらず、というか案の定というか分厚い雲が垂れこめる曇天だった。太陽の光なんて僅かも差し込んではいない。

驚きを隠せない表情のまま、ボクはゆっくりと立ち上がった。が、
「うわぁっ！」

足に上手く力が入らず、身体がバランスを崩してしまった。そのまま力の抜けた足じゃ抵抗もできず、固いコンクリートの地面の上に尻もちをついてしまった。

「っでえ……」

ボクは、じんじんと骨にひびくような痛みに襲われるお尻を呻きながら抑える。本当に自分が情けない。

「くそっ……。くっ」

ボクは身体の後ろの地面に手をつけて、なんとか立ちあがった。立ち眩くらみに似た眩暈めまいに一瞬身体が揺れたが、今度はしっかりと地面に立つことができた。

「やっぱり……。ここは——」

ここは、ボクが約六年間通った路地だ。

彼女がいる、街だ……。

どうしてここにいるかは分からない。けど、多分力が暴走したの
だろう。というか、それしか考えられない。

そう思ったボクは、とりあえず自分の元家に向かうことにした。
別にそこに戻ってまた住みたいわけじゃないけれど、ただ……なん
となく頭が家に戻ってみようと考え付いたのだ。

家族はボクを捨てた。けれど、やっぱり血は嫌でも繋がっている
んだ。もしかしたらその血が、帰りたいと騒いだのかもしれない。
「っと。その前に」

ボクは身につけている灰色の長いＴシャツについているフードを、
すっぱりと顔まで覆うようにしてかぶった。これ以上、ボクの力で
もめ事に巻き込まれたくない。だから、できるだけ顔は隠しておき
たい。

でも——たとえ、どんな問題が起ころうとも彼女にだけは会いた
い、と切に思った。

北側の街は、相変わらず華やいかにぎやかな場所だった。

目立ちたくはないボクは、フードをかぶったまま道の隅をこそこ
そと歩いた。周りは自分のことしか考えていない人ばかりで、ボク
に目をくれる人なんて一人もない。

ボクは道際に建ち並ぶ店に張り付くようにして、俯くように顔を
下げたままゆっくりと進む。

このあたりの道は良く知っている。毎回彼女に会いに行くときは
必ず通っていた道だから。この数カ月では、何も変わってはいない
ようだ。店も家も見覚えのあるものばかりだ。

ボクは石畳の地面を睨みつけるように見つめながら、足を前に運
ぶ。視界ではブーツが地面をしつかりと踏みしめる。その時、

「——あとは、キャンディーショップに行ってクラリッサちゃんに
お土産を買って行こうかしら？ あの子は確かキャンディーが好き

だつたわよね」

ボクの横にそびえる洋服店の扉が外側へ開いた。扉はボクの行く手を阻むように開いたので、ボクはそれにぶつからないように足を止めるしかなかった。のだが、他にも足を止めた理由はある。それは、

「クラリッサ……？」

その名前に、聞き覚えがあった。

クラリッサはボクの姉の名前だ。姉とは別人かもしれないけど、その名に反応してしまった。

乾いて澄んだベルの音とともに、店の扉が閉まる。ボクは僅かに顔を上げ、そこに立つ人物の顔を確認した。そして――

「っ……」

思わず、息をのんでしまった。

今思うと、あれは偶然にしてはできすぎている出会いだったと思う。けれど、本当にあったのだからこれは神の悪戯としか思えない。もしくは、ヒカリがボクをあゝの路地で倒れさせた時から決まっていた、必然的な出会いだったのかもしれない。

何にしても、そこでボクは――ボクを売った母親に出会ったんだ。

s c e n e 4 4 (前書き)

今日は何かと時間がありませんので、短めでお送りしています。

僅かにカールした茶髪。ややつり上がった淡い茶色の瞳。フリルのあしらわれた紫のドレス。色とりどりの花でできた重たげな髪飾り。歩くだけで疲れそうなほど高いヒールの黒い靴。

着ているものこそ立派になりはしたが、やはり先ほどの店から出てきた人物は紛れもないボクの母親だった。ちなみに体系も、以前よりかなりふくよかになっている。

ボクは見間違えようのないその人物を今——ストーカーしている。……いや。ストーカーっていうと悪く聞こえるな。そう、ただ尾行しているんだ。何故って、家を探しだすために。家なら以前住んでいた場所へ戻れば良いのではと思うかもしれないけど、どうせこんな服を着てこんなところで買い物をしているくらいだ。きっと、家も北側に立て直しただろうと見当をつけた。

前にも言ったけど、ボクは決して家に帰りたいわけじゃない。ただ、好奇心というか、気まぐれというか。別に復讐が目的じゃない。何故か復讐してやりたいという気持ちは一向に湧き上がってこない。もし、復讐するとしたらあのじじいにするべきだと思っしな。

とにかくボクは、足音を忍ばせて母親の後をつけていた。眼前で鼻歌なんか歌いながら悠々と足を運ぶ母は、ボクに全く気付いていないようだ。

母は以外にも遠くから来ているようだった。あの店からかなり歩いた。……良く考えたら、馬車を手配したら良いだけの話なのに、何故母は徒歩で？　そう訝しく思ったボクは、思った後すぐに思い出した。

母は、歩くことが好きだった。というか、運動が好きだったんだ。まあ、今は太った体系を戻すために歩いているのかもしれないけど。などと、必要のないことをあれこれ考えているうちに、母はとある門の前で立ち止まった。ボクは慌ててそばの路地に身を隠し、母

が門を開けてその中へ入っていく姿を見つめた。どうやら、新しい家はこの建物の様だ。

白い石造りの五階建て。屋根は青灰色^{せいかいしょく}。建物はコの字形で、建物に囲まれるようにしてある庭には巨大な噴水がどっかりと腰をおろしている。

ざっと、建物のつくりはこんな感じだった。バーンズ家の家の大きさには負けるけれど、こんな豪邸を建てるなど相当の金が必要だ。ボクはそこで、自分はかなりの大金で買われたことが分かった。

別に落ち込んだりはしない。むしろ今は——清々しい。

じじいから逃げられた清々しさ。彼女のいるこの街に戻ってくることができた清々しさ。

ボクは満たされたような気分になって、思い切り息を吸い込んだ。——よし。行こう。もう、この家に様は無い。母親にも会えだし、今の家も見ることができた。あとは、彼女に会いに行くだけだ。きつとじじいはボクを捉えるために追手を出すはずだ。その追手がボクに追いつく前に、速く彼女に会いに行かなければ。彼女に迷惑がかからないように、追手が迫る前に彼女の前から消えなければ。ボクは家に背を向けると、ゆっくりと足を一歩踏み出し、

「ちよつと！」

耳に届いた甲高い声に、足を止めざるを得なかった。背後からその声は聞こえたが、ボクはあえて振り向かなかった。

——何故ってこの声を、知っているから。

「その貴方、待ちなさい。一体何のつもり？ 路地からこそこそと家をじーっと見て。まさか、盗みに入ろうなんて考えてないでしょうね？ 入ったところで貴方なんて、一瞬で警備の者たちに捕まるんだからね」

ボクは密やかな吐息をつきながら、身体を百八十度回転させて建物と向き合った。否、建物の門の前に立っている少女と向かい合っ

た。

「貴方誰？ 顔くらい見せなさいよ」

少女もとい——ボクの姉は眉をひそめてこちらを睨み据えていた。

s c e n e 4 4 (後書き)

さて。昔の家族にどんどんシャノンは会っていきますね。
さあ……一体彼女にはいつ会えるのでしょうか？

scene 45

姉は見違えるほど綺麗になっていた。もともと骨ばっていた頬には適度に肉が付き、汚れでくすんでいた金髪は、きちんと手入れがされていると分かる美しい色に輝いている。美しいレースやフリル、リボンがついた白い清楚なワンピースを身に纏い、ストレートの金髪には淡い水色のリボンが結ばれていた。

でも——とても綺麗だけど、何か違う。今の姉はキラキラしていて顔立ちも一層整ったけど、？彼女？の方が何万倍も綺麗だ。……どうしてだろう？

「——あ。そうか」

自問自答。

頭の中の問いの答えは、一瞬で分かった。

姉は確かに美人だけど、その美しさの大半は着飾って取り付けているようなものだからだ。着飾ることで作り上げた偽りの美しさを姉は纏っているだけ。だから、自然体の美しさを持っている彼女の方が、とても綺麗だと感じるんだ。……こんなセリフ、彼女の前じゃ恥ずかしすぎて絶対に言えないけどな。

ボクが独り思考している間も、姉はイライラしたような顔をしてずっと同じ場所に立っていた。が、良く見るとその足は僅かに震えている。どうやらフードを深くかぶっているから正体の分からないボクのが怖いらしい。だからこれ以上近付けないでいるらしい。「いい加減、素顔を見せたらどうなの？ 卑怯者」

「卑怯者なんかじゃねーよ。ただ単に、ボクは顔を見られたくないだけだ」

ボクは声だけは威勢の良い姉に向かって言い返す。さすがに言葉遣いが変わっているから、相手はボクだと、自分の妹だと気づかな

いはずだ。そう思ったが、

「——ねえ、貴方。あの……私と何処かでお会いしたことは無い？

……声を聞いたことがある気がするのだけれど」

姉は以外にも耳が良いらしい。小鳥のように小首を傾げた姉は、怪訝そうな顔でこちらを見つめる。

正体がバレると厄介だと思ったボクは、顔を見せるのだけは避けなかったからそのまま立ち去ろうと、身体を反転させようとしたが、横を向いたところで、それは起きた。

「ぐっ——」

突然、強い風が横を向いたボクの正面から吹きつけてきたんだ。ボクが慌ててフードを抑える間も与えずに、風はボクの頭からフードを剥がし取る。風に、灰色のフードとボクの短い茶髪が舞う。

「なっ——！」

フードが外れてしまったボクを見て、姉は息をのんだようだ。

——こうなりや、もう誤魔化すことなんてできない。

大きく息をつきつつ、ボクは姉と正面から向かい合った。今度は、フードなしで。

「う、そ……。貴方、シャノン……？ 本当に——」

「ああ。そうだよ。てめえらが何力月か前にあの男に売りやがったシャノンだよ。まさか妹の顔を数力月の間に忘れたなんて、ホザくんじゃねーぞ」

「そんな……。だって——。それに、貴方、その言葉遣い。もっと、シャノンは、」

「あんな風にされて、性格がネジれない方が可笑しいってーの」
ボク顔をぶすつと歪めながら、姉を見る。

「それに、どうして、貴方が、ここに——？」

つつかえつつかえ話す姉は、卒倒してしまいそうなほど青白い顔をしていた。

「んなの、逃げてきたからに決まってるんだろ。……ボクにもどうやって逃げてきたのかは、よく分かんねーけど。——じゃ。特に用は

無いから、ボクは行く。あばよ。クラリツサ・アンヴィルさん」

皮肉っぽい笑みを浮かべて、ボクは姉をフルネームで呼んでやった。ボクのもと姉は身体を硬直させたままだ。

ボクはフードを丁寧にかぶりなおし、それを手で押さえながら姉に背を向けた。

編み上げブーツをはいた足が、一歩前へと歩み出す。

s c e n e 4 5 (後書き)

今回も短くて申し訳ないですoysz

s c e n e 4 6

彼女は、そこ必ずにいる。

石造りの家々の間にできている、薄暗い路地を通りながらボクはそう思っていた。

ボクが今向かっているのは、無論バーンズ家だ。正確には、彼女のいるバーンズ家だ。

空は相変わらず灰色の雲で覆われている。彼女と出会ったあの日のように。家族に売られたあの日のように。空は今にも泣き出しそうなほど、重く暗い。

今思えばその空は、ボクの先行きを反映しているものだったのかもしれない。

「っ―嘘だ」

ボクの思いに反し、彼女はバーンズ家にいなかった。

季節を問わず、いつでも庭で仕事をしていた彼女。しかし、もう庭にその姿は無い。

「……………」

ボクは誰もいない庭を、ただ呆然と眺めていた。頭の中で激しい音が五月蠅く響き、ボクの頭に激痛をもたらす。

「何、で―。あ。そうか……。きつと、この数カ月間に、彼女の仕事は変わったんだ。だから―今はきつと、屋敷の中で、仕事をしてるんだ。そうだ。―そうに決まってるじゃないか」

そうだよ。それ以外のことがあるはずない。そうだ……。そうに決まってる……。

自分にそう思い込ませるかのように、ボクは心の中できつとそうだと狂ったように言い続ける。それは、彼女とボクの絆を繋ぎ止め

てくれる、ささやかな呪文。

「うん。彼女はもう、雑用なんかしなくて良くなったんだよ。きつともっと良い仕事を貰ってるにきまつてる……」

それは、とても良いことだ。心から喜び、彼女を祝福しなければならぬことだ。

だというのに――

そこには何故か、素直に喜べない自分がいた。

心に浮かびあがるのは失望と喪失感、そして耐えがたいほどの悲愴。

――どうしてこんなにも、胸が苦しいんだ？ これじゃまるで、失恋したみたいじゃないか。

訳の分からない胸の苦しみから逃げたくて、ボクはバーンズ家に背を向けた。そのままフードを抑えつつ、脱兎の如く駆け出す。

自分でもどうしてここまで焦っているのか分からない。――分からない。この胸の痛みも。彼女がどうしてボクの前に現れてくれないのかも。何もかも、すべて分からない。

まるでじじいに囚われていたあの数カ月時間が、世界を、彼女を、そしてボク自身を一変させてしまったかのようだった。

相変わらず、南側とは比べ物にならないほど綺麗で洒落^{しやれ}ている北側。そこは路地さえも綺麗で整っている。ゴミ一つ、塵^{チリ}一つ落ちてはいない。南側の路地は瓦礫で埋もれているというのに。

路地は昼間だというのに、静寂に包まれている。私的^{しき}にはそつちのほうありがたいが、人気がないというのは何か居心地が悪い。静かすぎる路地には、ボクのブーツの底が奏でる単調な音だけこだまする。

「これから、どうする――？」

それは、あまりにつまらないからこれから先のことを考えようと思ひ、とっさに口をついた言葉だ。けど、呟いてすぐボクはその言葉の重要さに気がついた。

「そつだよ——。これから、どうする？」

無論、答えは？逃げる？だ。けど、もう一生彼女に会えないかもしれないというのに、彼女と言葉も交わさずに別れてしまうのだけは嫌だった。だから、一度でいいから彼女に会っておきたい。けど、その肝心の彼女がいらないのではどうしようもない。

今のボクは逃亡者だ。あまり一つの場所でゆつくりはしてられない。あのじじいのことだからすぐに追手を出すだろう。だから、追いつかれる前にはここを発^たたなくちゃいけない。

どうする？　とりあえず逃げるとして、彼女には——。

「つ——と」

思考している間に、前方から木編みの籠を下げたぽっちゃり体系の中年女性が、結構近くまでこちらへ歩いてきていた。ボクは慌ててフードを手で押さえる。こんな路地で人に会うなんて思ってもみなかったから、フードから手を離していたのだ。

「？」

あわててフードを抑えたボクに、女性は訝しむ様な視線を寄こす。ボクはそんな視線に気付かぬフリをして、自然な装いで女性とすれ違った。

s c e n e 4 6 (後書き)

ついに彼女が自壊(↑次回ww)……!!

女性とすれ違って少し経った後、小さな風が巻き起こる。風は力なく、しかし確かにフードとそこからはみ出ている茶髪を揺らす。ボクは俯いたまま、フードを抑えて速足で路地を歩く。

もう人とすれ違うことはなかりうと、ボクは余裕をかましてフードから手を離す。そのまま足を前へと変わりなく運び続け、

「――危ッ^{あぶ}」

意外にも前方から人が歩いてきた。長身で、体つきはスリムだけど胸はあるから性別は多分女だろう。というのも、その人物は顔から肩にかけてを布で覆っていたのだ。そのため、顔がはっきりと見えないから？多分？なんだ。年齢も良く分からない。女性は、体格だけじゃ年齢をイマイチ判断できないからな。布の隙間からは、色白の肌が少しだけのぞいている。軽く巻きつけられた布の端は、肩で頼りなげに揺れていた。

「――」

ボクはできるだけ自然に手をフードへ再度持つていき、さきほどと同じようにふつとすれ違う。相手は特にボクを気にしていないようだった。というか、ボクなんか道に転がっている小石と同じようなもので、全く眼中にないみたいだった。

先ほどと同じく、すれ違った少し後で小さな風が起きる。風はフードを申し訳程度に揺らし、風は――
爽やかな、花の香りを運んだ。

「――」

ボクはその香りに、一瞬で前進を止めた。風が運んだ、かすかな香り。

それは――彼女の香り。

ボクは気付かぬ間に双眸を見開き、反射的に先ほどの人物が歩いて行った後方を振り返った。

彼女の香りを発した人物は、やはりボクのことなど全く気に止めずに歩いている。その歩調はとても速く、最初にボクとすれ違った女性に追いつきそうになっていた。

「あつ——」

ボクは口を開いたが、彼女を何と呼びとめたらいいか分からなかった。？彼女？と呼ぶのはおかしい。かといって、？君？も変だし。ボクの口は何と言って良いのか分からないまま、「あ」の形で固まる。が、次の瞬間、

「——え？」

丸い形をしていた口は、横長の丸い形に変化した。

見開かれたままの、ボクの目。その目が捉えたのは、信じられない光景だった。

彼女の香りを発する人物の身体が、女性より前へ進む。と、ここまでは何もおかしいところなんてない。けど、

すれ違いざまに、彼女の香りを発する人物が女性の腕に下げられている籠を、ひったくったのだ。

「え——？ ええ——」「ぎゃああああ！ ひったくりー！ ちよつと、待ちなさああい！」

ボクの叫び声は、ボクの声より大きい女性の甲高い悲鳴にかき消された。籠を奪った人物は、そのままダッシュで逃げだす。

「待ちなさああああああああい！」

貴婦人、本気モード。

女性は上品に広がるスカートをはいて髪も綺麗にセットしているというのに、その髪を振り乱し、スカートの裾が大きく広がって大根のような太腿ふとももがのぞくのもお構いなしに、下品極まりなく走り出す。が、籠をひったくった人物に女性が追いつくはずがないことは、火を見るよりも明らかだ。

「……って。ひったくりを見逃せるかってーの！」

ボクはしばらく呆然と事を見つめていたが、頭の中を冷静にした後地面をけり、低い体勢で走り出す。正面からぶつかってくる風に、

フードは無論煽られはざされる。そこは強風直撃だから仕方がないし、今はんなもの気にしてる場合じゃねえ。

ボクはあつという間にゼーゼーと言って腹の肉を揺らしている女性を追い越した。

籠を持つている人物までの距離は、十メートル弱。

「てっ！」

ボクは軽やかに渾身の力を込めた足で地を蹴り、自分の左側にそびえているレンガ造りの家の壁へと移る。身体を斜めにした状態でそのまま壁を蹴り、ひらりと身体を舞わせながら籠を持つ人物の前へと降り立った。つもりだったのに、

「んなあつ！？」

ボクが地面に降り立つよりも早く、その人物は右わきに伸びているさらに狭い路地へと入って行った。

ボクはよくありがちな突っ伏すように身体をずべつと地面に倒すあれをしそうになったが、かろうじてそんなマヌケなこととはしなかった。足を曲げて衝撃を和らげながら着地し、苦々しく右へと延びる路地を見つめる。

「くっそー。ヒカリたちよ！ あの人物を追い、その手に持っている籠の取っ手を切り落とさない！」

s c e n e 4 7 (後書き)

いいね♪ ハガレン。

25巻、発売日そうそう買ったよーい♪

ハガレン万歳！ 荒川さん最高！

いつかハガレンや黒執事みたく高度なストーリーの話が書きたいと
夢見る女子コーセイDEATH（笑）

あ。キョーミないですか。そうですね…。はしゃぎすぎました。失
礼しましたorz

ボクの命令に絶対従うヒカリたちは風の如く空を駆け抜け、籠の取っ手だけを気持ちいいくらいにすぱっと切った。ヒカリとともにひったくりを追って走り出したボクは、ひったくりのいる少し離れた場所で籠が落下するのを目撃した。

重く鈍い音とともに、籠は地面に落ちる。ひったくりの手には、切断面の綺麗な籠の取っ手の上半分だけが残った。

「？」

ひったくりはたと止まり、怪訝そうに急に軽くなった手に視線を落とす。その姿を見つめながらボクは、

「てええいッ！」

思い切り、体当たりをしてやった。

身体がぶつかり合う鈍い音。ひったくりはバランスを前方へ大きく崩す。

「つと。うぎゃッ」

体当たりの有り余る勢いで、ボクもそのままひったくりの上に倒れる。

ひったくりの細い身体が、石畳の地面に倒れ込む。

「うつ……」

ひったくりは、ボクの下敷きになりながら地面に倒れた。その瞬間、その口から小さなうめき声が漏れた。倒れた衝撃を足や腹部に感じながら、ボクは顔をしかめた。しかしボク自身がひったくりの重石になっているから、相手は逃げるできない。

「ここで逃げられたくねーからな、つと」

ボクは体勢を立て直して上半身を上げ、膝を相手の背中に押し付けながらその両腕を背中側で強くひねり上げた。

「——っ！」

相手はその痛みに、小さく呻く。が、すぐに歯をくいしばったよ

うだ。呻きはすぐに上がらなくなった。

「あ。そうだ」

ボクは視線を横へと逸らし、取っ手が切れた籠を見た。籠からは中身が少し飛び出し、そこらに散らばっている。その中には、分厚く膨らんだシックな茶色の財布もあった。

「持ち主に返さなきゃな」

独りごちるようにして呟きながら、後方に広がる路地の入口を振り返ったときだった。

「ハア。ハア。や、やっと、追いついた。ゼー、ゼー」

タイミング良く、今にも死にそうなほど苦しげな呼吸をする汗びしょびしょの女性がやってきた。意外にも到着が速かったな。

「あ。その籠。取り返したんで、持っていつてください」

ボクはひったくりを力づくで抑えたまま、女性を見る。

「あら。そう。それは――」

愛想笑いを浮かべた女性の顔が、刹那に凍りつく。

「あ。あ、あんた――。？悪魔の娘？」

女性の言葉に、ボクははっと目を見開く。

そうだ。走ったときにフードが外れちまってたんだ。

「……っ」

女性の言葉に、ひったくりが身体をビクリと反応させる。

ボクは黙ったまま、女性を静かに見つめていた。

「だっ、誰も、助けてなんて言ってないんだからね！」

女性はおどおどとしながらも路地に入り、用心深く身構えながら籠のそばまで来た。その怯えたような姿を見ると、今ならボクが「わっ！」と驚かせただけで女性は気絶してしまいそうに思えた。女性は急いで荷物をかき集め、取っ手の切れた籠を小脇に抱えながら来た道を引き返す。

やっぱり、数か月じゃ噂は消えないか。

別に悪魔の娘と呼ばれるボクの噂が、この間に消えることを期待してたわけじゃない。けど、何故かやっぱりかと思っただけ落ち込む自

分がいた。だから、知らず知らずボクはこの数カ月で、悪魔の娘という名の噂が消えていてほしいと望んでいたのかもしれない。

ボクは逃げる女性の背中をぼんやりと見つめながら、そんなことを思った。とその時、女性の背中が遠く小さくなるのを止めた。

「たっ、頼んではないけど、一応、取り返してくれて、ありがとう」
女性は振り向かないままボクにそう告げると、また走り出した。
？ありがとう？

そんな言葉、ボクにはとても不釣り合いだ。その言葉をボクに対して使うのは、とてももったいないと思う。

「——ありがとう、ねえ」

そういえば昔、彼女にもそんなことを言われたっけな。

そう考え、はっと視線を自分が抑えているひったくりに落とした。ひったくりは抵抗一つせず、何も変わらずそこにいた。

「さあて。その顔、拝見させてもらうぞ、っと」

布が風をはらむ大きな音が立つ。ボクは右手でひったくりの顔に巻かれている布を、容赦なく引き剥がした。

布の下から姿を現す金髪。それとともに、ボクの鼻孔を彼女の香りがくすぐる。ゆつくりとこちらを振り返って仰ぎ見る、エメラルドグリーンの――。

「――っ」

刹那、ボクは息をのんでその瞳を見つめていた。

確かにその目はエメラルドグリーンだ。見間違いようもない、完璧なエメラルドグリーン。でも、

その瞳は、とても濁っていた。

彼女の瞳の様な澄んだ美しさも、純粹な煌めきも、柔らかな光も、その瞳には宿っていない。あるのは、濁った緑と、相手を射抜き傷つけるような鋭い眼差し。

――この人物は、本当に彼女なのか？

瞳の濁りがあるだけで、ボクはそう疑わざるを得なかった。

「――っ離して！ 離セッ」

彼女らしき人物はボクの眼前でその瞳を細め、鋭くボクを睨みつけた。その瞳は、昔彼女がボクに向けていた優しい光を灯したものとまるで別物だった。

少女はボクが掴んでいる腕を、痛いだろうに無理やり強く動かしてボクの束縛から逃れようとした。

「――何で。何で、だよ？ お前は……？ 彼女？ で？ 君？、だよな」

「違う。五月蠅い！ 離セッ」

呆然として、頭できちんと思考することができない。頭は痛いくらいにまっ白で、視界が不安定に揺らいでいるかのようにくらくらする。

――本当に、たった数力月の時間は、彼女をこんなにも、変えてしまったのか……。

「――嘘だ」

俯いたボクの今にも消え入りそうな眩きとともに、手の平から腕にかけてと膝に衝撃が走る。彼女が力の弱ったボクの手を振りほどき、膝を背中から落としたのだろう。はたまた、違うかもしれないいや、そんなことどうでもいい。今知りたいのは、あの少女が本当に彼女であるのかどうか。もし彼女であつたなら、何故こんなにも変わってしまったのか。何故ひっそりなんてしているのか。何故バーンズ家の奴隷から解放されているのか。

——何故、ボクを厭^{いと}うたのか。

「何で……。どうして。答える……。答える。答えるよ！」

ボクは視線を上げ、前方へ向かつて咆哮するように叫んだ。少女の背中では、十数メートル向こうまで離れていた。けど、たった数十メートルの距離しか開いていないのにその時のボクには、ボクの手が届かないとても遠くに彼女は行ってしまっているように見えた。

ボクの叫びに反応してか、少女の足が止まる。

「私はもう、貴女に会いたくないの。もう私に、かかわらないで」とがめる風でも、起こった風でもない、昔と変わらぬ彼女の声音。しかしその声には、確かな威圧感があつた。

「何でだよ。何で……。理由を説明しろ」

「……………」

ボクの問いは、彼女に無言で切り捨てられた。

彼女は何も答えないまま、再度前方へと駆けて行った。彼女の背中が、さらに小さくなる。彼女が、ボクから離れてゆく。

「……理由を説明しろよ。くそッ。何でなんだよ。何でなんだよ——」

ボクの叫びは、虚しく虚空を切り裂く。ボクの声は曇天の空に吸い込まれるようにして消え、多分、彼女には届かなかつただろう。

何もできないまま、ボクはその場に崩れるようにして倒れた。何も考えたくなかった。何もしたくなかった。何も聞きたくなかった。ただただ、胸に大きな穴があいてしまったかのような喪失感だけが、胸の中を支配していた。

相変わらず空には鈍色の雲が浮かんでいるが、昼間よりはかなり晴れて夕日が大地を照らしていた。

彼女と会った昼間から、結構時間が過ぎたらしい。路地に倒れたままのボクは、緩慢に唇を動かす。

「——とりあえず、返しに行かないと」

^{から}空の頭が思いついたのは、そんなことだった。

返しに行かなければ——何を。自分が持っている布を。——何処へ。彼女のところへ。——彼女は何処だ。分からない。けど、返さなきゃ。それに、彼女にあってちゃんと納得のいく話をしてほしい。ボクは彼女から引き剥がし、そのまま手に持ったままだった彼女の布を目の前に掲げた。ベージュの、バスタオルくらいの大きさの布。布を縁取るようにして入っている、藍色のライン。

ボクは布で顔を覆った。爽やかな花の香りが柔らかく、広がる。その香りは憂いに沈んだボクを柔らかく抱擁し、慰めてくれているようだった。

香りは、彼女が確かにいたことを証明してくれる。彼女はこの世界、この国、この街にいる。きっと。

もし、ボクと彼女が強い絆で結ばれているのなら、きっとまた出会えるはずだ。

s c e n e 49 (後書き)

祝 第50話目!!

s c e n eでは49になっていますが、プロローグを合わせて今回で50話目になります!

50かゝ。100の半分ですね。ハハハ。まだa c t 1だけなのに……。

でもそろそろ終わりです! 予定ではあと4話でa c t 1は終了です。

読者の皆様には、こんなにダラダラと長い物語につき合っていただいて、本当に感謝感激です。ダラしない作者で本当に申し訳ないですo r z

「海が、見てみたいな」

彼女は屋敷の庭で、憂いを帯びた瞳をしてよくそう言っていた。海が見てみたい。

そんなこと、実現するのは容易いことだ。この街は西側が海に面しているから、屋敷から少し歩いたところには海は広がっている。

「それなら、行けばいいじゃない？」

そのころのボクには、彼女が不思議でたまらなかった。ボクにとって、海なんて珍しくもなんともない。それなのに、何故彼女は…

…？

「無理なのよ」

「え？」

ボクの問いかけに、彼女は遠い目をしながら掃除で使っているほうきの柄の先に、組んだ手を乗せてその上に顎を乗せた。

「私、ここから一步も出られないの。奴隷だから。このお屋敷のお庭だけが、唯一私の居られる場所よ。私は籠に入れられた鳥と同じなのよ。籠の中の鳥は、広大で青く美しい空を飛びたいと望んでも、願いをかなえることはできない。私が海を見てみたいと思うのも、それと同じようなものね」

ボクはさらに彼女が分からなくなってしまった。

「じゃあ、叶わないと分かっている、どうして願うの？ 虚しいじゃない」

「ええ。とっても。けれど——叶わないことだからこそ、強く願ってしまうのではないかと思うわ。多分、だけれどね」

微笑みを、可憐とも呼べる見事な作り笑いを、彼女はそのとき浮かべた。その瞳は、ここよりも遠くを見つめているように見えた。

彼女は多分、西の方向に広がる海をその瞳で見ていたんだと思う。……たとえば彼女が海とは真逆の方向である東を見ていたとしても…

…。

彼女は自分が東を見つめていることにも気付かずに、しばらくの間自分が行くことのできない遙か遠くを見つめていた。

黄昏の淡いオレンジ色の光が、彼女を黒い影に染め上げる。

その黒い背は小さく、弱く、そして儚く見えた。まるで何かを憂いているような、大きな哀愁を帯びているのだ。

「……やっぱり、ここにいたか」

空の色を映し出す光の海。オレンジの夕日は、自らと同じ色に海を染める。

砂浜を踏みしめるかすかな音を立てながら、ボクは波打ち際に独りで佇む彼女のもとへ向かう。

身体の正面を夕日の方向へ向けて立つ彼女。長い金髪が、風に小さく揺れる。そのシルエットの細さは、数か月前と今の暮らしの大きな差を十分に物語っていた。

「……なあ」

呼び方が分からず、少し悩んだ後にそう呼んでみる。名前がないというのは、その人を呼ぶことができないから、とても不便でとても悲しい。

「……………来た」

彼女は僅かな間を開けた後、聞き取るのが困難なほど小さく呟く。その呟きと間の意味が分からず、ボクは首を小さく傾げた。その瞬間、強めの風に髪を乱暴に撫でられた。刹那、

「わっ。……ああ。すごい——」

風と共に、小さなピンクの花弁が運ばれてきた。

空で軽やかに舞うそれらは、とても美しく幻想的だった。

「サクラ。隣国、瑞穂の国の国花。名前の由来は、瑞穂の国の古典に登場する？木之花咲耶姫このはなぐさやひめ？が最初のサクラのタネを蒔いたので、「さくやひめ」の名前から「さくら」になったらしいわ」

彼女は緋色の景色の中で、柔らかく微笑むように舞う花弁を見つ

める。

サクラというらしいこの花は、海上に流れ続ける。まるで、長い布を纏って躍っているかのようだった。

サクラの舞いと、海の煌めきと、黄昏の光。その三つが絡み合い、神々しいまでに荘厳な景色を紡ぎだす。

しばらくの間、ボクはその景色から目が離せなくなっていた。はっと我に返りこちらへ背を向けている、影に覆われた彼女を見つめる。その表情は、全くうかがえない。

「……ごめん。ボク、何も言わずに姿を消しちゃって。サイテーだと思うなら、無視してくれたって構わない。許してくれなくても、構わない」

s c e n e 50 (後書き)

桜の知識は、Wikipediaさんから頂きました。

ボクは深く腰を折って頭を下げ、彼女に謝った。

謝るだけではこの空白の数ヶ月間を埋めることなどできないということは、十分すぎるくらい承知している。彼女は、ボクに自分は捨てられたのではないかと不安になっただろう。自分を捨てたボクを、恨んだだろう。

ボクがしたことを許してくれなくたって、構わない。ただ、ボクは謝りたいんだ。たとえそれが、ただの自己満足であつたとしても。「え。どうして? —— 何で、謝るの」

「……………はい?」

ボクは九十度以上の角度に折っていた腰を、驚きのあまりすばやく元の位置に戻していた。腰真つすぐにした刹那、視界に彼女の姿が入る。彼女は背を向けずこちらを向いていた。その顔は彼女の背中側から照っている夕日のせいで、影になって見えない。しかし声からすると、どうやら戸惑っているみたいだ。

「え? え? だって……ボクがいなくなつて、それで君は怒つて

——」

「違うわ。私、貴女には全然怒りなんて感じてないのよ。むしろ…

…とても、心配した」

彼女の聞いているだけで胸を締め付けられるような切ない声に、ボクの心は不安げに揺れた。

けど、待てよ。怒ってないなら、さつきはどうして……?

「貴女、急にいなくなるんですもの。もう、言葉では言い尽くせないほど、とても心の底から心配したわ。心配で心配で、屋敷を飛び出して毎日北側と南側の街中貴女を捜して……。お金を持っていな

い私は、いつしか泥棒をして生きていた」

「じゃあ、さつき、もう、関わりたく、ないって……」

戸惑う気持ち表に出て、つつかえつつかえにしか話すがで

きない。

「今の私を、貴方にだけは見られなくなかったのよ」

彼女の声は耳元でそつと囁くような、波の音で消されてしまいそうなほど小さいものだった。

彼女はまるでボクから顔を反らすように、身体を回転させて背を向ける。ボクは砂を踏みしめる乾いた音を立てながら、数歩歩く。そしてすぐそばまで近づいた彼女の横に、一メートルほどの間隔をあけて並んだ。

相変わらず桜は宙を舞い、海は一定の周期を保ったまま小さな波を作り上げている。

「謝らなければならないのは、私の方よ。私がさっきあんなことを言ったから、貴女は傷ついたのよね。……本当に、ごめんなさい」

彼女は僅かに身体を曲げてボクを見、顔を歪めて丁寧に頭を下げた。洗練された、動きだった。

ボクは歪められた彼女の顔を見たくなくて、慌てて大きめの声を上げた。

「いや。いいよ。何か……良かった。許してくれなくてもいい、なんて言っただけで正直君に嫌われるのは、嫌だから」

「それは、私もよ。……こんな私に貴女が関わってほしくは無いけれど、でも貴女が私の遠くに行ってしまうのも嫌。矛盾しているけれど、そう思ってしまうのだから仕様が無いわよね……」

彼女は下げていた頭を上げる。ボクは金糸のように美しい髪を揺らしながら顔を上げる彼女を見つめながら、柔らかに微笑んだ。それは、彼女の苦笑いにも相当しないほど不様で格好の悪いものだけれど、ボクの心からの微笑みだ。

彼女の方は僅かに視線を下げていて、ボクの足元辺りを見ているようだった。その顔はやはり、憂いの色に染め上げられている。

「……本当に、変わってしまったのね。貴女も、私も。このたった数カ月で」

「ああ」

「でも、私は貴女を嫌ったりしないわ。たとえ貴女に傷付けられ、厭われ、捨てられたとしても。それに、とても素敵よ。その口調の貴女も」

「……そうか？」

「素敵よ？と何の躊躇いもなく彼女は言う。なんだが、言われたこちらがこつぱずかしい。」

「それに、いくら口調が変わったって中身は優しくて明るくて、勇敢で思いやりのある貴女のままだもの」

「そんな。ボクはそんな大層な人物なんかじゃないさ。……あ。そうそう。これ、ボクが持ったままだった」

あまりに彼女が恥ずかしくなるようなことを言うものだから、ボクは恥ずかしさを隠すために彼女へ近づいてそつと布を差し出した。ボクの手握られたままだったそれは、色あせ汚れてしまっているが解れや破れは全くない。その布は、彼女が物を大切に扱っていることを証明していた。

差し出された布を、彼女は見つめる。

「ありがとう。そつか。貴女が持ったままだったのね」

彼女は、細く白い手で布をそつと掴む。

「それから。ボクはまた、行くから。当分、君に会うことはできない」

「——え？」

彼女の手がピクリと小さく跳ねる。と同時にその動きも完全に止まり、彼女は受け取りかけていた布を取り落としそうになった。

海岸から海へと吹く風に、布が大きくはためく。

「おっ！と」

ボクは海へ飛んで行きそうになった布を、慌てて抑える。気がつけば、もう桜の可憐で優雅な舞いは終わっていた。残されたのは、海の上を漂ういくつもの小さな花弁。

「ね、え……それ。——どういうこと？ あ、貴女はまた、いなくなってしまうの……？」

彼女は、躊躇いがちに、戸惑いがちにボクを見つめる。その瞳は、目を当てていられないほど悲しげに、不安げに揺れていた。

「……ああ。ごめん。でも、ボクは、逃げなくちゃいけないんだ――」

――

ボクは彼女に洗い浚い、すべてのことを話した。ある男へ家族に売られたこと、そこで自分は力の実験をさせられたこと、男が創っている痛みを感じないヒトのこと、力の暴走によって逃げ延びたことなど。彼女も最初は相槌や質問をとるところで入れていたが、後半はやや俯いたまま黙ってボクの話に耳を傾けていた。

「——そして今、ボクはここにいる。以上だ」

「……そう。貴女は今、逃走中なのね」

「ああ。だからボクが君のそばにいたら、君に迷惑がかかってしまう。それだけは、嫌なんだ。だから……ごめん。ボクは行く。あのじじいから逃げるために」

「——そっか。分かった。貴女の道は貴女で決めることだもの。私に貴女を止める権利は無いし、貴女の見解に私が干渉する権利も無いわ。——行つてらっしゃい」

彼女は僅かに下げていた顔を上げ、笑みを見せた。誰がどう見ても文句なしの綺麗な笑顔。細められた目じりも、両側に柔らかく引き上げられた口元も、とても魅力的で色気がこぼれている。だけど、
「……こんなときにまで、作り笑いしなくていいぜ。その完璧な笑顔、ボクじゃないと作ったものだって気がつかねえだろうっけだな」

長年付き合い、彼女に魅せられてきたボクにしか分からないだろう彼女の作り笑い。彼女は、この数カ月で作り笑いが怖いくらい上手になっていた。

「……………。だつて——」

彼女は、僅かに口元を下げて作り笑いを崩した。

「——こうしていないと、無理してでも笑っていないと、泣いてしまふんだもの……」

「じゃあ、泣けばいいじゃないか」

ボクの言葉に、彼女の顔に微かな驚きの色が浮かぶ。しかしそれも刹那に色あせ、作り笑いが一瞬で崩壊する。

エメラルドグリーンの瞳が輝きを増し、ついに煌めく涙の雫がほろりと頬を伝う。潤み輝くその瞳はとても美しく、とても懐かしかった。涙にぬれた彼女の瞳は、昔の純粋な輝きを放つ。

「本当は、行つて、ほしくない！　ずっと、ずっと貴女には、そばに、いてほしいよお……！」

彼女は喉から言葉を絞り出すように言い、声を上げて泣き出した。手の平で、後から後から流れて止まらない涙を必死に彼女は拭う。その姿は、幼い子供が転んで泣いているかのようにだった。

ボクは泣き続ける彼女へ身体を寄せ、そっと抱きしめた。

「うん……。そうだよな。ごめんな……。でも、とりあえず今は、できるかぎり君のそばにいるから。だから、思い切り泣けばいい……」

彼女は泣きながらも、ボクの言葉に小さく頷いた。

しばらく彼女はその澄んだ瞳から、涙をこぼし続けた。ボクはずっと、彼女が泣き止むまで抱きしめていた。彼女はボクより僅かに身長は高かったけど、ボクよりとても細かった。本当に貧しい暮らしをしているんだということが、ヒシヒシと伝わってくる。思わずボクは、彼女を抱きしめたまま眉を寄せていた。

ボクのせいで、泥棒をしなければならぬほどにまで墮落してしまった彼女。屋敷を飛び出したなどと簡単に言っていたが、言葉で言うほどそれは容易くないだろう。泥棒をすることだって、いつ捕まえられてしまうか分からない行いだ。彼女はこの数力月の間に、凄まじく大変な思いをしてきただろう。

それなのに——ボクはまた、この不幸な少女をさらに独りにしてしまうのか。

「——ごめん。我儘だつて分かつてるけど、私、どうなつてもいいから、貴女と一緒にいたい」

「……………」

ボクは何も言えなかった。彼女のその願いは、到底叶えられない。ボクは、彼女にだけは迷惑をかけたくない。彼女にだけは、これ以上何があってもボクのせいで堕ちてほしくない。

そして——彼女にだけは、幸せになつてほしい。ボクがいなくても、いつでも笑つて過ごしてほしい。作り笑いなんか、浮かべなくていい日々を送ってほしい。

「——あ。砂漠の、薔薇」

強い願いの末、ボクはそんなものの存在をはつと思ひだした。

砂漠の薔薇。それは、この世界を丸ごと吹き飛ばすことだつて容易いほど、大きな力を持つている宝石。噂によると、瀕死状態の人を元気にすることだつてできるらしい。願えば、若返りだつて可能だと聞いた。

しかし、砂漠の薔薇には願つてはいけない願い事が二つある。一つは、自分の欲望のための願い。もう一つは、死者の蘇生。この二つのいずれかを願つた時、砂漠の薔薇は砂のように砕け散つてしまうという。

この話は悔しいながらも、あのじじいに聞いたことだ。そして今——ボクはじじいに初めて感謝をした。

悔しいけど、もう方法はこれしかない。彼女を救い幸せにする唯一の方法。それは——

砂漠の薔薇を、手に入れること。

「え。何？」

彼女は疑問符をつけてボクに言つと、ボクから身体を離れた。その目元は、赤みを帯びていた。

「——そうだよ。ボクは、砂漠の薔薇を探す。だから、君にはボクの帰りを待つていてほしい。絶対、ボクは砂漠の薔薇を手に入れて君のもとへ帰つて来るから」

ボクは結局自分の手に持ったままだった彼女の布を、今度こそ返すためにそつと差し出した。

s c e n e 52 (後書き)

a c t 1 終了まで、あと一話！

彼女はボクの言っている言葉の意味が分からないという風に、不思議そうな表情をしたまま差し出された布を見つめる。まあ、無理もない。彼女は多分砂漠の薔薇の存在を知らないだろうから。それに、もしここでボクが砂漠の薔薇がどんなものを教えてしまえば、優しい彼女は表情を一変させて必死にボクを止めるだろう。？自分のために危険を冒すようなことはしないでほしい？と言って。

だからボクはあえて何も言わないことにした。彼女の方もさして気にしていないようだった。その視線は、ボクが持つ布だけに注がれている。

やがて彼女は何かを決心したかのように瞳を閃かせ、大きく頷いた。

「うん。やっぱりその布、貴女が持っていて」

「え？」

彼女は布から視線を上げ、眉をひそめるボクに視線を投げかけてきた。

「いいから。——どこかで、貴女と繋がっていたいから。その証に」
彼女は真つすぐな光が輝く瞳を、ボクに向ける。ボクはその視線をしつかりと受け止め、

「——ああ。分かった。これは、ボクが持つことにするよ」

ゆつくりと、しかし力強く頷いた。

彼女は頷くと、その眩しいほど白い手で布を握ったままのボクの両手を取った。そのまま手を僅かに上へあげ、真摯な眼差しでボクを見つめる。

「——シャノン。逃げて。生き延びて……。たとえ、すべての希望が消えたとしても……。私はずっと、貴女の味方だから」

目を、見開く。

柔らかに優しく細められた、深い海の色に似たエメラルドグリーン
の瞳。微かに傾けられた頭の動きに連動して揺れる、光に煌めく
金色の髪。僅かに朱を帯びている頬。艶やかともとれるほど美しく
曲線を描く唇。

彼女は、これまでに見たことがないほど美しい笑みを浮かべた。

「——ああ。ありがとう」

ボクは自分なりに精一杯の笑みを浮かべ、彼女の？本物の？笑顔を
見つめ返した。

*

*

*

長い話が終わり、ボクはユーフェミアの瞳を見つめた。

「ボクの過去の話は以上だ。——何か、長くなっちゃったな」

「いいえ。とんでもないです。とても、良い話でした。お話してく
ださって、ありがとうございます」

ユーフェミアは、ボクに微笑みかけた。瞳の色は違うけど、さら
りと風に揺れる金髪の美しさ、美麗な雰囲気彼女とユーフェミア
はとてもよく似ている。だからかもしれない。ボクがユーフェミア
に親近感を抱けたのは。

「話していただいたお礼に、私も過去の話をした方がよろしいので
しょうか？」

ユーフェミアの声音と表情に、ボクは慌てて首と手を振った。

「いいって。無理に話さなくて。ボクは勝手に話しただけだし」

「そう、ですか」

ユーフェミアは、再びうつすらと笑む。

自分も過去の話をした方がよいだろうか？ と言った時、ユーフ
エミアはこちらが泣いてしまいそうなほど悲しげな表情を浮かべた

んだ。そんな顔をするくらいだから、きっと彼女の過去にも相当辛いことがあったんだと思う。

ユーフェミアがボクに過去を話し、その悲しみと辛さのすべてをボクは理解してあげられ、尚且つ^{なおかつ}それらの負の感情を分かち合えることができるのなら、ボクだってユーフェミアに話してくれと言うだろう。けれど、人の痛みを他人に理解することはできない。その痛みは苦しみを理解できるのは、己自身のみだ。

——ボクのこの痛みと苦しみだって、誰にも理解できないだろう。それに、他人の過去をあれこれと詮索したり聞き出したりするのは、感心できることじゃないしな。

「——シャノン。実は私にも、とても重要な話があるのです。お話しても良いでしょうか？」

「うん？ 何だ」

「実は——」

*

*

*

『 親愛なる彩乃へ

この手紙を貴女が読んでいるとき、私は貴女のそばにはいないでしょう。私はシャノンとともに、砂漠の薔薇を探す旅に出ることにしました。貴女に一言も相談せず、とても身勝手な行動をとった私を許してください。構いません。けれど、絶対に私たちを追いかけるなどとは思わないでください。そして、決してシャノンを恨みはしないでください。これは、私一人の決断です。もし、貴女にこのことを告げていれば貴女は私を行くなと止めていたでしょう。もしくは、彩乃、貴女自身もついて行くと言っていたでしょう。しかし、私はそのどちらも望みません。貴女は確かに、私を守るものです。しかし、同時に秘宝の守り手——つまり、瑞穂の国の平和

の守り手であるということも、お忘れにならないでください。それに、貴女は身体の具合も悪化してきているのですから、無理はなさらないでください。貴女の身体の具合が心配だったので、一応事情を書いた手紙を蓬様に届けてはおります。多分、数日後には蓬様が訪問なさるでしょう。

貴女はしっかりと身体を大切にしてください。そこで留守番をしてください。白胡もいますし貴女はしっかりしているのですから、きつと私がいなくても大丈夫です。

必ず私は帰ってきます。本物の砂漠の薔薇を持って。それまで、このお屋敷のことはお任せいたします。』

墨の達筆で書かれた手紙の最後には、簡単な桜の花が描かれていた。桜。それは、ユーフェミアの華押。

手紙に目を落としている、漆黒の髪と瞳の少女は、ユーフェミアが和紙に書いた手紙に一滴の涙をこぼした。そして、震える唇でそつと囁くように一言呟く。

「ちゃんと、生きて帰って来るんだよ……。ゆうちゃん」

* * *

「——シャノン。私を旅に連れて行ってほしいのです」

「……え？ それは、その——」

「はい。私も、砂漠の薔薇を探すつもりです」

「……でも、知ってるのか？ 砂漠の薔薇は、一度願いをかなえたら以後百年は効力を発揮しないってこと——」

「はい。それは承知しております。私の場合は？ 形だけ？ 砂漠の薔薇があれば良いのです。貴女がその彼女さんのために願いをかなえた後、何の効力もない砂漠の薔薇があれば十分です。この国の住民は砂漠の薔薇によって平和が守られていると考えていますが、実際

は自分たちの力で平和を保っている。だから、砂漠の薔薇の力など必要です。けれど、砂漠の薔薇がないと住民の方々がパニックを起こしかねないので、ここに砂漠の薔薇を置いておきたいのです」「そういうことか。なら、ボクは別にいい。けど——旅は、生易しいものじゃねーぞ?」

「はい。けれど私は、この国の平和のためにもそれを手に入れなければならぬのです。だから、お願いいたします」

「……彩乃には、言ったのか? そのこと」

「——いいえ。けれど、置手紙をするつもりです」

「そんなんじゃ、彩乃が心配するに決まってるだろ。それに、ユーフェミアがここを開けていいのかよ?」

「……それは、多分だめなことだとは思いますが。けれど、私は、行きたいのです。何があっても。誰が何と言おうと。この国の秘宝を守ることに、私の任務なのですから」

「……………。本当に、いいのか?」

「勿論です。足手まといになるかもしれませんが、よろしくお願いします——」

*

*

*

桜の都を後にして——

春の宵を、二人の少女が歩みだす。

一人は透き通るような碧眼と、さらりと揺れる茶髪を持ち、一人は夜闇に浮かぶ月のように美しい蜜色の髪と瞳を持つ。

一人は大切な人を幸せにするために、一人は己の同胞のために——
神秘の宝石? 砂漠の薔薇? を求める。

s c e n e 53 (後書き)

だああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！

a c t 1 終了いたしました！

今回は、タイピングにかなりの労力と時間がかかってしまいました
o r z

普段は一話千三百字、二千三百字の間くらいで納めるのですが、今回は三千字を超えました。最終話ですからね……。

さてさて！ シャノン、お疲れ！ 君にはゴールデンウィークなんかよりももっと長い休暇を与えよう！ 感謝したまえ（シャノン：ふざけんなッ！！）

次回からは、いよいよ a c t 2 に突入いたします。次は、青年が主人公です。

では。予定としては明日から a c t 2 の投稿開始です。
ですが『予定は未定』です ↑このセリフが何か分かった人は、
同盟結びましょう（笑） もちろん「時雨沢恵一さん大好き同盟」
です（笑々）

scene 1

——雨粒が、頬に落ちてきた。

不幸になる予感がした——

*

*

*

砂塵が、空高く舞った。

満月の光は、明るく黄土色の土地を照らす。微かに起きる風は水気のない砂を易々と舞い上げる。広大な夜の砂漠は神秘的で美しく、昼間とは比べ物にならないほど寒い。

「今日中には到着すると思っていたんだが……。某の^{それがし}見当違いだったか」

蜜色の満月が浮かぶ夜。地平線が望めるほど途方もなく広い砂漠の中で、柔らかな響きを含んだ涼やかな男の声が響いた。砂漠にブーツの底で点々とへこみをつけながら、男は全く疲れを見せずに歩く。

年齢は二十歳^{はたち}ほど。この夜闇に負けぬほど黒い長髪と、同色の瞳を持つ。長い髪は、うなじで一つに束ねられている。青年は地面につきそうなほど長い、ローブのような薄い生地フード付きコートをはおり、その下に黒いシャツを着、ゆったりとしたズボンとショートブーツをはいていた。砂よけのためか、鼻から口あたりは布で覆われている。背には大きめのリュックが背負われていた。目鼻立ちは整っているが、美形というよりは中性的な顔立ちだ。

「今日はこのあたりにするか。あとは明日だ」

青年は前方に見えてきた大きな岩を確認し、小さく頷いた。岩にはそれほど厚みがなく、砂漠の砂よりもやや濃い黄土色をしている。

「よし」

青年は岩の陰に腰を落ち着け、肩から背負っていたリュックを下ろすと岩に沿わずようにして自分の隣に置いた。リュックを置かれた砂は、僅かにへこむ。

青年は下ろしたばかりのリュックの中に両手を入れると、おもむろに何かを探りだした。

しばらくリュックの中をかき回していた青年は「あ。あった」と声を上げ、リュックの中から両手を引き抜いた。リュックの中から青年は両手を抜き、右手の方には紙に包まれた長細い固形の携帯食料が握られていた。

「さて。火を焚かなくてはな」

青年は無造作に携帯食料の包みを破ると、そのままさして美味しくもなさそうに食べ始めた。味わわず、ただ咀嚼し嚥下する。まさにそれは、空腹の胃にモノを詰め込んでいるという表現がぴったりの食べ方であった。

青年は右手に持っていた携帯食料を左手に持ち替えると、それを食べながら右手の人差し指で砂に何やら奇怪なものを描き始めた。コンパスで描いたかのように綺麗な二重の円の中に、正位置の三角と逆位置のの三角をそれぞれ一つずつ重ねて描き、六角形の星を描き上げる。さらに二つの円の間にできた空間に、ルーン文字のようなものを細かく描き込んだ。最後に、六角形の星の中心に小さなトカゲのようなものを描く。青年はトカゲを頭、身体、尻尾の順に描いていく。

その指が尻尾を描き終え、尻尾を描く動作に続けて少しずつ砂から指を離しつつ今度は宙に何かを描き始めた。宙に何かを描く指は、蛇のようにうねっている。そのためその動きは何かを描いているというより、宙で人差し指を奇妙にくねらせているように見える。

一体何をしているのだ、と訝しく思うような青年の行動。しかし宙を動く指の残像を残すようにして、赤い筋が浮かびあがってきたのだ。赤い筋は指の動きを追うようにしてうねり、それは下の方か

らだんだんと太さを増していく。筋は揺らめきながらみるみるうちに大きさを増し、やがてそれは砂の上で煌々と燃える炎へと変わった。

炎が上がると同時に、青年は見計らったかのように携帯食料を食べ終えた。

「ひとまず、暖は確保できたな」

青年は伸ばしていた右手を自分の方に引き寄せると軽く両手をはらい、顔を綻ばせた。その表情は赤々と燃える炎に照らされて、照れているかのように赤く染まっていた。火は燃えるような木も紙も草も一切ない、さらさらの砂の上で燃え続ける。

青年が使ったのは、魔術である。簡単な魔方陣を使った、四精霊の魔術。青年の術を見る限り、どうやらこの青年は四精霊使いであるようだった。

scene 2

「さてと。とりあえず地図を確認してみるか」

青年はリュックについている小さなポケットを探り、何重にも折りたたまれ、あちこちが破れてボロボロになっている地図と重量感のある立派な方位磁針を中から取り出した。青年は地図を丁寧に砂の上へ広げ、その上へ重石をするかのように方位磁針を置いた。

青年の広げた地図の大半は砂色が占めており、地図を縁取るようにして申し訳程度に緑が塗られていた。

「えっと……。昨日この街を出て、一昨日がこのあたりだったかな……」

青年は広大な砂色の地図に人差し指を置き、方位磁針と照らし合わせながら自分が通ってきたルートをたどる。

「……。今日は……。やはり、おかしいな」

青年の人差し指がさすのは？イーストシティ東の街？と書かれた、砂漠の中の大きな街。街のそばには、小さく？オアシス？という文字が表記されていた。

青年は地図から顔を上げ双眸を細めると、遠くに見える小さな緑の塊を望んだ。

「オアシスも見える。この位置にイーストシティがあるはずなのだが……。何故だ？」

青年は指で、イーストシティと書かれた部分を一定のリズムを刻みながら叩く。左手の指に顎を寄せ、しばらく考え込む。

沈黙だけが流れる、荒涼とした砂漠。風は凪ぎ、煌々と燃える火に照らされた青年を蜜色の満月だけが見下ろす。

「間違えたのは、距離か方向か……。しかし、このオアシス以外のオアシスはもつと先に行かなければならないはずだ……」

青年は眉をひそめ、難しそうに顔を歪める。が、

「——ま。いいか。こうして考えていても時間の無駄だ。朝になれ

ば方向を確認してみよう。よし」

青年はあっさりと地図から方位磁針を上げ、リュックのポケットに収めた。それから地図を丁寧に折りたたみ、方位磁針を入れたものと同じポケットにしまう。

続いて青年は違うポケットの中から、手の平よりやや大きめの本を取り出した。本は古ぼけており、装丁は緑一色だけでそれ以外にはない。

青年は黙って本のページをめくる。紙の擦れる小さな音が、滑らかに流れるように響く。

「確か、このあたりまで読んでいたかな……」

青年は薄い岩に背をあずけると、魔方陣が描かれ、ルーン文字のような奇怪な文字が羅列している本を読み耽^{ふけ}だした。

本に視線を落とす青年の姿を、優しい光で月と炎が照らす。穏やかな風は小さな粒子を舞わせ、炎を神秘的に揺らしていた。

朝日がゆつくりと登り、砂丘をその光で縁取る。

朝の爽やかな光は砂に覆われた地を照らす。

「っ……。うう」

岩に背をあずけたまま毛布にくるまって眠っていた青年は、掠れたような呻き声を上げながら身を起こした。その闇色の目をうつすらと開け、太陽を確認する。瞳は黄金に輝く太陽をその瞳に移し、間もなく瞳を閉ざした。そのまま青年は深呼吸をするように、大きく息を吸い込んだ。

「うぐううっ……」

そのまま身体を伸ばし、腕も頭上へと伸ばす。その体勢のまま大きく息を吐くと、腹筋に力を込めて上半身を起こした。

「よつと」

青年はそのまま立ち上がり、毛布を砂の上へと落とした。

「今日も一日、頑張つて歩かねばな」

青年は双眸を細めて、眩しく輝く太陽を一瞥する。そして落ちた

毛布をかがんで拾い上げ、砂を軽く払い落す。

「さて。ここは一体どこなん——」

青年は慣れた手つきで毛布をたたみながら周りを見まわし、そして、

バサッ

毛布をその手から、落とした。青年の手は瞬時に固まり、目は大きく見開かれる。

「まさか……。嘘だろ……。何だ。某は、それがし間違つてなどいなかった……」

青年は小さく口を動かし、眼前に広がる景色を食い入るように見つめた。

青年が見つめるのは、奇怪な岩が広がる景色。よく見ると、岩はどれも青年が凭もたれていたもののように薄い。

——青年は、着いていたのだ。イーストシティに。しかし、その街は完全に形を変えていた。

「……某が、もう少し速く着いていたならば……。くっ。悔やんでももう無駄か……」

青年の前に今広がっているのは、殺風景な瓦礫の街であった。「……………」

青年は漆黒の瞳を閉ざすと、緩慢とも思える動きで口を開いた。

「まだ、旅は長引きそうだ。某は、なかなか帰れぬようだ。——すまない。彩乃、ユーフェミア……」

十年も昔の記憶が、滅びた砂漠の街を見つめる青年の頭の中で鮮やかに思い浮かぶ。

s c e n e 3

*

*

*

瑞穂の国にある、とある小さな田舎。

「よいしょつ。よいしょつ。よいしょつ」

そこに小さなかけ声とともに畑を耕す、十歳になるかならないかというほど幼い少年がいた。

少年は男にしては長い黒髪と、同色の瞳を持っていた。作業着なのか、土で汚れた綿の服を纏っている。少年——青年の面影がある少年は、やはり中性的な顔立ちをしていた。

自分の身長ほどもあるうかというほどの鍬くわを目線の高さまで振り上げ、鈍い音を立てながら土に突き立てる。少年は息も荒く汗を流しながら、その動作を繰り返していた。そんな少年を、まわりつくような生温かい春風が包み込む。

鈍い音と小さなかけ声が、一定の間隔を保ったまま響く。華やぐ瑞穂の国の中心都市の喧騒とはかけ離れた、ただっ広い田畑が広がる静かな田舎。舗装もされていない土の道や畦道あぜみちがのび、畑のそばには点々と藁ぶき屋根の家が見える。

「よつと。よつこいしょつ」

少年は鍬を一振りするたびに汗を散らしながら、畑の土を掘り起こしていく。茶色の土を鍬で抉ると、黒っぽい土が独特の湿った臭いを放ちながら姿を現す。

少年が同じ動作を繰り返す、その時だった。

「よいつ——？」

少年の足に、何かか軽くぶつかってきた。眉をひそめ、動きを止めた少年は土に鍬を突き立てたまま、足元を見る。と、

「あ」

そこには、小さな手毬てまりが落ちていた。

赤や橙や金の糸できらびやかに作られた、小さな手毬。それが少し畑の土で汚れて、少年の足元に転がっていた。

「何故、こんなものが……？」

少年は黒い髪を軽く揺らしながら首を傾げる。そのまま鍬から手を離し、腰をかがめると鍬から離れた手で手毬を拾い上げた。自分の右手の中にすっぽりと収まっている手毬を、怪訝そうに黒い双眸で見つめる。少年は手毬を左手に持ち替えると、右手でそれについている畑の土を軽く払い落した。

「何故なのだろう？」

少年はどうして手毬がこんなところに？　と言わんばかりにしげしげとそれを見つめる。その時、

「兄者！　兄者！　それは一体何だい？」

あどけなく可愛らしい、少女の高い声が朗々と畑に響いた。

「彩乃！」

少年はその声に驚いて、視線を手毬から上げる。先ほどの声の主は、雑草が茂る畦道を小さく腕を振りながら走っていた。

「走ってはいけないと何度も言っているだろ。ちゃんと家で寝ていろ」

自分のそばまで駆けて来た小さな黒髪黒眼の少女を、少年は呆れたようにも叱責するようにも見える顔つきで見つめる。

はあはあと息を切らして、少女は膝に手をつける。

「兄者を見ていたら、何かを拾い上げていたみたいだったからさ。気になったんだよ」

息を切らせながらも、ニツと少女——彩乃は兄に笑いかける。

「だからと言って、走ってはだめだ。体調が悪くなったらどうする」「大丈夫さ。最近は立ち眩みの回数も減ってきてるし、気分もいいんだよ」

彩乃はニコニコとしながら嬉しそうに話す。少年はそんな妹を複雑な表情で見つめながら、鼻で小さなため息をついた。

「ところで兄者。それは何だい？　ずいぶん立派なものじゃないか」
彩乃は兄の持つ手毬を指でさし、小さく首をかしげた。

「ああ。実は某にもよく分からないのだ。何故か、足元に転がってきた」

少年は畑の数メートル先に伸びる道に視線を移し、そこを見渡し始めた。右から左へとじつと目を動かし、

「あ」

その動きを、道のやや左寄りの場所でぴたりと止めた。

「うん？　兄者。どうしたんだい」

彩乃は兄の視線を追って、自分もそちらを見つめる。

「多分だが、これはあの子のものではないか？」

二人が見つめる先。そこには、一本の桜の木が立っていた。薄紅の花弁をつけた桜は、丁度満開であった。風は凪いでいるため、花弁は流れないが一枚二枚と僅かに花弁をその足元へ落としていた。

そんな美しい桜が咲き誇る木の後ろ側。そこに、一人の少女が立っていた。

「その人！」

少年は木に隠れるようにして立っている少女に、声をかけた。びくつ少女の身体は震え、少年の声に反応する。

「……………」

少女は控えめに木の陰からその姿を覗かせた。そして、

「っ……………」

少年はその姿に息をのみ、彩乃は見惚れるようにしてため息のような吐息をついた。

木から姿を覗かせた少女は、とても美しかった。夜空にかかる月を思わせるような蜜色の髪と瞳、おずおずと木の後ろから少年と彩乃を窺うその顔は、照れているのか朱に染まっていた。

s c e n e 4

ふわりと風になびく艶やかな金髪。上目遣いに少年を見つめる金の瞳。繊細さを感じさせる、線の細いすらりとした体つき。橙色の地に白い蝶の舞う模様が入った着物を紅色の帯で結び、金髪の頭の上で真つ赤なりボンを結ぶ。

優雅とも言える桜の下に立つ少女は、神々しいまでに美しかった。

少年はその美しさにか、呆氣にとられたようにポカンと口を開き、彩乃は目を瞠ってその姿を見つめていた。やがて少年が彩乃より早く我に返り、手毬を持った左手を真つすぐに天へと高く掲げた。

「その者。これは、おぬしのものか？」

少年の問いに、桜の木の下少女は何度も大きく頷いた。

「やはりか」

少年はほつとしたように安堵の表情を見せ、畑に刺したまま鍬を放置し少女の元へと歩みだす。

「あ、兄者」

彩乃ははつとし、歩みだした兄の背を追う。

「彩乃は来ることはないのだぞ」

少年は一旦足を止め、肩越しに自分に付いてくる妹を振り返った。
「いいんだよ。あの子のことが、気になるんだ」

少年は自分の隣に並んだ妹を、心配げな眼差しで見つめる。

「無理はするなよ。気分が少しでも悪くなれば、某に言うのだぞ」

「分かってるよ。全く。兄者は心配のしすぎだよ」

彩乃は兄に片手の平を突き付けて、その発言を阻止した。そのまま一人、歩き出す。

「……………」

少年は腑に落ちないような顔をしながらも、彩乃について再度少女へ歩みを進める。

「よっ、と」

道路より僅かに畑の方が低いため、道路と畑の境界線は段差になっている。その段差を、身体の小さな彩乃はゆつくりと登る。すぐに彩乃へ追いついた少年は、その彩乃より大きい身体で難なく段差を登った。

段差を登りきった二人は、桜の木の裏に隠れるようにして佇む少女の元へゆつくりと近づいた。

「どうぞ。畑の土で汚れてしまったが、許してくれ」

「いつ、いえ。あ、ありがとうございます」

少女は、とても澄んで綺麗なソプラノ声でおずおずと礼を言った。その美しい声音は、朝の訪れとともに鳴く小鳥のさえずりの様である。

少女は今にも茶色い幹と一体化してしまいそうなほど、ぴったりと木に寄り添う。手毬を少年から受け取るために恐る恐るのばされたその手は細く、発光しているかのように白い。畑仕事で豆だらけになり、土で黒く汚れた少年の手とは全く違う。

少年は少女の白く滑らかな手の平に、しばらく見とれていた。が、はっと我に返り、その綺麗な手の平の上にそっと手毬を乗せた。

「……その。おぬしは、異国人なのか」

少年は手毬を乗せながら、少女に問う。少女は遠慮がちに小さく頷き、そして、躊躇うように首を振った。

「？」

少年は少女のおかしな返答に首をかしげる。その少年の後ろに隠れるようにして立っていた彩乃が、少年の胴体の向こうからちらりと顔を出し、

「もしかして？はーふ??」

小さく首を傾けた。桜の幹にべったりと張り付くように寄り添っている少女は、首がもげてしまうのではと心配になるほど力強く縦にこくこくと頷いた。その頬は恥ずかしさのためか、ずっと朱を帯びたままだったがさらにその頬に赤みが増した。

「私、月倉ユーフェミアと申します。……母が、アシュリー人なの

です」

「ほう。ハーフなのか」

「はーふ。美人だねえ」

少年はユーフェミアと名乗った少女を、珍しそうに見つめる。彩乃の方は、ニコニコと笑顔全開でユーフェミアを見る。ユーフェミアは二人に見つめられ、恥ずかしそうに俯く。

「申し遅れた。某は。入江海棠と申す。こちらは、妹の彩乃だ」

少年、海棠は名を名乗り、妹を紹介した。ユーフェミアは丁寧に二人に頭を下げる。

「ところで話は変わるけど。？ゆうちゃん？は今、何歳なんだい」

彩乃は興味深げにユーフェミアを見つめる。唐突に？ゆうちゃんと呼ばれたユーフェミアは、ぎょっとした顔になる。

「こらッ。彩乃、失礼だろ」

「だって……。？ゆうふえみあ？って長くて言い難いんだよ。ゆうちゃんでもいいじゃないか。兄者」

「だからといってだな……」

海棠は呆れたように、彩乃を見つめる。彩乃はすねた様に口を尖らせ、海棠をじつと見上げる。

「……構いませんよ、その呼び方で。私はただ、とても驚いて、いるのです」

ユーフェミアの返答に「しっ、しかし……」り海棠が口ごもり、

「ほらね」と言わんばかりの顔をして彩乃は胸を張って海棠を見上げた。

「それに、ゆうちゃんって可愛らしくて響きがいいので、私は好きですよ。ちなみに、私は九歳です」

ユーフェミアはそこで初めて、二人に笑いかけた。それは恥ずかしそうな、はにかんだ微笑みではあったが、とても可愛い笑みだった。

「あたしや今は七つだけど、次の夏が来たら八つになるんだ。兄者は十だよ」

彩乃はそう言って笑い、そして、その笑みを一瞬で苦しみに歪めた。細い身体が、腰からくの字に曲げられる。明るい笑みを浮かべていた顔には苦しみだけが影を落とし、その口からは激しく苦しげな咳だけがこぼれる。

「彩乃ッ！」

海棠は彩乃の咳に敏感に反応し、その小さな背中を手でそつと擦る。

「ほら。家の中にいると言っただろう。身体が弱いんだから、無理に身体を動かそうとするな」

「うん。ゴホッゴホッ。じゃあ、またね。ゆうちゃん」

彩乃は血の気の引いた顔に笑みを浮かべ、先ほどまで海棠が耕していた畑のそばにある家へと続く畦道を歩み始めた。

scene 5

「あの……。彩乃さんは、どこかお身体の具合がよろしくないのですか」

ユーフェミアは畦道を歩む彩乃の背を目で追いながら、恐る恐る問うた。その問いに、海棠は「ああ」と短く肯定する。

「実は……。おぬしが知っておるかどうかは分からぬが、彩乃は？ 呪われし瞳の子？なのだ」

「なっ……。呪われし、瞳の子……。それでは、あの……」

「ああ。未だに、その病気の詳しい原因も治療法も見つかっていない。だから……。どうしようもない、病気だ。一年と数か月前、彩乃は突然発病してしまった」

「そう、だったのですか……。申し訳ありません。余計なことをお聞きしてしまつて……」

ユーフェミアは大変反省しているという風に顔を歪め、小さく俯く。少女の憂い顔を見、慌てて海棠は首を振る。

「いいんだ。おぬしがそのように落ち込まずとも。彩乃の病気は、某が必ず治すのだと決めたのだ」

「……海棠さんは、お医者様を目指してらっしゃるのですか？」

「え。あ、いや。そうではない」

少し戸惑ったような、海棠の曖昧な返答。ユーフェミアはきょとんと小首を傾げ、口を開く。

「では、どうなさるおつもりなのですか。病を治すのは、お医者様の役目では？」

「あ、ああ。そうだが、某の場合は――」

ぎこちなく紡がれる海棠の言葉に、

「海棠。仕事サボって、なあに可愛い娘こ口説いてるんだ」

男性の声が重なった。柔らかく心地よいその声質は、包容力がありとても魅力的であった。

「あつ」

そんな声に反応して、海棠は素早く右を向いた。そんな海棠につられるようにして、ユーフェミアも海棠と同じ方向を見る。二人の視線の先。そこにいたのは、

「全く。最近の子は、ませてるな」

黒眼黒髪の、男性だった。一つにまとめられた長髪と、薄い銀縁フレームの眼鏡が特徴的な童顔の男性だ。顔つきは、海棠と似通っている。

「とつ、父様！」

驚いたように海棠は声を僅かに荒げ、それから慌てたようにユーフェミアと父親を交互に見つめる。

「その、これは、口説いていたのではないぞ！ 某は、この娘の手毬を拾っただけであり……。その、そんなやましいことなぞ、けしてしているわけでは……」

「ほおーう」

ニタニタ顔で父親は、海棠に近づく。ユーフェミアは突然登場したこの男性、海棠の父に人見知りをしているのか、木の陰の再度身を隠してしまった。

木の後ろにこそそと隠れてしまったユーフェミアを、海棠の父は目敏く見つける。

「ふむ。これは、これは……。アシュリー人とのハーフの子だな」

海棠の父は、ユーフェミアの目線の高さに合わせるため腰と膝を折った。そして驚いたように目を見開き、恥ずかしそうに木と一体化しようとしているユーフェミアに微笑みかけた。

「今日は。私はこいつの父親、入江蓬。君は？」

「つつ、月倉、ユーフェマツ……ユーフェミア、です……」

ユーフェミアは舌を噛んでしまい、耳まで真っ赤にして俯いた。そんなユーフェミアの姿を、蓬は微笑んだまま見つめる。

「ユーフェミアちゃんだね。名前がカタカナってことは、母親がアシュリー人か」

蓬は腰と膝を真つすぐにのばし、ニタリと海棠を上から見下げる。人をからかうような笑みを浮かべた父親を、海棠はムスツとした顔で見上げる。

「それじゃ。若者はどうぞごゆっくり。年寄りは退散するよ」

「そうかよ。あつ。それから、今日は何故こんなに早い時間に帰ったんだ？」

「ああ。仕事が早く終わってな。それよりも。彩乃は？」

「体調が良いと言って先ほどまでここにいたんだが、急に咳が出たから家へ戻るように言った。多分、今は布団で大人しくしているだろう」

「そうか。ありがとうな。お兄さん。それから、ユーフェミアちゃんとは仲良くするんだぞ。いいな」

幼い笑みを浮かべた蓬は、彩乃も通った畦道を歩み家へと向かう。

「……お若いんですね。海棠さんと彩乃さんのお父上様」

「え。そうか？……某には子供^{ガキ}っぽすぎると思うのだが」

「いいえ。素敵なお父上様です。……ところで、先ほどから気になっていたのですが……」

「うん？」

ユーフェミアの問いに、海棠は首をかしげる。

「先ほど、何故蓬様は私がアシュリー人とのハーフだとお分かりになられたのでしょうか。そのようなこと、私は一言も言っておりませんのに……」

海棠に続くようにして、ユーフェミアが首をかしげる。海棠は「ああ」と声を上げ、傾けていた首を起こした。

「それはな、父様が魔術師だからだ。人には、？気？の流れというものがあっただな、魔術師にはその氣の流れが分かるんだ。その流れは、年齢や性別、人種など様々なことで一人ひとり違うし、体調や感情などで簡単に変わる。だから、父様はユーフェミアの中にアシュリー人の流れを感じたんだよ」

海棠は説明を終え、すぐにあつと小さく声を上げた。

「何ですか？」

「……その。名前、呼び捨てで、構わなかったか？」

scene 6

相手を氣遣うような海棠の表情と声音に、ユーフェミアは不思議そうに目を瞬かせる。^{しばた}質問の内容が全く分かっていないようなきよとんとしたユーフェミアの表情に、逆に海棠が不思議そうな顔をした。

「その、先ほど某はおぬしのことを呼び捨てて呼んでしまったのだが……？」

「え？ ああ。そうなのですか。それで、何か悪いことでもあるのですか？」

「いや。おぬしは今日初めて会ったばかりの者に呼び捨てにされて気にはならぬのかと某は聞きたいんだ」

再度ユーフェミアは瞬きを繰り返し、曖昧な口だけの笑みを浮かべきよとんとする。そんなユーフェミアの反応に、海棠は戸惑う。

「あ、の……。ユーフェミア、さん？」

「あ、その……。私、名前なんて一緒に屋敷に住んでいる人たちにしか呼ばれたことがないもので……。呼び捨て以外で呼ばれたことが、ないのです。先ほど彩乃さんに初めてあだ名で呼ばれましたし、蓬様に初めてちゃんをつけて呼ばれました」

今度は、海棠がきよとんとする番だった。

「初めてって……。おぬしのことをちゃん付けで呼ぶ友人などは、いないのか？」

「あ……」

海棠の問いに、ユーフェミアは顔を歪める。

一陣の風が二人の間を通り過ぎ、ユーフェミアの持つ蜜色の髪を長く揺らす。風に儚く揺れる細い糸の様な髪が、ユーフェミアの顔を覆う。

ユーフェミアのよくはない反応を見て、海棠は慌てる。

「すつ、すまぬ。気に障るようなことを聞いてしまったか……？」

「——いいえ。構いません。お気になさらないでください。それから、さん付けはしないでください。呼び捨てで構いませんから」
そう言ったユーフェミアは、光を受けて輝く朝露のように静かで美しい笑みを浮かべていた。しかしそれは、どこか作つたように見える笑みだった。

快晴。

澄みきつた川は、青く晴れ渡つた空の色を反映して煌めく。風は穏やかに凪いで、とても心地よい。

ユーフェミアとの出会いから数日経つた、そんな美しい日のこと。
「彩乃。ついて来なくても良かったんだぞ？」

「いいんだよ。兄者について行きたかつたんだ。良いじゃないか」
「しかしだな……」

「大丈夫だよ。これくらい平気さ」

にぎやかに店が建ち並ぶ中心都市。そこに白い和服と紺の袴をはいた海棠と、淡い桃色に色づいた白い紬を着、漆黒の長髪を丁寧にポニーテールに結っている彩乃の姿があった。

二人が歩くのは、華やぐ中心都市の大通り。彩乃は海棠と手を繋いでいるものの、海棠の少し後ろを歩いている。その姿はまるで、恋人同士のようなだった。

「あら坊ちゃん。べっぴんさん連れてデートかい？ 妬けるねえ」

案の定、そんな二人の姿を見た布屋の主人らしき一人のおばさんが、店から顔を出してケラケラと笑いながら海棠に言った。

布屋の前を通つた海棠は、顔を真っ赤に染め、

「なっ……」

僅かに言葉に詰まつた。

「ちっ、違います。某は、この者の兄です」

「あら？ そうかい」

ケラケラ笑いを止めぬまま、おばさんは二人を見る。

海棠はおばさんの言葉にむすつと顔をしかめ、彩乃はきょとんと

おばさんを見上げる。

海棠は顔をしかめたまま、ぎゅっと彩乃の手を握る右手を握り締めた。

「っ！」

その力の強さに、ビクツと彩乃は首をすくめる。そのまま視線を下げ、まじまじと海棠に握られている自分の左手を見つめる。

「行くぞ」

そんな彩乃をお構いなしに、海棠は強引とも思えるほど強く彩乃の手を引っ張り、ずんずんと速足で進み始める。

「えっ！」

彩乃は急なことに、小さく声を上げた。ぐっと腕が引っ張られ、足取りが自然と速くなる。

海棠の速足は、彩乃にとっては走るスピードとほぼ同じである。

「あっ、兄者。ちよっと、速いよッ」

「……………」

むっつりと黙ったまま、人ごみの中を海棠はひたすら歩む。彩乃は必死になって前を行く兄に付いていく。が、身体が弱く体力もない彩乃はあっという間に息を切らしてしまった。

「兄者……。ちよっと、止まってくれッ」

喘ぐような彩乃の言葉に、ぴたりと海棠は足を止める。

やっと止まってくれたとばかりに、彩乃はせわしなく浅い呼吸を繰り返しながら僅かに微笑む。

「兄者。一体、どうしたんだい。急に急ぎ足になって。びっくりするじゃないか」

彩乃の純粋な疑問に返ってきた答えは、

「……………」

振り払われた、二人の手だった。

「あ……………にじゃ？」

唐突な兄の行動に、彩乃の笑みはかき消された。視線を下げ、戸惑いを浮かべた顔で僅かに兄の手の感触と温度が残っている左手を

見つめる。

「……どうしたんだい。兄者？」

彩乃の問いに、海棠は振り返る。その顔は、不快に歪められていた。

「彩乃。いつまで手など繋ごうとするんだ。もうおぬしも某が手を繋がずとも構わぬ歳だろう。大体、おぬしが手を繋いできたからッ……！」

海棠は濁流のように言葉を彩乃に浴びせ、ふいにその流れを止めた。

「……………」

自分の正面に立つ彩乃の顔が、その時ふいに悲しみに歪んだのだった。

scene 7

今にも涙がこぼれそうな彩乃の瞳。その瞳から逃れるようにして海棠はふいと視線をそらした。彩乃もそんな海棠に話しかけたりはせず、ただ黙って俯く。

正面に向き直った海棠は前を向いたまま、

「……迷子になるなよ」

それだけ言々と歩み始めた。先ほどよりもそのスピードが遅いのは、彩乃への罪悪感があるからだろう。

自分の足音に重なるもう一つの小さな足音を聞きながら、海棠は後ろから彩乃がちゃんといってきていることを悟る。それと同時にその耳は、ぐすぐすという鼻をすすする音も聞き取っていた。

「……彩乃」

しばらく歩んだ後、海棠は正面を向いたまま妹の名を呼んだ。その呼びかけに後ろから返事はなかったが、それは重々承知の上で海棠は名を呼んでいた。

「すまない。先ほどは悪かった。あのようにムキになって……。某もあれごときで怒るなど、どうかしていた。どうか、許してくれ……」

ぎゅっと、海棠は両手でこぶしを握る。

彩乃と手を解いてから、ずっと考えて考えて考え続けていた謝罪の言葉。海棠は道中、ずっとそのことばかりを考えていた。普段優しく思いやりのある兄の姿しか見ていない分、あのよう突き放したものの言いをされては、彩乃のショックも大きいだろう。

「……………」

歩みを止めぬまま、海棠は黙って彩乃の返答を待つ。

絶対に許さない、と言われようがそれは仕方のないことだ。しかし、海棠の心中では許してほしいという気持ちの方が断然勝ってい

る。

「……………」

重苦しい沈黙。

「……彩、乃？」

さすがにここまで黙しているのはおかしいと思ったのか、海棠は歩みを止めると怪訝そうに彩乃のいる自分の後ろを振り返った。そして、

「っ！　まずい！」

そこに彩乃の姿がないことに、やっと気がついた。

「くそっ！　考え事に気を取られすぎていたッ」

海棠の顔に、みるみる後悔の色がにじむ。彩乃がいなくなったことに気がつかなかった自分の不甲斐なさに、腹を立てているのだろう。海棠は強く奥歯を噛み締めると、勢いよく地を蹴った。

「……彩乃。無事でいてくれよ」

海棠はここまで歩いてきた道を、疾風のような速さで走り始めた。

病が悪化し、道端に倒れているかもしれない。

悪人にさらわれているかもしれない。

右も左も分からない中心都市で、迷子になっておろおろしているかもしれない。

最悪の事態ばかりが、海棠の頭に浮かぶ。頭によぎる彩乃はすべて、手を解いた時のように憂いを含んだ泣き出しそうな表情をしているのだった。

海棠の頭の中で、涙に潤む漆黒の瞳が自分を見つめる。

「——ああっ！　某は何故あのようなことを言ってしまったのだ！
！」

海棠は苦虫を噛み潰したかのように顔を歪め後悔するが、その念は海棠をイラつかせるばかりだった。

——おつかいと彩乃の世話を頼むよ。お兄ちゃん——
家を出る間際に見た、童顔の父の笑顔。

彩乃の世話をするなど当たり前のこと。言われずとも分かっている。

強気にそう思っていた自分に、海棠は腹が立ち同時に恥ずかしくなった。

「……馬鹿みたいだ。全く」

陰鬱に俯き、ボソリと呟く。眉間に深いしわが刻まれる。

海棠が、今自分はどこまで引き返したのか確認しようと顔を上げ、道際に並ぶ店にどのようなものがあるのかを確かめようとしたときだった。

「ゆうちゃんをいじめるんじゃないよ！」

勇ましく響いた、甲高い少女の声。

「！」

その声に誰よりも早く海棠は反応する。

声の主を一瞬で悟った海棠は、ぴたりと足を止めた。海棠の前進方向の数十メートル先から上がった声。それは、

「彩乃！」

聞き間違えようのない、海棠が毎日聞いている妹の声。

「待っている……！」

海棠は声の上がつた方向へ向けて、さらにスピードを上げて走り出す。

人込みは、海棠の前進を阻む。海棠はたくさんの人にぶつかり、たくさんの人に押されながらゆっくりと、しかし確実に前進を続け、「つとと……！」

唐突に、開けた場所へ出た。

しかし海棠は、道のだ真ん中だというのに何故ここだけ開けているのか、ということを考えるよりも先に、

「彩乃！」

眼が捉えた妹の方へと、身体が動き出していた。

開けた場所の中心。そこに彩乃はいた。凜とした顔つきで三人の少年と対峙し、尻もちをついている一人の少女を大きく両手を広げ

て背中^{かば}に庇いながら。

海棠は彩乃以外の人物が自分の顔見知りなのかそうでないのかを確認するより早く、その瞳は彩乃と対峙している三人の少年たちの立ち位置、近辺に火の元がないこと、側を流れる浅瀬の川を確認した。そして何かを確信したかのように小さく頷くと立ち止まり、勢いよく前へ両手を突き出した。

唐突に不可思議な行動をとった海棠の姿を見つめる道行く人々は、怪訝そうに顔をしかめる。海棠の漆黒の闇を写し取ったかのように黒い瞳はうつすらとしか開かれておらず、唇は何かを詠唱するかのよう^{よう}に小さく、しかし速く動いていた。その口からは、何の音も漏れては来ない。

彩乃に対峙する少年の一人が怪しげな行動をとっている海棠に気付き、そちらを振り向こうと顔を動かした刹那、

「――我が僕^{しもへ}、風の精霊^{シルフ}の風麗^{ふうれい}よ！ここに形を成し、我が力となれ！」

うつすらと開かれていた海棠の瞳が決意を秘めたかのような光を灯して力強く開かれ、朗々とした声^{こゑ}がその場に響き渡った。

s c e n e 8

海棠は鋭い声とともに、目の前の相手を下から袈裟に切るようにして、風を切り裂きながら右手を左下から右上へと勢いよく振り上げた。

刹那――

「ぎゃあっ！」「何なんだよー！」「うわっ！ なッ――！」

彩乃と対峙していた三人の少年が、突然吹いた疾風によって軽々と宙へ飛ばされた。

ぎゃあぎゃあ和三様のわめき声を上げながら、三人は呆気なく川へと落ちる。派手に水しぶきが上がり、太陽の光によって小さな虹が出来上がった。

驚きと戸惑いと怒りと悔しさを練り混ぜたような複雑な感情を抱きながら、掘が深い川に落ちた三人の少年たちを気にもせず、海棠は彩乃へと走り寄る。

「彩乃！ 大丈夫であつたか？ っ……あ。ユーフェミア？」

「あ、海棠さん……。貴方が、助けてくださったのですか？」

「あ、ああ。正しくは、？間接的に？だがな……」

苦笑を浮かべる海棠。その曖昧な言葉と表情を見て、ユーフェミアはきょとんと首をかしげる。そして、

「ああー！ 非道いじゃない、海棠ッ！ この浮気者！」

小鳥の泣き声のように清々しく、吹きわたる風のように涼しげなソプラノ声が、強く吹き付ける一陣の風のように甲高く流れてきた。
「なッ。ひっ、人聞きの悪いことを言うなッ！ 大体、某はおぬしとの恋愛関係は一切持っていないぞ。あくまで契約主と僕だ。分かっているのか、風麗」

僅かに紅潮した顔で、海棠は後ろを素早く振り返った。

「っああん。もう。海棠ってば冷たいわね。でもそこがまた萌えるのよねえ」

「何だそれは」

海棠がいかげしげに見つめる先。そこには、宙に浮いている一人の少女がいた。見た感じの年齢は十代の後半ほど。ノースリーブの質素な緑と黄緑のワンピースを身にまとい、風にさらりとなびく腰まである白銀の長髪と、透き通るようなエメラルドグリーンの瞳と、エルフのような尖った耳をその少女は持っていた。

ふわふわと宙に浮く少女は化粧気はないが、まるで付けまつ毛をしているかのようにまつ毛は長く、綺麗な二重をしており、頬には紅を塗っているかのように朱が差し、蠢惑こわくな笑みを浮かべる肉感的な唇は紅を引いているかのように真っ赤である。つまりは、大変色っぽい美人なのであった。その美しさはかなり人間離れして見えるが、実際に宙に浮いているのだから人間ではないだろうと予想はつく。「あ……の。海棠さん。あのお方は、一体誰ですか？」

少女のあまりの美しさとその身体が宙に浮いているという異様に、しばらく呆気にとられていたユーフェミアは、言葉を絞り出すようにしてやっとそれだけ言った。

「あやつは、魔術的な契約を交わし某の僕しもへとなっている風の精霊シルフだ。まあ。某専属のシルフだと思ってくれ。ちなみに名は風麗ふうれいという」

「専属の、ですか……」

ユーフェミアはシルフの少女——風麗にゆっくりと視線を向ける。「ちよつとお！ 何、仲良さげ気に話しちゃってんのよッ。その女！ 邪魔よッ」

風麗の言葉とともに、海棠の横で小さな風が巻き起こった。風は海棠の髪をフワリと柔らかく揺らす。漆黒の髪が舞いあがり、もとの位置に戻るより早く、

「うわっ！ 速ッ」

海棠のすぐ左隣りに風麗の姿があった。

風なのだから、もちろん速いに決まっているのだが。

「海棠」。久しぶりなんだから、もっと再会を感動してもいいじゃ

ないの」

風麗は勢いよく海棠の腕に抱きつく。

「——って。わっ！」

その反動で、海棠はバランスを崩しそのまま風麗もろとも地面に倒れた。

「きゃっ。あたしっしたら海棠を押し倒しちゃったっ」

「阿呆ッ！ だから！ 某は——」

声を荒げ、風麗の腕から逃れようと必死にもがいた海棠だったが

唐突に、海棠の口が閉ざされる。

海棠が、何かマズいことでもあったかのようにふっと言葉を止めた理由。それは、

「——待て。待てって言うてるんだよッ！」

ふいに立ち上がり、大声で怒鳴りつけた彩乃に驚いたからであった。

海棠も彩乃も父親の血を濃く受け継いでいるのか、二人とも普段からよほどのことがない限りは声を荒げたりしない。そのため海棠は、大声を上げる彩乃の姿など見たことがなかったのだ。

「彩、乃……？」

驚きで目を瞠る海棠と、その横で彩乃にきょとんとした視線を送る風麗と、再び呆気にとられたユーフェミアを残し、彩乃は川へと落ちた少年三人組の元へと向かって行った。

「貴様ら。ゆうちゃんをいじめておいて、まさか何もしないで簡単に帰ろうってのかい？ そんなこと、あたしが許さないよ！」

川の淵に立ち、腕組みをして彩乃はぎろりと三人を見下ろす。少年たちよりも彩乃の方が歳は下だというのに、今の彩乃には年上の相手さえも怯ませてしまうような凄みがあった。

風麗と海棠によるちよつとした争いの間に、こそこそと川から這い上がって逃げようと企んでいた三人は、彩乃の剣幕に肩をすくめる。

「まずはゆうちゃんとちゃんと向き合って謝りな！ ゆうちゃんが許すというまで、何回だって頭を下げな！ 本当は土下座して謝ってもらいたいくらいだけどねッ」

風を切り裂きながら、彩乃は三人へと右手の指を突き出した。三人はまるで鋭く切れ味のよい刃物を突き付けられたかのように、同時にびくりと身体を震わせる。

「……………」

「速く謝りなって言うてんだろッ!!」

彩乃の叫ぶような声に、三人は居心地悪そうに互いの顔を見合わせる。

しばらく無言で見合わせていた後、三人の中で最も年長の中心的存在と見える少年が、「分かったから、川から上がらせてくれ」とぶっきらぼうに声を上げた。

「分かった。逃げるようなマネはするんじゃないよ」

彩乃は念を押し、その場から一步退いた。しかし、その厳しい視線はしっかりと三人の方向へ向けられたままだ。

少年たちは慌てながら上へあがるために堀を登る。先に上がった二人が、三人の中で最も小柄な少年が上がるのを手助けした後、三人はびしょ濡れの身体の正面をユーフェミアの方へ向け、

「……………すまなかった。許してくれ」「……………ごめん」「すいませんでした」

彩乃に恐れをなしたのか、三人が腰を折って真剣に素直な声音で謝った。

s c e n e 9

それまでぼうっと彩乃を見ていたユーフェミアは、僅かに反応が遅れる。はっと我に返り、ユーフェミアの美しい蜜色の髪が肩からこぼれた。

「あ……。はい。私は、構いませんよ。申し訳ないと思っているのでしたら」

ユーフェミアはちいさく首を縦にふる。

「あ、ああ。思ってるよ」

顔を上げた少年のもごもごとした口調に、彩乃の鋭い眼差しがそちらへ飛ぶ。彩乃に鋭く睨みつけられた少年たちのリーダーは、慌てて大きく手を振る。

「ほっ、本当だ！ 嘘なんてついてないって！」

リーダーの懸命に訴えるその瞳からは、真剣な色がかがえる。

彩乃はそれを見て取ると、ゆっくりと頷いた。

「よい。じゃ、もう行っていいよ」

彩乃の声を合図に、三人は転げるようにして走り去ってしまった。
「なあに？ アレ。男なのにみつともないわねえ。海棠の爪の垢を煎じて飲ませてあげたいわよ。まっ、謝った誠意だけは認めてあげるけど」

未だに海棠から離れようとしなない風麗は、クスクスと小さく笑いながら少年たちの背を見送った。

「……………」

ユーフェミアは、目の前で起きた出来事に呆然とするしかなかった。どうやら心と頭の整理ができないようで、ぼんやりとした表情のままその場に座り込んでいた。その体勢は終始、変わることがなかった。

「——ああ。何だ」

海棠はその真っ黒な瞳に希望に似た柔らかな光をたたえ、勇まし

く立っている彩乃の背を見つめる。

「もう、某が守らずとも立派に生きていけるではないか。彩乃……」
海棠はふっとため息をつくように、小さく呟いた。その呟きは、
悲愴と感嘆と安堵が入り混じったような複雑な響きをしていた。

「うん？ どうしたのよ、海棠」

風麗の笑顔の問いに、

「ああ。そろそろおぬしを四精霊の居るべき場所に帰さねばなら
いな、と思つてな」

海棠はさも可笑しそうに笑いを堪えながら答える。

「それはイヤアアアアア——！」

風麗の絶叫が五月蠅く響く。しかし、海棠の心には一点の曇りも
なく清々しさに満ち溢れていた。けれどやはり、その瞳にはほ
んのわずかな憂いが浮かんでいた。

彩乃の話によると――

気がつけば兄の姿を見失い、迷子になってしまっていた彩乃は、泣
き泣き家へ引き返そうか、それとも前へ進もうか迷っていたのだが、
その決断を下すよりはやくふとそばでユーフェミアの声がしたよう
な気がして、そちらへ行つてみるとユーフェミアを取り囲んでい
ている三人の少年がいたので、それに憤怒した彩乃は少年らに突
き飛ばされて尻もちをついたユーフェミアのそばへと駆けより、反
泣きになっていたその金髪少女をかばいつつ少年たちと対峙してい
たところ、海棠が現れ少年たちをシルフの力で川へと落としてくれ
た、というわけだったらしい。

「文章が長いわね」

未だに帰っていない風麗の突っ込みはさておき。

「ときに、兄者。どうしてここへ――？」

彩乃の問い。その言葉に、海棠はうつと詰まる。

今まで目の前の事に対応することで手いっぱいだったため、彩乃
に謝るために彼女を探していたことをすっかり忘れていたのだ。

謝罪の言葉はすでに考えているし、それを考える時間ならいくらでもあった。だというのに——いざ言いだそうとすると、何故か頭の中が真っ白になってしまふのだった。

頭の中で言葉を懸命に紡ごうとするのだが、紡いだ矢先それらの言葉は簡単に解けてしまい、頭の中から消えていつてしまふ。つまり海棠には、今の心情や感情を上手く言い表せないものであった。

「その……。彩乃に、謝りたいんだ」

海棠の口から出てきたのは、そんなひどく簡単な言葉だった。が、それだけでことは十分足りる。のだが、

「何を？」

彩乃はきょとんを小首を傾げ、本気で兄が何を謝ろうとしているのか分からない様であった。

そう切り返されるとは思ってもみなかったためか、一瞬海棠は不意を突かれたような気分にも陥る。その戸惑いは、思い切り顔に現れていた。

海棠はやや俯きながら、言葉を少しずつ丁寧に紡ぐ。

「何を……。その、彩乃に、あんなことを言ってしまったって、その……怒鳴りつけたりなどしてしまつて……本当に、すまない。某は——最低な兄だ」

「そんなことないよ！」

彩乃の力強い声に、だんだんと顔を俯かせていた海棠は顔をはつと上げた。

さすがにこの場の空気を読むことはできるらしく、風麗も自分の腕を海棠から解いた。そして軽く宙に飛びあがると、そのまま風と一体化するようにして煙のように風麗自ら姿を消した。

身体が軽くなった海棠は地面に足をしっかりとつけて立ち上がる。未だにユーフェミアは地面から腰を上げようとはしない。その視線は、シルフが突如として消えた空中と、向き合う兄妹（きょうだい）との間をせわしなく行き来していた。

「兄者。あたしは兄者に怒られて、良かったと思ってるんだよ。怒

るっていうのは相手のためを思っですることだつて、あたしは思うからさ。相手にこうなつてほしくない、こうしてほしくないっていう、相手を思いやる気持ちから来てる怒りだつてあると思うんだ。確かに、この世には理不尽な怒りも存在するけどさ。——それでも兄者の怒りはきつとあたしを思つてのことだと思ふからね。それにユーフェミアを守つて、あの三人を怒つてみて……初めて兄者の気持ち少し分かつたような気がするんだ。だから、謝つたりしないでくれ。むしろこつちが感謝を述べたいくらいなんだからさ」

はにかんだような、可愛い彩乃の笑み。それを見て、海棠はほつと安堵の息をついた。それは、彩乃の良い変貌を称える関心の吐息でもあるようだった。

「ちよいと。そこの坊ちゃんとお嬢ちゃん」

海棠と彩乃が声をかけられたのは、買い物済ませユーフェミアとも別れた後、二人で帰ろうと行きと同じルートを歩いていた時だった。

その声音に、海棠は驚いて声のした後ろを振り返る。案の定、海棠たちのすぐ後ろにある布屋の前に、行きに海棠をからかったおばさんが満面の笑みを浮かべて二人を見ていた。

「あ。さきほどの……」

「ああ。そうだよ」

海棠の言葉に、布屋の入口に設置された木のベンチに座っているおばさんは大きく頷く。そして一瞬でその顔に浮かべている笑みを崩し、不安そうに申し訳なさそうに眉を曲げた。

「さっきはすまなかったね。少しからかいすぎたよ」

「えっ、あ、いえ。こちらこそ、あのようなことでむきになってしまつなど、恥ずかしいばかりです」

海棠は小さく頭を下げ、ちらりと隣に立つ彩乃に視線を向けた。今はもう、海棠と彩乃の手はつながれていない。が、それについて駄々をこねるようなことをもう彩乃はしなかった。

「ところで坊ちゃん。あんた、あたしの知ってる人に顔がよく似てるんだけど……もしかしてはずれに住んでる蓬さんのところの息子さんかい？」

「あつ、はい。そうですが。……あの、父が何か？」

海棠はあの楽天的で緊張感ゼロの童顔を思い浮かべながら、おずおずと尋ねた。海棠の父は魔術師で、その力を使って人助けの仕事をしている。しかしそのためか、蓬が助けた人物を恨む者などから恨みを買ったこともしばしばあるのだ。

海棠はまた父が恨みを買ったのではないかと心配げに顔を歪めた

が、その表情とは裏腹におばさんはケタケタと軽快に笑っていた。

「やっぱりそうかい。あんた、父親にそっくりな顔してるねえ。なあに。心配するような悪い話じゃないよ。あたしは——正確にはあたしとあたしの娘は、昔蓬さんに助けてもらったことがあるんだよ」

「そ、そうだったのですか……」

海棠はほつと胸をなでおろし、強張っていた表情を和らげた。

「ああ。ところでちょうど今、うちに団子がたんとあるんだけど、それを片付けて行ってくれないかい？」

おばさんの言葉に、すっかり会話の輪から取り残されていた彩乃が嬉々として海棠の右袖を引っ張り、前方へ僅かに身を乗り出した。

「お団子ッ！？ あたし、お団子大好きなんだ！」

「そうかい。そりゃあ、良かった」

僅かに顔を上気させながら、彩乃は嬉しそうに太陽のように明るい笑みを浮かべる。そんな彩乃をおばさんは笑顔で見つめる。

「そつ、そんな、申し訳ないです……」

海棠は左手を振りながら、慌てて答える。

「あたしは団子を片付けて（……）ほしいんだよ。団子をあげるわけじゃないんだから、いいだろう？」

「え？ あ……」

「それに、あんたの話も聞かせてもらいたいからね。どうだい？ 妹さんも喜んでいるみたいだよ。」

海棠は自分の右袖を握っている彩乃のキラキラと輝く瞳を見て、断ることを諦めたらしく小さなため息をついた。

「へえ！ 蓬さんに魔術を習ってるのかい。じゃああんた——海棠君は、蓬さんの後を継ぐのかい？」

「まあ……できればそうしたいと思いますが、他にもしたいと思っ
思っていることがありますので、まだはつきりとは分かりません。
しかも某は、魔術師といっても四精霊使い^{しせいれいつか}なので」

「四精霊っていうと、アレかい？ エ（……）ルフとかサマラ（……）」

ンダーとかかい？」

おばさんのうる覚えの言葉に、海棠は頭上に大きな疑問符を作り上げた。

「シルフとサラムンダー！」

疑問符を頭の上に乗せている海棠に変わり、口いっぱいにみたりし団子を頬張っている彩乃が大声で答えた。

「ああ！ そうそう。それだよ。あたしより彩乃ちゃんの方が良く知ってるじゃないか」

おばさんの苦笑とともに、「ああ。シルフとサラムンダーですか」と海棠は両手を軽く打つ。

「それからねえ。シルフは風の精霊で、サラムンダー火の精霊で、あとウンディーネが水の精霊で、あと……あと……」

「ノーム。地の精霊、な」

「そうそれ！ あの髭もじやのちっちゃいおじいさん！」

海棠の助け舟を一部借りて、彩乃は四精霊の名をすべて上げた。

「こら。彩乃。ちっちゃいって言ったら、土影ひしかげに怒られるぞ」

海棠は困ったような、呆れたような笑みを浮かべて彩乃を見る。

「ひしかげ？」

おばさんは聞きなれないその単語に、一瞬眉を寄せる。

「ああ。土影というのは、某の召喚するノームの名です。地面の？ 土？に景色の？景？とさんづくりの？影？で？土影？です」

「へえ。そうなのかい。変わった名前を付けたねえ」

おばさんは感心したような、好奇心をそそられたような顔をして小さく頷きながら海棠を見る。

「でね、シルフの風麗はすごく美人のお姉さんでね、兄者とラブラブなんだ」

「なっ！ 彩乃！ それは違うぞッ」

ニタニタと彩乃は意地悪く笑い、慌てて海棠はそれに反論する。布屋のおばさんは、そんな兄妹を微笑みながら見つめていた。

「あと、サラムンダーの奏焰そうえんは格好良い男の子で、うるこがあつて

蛇みたいだ」

「蛇じゃなくて、トカゲだぞ」

「うん。あと、ウンディーネの水蘭すいらんは優しくて綺麗で、大人な感じのお姉さんなんだよ」

嬉しそうちに、時々間違えながら四精霊について顔を紅潮させながら語る彩乃。その姿を海棠は柔らかい笑みを浮かべて、穏やかに見つけていた。

s c e n e 1 1

「へえ。布屋の美寿々みすずさんに会ったのか」

「へえ。あの人、美寿々みすずっていうんだ」

美寿々というらしいおばさんの家で海棠と彩乃は、串でかなり大きな山ができてしまうほど大量の団子を食べたのだが、それは食べても食べてもきりがなかった。

終いには二人とも、当分団子を見たくも食べたくもなくなってしまうのだが、そんな二人をいじめるかの如く、布屋のおばさんは何本もの団子をお土産にと二人に持たせたのだった。

帰路の間中ずっと海棠が、「団子屋でもないのに、何故あのように大量の団子があるんだ？」などと文句を垂れていたほどだった。そして、そろそろ子供は寝なければならぬという時間帯に差し掛かった今、お土産であるその団子を食いながら海棠は今日あった出来事を蓬に話していた。蓬は何の躊躇いもなく団子に手を伸ばし美味しそうにそれを頬張るが、海棠の手はさすがにあまり団子の方へは伸びない。

彩乃はというと、少し無理をしてしまったのか帰り道の途中で咳が止まらなくなり、家に帰ってしばらくすると発熱を起こしたため今は静かに自室で眠っている。自室、といってもこの家は一階しかないため、蓬と海棠が団子を食べながら話し込んでいる囲炉裏いろりがある居間と、襖一枚で仕切られただけの小さな部屋だ。

「何だ。名前も聞かずに別れたのか」

蓬は美寿々の名を知らなかった海棠に、呆れたような声で言う。

「うん……。まあ……。で、その美寿々さんって人、父様に助けてもらったことがあるって言ってたけど？」

「ああ。美寿々さんを助けてから、かれこれ十年くらい経つかない？」

「じゅっ……。！ そんなに前なのかよ」

「そうだぞ。まだお前も彩乃も生まれていない時だ。ちなみに柚姫ゆずき

に逃げられてもいなかった時だな」

「ふうん……」

曖昧な返事。海棠は父に感情を悟られないよう誤魔化そうと、無理やり気持ちを抑え込んで団子に口をつけた。

柚姫。それは、顔も声も海棠は全く覚えていない母の名だった。

彩乃にいたっては、ちゃんと見たことさえもないだろう。柚姫は彩乃を産んですぐ、蓬に愛想を尽かして一人で出て行ってしまったのだ。父曰く、彩乃は柚姫似らしい。海棠は母親の顔も声も覚えていないが、母が漆黒の長い髪を撫でるようにして耳にかけるという癖は臚ではあるが覚えている。

「……で。美寿々さんは自分と娘を助けてもらったって言ってたけど？」

海棠は母の話の話題をかき消すようにして、先ほどと似たようなことを父に質問した。

はつきり言うと、海棠は母親の話があまり好きではなかった。自分たちを捨てた母を恨んでいるわけではない。けれど蓬は柚姫の話をするときに一瞬、本当にほんの一瞬だけ、その瞳に陰りを浮かべるのだ。海棠はいつものんびりのほほんとしている父に呆れてはいるが、嫌いでもなければ尊敬をしていないわけでもない。だから海棠は父の顔に浮かぶ影を見たくないから、あまり柚姫の話が好きではないのだった。

海棠の問いに、蓬は団子を食べる手を止め、遠くを見つめるように目を細めた。

「あれは、大雨の後のことだったな。十年ほど前、このあたり一帯に何日も雨が降り続いたことがあった。その雨は川に氾濫をもたらし、人々を水害で困らせた。その時はどこも雨のせいで家が水につかったり、畑がだめになったりして大変だったよ。ま、そのおかげで私の仕事は増えて儲かったんだけどね。本当に皮肉な話だ。——幸い家は川から遠いし、畑の方も結界を張ってなんとか持ちこたえてくれたから大きな被害は無くて済んだ。だから家に柚姫を一人残

して、私は近くの村や中心都市の方へ人助けの仕事をしに行っていた。そんな時、被害が大きかった中心都市の川沿いの道を歩いていたら、川の上流から一人の女の子が流されてきたんだ。もちろん、荒れ狂った流れの中をね。女の子を見つけた私が、浮遊の魔術でその女の子を川から上げようと手を上げた時。女の子を追いかけるようにして一人の女性が川沿いの道をこちらへ走ってきて、丁度私と軽くぶつかったんだ。女性は人助けで有名な私を見ると、すがりつくようにして娘を助けてくださいって懇願してきた。私は無論助けるつもりだったし、人の命にかかる仕事は無償で受ける主義だからすぐに少女を荒れ狂う川から助け出したさ。私にとってそれは、手を動かすだけの簡単なことだから、さしてすごいわけでもないんだが、女性はこちらが困ってしまいうくらい頭を下げて礼を言ってくれてね。その時改めて、ああこの仕事をしていて良かった、と思えたよ」

屈託のない子供の様な父の笑みに、海棠はつられて笑みをこぼすが、

「あれ？ でも、美寿々さんは、自分と娘を助けてもらったって……？」

「ああ。それはきつと、娘さんを助けたことで、自分も救われたってことなんじゃないか。もしもあのまま私と会わず、娘さんが助からなかったら美寿々さんは正気じゃ居られなかったんだろう」

「そうか……」

海棠は複雑な表情で呟き、それからすぐ笑顔になる。

「父様は、以外に立派なんだな」

「以外、は余計だろ」

蓬の屈託のない笑みは海棠の言葉によって、苦笑へと早変わりする。

「父様はガキすぎるんだ。一体今年で幾つだよ」

「あー。そろそろ三十歳になるかなあ。もう三十路だ三十路みそじ。っていうか、親の歳くらい覚えておけよ、海棠」

「はいはい」

海棠は呆れたように父へひらひらと手を振る。そんな海棠の姿を苦笑を浮かべたまま見つめていた蓬は、ふいに「ああ」と声を上げた。

「そういえば、私が助けた美寿々さんの娘さんはその時十歳だったから、今はさぞ私好みの麗しい女性になっているんだろっなあ……」
蓬のほんわりとした声に、じっと海棠は冷たい視線を父へと向ける。

「そういうこと考えるか？ 普通」

「無論、考えるさ」

「……この助平親父め^{すけへおやじ}」

「安心しろ。私にロリコンの趣味は無い」

「さいですか」

未だに冷たい視線を送る海棠。そんな瞳を見て、蓬は慌てて話題を変えようと海棠に話を振る。

「そついえば、他に都市で変わったことはなかったか？ 誰かに会ったとか」

蓬の発言に海棠は、まるで父に心を読まれたといわんばかりに大きく目を見開き、顔を真っ赤に染めた。

s c e n e 12

「なっ、何でそのような話に、なるんだよッ」

「うん？ 何でって、別にいいじゃないか。あ。さては誰かに会ったな？」

ニヤニヤと意地の悪い蓬の笑み。

「……こういうところがガキなんだよな」と独りごちる海棠は、ため息とともに言葉を発する。

「ユーフェミアに、会った」

「ほう！ あの美人の！ あ……。だから、私はロリコンではないぞ」

冷たく湿ったような海棠の視線に、蓬はいそがしく首を降る。

「分かってるよ。で……ユーフェミアに会ったんだが、その……ユーフェミアが、三人の少年にいじめられていた」

海棠のその一言に、ニヤついていた蓬の顔がふっと一瞬で能面のような無表情になった。俯きながら話している海棠は、父の表情の変化に気がつかない。

「彩乃が助けてくれたからよかったんだが。まあ、その、ユーフェミアくらい内気な女の子ならいじめられることもあるかもしれないが……某が気になったのは、たくさんの人がそこにいたのに誰一人としてユーフェミアを助けようとしなかったことなんだ。ユーフェミアがいじめられている周辺には意図的に避けてるとしか思えないくらい人がよりつかなかったし、皆見て見ぬふりをするように素通りして行くんだ」

海棠は眉を寄せて訴える。何故人々はユーフェミアを助けなかったのだらう？ 何故、誰一人としてあの少年三人を止めなかったのだらう？

海棠の頭の中にはそんな疑問ばかりがつのる。が、頭や心の中へ自問自答したところで、少しも答えは返ってこない。海棠はそれで

も何度もユーフェミアがいじめられていた場面を思い出し、何故誰も助けなかったのかを思索し続け、結局答えは「分からない」で行き詰まり、そして、

「それは、ユーフェミアちゃんがハーフだからだよ」

その疑問の答えは、唐突に蓬の口からこぼれ落ちてきた。

海棠は驚いたように、びくりと身を震わせる。それは蓬の答えに驚いたのではなかった。――蓬の、その声音の冷たさに驚いたのだ。
「――え？」

海棠は答えの意味が分からないことと、驚きに素早く顔を上げて蓬を見た。そして、息をのんだ。

蓬は、その柔和な顔に普段は見せないような厳しい表情を浮かべていたのだ。

絶句している海棠をよそに、蓬は表情を崩さぬまま言葉を続ける。

「海棠。差別って知ってるか？」

「差別って……あの、区別をつけて扱う、あれ？」

「そうだ。今の世の中、差別というのはそう珍しいものじゃない。

ユーフェミアちゃんはアシュリー人とのハーフで、そっちの血が濃く出ているから人種差別を受けてしまうんだ。まあ、二十七年前に大陸共通語になってからは国々の文化も統一性を帯びてきているから、瑞穂の国とアシュリー王国とユバーフィールド連合王国の間での人種差別は僅かながら減ってきたんだけどな」

蓬の言葉に、海棠は苦汁を飲んだかのようにぎゅっと顔をしかめた。

「だって、同じ人間だろ。それに、ユーフェミアは何も悪くないじゃないか」

「そうだ。海棠の言っていることは正論だ。だけどな、人生正論ばかりでできているわけじゃないんだよ」

「でもっ……」

海棠は顔を俯けこぶしを握り、何かを訴えようとしたのか肩に力が入る。がすぐに力を抜き、僅かに上げていた肩を力なく、呆気な

く落としてしまった。

「海棠。ユーフェミアちゃんと仲良くなったからには、絶対に最後まで仲良くしろ。分かっているな？」

海棠は蓬の言葉に、俯きながらもこくこくと大きく力強く頷いた。

「今日から刀稽古かたなげいこを受けたい！」

そんな突拍子もないことを言い出したのは、身体の弱い彩乃だった。

それは、早起きが苦手な蓬がまだ布団の中でいびきをかいて眠り、早起きに慣れている海棠と彩乃が二人で朝食を作っている朝のことだった。

その日は、蓬と海棠がユーフェミアについての話をした次の日である。

キヤベツを千切りにしている途中であつた海棠は、妹の突然の発言に危なく手に持っていた包丁で自分の手を千切りにするところであつた。が、慌てて包丁を手を切るより速く止め、事なきを得る。

「っと……。え、ま、またどうしてだ？」

戸惑いがちに海棠は彩乃を見る。彩乃は小さな鍋の中の味噌汁を味見しながら、目つきを鋭く尖らせる。ふわりふわりと柔らかく湯気を上げる味噌汁と、彩乃の鋭い眼光はとても不釣り合いに見えた。「無論、ゆうちゃんを守るためだ」

真剣な彩乃の答えに、海棠ははっと目を瞠みはる。包丁を握る手から力が僅かに抜け、銀光りするそれはまな板の上に重い音を立てながら落ちた。

海棠が見つめる中。彩乃は神妙な眼差しで味噌汁を混ぜていた。

「……もしかして、彩乃。昨日の話、聞いていたのか」

「ああ。聞いたよ。最初から最後まで、一語一句逃さずにね。だから、ゆうちゃんをしっかりと守れるだけの力があたしは欲しいんだよ」

彩乃は手が白くなるほど、お玉を持っている右手をぎゅっと握り

しめた。まるで硬いお玉の柄を、へし折らんとするかのような力の入れ具合だった。

海棠は何か追い詰められているような妹の表情を、呆氣にとられたような憂鬱に歪めるような悲嘆にくれたような、様々な感情が入り混じった複雑な表情で見つめる。

「……本当に、それでいいのか」

「ああ。あたしは、ゆうちゃんを守りたいんだよ。いつまでも、守られてばかりは嫌なんだ。それに——ゆうちゃんの悲しむ顔も、見たくない」

彩乃はその瞳に、強く輝く光を宿す。その言葉に、海棠は未だ複雑な表情を浮かべたまま、

「いいんじゃないか？ 彩乃が大丈夫なら」

そう言わなかった。

「えっ？」「わっ！」

突然上がった声に、二人は同時に飛び上がった。そうして身体を僅かに震わせた後、二人はそろえているとしか思えないような動きで同時に振り返る。そして、

「父様！」「父上！」

また同時に、同じ人物を指す言葉を大声を上げた。

「はっはっは！ 二人とも、ぴったりだな。以心伝心いしんでんしんってやつか？」

台所の入口にもたれて顔をのぞかせている蓬は、そんな二人を見て大きな笑い声をあげた。その笑いに、海棠と彩乃は互いに目を合わせて苦笑しあう。

「ところで彩乃。刀を習いたいのか？」

蓬の言葉にふっと彩乃は一瞬で表情を引き締め、蓬を真つすぐな眼差しで見つめる。

「ああ。あたしは本気だよ。……確かに身体は弱いし、体力もないけど……ゆうちゃんを、守りたいんだ」

何かを固く決意したときのゆるぎない瞳。燃え盛る炎を灯したかのようなその瞳に、蓬はふっと微笑んだ。

「何かを守るための強さ、というのは何ものにも負けないほど強いものだ。彩乃なら、大丈夫だろう」

蓬の答えに、彩乃はぱつと明るく顔に笑みを浮かべる。が、

「しかし父様。彩乃は身体が弱いのだぞ」

それに反論したのは、海棠だった。

海棠は厳しい眼差しで彩乃を見つめ、続いて蓬を見つめる。蓬は昨夜とは打って変わって、普段通りのゆるりとした笑みを浮かべて海棠の視線を受け止める。

「刀を習ったとして、彩乃が身体を壊しては――」

「兄者！ あたしは大丈夫だよ。あたしは、もう決めたんだ」

彩乃の決意は、誰にも壊すことのできないような巨大な岩のように恐ろしく固かった。そんな決意をあらわにしている瞳に見つめられ、海棠は僅かに狼狽する。

「私はいいと思うよ。だけど、誰でも気軽にできるほど刀稽古は楽じゃないと思うぞ」

「ああ。勿論分かってるよ。あたしにや魔術の才能がないからね。刀なんかの武器の扱いを習うしかないんだよ」

苦笑交じりに彩乃は言う。

「どんなに辛くても、続けられるという覚悟はあるか？」

「勿論だよ」

彩乃は心配げに見つめる海棠の視線を受けながらも、力強く頷いた。

その首肯により、彩乃が刀稽古を受けることは決まったのだった。

s c e n e 13

海棠と彩乃がユーフェミアに出会ってから、八年の歳月が流れた。彩乃は刀のセンスがあつたのか驚くほど上達し、海棠も父とともに人助けをできるようになるほど魔術の力をつけた。

やはりユーフェミアは差別を受けていたが、人助けで有名な腕の立つ魔術師である蓬の息子、娘と中が良いということで、さほどひどい扱いは受けていないようだった。

このまま穏やかな日々が過ぎてゆくのだと、誰もが思い、これから起きる三人の転機に気付くものなど、誰一人としていなかった。いや——時見である蓬には、分かつていたことなのかもしれないが。そんな運命の境目は、雨とともにやって来た。

黒く染まつた曇天の空の下。

「——あつ」

人助けの依頼を終え、蓬とともに家へ帰っていた海棠の頬に突然雨粒が降って来た。

「うん？ どうした」

蓬はふいに声を上げた海棠の顔をのぞき、海棠は「いや……」と曖昧に返答を返しながら、湿った頬を右手の平で拭った。

「雨が降ってくるみたいだ」

海棠は低く雲が垂れこめる空を見上げ、顔をしかめた。

「そうか。少し風も湿っぽくなってきたしな。急ごうか」

蓬は急いでいる風は全くない、のんびりとしたマイペースな声でそう言う。

「ああ。まあ、笠かさも持ってきてあるがな」

海棠はひもで首にかけている笠がちゃんとそこにあるか確認するように、肩越しに軽く振り返る。一方の蓬は全く気にする風もなく、海棠の言葉に頷く。

「そうだな。――ああ、そうだ。話は変わるが、海棠」
「何だ？」

海棠は暗い虚空を見つめていた視線を下げる。

「周囲の人の中で雨が最初に落ちてきた人は不幸になるって迷信、知ってるか？」

「何だよ？ それ」

「雨って、あまり嬉しいもんじゃないだろう」

「まあな。日照りが続くのも、嬉しいものではないが」

「だな。まあ、一般的に雨はあまり好かれない。だからその雨が一番に落ちてきた人は不幸になるって、それだけの話さ」

「ふうん」

海棠はやや顔をしかめながらも、さして興味もなさそうに生返事を返す。その瞳は再び曇天の空を映し出す。漆黒の瞳に灰色の空が映り、その瞳の下に再び雨が落ちてきた。雨の雫はゆつくりと頬を滑り、その後素早く駆け抜けるように頬の上を走る。それはまるで海棠が一粒の涙を流したかのようであった。

本降りになる前に、なんとか二人は家にたどり着くことができた。雨は僅かに強さを増していた。今はその雫が地や木の葉を打つ、冷たく湿った音が聞こえるほどになっている。

「あー、父様。彩乃はちゃんと笠を持って、下駄をはいて稽古場に行っただろうか？」

海棠は囲炉裏に火を焚きながら、玄関でわらじを脱いでいる蓬に問いかける。わらじときやはんを脱ぎかけていた蓬はその手を止め、玄関脇の笠をかけている壁を見つめ、それから土間に並べられている靴を見つめ、

「ああ。大丈夫だ。ちゃんと彩乃の笠が一つなくなっているし、わらじはあるが下駄はなくなってる」

海棠は安堵のため息をそっと吐いた。彩乃にとって雨は天敵である。雨の勢いが強ければ笠をかぶったところで少しはぬれるが、か

ぶらないよりはましだろう。

安心している海棠を見ながら、蓬はにやりと意地悪く笑う。

「ま。あいつはお前と違ってしっかりしているからな」

その言葉に、むっと海棠は顔をしかめる。

「某それがしがそれほど頼りないというのか」

「いいや。誰もそこまでは言ってないぞ」

蓬はわらじときゃはんを脱ぐと、海棠が火を焚いている囲炉裏へと近寄った。

その時だった。

強風が戸を揺らすような、激しく戸を叩く音が響く。戸の建てつけが悪いのか、入口の戸はかなり激しく揺れ、大きな音をたてた。

「何だ……？ 風か」

音の原因は、雨とともに強まってきた風のせいだろうと海棠は決めたが、

「誰か……！ 誰か、いませんか……！」

音とともに聞こえてきた、今にも風にかき消されそうな声によってその可能性はゼロになった。

「あ、はい！ 今開けます！」

海棠は先ほど入って来たばかりの戸へ駆け寄り、軽くわらじをはくと大きなきしむ音を立てながら木戸を開けた。そこにいたのは、

「あの……！ 入江さんのお宅で、間違いありませんよね？」

十代半ばほどに見える見知らぬ少年だった。笠もかぶっていないため、その短い黒髪はぺったりと頭に張り付き、毛先からは水が滴り落ちていた。

「そつだが……。何の用だ？」

訝しげに海棠はずぶぬれになりながら息を切らしている少年を見つめる。

「とにかく……！ 彩乃さんが、大変なんです！」

「彩乃がつ？ 彩乃が、どうしたんだ！」

海棠は突然出てきた妹の名に、目を見開き声を荒げた。その声の

大きさに驚いたのか、囲炉裏の前に座っていた蓬も玄関前へと出てきた。

「彩乃さんが……稽古中に突然、倒れてしまつて……。とにかく、発熱がすごいんです……！　それで、僕はお家の方を呼んでくるようにと……」

「分かつた。父様」

海棠は振り返り、土間には降りず土間より前に立っている蓬へと声をかけた。

「ああ。分かつた。私はここで待っている。誰もいないときに、仕事の依頼が突然来ても困るしな。それに、海棠なら一人でも大丈夫だよ」

海棠は頷くと、笠もかぶらずにわらじではなく下駄をはいて外へと出る。

「案内を頼む」

「はい！」

海棠と少年は頷きあい、さらに強さを増して降り出した雨の中を駆けだす。

雨は容赦なく二人を打ち、服に水を吸わせていく。ずぶぬれになつて重さを増す服に、体温と体力を奪われながらも二人は稽古場へと急ぐ。

「彩乃……」

妹の名を呟いた海棠は、嫌な予感に胸を激しく打つ心臓を抱えながら、眉間に深い縦皺たてしわを刻んだ。

入江家から走って十五分ほどの場所に、稽古場はあった。

そこはいかにも道場という風格のある、木造りの立派な建物だった。が、建物の鑑賞などをしてる余裕も暇も今の海棠にはない。

びしょ濡れになった海棠は、道場に入ったところで入口にいた人たちにタオルを渡され、同じくタオルを受け取っている、海棠を案内した少年に「こちらです」と案内される。海棠は導かれるまま、稽古をするための広い板張りの間をぬけ、扉によって仕切られた奥まった廊下へと歩を進める。窓のない薄暗いそこは、すみのほうでポツリポツリと頼りなげな蠟燭の炎が燃えていた。

海棠を案内していた少年は一つの扉の前で立ち止まり、そこを手で示した。

「彩乃さんがいるのはここです」

少年ができる限り音を立てないよう、静かに戸を開く。部屋の中は、闇を好み光を拒んでいるかのように一本の蠟燭しか光源は存在していなかった。

扉が開かれた部屋の中。そこには、数人の女性たちが一つの布団を取り囲むようにして座っており、部屋の隅にはその部屋では一人だけの男性が、気難しい顔をしてあぐらを組んで座っていた。

少女女性たちが囲んでいる布団の上。そこに、彩乃はいた。

「……おや。君は？」

海棠に皆の視線が集まる中、部屋の隅に座っていた男性が声をかけた。

見た感じ、四十代前半というところか。黒髪は短く刈りあげられており、筋肉隆々というわけではないが、しっかりと筋肉の付いたいかにも武道をしていそうな男性だった。

海棠はその場に音もなく正座すると、丁寧に両手をつけて深々と腰を折る。その背後からは、少年が静かに戸を閉める気配が感じら

れた。

「某は、彩乃の兄の海棠と申します。この度は、妹が大変ご迷惑をおかけしました」

海棠は頭を下げたまま、畏まって言う。

「まずは海棠殿、その頭を上げてください。それから、一つお聞きしてもよろしいかな？」

「はい」

海棠は頭をあげ、男をまっすぐに見る。

「彩乃殿は？呪われし瞳の子？と聞いたが、今までもこのようなことはあったのかね？」

「はい。突然倒れ、発熱することは度々ありました」

「では、対処法も分かるのだな？」

「承知しております」

海棠は頭を小さく下げると、再び音もなく立ち上がると彩乃の左側の枕元へと移動した。

彩乃を取り巻いていた人たちは海棠のために左右へと寄る。蝋燭のほのかな明かりのもと、海棠は少女女性たちが寄ってできた隙間に膝をつく。彩乃の顔は蝋燭によって僅かに朱に染め上げられていたが、実際発熱によってその顔は赤く火照っていた。額にはたくさん汗の玉ができているが、できた途端にすぐさま水にぬれたタオルを持った女性によって吹き取られる。火照った頬とは反対に、僅かに開けられた唇はすっかり血の気を失っている。唇の隙間からは、苦しげなうめき声が漏れる。

「彩乃……。もう少しの辛抱だからな」

海棠は熱にうなされている妹を励ますように囁くと、周りに座る女性たちに彩乃の周りから離れてもらうようにことわりを入れる。

女性たちが心配げに彩乃を見つめながらも、彩乃から離れたことを確認すると海棠は手を正面にかざし、ゆっくりと顔を伏せ影を落とす。漆黒の瞳はうつすらと閉ざされ、口は何を言っているのか分からないほど速く小さく動く。その声は、静寂と沈黙という言葉が

とてもふさわしいこの部屋にいる者にさえ、全く聞こえない。

やがて、

「我が僕、水の精霊の水蘭ウンディネすいらんよ。ここに形を成し、我が力となれ」

海棠は声に出して静かにそう言う。

明らかに、小さなころより詠唱を唱える時間も短くなっている。

海棠の言葉とともに彩乃の右側の枕元に小さな水の渦が起きた。

部屋にいる全員の視線を浴びながら、それはみるみる人ほどの大き
さになり、ついには人の形へと変化した。

「っ——」

部屋の中にいる人々は、水からできた人物——ウンディネを見た途端、一斉に息をのんだ。

ウンディネはこの世のものとは思えぬほど神々しく、誰もが目を眩みはらずにはいられない美貌を持っている。

暗闇に沈む部屋の中で眩しいほど煌めく水色の髪は光の粒子を纏っているかのようで、吸い込まれてしまうようなほど深い紺碧の瞳は皆の視線を集めてしまうような魅力に溢れていた。肌は透き通るように白く、しかしそれが不健康に見えることは決してないのだった。

レースのほどこされた質素なワンピースは、よりウンディネの美しさを際立たせる。

ウンディネ——水蘭は、自分の目の前に座る、主人の海棠を微笑みながら見つめる。

「水蘭。彩乃の体温を下げてください」

「仰せのとおりに」

澄んだ音を奏でる鈴が震えるかのような、涼やかで儚い響きを持つ水蘭の声音。海棠への返答とともに、水蘭はその細長く白い手の平を彩乃の額にそつと当てた。一体何を始めるのかと海棠以外のものが注目する中、水蘭の手の下の彩乃の額が青白く発光しだした。光は、部屋を隅から隅まで照らせるほど明るい。

青白い発光とともに、彩乃の口からもれる苦しい息も少しずつ

穏やかになっていく。水蘭はそのまましばらく彩乃の額から手を離さなかったが、彩乃のうめき声が和らぐとそっと額から手を離れた。同時に、青白い光も音もなく消え去る。

とその時、

「……う、ん。っ——あ、れ……」

固く閉ざされていた彩乃の瞼が、うつすらと持ち上げられた。その漆黒の瞳はまだ焦点が定まっていないのか、虚ろではあったが。

やがてその瞳に光が宿り、視線が枕元に座る海棠へと向けられる。

「あ、兄者……。一体、何故、ここに……？」

普段の声からは想像もつかないようなかすれた声で、彩乃は海棠に問う。海棠はそんな妹の顔を、ほっとしたような笑みを浮かべて見つめる。

「彩乃が稽古の途中で突然倒れたと聞いてな。某が慌てて駆け付けたんだ」

「ああ……。そうだった、のかい……」

彩乃は視線をふらりと彷徨わせ、今度は海棠の反対側に座る水蘭の方へ向けられた。

「あ。久しぶりだね、水蘭」

「お久しぶりでございます。彩乃様」

水蘭は誰がどう見ても美しいというであろう、優美で可憐な笑みを浮かべながら、軽く瞳を閉じ膝に両手を置いて小さく頭を下げた。

彩乃もその口元をうつすらほころばせる。

軽く頭を下げている水蘭が顔を上げると同時に彩乃は視線を横へ移動させ、視界に入った海棠の姿を静かに見つめた。

「兄者。ありがとう、ね。あたしは、いつも兄者に、助けられて、ばかりっ——」

言葉を最後まで言い終わらぬうちに、彩乃は苦しげに咳き込み始めた。

「彩乃ッ！ 大丈夫か!？」

「あつ、ああ……。だ、いじょうぶ、だよ」

彩乃は必死に咳を我慢しながら、やっとそれだけ言う。

「水蘭」

海棠は彩乃から向かいに座る水蘭へと視線を上げた。水蘭は背筋をまっすぐ伸ばしたまま、姿勢良く正座をして海棠を見返した。

「彩乃の喉をうるおしてくれ。少しは楽になるだろうから」

「承知いたしました」

水蘭は「失礼いたします」と瞼を伏せながら彩乃に告げ、瞼を閉じた彩乃の喉の上にそっと手を置いた。水蘭の白い手が彩乃の喉に重なるとともに、先ほどと同じく水蘭の手の下が青白く発光しはじめる。今回はすぐに水蘭も手を引き、同時に光もすぐにおさまった。

「——彩乃、大丈夫か」

海棠は彩乃の顔を覗き込むようにして見つめる。瞳を閉じたまま彩乃はゆっくりと深呼吸をし、やがて緩やかな動きで瞼を上げた。

「……ああ。ありがとう。おかげで、すごく喉が楽になったよ。本当に迷惑ばかりかけてすまないね。兄者」

「何を言っているんだ。これくらいのこと、迷惑でも何でもない。それに某は水蘭を呼び出しただけであって、ほとんどの事は水蘭が

したことからな」

海棠は彩乃に労わるような笑みを向けながら、「まだ体調も完全に治ってはいないのだから、ゆっくり休め」と言った。彩乃も自分を見つめる妹思いの兄に微笑みかけ、すつと瞼を下ろした。

やがて規則的な寝息が聞こえ始め、それと同時に海棠は大きく息をついた。そしてそれまでその顔に張り付けていた、何の不安も心配も見せない笑みを剥がし、その下から海棠の本当の気持ちを表した表情——絶望と悲嘆に暮れるような悲しげな顔——を露わにした。海棠が悲しげに顔を歪める中、部屋にいた者たちは一斉に感嘆と安堵が混ざったような吐息をはきだす。

その中から代表するようにして、部屋の隅に座る男性が小さく声を上げた。

「……すごいな。魔術とは本当に万能の力なのか」

男は感心するように海棠と水蘭を見つめる。——明らかにその視線はほぼ水蘭に向けられていたが。

男の問いを聞いた海棠は男へと向き直ると、ゆっくりと首を振った。

「そうではありません。簡単な治癒はできますが、魔術といえど彩乃の病を完全に治すことは不可能です」

海棠は視線を膝の上に落とすと僅かに首を振り、悲しげに口を小さく動かした。その口調には憂いや無念や絶望などといった、負の感情ばかりがにじんでいる。

そんな海棠の悲愴をくみ取ってか、部屋の隅に座る男も顔を伏せ声のトーンを落とす。

「やはり、魔術でも治せぬものはあるのか……」

男の言葉に海棠は俯けていた視線を上げると、

「いいえ」

小さく首を振りながら否定の短い言葉を口にした。その言葉に驚いて、男は先ほど伏せた顔をすぐに上げる。その視線は、深い悲しみに溺れているにしては明るくまっすぐな、まるで希望を見つめて

いるかのような光を宿した海棠の瞳に向く。

「それは、今の君には使えない魔術なのかな？」

「——はい。しかし、手に入れる（・・・）つもりです。それを手にすることはとても難しいかもしれませんが……いいえ。とても言葉では言い表せないほどつらく、厳しく難しいことでしょう。しかし、某は彩乃の病を絶対に何があっても治したいのです」

「……………。そうか」

男は布団の上ですやすやと安定した寝息を上げながら眠る彩乃を見て、優しく静かな微笑みを浮かべた。

「彩乃殿は、良い兄をお持ちのようだな」

「いえ。某は、兄として当然のことをしているだけにすぎませんから」

微笑みながら彩乃を見つめる海棠。その瞳には、悲壮の光が確かに煌めきを放っていた。

「……父様」

「うん？ 何だ、海棠。こんな夜半にそんな真面目な顔をして」

「某は、決めた。これ以上、彩乃に苦しい思いをさせるわけにはいかないんだ」

「……………というと、やっぱり？ あれ？ に頼るつもりか？」

「ああ。もう頼りの綱は？ あれ？ しかないんだ」

「しかし……何もお前が危険な目に会う必要はない。縁起でもない話だが、お前がそうすることで私はお前と彩乃の二人を失ってしまうかねない。それに——もし？ あれ？ が手に入らなければ、お前は彩乃の死に目に会うことはできなくなるんだぞ」

「縁起でもない話はなしだ。これは某の意思だ。もうあと四年で彩乃も二十歳になってしまう。もつと速く出発するべきだったのだろうが、魔術の完全な取得までに時間がかかりすぎてしまった。某は、もうこれ以上待つことはできない。——たとえ某が彩乃の死に目に立ち会えなかったとしても、可能性がある限り彩乃を救うために某

「は？あれ？を求める」

「海棠。お前はもつと自重じぢゆうしたほうがいい」

「そんなこと、分かっている。しかも——時間がないんだ。時間
は某や彩乃のために、止まってくれはしない。残酷なことにな」

「……………。本当に、行く気か？　？あれ？を見つけたのは、そう
容易いことじゃないぞ」

「それは百も承知している」

「——そうか。そんなに決意が固いなら、私は止めない」

「ああ。ありがとう、父様——」

快晴。太陽を東に置く雲ひとつない空は、凝視していると目が痛くなりそうなほど青い。

「……………」

海棠は重くも暗くない、寧ろ清々しさにあふれた沈黙を纏いながら、床にあぐらをかいて大きなリュックの前に座り、自室で荷造りをしていた。海棠は一つひとつその手にとって確認しながら、大きく開かれたリュックの口の中に荷物を丁寧に入れていく。

「…………彩乃。必ず某が病を治してやるからな」

海棠は漆黒の瞳に、決意と信念を秘めたようなゆるぎない光を帯びていた。その口調はいつものように涼やかで柔らかな響きを含んでいるが、数多の修羅を駆け抜けてきた者のような恐ろしいほどの強さがそこには滲んでいた。

海棠は男にしては細く白い手で、リュックに入れる最後の荷物――文庫本サイズの小さな古めかしい魔術書――をリュックの側面に付いた小さなポケットにゆっくりと収める。本がポケットに入りきり、海棠がポケットをボタンで閉じる。

「…………ついに、某はゆくのか……………」

海棠が物思いにふけるように視線をぼうと彷徨わせ始めた時、コンコンコンッ

家の玄関の戸を素早くも齒切れよく、鋭い音を立てながら叩く音がした。

「うん？ 朝から客か…………？」

海棠は僅かに腰を床から浮かせる。

「はい。今開けます」

海棠の自室とは木戸一枚で仕切られている居間から、蓬の呑気な声上がる。ゆっくりと立ち上がった海棠の耳に、ゴトゴトと鈍い音を立てながら木戸が開く音が届く。

首をかしげながらも、海棠は自室の戸をあける。海棠の部屋は居間を挟んだ玄関の正面にあるため、戸を開ければ瞬時に玄関を見ることが出来る。

部屋から顔だけ出した海棠は、

「っ——」

一瞬で言葉を失い、黒目がちな双眸を大きく見開いた。

海棠の視線の先にある、大きく戸が開かれた玄関の前。そこに——
美麗な少女が立っていた。

「……………」

海棠は自分の鼓動が速まっていることにも気付かずに、自然と開いた口も閉じぬままに呆けたような顔で金髪の美しい少女を見つめる。そんなアホ面丸出しの海棠を、玄関脇に立つ蓬はニヤニヤと意地悪く見つめる。

「？」

玄関前に立つ少女は、蜜色の髪を揺らしながら小さく首をかしげて、きょとんと海棠を見つめる。少女の真っ赤な紅を引いているふくらとした唇は、小さく微笑んでいる。

蜜色の髪は丁寧に結びあげられ、そこには涼しげな音を立てる綺麗なかんざしが飾られている。髪と同色の大きな瞳は澄んだ真っすぐな光を宿す。

少女の姿を固まったらましばらく見つめていた海棠は、突然何かに気付いたかのようにはっと息をのんだ。

「あ……。え、ま、まままさか、ユーフェミア、か……？」

「はい。そうですよ。そうですが……どうしたのですか？ 海棠。とてもぼうつとしていらっしゃるようですが……」

「えっ？ あ、いや……その……」

海棠は裏返った声でどきまぎと言葉を発していたが、やがてその言葉を濁す。耳から首まで真っ赤になった海棠は、ユーフェミアを見ていられなくなり視線を床へと落とす。

「ユーフェミアちゃんがあまりに綺麗だったから、照れているんだ

よ」

何の恥ずかし気もなくそう言ったのは俯いている海棠ではなく、その姿をにやにやと見つめる蓬だった。

海棠とユーフェミアの視線を一気に集めた蓬は、ふふんと小さく笑い声を上げる。

「なっ……！ 父様ッ……！」

「そうだったのですか？」

ユーフェミアはきよとしたまま、視線を蓬から海棠へと移す。海棠は怒っているのか、戸惑っているのか、恥ずかしがっているのかよく分からない表情をしてユーフェミアと蓬の間で視線を行き来させる。

「えっと……。その、ユーフェミア……。その……。えっと……。それは……」

海棠は顔を伏せて、もごもごと呟く。

ユーフェミアは再び俯いてしまった海棠を見つめながら、柔らかに微笑んだ。

「——ありがとうございます」

感謝を示すその一言に、海棠はぱつと顔を上げた。その頬は、まだ朱を帯びている。

「綺麗と思って下さっていたのなら、それはとても嬉しくありがたいことです」

「……え。あ、ああ。うん……」

海棠は僅かに開いた口から、やっとそれだけ言葉を発する。

「ふふん。初々（ういうい）しいねえ」

玄関脇に立つ蓬は、小さく笑いながら海棠を見つめる。その黒い瞳には——僅かな憂いと焦燥が滲む。

「とつ、ところでユーフェミア。今日はまた、何でそんな格好を……？」

海棠は自室から出て、後ろ手に戸を閉める。居間に彩乃の姿はない。どうやらまだ床の上で夢を見ているらしい。

「そうなのです。私は、海棠と彩乃に伝えなければならないことがあつて、ここへ来たのです」

「伝えなければ、ならないこと……?」

海棠は、ふいに影を落としたユーフェミアの顔を見て、ぎゅっと強く眉を寄せた。先ほどのものとは違う胸の高鳴りが、海棠の身体を満たす。

ユーフェミアの赤い唇が、そつと開かれる。

「実は私……、ここを去らなければならないのです。なので、とても仲良くしてくれた海棠と彩乃に、そして大変お世話をおかけした蓬さんに——お別れの挨拶をするために、ここへ来たのです」

scene 17

「……え？」

海棠は、一瞬意味が分からなかった。というより、脳が、身体が、ユーフェミアの言葉を理解してはいけない、理解したくもないと、拒絶しているかのようなだった。

「……な、何故、だ？」

海棠の身体が、驚愕と混乱と爆弾発言の衝撃によって不安定に傾ぐ。海棠はよろめく身体を支えようと、先ほど閉めた背後にそびえる自室の木戸に背をあずけた。木戸は鈍く低い音を立てながら、僅かに揺れる。

海棠は視線を不安げに四方へ彷徨わせ、手に大量の汗を滲ませ、額にはじつとりと脂汗のようなものを浮かべた。

「それは——」

ユーフェミアが憂いの色を浮かべた瞳を、そつと伏せながら口を開いたときだった。

「その説明は、わたくしからさせていただきます」

金髪金眼の少女の後ろから、海棠には聞き覚えのない女性の声が上がった。

氷でできた白刃のような冷たい鋭さと、一点の濁りもない水のよう澄んだ響きをした声だった。

「ユーフェミア様——いいえ。主様。^{ぬしさま}ここはわたくしがご説明をいたします」

ユーフェミアの後ろから現れたのは、くノ一の格好をした長身の女性だった。瞳は黒くややつり上がって鋭く、やや茶色を帯びた黒髪は女性にしてはとても短い。

「お初にお目にかかります。わたくし、この度？秘宝？の守り主となられました月倉ユーフェミア様の護衛兼秘宝の守り手をいたします、武政美桜^{たけまゆみお}と申します」

美桜と名乗った女性は慣れた動きで綺麗に四十五度腰を曲げ、丁寧にお辞儀をした。

「秘宝の守り主……。まさか、あの、森の中の……？」

海棠ははっとした声とともに、木戸へあずけていた身を前方へ乗り出す。漆黒の双眸はたくさんの感情が入り混じっているかのような複雑な色を浮かべながら、目玉が飛び出てしまいそうなほど大きく見開かれる。

「はい。左様でございます」

美桜は機械的な口調で、淡々と事実を明々白々に答えた。

「しかし……何故だ？ 現在守り主である方は——」

「現在の守り主——いや、もう元守り主、というべきかな。秘宝の守り主であった白月閃花^{しらつきせんか}さんは先日、心臓の病によって享年九十七歳で他界されたよ」

それまで緊張感の欠片も持っていなかった人物——蓬が、書かれた文章を淡々と読むようにして言った。

蓬の言葉に、海棠は憂いに顔を歪め、ユーフェミアと美桜は蓬の発言に驚いた。

「……。貴殿、名は確か蓬といたしましたね。何故、そのことを知っておられるのですか。その事實は、まだ閃花様の身近な人しか知らない情報だというのに……。貴殿は情報屋なのですか？」

美桜の驚きを隠せぬ言葉に、蓬は大仰な仕草で肩をすくめる。

「まさか。私はただの魔術師兼時見の中年オヤジさ」

蓬はうつすらと笑みを浮かべる。

「そうでしたか……。貴殿が時見だというのは、納得できます」

美桜は僅かにトーンが落ちた声で蓬に言う。

海棠は信じられないという風に頭を左右に振り続ける。美桜のそばに立つユーフェミアは憂いに顔を歪め、瞼をそつと伏せる。

「しかし……。しかし、何故、だからといってユーフェミアが守り主にならなければならぬんだ？ 白月様との関係性は一体どこにある？」

海棠は困惑しきつた様子で視線を定位置に定めぬまま、慌てたように口調で美桜に問う。

「ユーフェミア様は姓は違いますが、閃花様の里子であられます。閃花様の家族や縁者の方々が何処で何をしているのかも、ましてや実際に家族や縁者がいるのかも不明ですので、自然に次期守り主はユーフェミア様となるのです。またユーフェミア様は中心都市に住んでおられますが、特別に秘宝を守っている屋敷への出入りを許されていました。また、秘宝の知識も閃花様より学んでおりますので、ユーフェミア様ほど次期守り主にふさわしい方はおられないのです」

「そ……んな……」

頭の中の整理ができず、混乱したままの海棠は未だに話が信じられずにいた。

秘宝とは、この瑞穂の国の平和を長年保っている魔力の宿った宝石の事である。その秘宝が壊されたり、盗まれたりして瑞穂の国の平安が乱れないように命をかけて守るのが、守り主の役目。そしてその守り主と、守り主とともに秘宝を守る者——俗に守り手と呼ばれる者——がいる。守り手は武術に優れ、守り主とこの国に忠誠を誓うことができる者でなければならない。また、屋敷の場所を知られないようにするためにも、守り主と守り手はそれぞれ一人ずつと決まっている。それは、秘宝を狙う者に捕まったとしても口を割るものが少数で済むからという理由でそうなったのだが、世間では大人数であり派手な行動を起こさないようにするためという理由で通されている。

そして肝心な秘宝は、その場所が特定されないようにするために、広い森の中の屋敷で守られている。その秘宝が何なのかは、守り主と守り手以外には誰も知らない。

海棠の中にある秘宝についての知識が、一気に脳内から溢れだした。

守り主と守り手が一人ずつである本当の理由については、裏ルートからたまたま耳にした情報だ。それ以外の情報は、瑞穂の国の国

民の大半が知っているであろう知識である。

海棠の頭の中から、秘宝についての知識と言う名の濁流が流れ出る。それと同時に、これからユーフェミアがどうなってしまうのかということが分かっている自分を非難するかのように、炎のように真っ赤な怒りの花が濁流を埋めつくさんばかりに咲く。

——これからユーフェミアは、秘宝と瑞穂の国の平和を守るために、その命をささげるのだ。それはもう、人柱と言っても過言ではない。海棠は運命を呪い、きしむ音が立つほど奥歯を強く噛み締めた。

「海棠。大丈夫、ですか？」

ユーフェミアの心配げな眼差しと声音に、海棠ははっと我に返った。

「あ？ ああ……。某は、大丈夫だ。しかし、ユーフェミア……。おぬしは、どうなんだ……？」

「私、ですか……？」

ユーフェミアは目を丸くして、きょとんと小首をかしげた。まるで、自分は守り主になることは当たり前前で、何故海棠が自分のことを心配しているのか心底分らないという風に。

「私は大丈夫ですよ。確かに……。閃花さんが永眠につかれてしまったことは、言葉では言い表せないほど悲しいですが……。その後を継ぐことができるのならば、これ以上の幸せはありません。それに——海棠や彩乃たちの住むこの地の平和を私は維持したいと願っていますから……」

ユーフェミアは屈託なく笑い、美しい蜜色の瞳に柔らかな光をたたえた。しかし——

——海棠はその瞳に入り混じる、不安と憂いの色に気付いていた。

「さて。長居はできません。主様。お別れのご挨拶を」

残酷とも思える美桜の冷たい声が、僅かな間流れた沈黙を断ち切る。

海棠は無表情の手本のような顔をした美桜を、睨みつけるように一瞥した。

「……そう、ですね」

ユーフェミアは悲しげに、寂しげに頷く。

「あの……彩乃はいますか？ 彩乃にも挨拶をしなければなりませんので……」

「あ。ああ。彩乃は……多分、まだ寝ているよ。——彩乃は、早起きが苦手なんだ」

彩乃が昨日倒れたなどと言ってユーフェミアに余計な心配をさせないためにも、海棠はその目鼻立ちの整った顔に笑顔を貼り付けて、ぎこちない声で苦手な嘘を言った。

「そう、ですか……」

ユーフェミアは申し訳なさそうに瞼を伏せ、思案する。

ユーフェミアの本心としては永遠の別れかもしれないのだから、彩乃に挨拶くらいはしていきたいのだろう。しかし身体が弱く早起きが苦手らしい彩乃を無理やり起こすのも悪い気がして、自分から彩乃を起こしてきてほしいとは言いにくい。

ユーフェミアは顔を歪め、しばらく心の中で葛藤する。

開き切った戸口から春の暖かいそよ風が家の中へと舞いこみ、そこにいる四人の髪を小さく揺らす。木戸は風によって揺れ、小さな音をたてた。家の裏手にある山でうぐいすが軽やかに鳴き、沈黙が降り注ぐ場にやけに大きく響き渡る。

「——えっと。良ければ、起こそうか？ 彩乃を」

困り切っているユーフェミアを助けようと、海棠は思い切って口

を開く。

ユーフェミアは海棠の言葉に顔をふっと上げ、蜜色の瞳で真つすぐに海棠を見つめる。そのままくりと小さく頷くと、僅かに口を開けて息を吸い、

「そんなこと、許さないよ！」

ユーフェミアは、そのまま言葉を発することはできなかった。

いつかどこかで聞いたことがある言葉が、あの頃より少し低くなつた声音で静まり返っていた場所に大きく響いた。

「えっ——？」

ユーフェミアは言葉を発しようとして開けていた口をそのままに、小さな疑問の声をもらした。

先ほどの言葉に驚いたのは、ユーフェミアだけではなかった。自室の前に立つ海棠も、玄関先にユーフェミアとともに立つ美桜も双眸を見開いて声の上がつた方向に視線を移した。ただ一人——玄関脇に立つ蓬だけは、

「ふふん。舞台の幕が上がったな」

無邪気な子供のように目を輝かせて、先ほどの声の主——彩乃を見つめていた。

「……別れるなんて、そんなことあたしゃだよ！」

彩乃は激しく首を振り、駄々をこねる子供のような口調で言う。

「彩、乃……」

海棠は驚いたように、突然隣の部屋から現れた彩乃を振り向く。

四人の視線は一気に彩乃へと集まり、その視線をものともせず彩乃はただユーフェミアだけを見つめていた。

その立ち姿は凜々しいとも威風堂々としているとも言える。昔、ユーフェミアをいじめていた少年たちを蹴散らしたときのように、今の彩乃は相手を圧つするような雰囲気纏っていた。

「彩乃……。これは、仕方のないことなのです。貴女には、とても申し訳ないですけど……私は、行かなければならないのです。これは、私の役目であり決意なのですから」

「あたしだって！ あの日、ゆうちゃんを守るって決めたんだ……！ あたしはこの命をかけてでも、ゆうちゃんを守りたいんだよッ……」

「彩乃……」

ユーフェミアは胸に右手を当て、叫ぶようにして言った彩乃を申し訳なさそうに、そして悲しそうに見つめた。

彩乃は強く、血がにじみ出るほど強く唇を噛み、ユーフェミアの姿から決して目を離さない。

「貴殿は一体何を考えているのですか？ この国の平和を疎かにしようというのですか？」

美桜の呆れたような声と視線が、凜とした表情で立つ彩乃に浴びせられた。彩乃は美桜を、鋭い眼光を浮かべた瞳で睨み返す。

「それは違うよ。あたしは——ただゆうちゃんを守りたいんだ。ゆうちゃんが危険にさらされるようなことがあれば、あたしは命をかけることさえ惜しみはしない」

彩乃の声は低く、まるで相手を脅しているかのようだった。

しかしそんな彩乃の声に怯むような姿は見せず、美桜は不敵とも思える笑みで彩乃を見返した。

「ほう。それはつまり、ユーフェミア様とともに秘宝のある屋敷に住み、秘宝の守り手となることも厭わないということですか？」

美桜の挑発するような、馬鹿にしたような声音。

その言葉にユーフェミアは蜜色の瞳を大きく見開き、海棠は怒りと驚きに顔を歪めた。

「彩乃……！ そんな役割、負うものではない。おぬしは身体も悪いのだぞ！ 昨日も稽古中に倒れて寝込んでいたというのに……ッ！」

海棠はそう言うってから、しまったと一瞬で口をつぐむ。

海棠の発言を敏感に聞きつけたユーフェミアは、さらに双眸を大きく開いた。

「彩乃は、昨日倒れたのですか！？ 大丈夫だったのですか？ 今

は、大丈夫なのですか？　どこか痛いところはありませんか？　熱は？」

おろおろとしながらも、ユーフェミアは立て続けに彩乃へ質問を浴びせかける。

「ゆうちゃん。そんなに言わなくても、あたしは大丈夫だよ」

彩乃は微笑を浮かべ、安心させるように穏やかな瞳でユーフェミアを見つめる。

「そう……ですか」

ユーフェミアは僅かに上がっていた肩をすんと下げ、しかしその瞳にはまだ少し不安の色が混ざっていた。

彩乃は表情はそのままに、視線をユーフェミアから近くに立つ美桜へと移す。

二人の視線がぶつかり合う。二対の黒い瞳はどちらも鮮烈に燃える炎の様な強い光を灯し、相手を閃く刃物のような眼光で射る。

彩乃はその微笑を不敵な笑みへと変化させる。美桜は彩乃の笑みを、冷たい瞳で静かに威圧するように見つめ続ける。

「おい、そのあんた。……確か、美桜だっけ」

「はい。何でしょう」

「さっきまでの話を聞く限り、ゆうちゃんと秘宝の守り手はあんたらしいじゃないか」

「そうですか。それが何か」

すましたような美桜の顔と声。彩乃はその笑みを不敵なものから寧猛なものへと一瞬で変え、美桜を見すえる。

「じゃあ、あたしがあんたより強けりゃ、その役目をあたしがしてもいいってことだね？」

「なっ……………」

海棠は驚きに絶句し、

「！」

ユーフェミアは目を睜り、

「……ほう。それは面白いですね」

美桜は口の端を釣り上げて歪んだ笑みを浮かべ、

「……………」

蓬は、くすりと小さく笑った。

彩乃は標的を視線で捉えるようにして、双眸を眇める。

僅かな間の沈黙。沈黙は人々を容赦なく、静かに圧する。

沈黙の中。海棠はまるで自分の問題であるかのように不安げに眉を寄せ、心配げに彩乃を見つめる。

が、そんな兄に彩乃は少しも目をくれようとはしない。その視線はただ一人——武政美桜にのみ注がれる。

「彩乃！ 気持ちは分かるが、そのようなこと——」

「兄者！ 少し黙っていてくれないかい。これは、あたしの問題なんだっ——」

不安げに海棠が見つめる中、彩乃は美桜を見つめたまま海棠へと声をかけた。低いアルト声が大声で海棠の発言を阻止し、そして、
「っ……………ゴホッ——」

唐突に、その言葉が止まった。彩乃はふいに身体を折り曲げ、口元を右手で押さえると咳き込み始めた。しかもその咳は普段のものとは違っていた。普段の乾いたようなものではなく、もっと重く、喉の奥に何かが詰まっているかのような——

嘔吐か吐血をする間際のような。

「彩乃ッ！」

海棠が妹の名を叫んだ刹那、

「ガハッ！」

手で塞がれた彩乃の口から——真っ赤などろりとした液体が溢れだす。

彩乃の口からこぼれ出した血は床へと落ち、その上へ不気味な跡を形成し始める。液体と言うにはどろどろとしすぎている血は、床や彩乃の足を真紅に染め上げてゆく。

「彩乃——！」

再び、海棠の叫び。

彩乃は血を吐きながら呻き、力なく膝を折る。海棠はすぐ傍にいる彩乃へと素早く近寄り、その背中を撫でる。

「彩乃——！」

床に座り込んだ彩乃を、ユーフェミアは今にも泣き出しそうに瞳を潤ませて見つめる。

「——」

美桜は双眸を鋭いナイフのように細め、真っ赤に染まる少女を見つめる。

彩乃の口から流れ出していた血はやっと止まり、血に汚れた口で荒い呼吸を数回繰り返した後、声を出すためにゆっくりと唇を持ち上げた。

「兄者……。大丈夫だよ。本当さ。だから——行かせて、くれ……」
「馬鹿者！ 何を言っているんだ！！ 今の自分の状態が分かっているのかッ！」

海棠は目をむいて叱責する。彩乃は血色の悪い顔をゆるりと上げ、大声を上げた海棠を見る。

海棠は叱りつけたようには見えない穏やかな表情で、血に顔を汚した彩乃を見つめる。

「彩乃……。ユーフェミアを守りたいという気持ちは分かる。しかし、これ以上……無理をするな」

海棠の穏やかではあるが、しっかりとした力強い声。彩乃は僅かに瞼を伏せて俯き、血にまみれた右手を小刻みに震えるほど強く握

りしめた。

「っ——。あたしは、あたしが正しいと思ったことをするだけだ——」

呟きとも囁きともれる、彩乃の小さな声。それとともに彩乃は握りしめたこぶしで乱暴に口元をぬぐった。口元についていた血は、僅かに手へと移動する。

彩乃は海棠が驚いたように、心配するように見つめる中、しっかりと床に足をつけて立ち上がる。その足は立ち上がる間、僅かもふらつきはしなかった。

彩乃は拭ったもののまだかなり血で濡れている口を開き、爪の間まで血に汚れている右手の人差し指を刀の切っ先であるかのように美桜へと突き出した。

「美桜！ あたしと、勝負しな！ あたしは——月倉ユーフェミアを絶対に守るんだ！！」

海棠は彩乃の行動に再度絶句し、戸惑うような瞳で玄関の脇に立つ蓬を見た。蓬は先ほどから一ミクロンも立ち位置を変えずに、うつすらと微笑んだ。その笑みは、普段見せる子供の様なものではなく、落ち着いた大人びたものだった。

「彩乃」

静かな声が、勇ましい少女の名を呼ぶ。彩乃は自分の名を呼んだ人物——父である蓬へ、ゆっくりと視線を向ける。

「何だい。父上」

「本当に、お前はその選択でいいんだな」

「ああ。絶対に、後悔はしないよ」

「これから先、身を裂かれるほどの苦しみや辛さがあっても、その思いは変わらないか？」

蓬の鋭い瞳。彩乃は視線を少しもそらさずに、その強い眼光を宿した漆黒の瞳を見せる。

「——ああ」

「ユーフェミアちゃんを、絶対に何があっても守り抜くことができる

か？」

「??できる?んじゃないよ。?やってみせる?んだよ」

彩乃の顔に、僅かな笑みが浮かぶ。その笑みを面白そうに眺める蓬は、静かに瞼を下ろした。

「そうか……。なら、私は止めない」

蓬は瞼をそつと持ち上げる。その瞳を、海棠が驚愕の視線で見つめる。

「父様！」

絶望の滲む海棠の顔を見ながら、蓬は双眸を細める。その表情は厳しく、いつもの幼さと緊張感の無さは欠片も感じられない。

神妙な面持ちを崩さぬまま、蓬は落ち着いた声を上げる。

「海棠。いつであれどんなときであれ、進む道を決めるのはその道を進む人間自身だ。彩乃の道は、彩乃が決める。——その道に干渉する権利は誰にもない」

「し、しかし……」

「しかし、はナシだ。他人の人生を妨害したり、反対したりすることとはたとえ家族であろうと許されない行為だ。ただ人生を干渉してよい唯一の例外は、その人物が己の選んだ人生を進むことで人様の迷惑になってしまう場合だけだ」

「……………」

海棠は苦しげに胸を上下させて空気を飲み込む。蓬は冷静な表情を崩さないまま、海棠の悔しげで悲しげな表情を静かに見つめる。

「——海棠。？砂漠の薔薇？の決まりを、お前は知っているか？」

蓬は一瞬、その黒い瞳を閃かせる。

身体のおちこちに血がこびり付いてしまっている彩乃は何故こんな時にそんなものの話が出てくるのかと首をかしげる。背後から吹いてくる風に蜜色の髪を揺らしているユーフェミアは、自分しか知らない大切な秘密がバレてしまったかのように、ぎくりと身体を震わせる。ユーフェミアのそばで腕を組んで立つ美桜は、視線だけを蓬に向けると双眸を刃のように鋭く細める。床に膝をついている海棠は、すつと息をのむ。

「……私欲のために行使してはいけないことと、死者の蘇生を望んではいけないこと、だ」

海棠の神剣な答えに、蓬は満足そうに大きく頷く。

「その通り。他人の人生についても、その決まりと同じようなものだ。私欲のために、他人の人生についてあれこれ指図してはいけない。海棠。お前なら、そのことをよく分かっているはずだ」

「……………」

海棠は何ともいぬ苦々しげな表情で俯き、真つ赤に汚れている木の床を凝視した。木と木の板の境目に血が入り込み、その隙間を流れた血が小さな赤い川を作り上げている。

「父上……………」

彩乃は海棠を見つめる父の方を向き、何と感謝の気持ち述べたら良いものかと思案するような、父に自分の考えが認めてもらえたことが嬉しくてたまらないというような、複雑な表情を浮かべていた。蓬は小さく笑って自分を見る彩乃へ視線を向け、童顔に屈託のない微笑みを浮かべた。

「——それに、彩乃の病は海棠が治すんだろう？」

蓬の言葉に、ぱつと海棠は床から視線を上げ、視線だけをこちらへ向けている玄関わきの父を見た。

「えっ…………？ 兄者。そんなこと、あたしや聞いてないよ？」

彩乃は眉をひそめ、首を九十度回転させて海棠を見た。海棠は子供くさい笑顔の父を見ながら、うつすらと口を開く。

「ああ…………。そうだ。そうだ、な…………。某が、彩乃の病を治すと決めたのだつたな——」

海棠は足腰に力を込めてゆっくり立ち上がると、幼いながらもしっかりと父としての威厳をもつ蓬の顔を見すえる。

思い起こせば、夜半に海棠が旅立つと報告した時も、蓬は最終的に海棠を止めはしなかった。もし蓬が海棠の旅に反対していたとしても、海棠が旅に出ただろう。

——今の彩乃の心境も、それと同じなのだ。

「……………。分かった。彩乃、某も——おぬしを止めはしない」

海棠は身体を横へと向け、彩乃に正面から向かい合った。彩乃へと向き直った海棠の顔には——

彩乃を祝福するかのような、柔らかい笑みが浮かんでいた。

「兄者——。ありがとう…………」

彩乃は顔を明るく染め、深々と腰を折った。

「いや。いいんだ。その代わり、しっかりユーフェミアを守るんだぞ」

海棠は少し身を乗り出して、彩乃の左肩を右手で一度だけそっとたたいた。彩乃はしばらく頭を下げていたが、やがて下ろしたままの漆黒の長髪を揺らしながら顔を上げ、口がきけないかのようにこくこくと大きく頷いて返答をした。

二人を見つめる蓬は僅かに双眸を細め、

「海棠。彩乃」

二人の名を、ゆっくりとしつかりと呼ぶ。名を呼ばれた二人は同時に、同じ黒曜石のように美しい双眸を父に向けた。

蓬は自分と同じ二人の黒い瞳を見つめながら、口を開く。

「私は、お前たちの行動を止めはしない。しかし、その魂と肉体はこの世に一つしかないということを忘れるな。そして——後悔をするような生き方だけはしてはいけない。いつだって自分を信じ、自分に恥じぬ人生を歩め」

「ああ」

「分かってるよ」

海棠は真つすぐな瞳で蓬を見、彩乃は炎を灯しているかのように明るい瞳で蓬を見る。

真つすぐな瞳をしたまま、海棠は彩乃へと向き直る。彩乃も海棠の行動を眼の端で捉え、自分よりもかなり背が高い海棠へと向き直る。

「大丈夫だ。——彩乃なら、絶対にできる」

海棠は彩乃を励ますようににっこりと笑った。

彩乃は海棠の顔を見て再び強く頷くと、黒い瞳に瞼を下ろしながら一度だけ大きく息を吸った。

漆黒の瞳が瞼の下からのぞいた瞬間、彩乃は身体を玄関の方向へと向け、その目でそこに立つ美桜の姿をしっかりととらえる。

「美桜！ あたしと勝負しな！」

彩乃の口から本日二度目の勇ましい科白が出た途端、美桜の口の

端がニツと歪に歪んだ。

s c e n e 2 1

美桜は口の端を釣り上げたまま、唇をめくれ上がらせる。

「良いでしょう。では、表へ出てください」

「ああ」

彩乃は固まった血が赤黒くこびり付いている右手を、ぎゅっと強く握り込む。それは短い彩乃の爪が、手の平に食い込むほどの強さだった。爪が強く手の平に食い込んでいるというのに、彩乃はその痛みに気付いていないかのようにだった。

漆黒の瞳が、暗闇の中で閃く猫の目のような光を浮かべる。

「がんばれよ。彩乃」

「ああ。必ず勝って見せるさ」

彩乃は正面を向いたまま海棠に向けてか、僅かにその口へ微笑みを浮かべた。海棠はその笑みを確認すると小さくその首を上下に動かす。

彩乃はゆつくりと、一步前へ踏み出す。一步、また一步と着実に足は前方へと進む。彩乃の視線は移動する間も、つねに美桜へと注がれる。美桜は冷めたような光を浮かべた瞳で、彩乃の視線を受け止める。

「……………」

「……………彩乃」

海棠は無言で眉をしかめながら彩乃の背を見送り、ユーフェミアはこちらへ徐々に近づいてくる彩乃を心配げに見つめる。

たくさんの視線を浴びながら、彩乃は玄関へと、美桜とユーフェミアのそばへとたどり着く。

美桜は彩乃を見て、まるで小馬鹿にしているかのようににやり笑い、一步退いて外へ出ると指を折ったり伸ばしたりしながら彩乃を挑発するかのように呼ぶ。

彩乃は玄関に下りると慣れた手つきで素早くわらじをはき、足首

にきやはんをつける。ユーフェミアはまるで彩乃が想い人であるかのように、その姿をずっと見つめていた。しかし想い人を見る目と違うのは、その瞳に映る色が喜色ではなく憂いを帯びた暗い色だということだ。しかもその顔にはつねに不安と相手を心配するような表情が浮かんでいた。

わらじときやはんをつけ終えた彩乃は、彩乃が外へ出やすいようにとわざわざわきへ寄ったユーフェミアをまつすぐな瞳で見つめる。「ゆうちゃん。あたし、絶対にゆうちゃんを守るから」

「彩乃——」

彩乃は緊張で厳しくなっていた表情をふいに和らげ、屈託のない笑みをその顔に貼り付けてユーフェミアを見た。ユーフェミアはやや心配げに彩乃を見つめていたが、やがて僅かに頭を上下させるとその瞳に決意に似た固い意志を宿した。

「分かりました。私は、彩乃を信じております」

「ありがとう。あたしを、信じてくれて」

彩乃は自然な笑みをその顔に浮かべた。ユーフェミアはこくりと小さく頷き、彩乃はユーフェミアのそばを通り抜けると、木戸をくぐって外へと出た。

春の穏やかな青空。淡い桃色の桜花が雪のように地に降り注ぐ。

海棠と彩乃とユーフェミアが初めて出会ったあの桜の木は、今年も見事な花を溢れんばかりに咲かせていた。

紅桜は可憐に花弁を舞わせ、鮮やかな緑を放つ若葉は大変眩しく、まさに花紅柳緑と呼ぶにふさわしい風景だった。

美麗な景色の中。堅く、しかし強い決意を秘めた面持ちで歩む彩乃は、その景色にも劣らぬほど美しい。

彩乃は家の前に広がる土を固めただけの広場の中心に立ち、はつとするほど美しい蒼穹を静かに見上げる。

彩乃より先に外へと出ていた美桜は、ユーフェミアを乗せて来たらしい家の脇に置かれた駕籠かしょの傍で肩甲骨あたりまであるクリーム色の髪と、澄んだ碧眼を持つ十歳くらいの少女から二本の木刀を受

け取っているところだった。

二本のしなやかな木刀を携えた美桜は、彩乃のそばへと静かに歩み寄る。彩乃は視線をふっと下げ、自分へ向かってくる美桜を見すえた。

誰もが静かに成り行きを見つめる中、美桜は彩乃のそばまで歩み寄り、木刀の一本をまっすぐに差し出した。

「これを持ってください」

彩乃は美桜に差し出された木刀の柄を右手で握り、美桜も自分の手に握っているのは一本だけとなった木刀を静かに持ち直した。

「手負いだからと言って、甘く見るんじゃないよ」

彩乃は視線を数ミリも反らすことなく、美桜の瞳だけをしっかりと見つめる。

そんな彩乃をあざ笑うかの如く、美桜は不敵な笑みを浮かべた。

「そちらこそ、守り手の実力を甘く見ないでください」

すらりと光る、鋭い刃やいばのような二人の瞳がぶつかる。

「じゃあ。はじめるよ」

「ええ。はじめましょう」

彩乃は全神経を美桜へと注ぎながらも、ゆっくりと背後へ歩み出す。

彩乃は家から見て左の方向へ、美桜はそれと向き合う位置になる右の方向へと歩む。

二人の間がたつぷり十メートルほど空いたところで二人は止まり、身体の正面を相手へ向ける。

「彩乃……がんばってください」

「彩乃。必ず勝つんだぞ」

誰も美桜を応援しないという完全アウェイな状態で、しかし美桜は余裕と不敵に溢れる笑みを崩すことはない。

ユーフェミアは祈るように指を組み、瞼をそつと伏せる。海棠は彩乃を信頼し、両こぶしを握り締めて成り行きを見守る。蓬はそんな二人とは対照的に、まるで見世物みせものを面白そうに見ているかのよう

に口元を綻ばせている。

「では」

美桜は小気味良い音を立てながら、木刀で空を上から下へと斜めに切り裂く。そのまま連動するようにして、ゆっくりと中段に木刀を構えた。

その一連の動きは、緩やかでありながらもきつと清々しいほどに冷たく張りつめた、美しい冬の川の流れのようだった。

「っ——」

敵でありながら、美しいとさえ思ってしまう美桜の動きに、彩乃は思わず息をのむ。美桜の身体から発せられる、一点の濁りもない刃のように研ぎ澄まされた鋭利な雰囲気、一瞬で気負され挫けそうになる。

彩乃は冷や汗を額から頬へと流しながらも、ぐつと奥歯を噛み締めた。

「——では。行きます」

美桜はすらりと光る刀身のような眼差しを彩乃へ向ける。二人にはかなりの距離があるというのに、彩乃にははつきりと自分に向けられる美桜の突き刺すような視線が分かった。

今や美桜の顔には笑みは欠片も残っておらず、その顔に浮かぶのは真剣な表情だけだった。先ほどまで歪んだ笑みを浮かべていた口元は、すっかり引き締まっている。

美桜は対峙する彩乃へ視線をしっかりと向けたまま、ゆるりと右わきへ木刀を構えなおす。木刀の切っ先が地面へと向いた刹那、わらじをはいた美桜の足が強く地面を蹴り、低い体勢で走り出した。

風を切りながら猛スピードで走り寄って来る美桜を見すえる彩乃は、その瞳にきつい光を閃かせる。そして——

木刀と木刀のぶつかり合う、鈍い音が響き渡る。

堅いもののぶつかり合う音。それは鈍く低く、周りの山へと波紋を広げるようにこだまする。

「っ——」

美桜によって振るわれた一撃を己の木刀で受け止めた彩乃は、強く歯を食いしばるようにして奥歯を噛み締める。

「……………」

美桜は木刀越しに、冷たく清々しい氷の様な瞳で彩乃を静かに、しかし鋭く見すえる。その瞳には焦りや躊躇いや戸惑いといった感情は全く映っておらず、そこに映るのは――

余裕と、相手を射すくめるような冷酷な光のみ。

美桜は木刀を前方へ押すようにして彩乃の木刀をはじく。彩乃は寸分もバランスを崩すことなく、僅かに後退する。

木刀を即座に中段に構えなおしていた美桜はさらに間合いを詰め勢いをつけるために足を一步踏み出し、滑らかな弧を描くようにして裂帛の気合とともに彩乃の脇腹へ強かに木刀を振る。

「ッ——！」

彩乃は後方へ飛び退り、^{すさ}かろうじて木刀をかわした。彩乃の腹部の前で、美桜の木刀が虚しく空を切り裂いてゆく。

「はぁあッ！」

彩乃の迫力のある気合。

標的を失い空を裂く美桜の木刀を、彩乃の木刀が下から上へと一陣の風の如き素早い動きではじき上げた。

「——」

場違いに思えるような虚しく乾いた音とともに、美桜の目がぎょろりと下を見る。

味気のない色をした地面。茶色の地面を申し訳程度に彩るようにして生える緑の雑草。風に舞う桜。彩乃の木刀。揺れるセミロング

の黒髪。自分の——ガラ空きになっている腹部。

木刀を強くはじき上げられ、木刀を握っている右腕を宙へ上げている美桜の目がそれらを捉えた刹那、

「もらったあッ！」

彩乃は地面が揺れるのではないかと思うほど強く、左足を大きく一歩踏み出した。その勢いにのせて、自らの右手に握る木刀を相手の鳩尾^{みぞおち}めがけて、全体重をかけてつく。が——

「——！！！」

「なッ——！」

上へ掲げられていた美桜の木刀が、まるで天空を舞う鷹^{たか}が急降下をして地を駆ける兎を襲うように、上から下へと有り余る力を使っている切り彩乃の木刀へ振り下ろされた。前方へ突き出されていた彩乃の木刀の軌道は大きく下へとそれ、その切っ先は美桜を倒すはずで突かれた強大な破壊力を用いて、いとも簡単に地面を深く抉る。地面を抉ったことによって木刀が急停止し、木刀を握っていた彩乃の右手首の関節が外側へと曲がる。

全体重を木刀にかけていた彩乃は、その身を前方へ——美桜の方へと投げ出すような形となってしまった。

「まずッ——！」

彩乃の顔に、明らかな焦りの表情が浮かぶ。

「ぬるい、ですね」

美桜は木刀を持ったままの右腕の肘を、こちらへ倒れこんできた彩乃のうなじへ強く叩きつけた。

「がはッ！」

短く息を吸い込むような声とともに、反撃することすらできぬまま彩乃は虚しく地面へと倒れる。

うなじを強打したことによって、彩乃の意識が一瞬だけ飛ぶ。が、地面に叩きつけられた痛みと、肺を打ったことによって一瞬息が止まったことにより意識は正常化した。

「ぐッ——！　　がはッ！　　ゲホッ」

彩乃は噛んだ唇から出た血と、口に入り込んできた地面の土が混ざった唾を吐きながら、木刀を握り直そうと右手に力を込めた。が――

握りしめるより早く、彩乃の右手に鋭い激痛が走った。

「ぐ――ッ！」

「甘いですね。あまりに、弱すぎます」

彩乃の顔に、影が落ちる。頭上から降って来た声音はどこまでも冷たく、まるで聞く者の心を凍りつかせようとしているようだった。太陽を背に立つ美桜は、その足の下に彩乃の右手を敷いていた。しかし敷いている本人は、まるで彩乃の手が地面に落ちている葉っぱや石ころと同類であるかのように、何の気にもせず踏みつけ続ける。

「つッ――。ぐッ……」

彩乃は額に脂汗を浮かべながら、木刀を握る右手に力を込めようとした。が――

美桜によって踏まれているその手は、すでに木刀を離していた。

「終わりです。入江彩乃」

氷のように、相手を射るような美桜の声。彩乃は美桜を見上げ、そして――

「つ――」

目の前に突き付けられた木刀の鋭さに、息をのんだ。

まるで彩乃の眼球を貫こうとしているかのように、木刀は眼球の数ミリ手前で静止している。

「残念ながら、貴殿の負けです。下手に動けば――眼球が潰れますからね」

「……………」

彩乃は額から頬へと汗を流す。その汗が顎から滴るとともに、彩乃はふっと目を伏せて口を閉ざした。

「そんな……嘘、だろ」

二人の姿を遠くから傍観していた海棠は、地面に突き倒されてい

る妹の姿を絶望の色を移した瞳で見つめる。

「……っ」

ユーフェミアは眼前で展開された光景に完全に言葉を失い、

「やはり、な。しかし……」

蓬はもとより承知であつたかのように、この勝敗に頷きつつ、意味深な笑みを浮かべた。

「では。守り手は諦めてください」

「……………」

敗北した彩乃は口を開かず、視線も上げようとはしなかった。その唇は、悔しげに結ばれていた。

ものの数十分で方が付いてしまった二人の戦い。

力量、迫力、体力、オーラ、判断力、身のこなし。それらの中のどれも、最初から最後まで彩乃の方が勝るものはなかった。その背には常に冷や汗が流れ、額には脂汗が絡む。

美桜の常に落ち着き払った瞳、冷静な判断力、流れるような身のこなしは戦闘中、一切乱れることはなかった。

圧倒的な優勢を誇って、美桜は彩乃を打ち負かし敗北へと追いつたのである。

彩乃の手の上から、美桜の足が引かれる。相変わらず冷酷とも思える無感情な瞳で、美桜は彩乃を見る。彩乃は顔に影を落としたまま、頭を上げようとはしない。

「彩乃……」

周りに漂う冷たい沈黙を断ち切るようにして、海棠が悲しげに妹の名を呼んだ。静謐な闇のように美しい漆黒の瞳が、ふいに陰りを帯びる。

海棠は視線を伏せている彩乃のそばへと駆け寄ろうと足を一步踏み出し、

「っ……」

刹那にそれを止めてしまっていた。海棠は信じられないという風に息をのみ、双眸を大きく見開く。

彩乃が、上半身を起こし、顔を上げたのだ。——その顔に、恐いほど綺麗な笑みを浮かべて。

「美桜。ありがとうね。うん。あたしも甘かったよ。秘宝の守り手に勝負を挑むなんて。こんな姿、剣術の師匠に見られたら、きつと怒鳴られるね。ははっ……。まったく——あたし、恥ずかしすぎだよ」

彩乃は立ち上がりながら、元気とさえ思える口調で言った。ただ、その言葉が終わりに近づくほど、その声はだんだんと小さくなっていった。

両足をしっかりと地面につけ、地に倒れていた彩乃は再び立ち上がる。しかしその瞳は誰も見ようとはせず、立ち上がった瞬間に視線を皆からそらすようにして彩乃は空を仰いだ。それは——

まるで、涙がこぼれるのを防いでいるかのようにも見えた。

全員が静寂を守る中、彩乃は雲ひとつない青空を見つめながら口から大きく息を吸った。

「——本当に、自分が、なさけないね」

吸った息をすべて吐き出すかのように、天空を仰ぐ少女は大きなため息をつくように言葉を吐き出した。そんな表情の見えない彩乃の顔を、美桜は双眸を細めて静かに見つめる。

「……………」

海棠は足を一步前へ出したままの体勢で、憂いを帯びている彩乃を沈んだ面持ちで見つめる。彩乃は視線を空から土色に汚れた自分の服へと落とし、「あーあ。服が土で台無しだよ。まったく……」と意図的に大きくしているとしか思えない音量の声で言い、身体中についた土を力任せに手の平で強く叩き^{はた}はじめた。

しかし、彩乃を見つめる海棠はあること（……）をちゃんと見ていた。

——彩乃が身体を叩く動作の一部と見せかけて、時折目元をこっそりと手で拭っていることを。

「くそつ。なかなか土の汚れって落ちないね……」

悪態を付きながら彩乃は懸命に身体中を叩き、そして、

「貴殿は馬鹿ですか」

ふいに、美桜に声をかけられた。

彩乃からもうもうと土煙りが上がっているというのに、何故か美桜は彩乃のそばから遠ざかってはいなかった。

「貴殿は、弱いうえに馬鹿で阿呆なのですね」

「……………」

美桜の冷静とも冷淡ともとれる声に彩乃は一切返答せず、ただただ黙々と身体をはたき続ける。まるで、それをする事しかできないかのようにただただ、淡々と。

「——泣きたいときは泣けばいいんです。それを我慢している貴殿は、勝負で負けるより数千倍も情けないですよ」

美桜の言葉に、彩乃は黙したまま服から美桜へと視線を移す。美桜へと向けられたその瞳には、何の感情も浮かんでいなかった。

「やだね。あたしゃ、泣いてなんかないさ。泣くなんて、弱い者が

することだよ」

「そういう強がりなところが、情けないと言っているのです。それに――泣くことは弱いこととイコールではありません。泣いた分だけ、人は強くなるといえます。泣くほどの辛い経験や悲しみを強さに変えていける者。その者こそ、本当に強い者です。泣くことさえできないものは――最初から、強くなどなれません」

美桜は真っすぐに彩乃を見すえ、相手を諭すかのように言葉を紡いだ。彩乃は美桜のあまりに真っすぐな瞳から逃げるようにして視線を右の地面へと落とし、そこに自分の木刀が取り残されるようにして落ちていることに気がついた。

彩乃はゆっくりとかがんで木刀を拾い上げた。木刀は彩乃ほどは汚れていなかったにせよ、僅かに土を纏っていた。握る柄の部分には彩乃のものか、僅かに赤い血のシミがついている。

彩乃は木刀を土を軽く払い、右手で柄を強く握り締める。その瞳に浮かぶ強い決意は今や半分ほどを憂いに占領されており、決意の光は僅かに弱くなっていた。

彩乃は木刀を握ったまま立ち上がり、振り返って美桜の方へ木刀を握る右手をのばす。

「ほら。返すよ」

「帰すのであれば私ではなく、あちらにいる白胡――クリーム色と碧眼の少女に渡してください」

「白胡？」

彩乃は美桜の指し示す家のそばに置かれた駕籠^{かじ}の方向へ、訝しげに視線を送る。と、そこには先ほど美桜が木刀を受け取っていたクリーム色の髪の少女が、にっこりと可愛い微笑みを浮かべて立っていた。

「……？」

彩乃と同じく、美桜の指先を追って白胡を見た海棠は、小首をかしげた。

駕籠のそばに立つ少女――白胡からは、人間の持つ独特な気の流

れと生きている者の温もりを感じられなかったのだ。

「あの子は、何なんだい？ 何のためにいるんだい」

海棠とは違う意味で疑問を持った彩乃は、美桜へ訊ねる。美桜は白胡を指したまま、口を開く。

「白胡は、主様の身のお世話をする？ アンドロイド？ です」

「へえ。人造人間なのかい」

彩乃は珍しそうに、好奇心がわいたかのように僅かな喜色を含んだ声を上げる。

「ああ。なるほどな」

海棠は二人の話を耳にし、彼女に気の流れと生きた者の温もりを感じられなかったことに独りで納得した。

彩乃は数メートルほど先に独りでたたんでいる白胡のそばへと歩み寄り、丁寧な木刀を両手で差し出した。

「白胡、と言ったね。ゆうちゃんを、頼むよ」

「分かッタ、アルよ」

白胡は歪な言葉を使いながら、ロボットとは思えない滑らかな動きで木刀を彩乃から受け取った。

白胡へと木刀を返したとき、彩乃の手が僅かに白胡の手に当たった。白胡の手は、驚くほど冷たかった。が、肌の質は驚くほど人間に近く、柔らかな弾力を持っていた。

木刀を確かに白胡へと返却した彩乃は、家の玄関前に立つ蓬と海棠とユーフェミアの顔を、しっかりと真つすぐに見つめた。その瞳は僅かに憂いを含んでいたものの、清々しいほど綺麗な光を浮かべていた。彩乃は口元をほころばせ、

「——ゆうちゃん！」

悲鳴に近いその声とともに、一瞬で笑顔を凍りつかせた。

彩乃の声に反応した海棠が驚いてユーフェミアを振り返ると、美桜がしまったという風に届くはずもない手をユーフェミアへ虚しく伸ばすのと、ユーフェミアが「え？」と疑問を口にするのが同時だった。

次の瞬間、

「きゃあああッ!!」

ユーフェミアが甲高い悲鳴を上げた。何故なら、

「皆、そこを動くなッ!」

突如として自分の背後に現れた者に、捕えられたのだから。

ユーフェミアの後ろに現れた者はユーフェミアの腹部に左腕を巻きつけ、白く今にも折れてしまいそうなほど細い首に鋭いくないを突きつけていた。

太陽の光を反射して怪しく閃くくないを見た海棠は目を見開いて動きを止め、蓬は楽しいという感情を無理やり押し殺して不自然な険しい表情を浮かべ、美桜は歯が鈍くきしむほど強く歯を噛み、彩乃はユーフェミアを捕えている者を鋭い眼光で睨み据える。その瞳には——強い決意が再び、強い光を放とうとしていた。

沈黙。

そこに立つすべての人たちは口を閉ざし、決して開こうとはしない。同じく、身動きも皆しようとはしなかった。

「ククツ。懸命な判断だな。そこから一步でも動くと、この女の首が瞬時に飛ぶと思え」

ユーフェミアを抑えつけている者は、己の前にひれ伏す者たちを見下すような下卑た笑い声を上げる。その顔はさも愉快だと言わんばかりに歪む。

その者は、真っ黒な服を纏い真っ黒な髪と瞳を持つ、大体二十から三十歳ほどに見える女性だった。

「ほう……。なかなか美人じゃないか」

この緊迫した空気に満ちた場には大変不釣り合いな、緊張の欠片もない呑気な声を蓬は上げた。

「父様。今はそのようなことを言っている場合では――」

「そこ！ 五月蠅いよ」

海棠が上げた叱りつけるような呆れたような声は、女性の鋭い声に途中で抹殺された。

海棠も蓬も、瞬時に口をつぐむ。海棠の瞳には焦りが浮かぶが、蓬の瞳には事のすべての成り行きを見とおしているかのような、ひどく落ち着いた色がうかがえた。

しばしの沈黙が再び人々にまとわりつく。風はこんな張りつめた空気の中でも、先ほどと何ら変わりなく桜の花弁を運び続ける。

「――なあ。その美人のお姉さん。ちょっといいかな？」

「父様」

海棠が呆れたようにため息をつきながら蓬を見、蓬は横目で海棠へ何か意味深な視線を投げた。海棠はその意味を汲み取ってか、蓬に気を取られている女性に気付かれぬよう、そっと両手を背中へと

まわした。

女性は奇妙なものを見る目つきで蓬を見る。

「何だ。お前、この状況が分かっているのか？」

女性はユーフェミアの腹部に巻きつけている左腕に力を込める。

右手に握られた煌めくくないは、さらにユーフェミアの喉に近づき、僅かに白い肌へ食い込んだ。あまりの恐怖に、ユーフェミアは喘ぐような息をする。

「ああ。分かっているさ。悲しいことにね。で、聞きたいことがあるんだが」

「この場でお前に発言の権利があると思っているのか？」

「発言に権利なんてものはもともと存在しないよ。で、美人のお姉さん」

「……………。——何だ」

女性は諦めたように、小馬鹿にするように、呆れたように鼻で小さな息をついた。

——どうやら？美人？というところは否定しないらしい。

「君は、何故ユーフェミアちゃんを狙うんだ？」

「はっ。私を馬鹿にしているのか。こいつが、秘宝の守り主だからに決まっているだろう。こいつを殺せば、秘宝を奪うのは簡単になる。秘宝を守っている結界が容易く崩れる——」

女性は何を感じてか、はっと言葉を止め、そして、

ユーフェミアもろとも、姿をその場から霧のように消し去った。

刹那。海棠が素早い動きで正面へ左手を突き出し、それまで女性が入っていた場所に、高温の蒼い炎が巨大な火柱を形成した。

「くそっ！」

「おっ」

「っ——」

「はっ……………！」

海棠は悔しげに顔を歪めながら女性に直撃するはずであった炎を見、蓬は感心したような声を上げ、美桜は息をのみ、側に立つ白胡

へ何か耳打ちをしていた彩乃は瞬時に目を見開いた。

「バレてしまったか」

左手を前方へ突き出している海棠は、小さく舌打ちをしながら手を下げる。その左手の平には小刀で描いたのか、真っ赤な血でできた炎の魔方阵があった。

「うーん。上手いと思ったんだけどね。あの魔術なら的だけを焼けたのに。——未来は、簡単には変わらないってことか」

蓬は唸るように言い、鋭い眼差しで徐々に弱まっている炎を見る。その場にいる全員がそれぞれの思いを胸に秘める中、

「はっ。甘いんだよ。その男と私が会話している隙に、その魔術師があたしを狙ったんだろう？」

何処からか、ふいに皆の前から姿を消した女性の声が響いた。女性とユーフェミアを除く四名がほぼ同時に、全員の後方にある桜の木の方を見やる。

全員の視線が注がれる桜の木の下には、やはり先ほどと同じ体勢の女性とユーフェミアが立っていた。

「おい、その魔術師。動いたってことは、この女がどうなってもいいってことだな」

女性は心底面白いという風に口の端をニッと大きく釣り上げ、ユーフェミアの喉にくないを強く食い込ませる。くないの刃はいとも簡単にユーフェミアの真っ白な肌を切り、身震いをしてしまうほど不気味な真紅の雫を滴らせた。

「畜生ッ！」

海棠は自分の仕出かしてしまったことに悪態をつき、血が溢れるのもかまわずに左手を強く握りしめた。その指の隙間から、鮮血が痛々しいほど大量に流れ落ちる。

「——海棠！ もう構いませんッ。私は——。私は——！」

ユーフェミアが蒼白の顔で必死に叫ぶ。その瞳からは美しいと思えるほど透明な涙がこぼれ、頬を伝う。

恐怖と悲しみに震えるユーフェミアを見つめながら、海棠は瞋恚しんい

の焰を瞳にたぎらせ、美桜は己の不甲斐なさと憤りと悔しさに唇を強く噛み、蓬はただ静かに女性とユーフェミアを見つめ、彩乃は「ふつ。ふふふつ。あははははははっ！ はははははははははっ！！」本当に楽しそうに、おなかを抱えながら狂ったように笑いだした。

「な、に……？ 三文芝居、だと」

女性は眉をひそめて、眉間に深い皺を刻んだ。その瞳は威嚇するかのように彩乃を睨みつけているが、そこに浮かぶ感情は戸惑いや焦燥といった類のものだった。

彩乃は変わらず余裕とさえ思える神妙な瞳で、口の左端を釣り上げて女性に不敵な笑みを向ける。

「そうよ。ふふっ。貴女がすっかり私たちの芝居に騙されているものだから、可笑しくて、くくくっ、つい、笑っちゃったわ」

「どういう、意味だ？」

「そういうも何も、そのままの意味だけねど？」

疑念に満ちた女性とは反対に、彩乃はクスリと笑う。

「……何？」

海棠は眉を寄せ、

「ふふん」

蓬は愉快そうに鼻で笑い、

「……？」

美桜は物思いにふけるようにして、左手の人差し指で顎を挟み、

「……………」

ユーフェミアはポカンと口を開けて、余裕満面の彩乃を見つめた。

「お前……。何を、企んでいる？」

戸惑いによってすっかり冷静さを失っている女性は、周りの反応などには気付かずただ彩乃だけを見つめる。

「何を企んでいる、ですって？ 私は何も企んでいないわ」

彩乃は小さく肩をすくめ、そのまま言葉を続ける。「だけれど――

――。そうね。貴女に、良いこと教えてあげるわ」

「？」

女性は訝しげに彩乃を見つめる。

彩乃は隣に立つ白胡の応援するかのような眼差しを受けながら、一歩前へ進み出る。僅かな衣擦れの音が、沈黙の中でやけに大きく響いた。

「貴女が捕まえている、その金髪の女。それ——守り主でも何でもないのよ？」

「……なッ」

女性は一驚、目を大きく見開く。

女性と同じように事情をつかめていない海棠も、女性と同じような反応を見せた。違うのは、声を上げなかったことくらいだ。

美桜は未だに、彩乃の考えを読み取ろうと思案し続けている。

「——ふふっ」

時見である蓬は、小さく口元だけで笑い、

「……………」

彩乃からこの作戦について予め聞いている白胡は、彩乃をじっと見守り続ける。

「頭の硬い貴女のために、私が事を簡単に説明してあげるわ。だからね、貴女みたいに守り主の命を狙う、大馬鹿者がいるでしょ？」

その金髪女は、そういう人たちから本当の守り主を守るための、

「ダミーよ」

「なッ……！ はっ、はったりをかますな」

「はったり？ プッ。馬鹿じゃないの。はったりなんかじゃないわ」

彩乃は間髪入れずに言い、嘲笑を浮かべる。

がその時、ふいに女性の口に僅かな笑みが垣間見えた。

「では、もしもそれが本当だとして、何故今更お前が本当のことを言う必要がある？ ダミーが殺されるだけなの？」

女性は嘘を見破ったといわんばかりの、得意げな笑みを浮かべる。

が、彩乃は微塵も焦りを見せはしない。

「そう。ダミーが殺されてしまうわね。私はダミーが殺されようと構わないわ。けれど——私の前で誰かが死んでしまうのはイヤなのよ。特に、それが私のせいで死ぬのだったら尚更、ね」

「彩乃！」

突然、芝居を続ける少女の名を呼ぶ声が上がった。線が細く、しかし凜とした響きを含んだ麗しい声。その声は、女性によって捕ま

えられ、首にくないを突き付けられている少女のもの。

ユーフェミアは、女性に抵抗しようとはせずに震える声で必死に叫ぶ。

「彩乃！——いいえ！主様。もう、いいのです。私は、もう、いいんです！！」

首から血を流す、蜜色の少女は涙を頬に伝わせた。その表情は儚くも、何か強い決意のようなものが感じられた。

ユーフェミアの女優顔負けの華麗な演技に、

「なるほど」「——そうか」

海棠と美桜が、同時に事情を理解した。

「何——。主様、だと？」

女性は驚きに目を睜り、両手に込めていた力を僅かに緩めた。

桜の舞う澄みきつた蒼空^{あおぞら}。風は穏やかに人々の髪を揺らし、桜の花弁を乗せ、春の香りを届ける。風光明媚^{ふうこうめいび}なその場に漂うのは、緊迫した空気。

表情を引きつらせた守り主の命を狙う女性は、驚愕に双眸を見開く。自分の思惑通りに事が進んでいる彩乃は、クスツと小さく笑った。

「そう——」

儚い響きを含むアルト声が、彩乃の口からこぼれる。月の明るい夜闇のように艶めく漆黒の髪をなびかせながら、視線はそのままに彩乃は顔だけを僅かに上へ向けた。黒曜石のような瞳が、太陽の光の力を借りて煌めく。そして——

誰もが魅せられてしまいそうなほど可憐な笑みを、その口元に綻^{ほころ}ばせた。

彩乃の、ユーフェミア顔負けの美しい笑みに誰もが息をのむ。

「——本当の守り主はこの私。私の命が危なくないように、私は守り主となるまではここで安全に暮らしていたのよ。残念だったわねえ。すっかりダミーに騙されちゃって。守り主の刺客って、もつと頭のキレル賢い人だと思っていたわ。なのに、——プツ。貴女って、本っ当に？馬鹿？なのね」

人を嘲^{あざわ}るように、クスクスツと彩乃は笑う。馬鹿を強調した言葉と彩乃の笑みに、

「……つぎけるな……。——ふざけるなああッ！」

女性は冷静な思考と判断力と理性をすっかり失い、怒り任せに鋭い咆哮を上げた。その脳内は憤怒だけに支配されており、何故彩乃が守り手である美桜と戦っていたのか、などという彩乃の証言との矛盾には気付かない。女性は瞳に怒りの業火を燃やし、自分の怒りをぶつけるようにして捕まえていたユーフェミアを強く地面に突き

飛ばした。

「きゃっ！」

ユーフェミアは土ぼこりを纏いながら、地面に強く身体を打ちつける。

「っ——！」

本当の守り主の身を案じた美桜が、ユーフェミアへと近付こうとしたが、

「——！」

ユーフェミアの強い光を宿した蜜色の瞳に睨みつけられ、足を止めざるを得なかった。

ここで美桜が駆けよってしまうと、女性に本当のことを見抜かれてしまうかもしれない。そうなってしまえば、彩乃の演技も身体を打ったユーフェミアの痛みもすべてが無駄になってしまう。

美桜は駆け寄りたい衝動をぐっと堪え、ユーフェミアから視線を引き剥がすために彩乃へと無理やり目を向けた。

彩乃は今、己の命をかけてユーフェミアを守っているのだ。自分が本当の守り主だと言えば女性は自分の命を狙ってくると考え、自分が身代りになってユーフェミアを守ることを決断したのだ。

「私をつ……馬鹿にするなああ——！」

女性は空気を揺るがすような叫び声とともに、その場から姿を消した。

「彩乃！ 気をつけてください！」

ユーフェミアはそんな細い声を限りに叫び、

「——神の愛娘、か」

この場で唯一その名を知っている蓬は、女性の特殊な瞬間移動能力の名称をふと口にした。

どこから現れても構わないよう、彩乃は神経を尖らせてずっと身構え、

「——あああっ！」

刹那、彩乃の背後から猛々しい声とともに疾風が吹き荒れた。

彩乃が風を感じた瞬間、可憐に宙を飛ぶ黒蝶のようにひらりと前方へ跳んだ。地面が近付くと、しなやかに身体を丸めて受け身を取り、一回転をしたのち地面に足をしっかりとつける。土で汚れたことなどお構いなしに、すぐさま後方を振り返る。

「——ちいッ！」

黒光りするくなくいによつて、彩乃が先刻まで立っていた地面が碎け散る。粉碎した土は宙を飛び、その向こう側からくなくいを握る女性の射るような視線が彩乃を貫く。

普通であれば粉碎などしないであろう地面が粉々になっていることを確かめた彩乃は、女性の怪力に驚きつつも素早く立ち上がり、バックステップで後退。すぐさま膝を折って身構える。

「畜生——！」

女性は地面に深々と刺さっているくなくいを抜こうとはせず、懐かふしうら新しいくなくいを引き抜いた。一点の曇りもなく研がれた鋭い両刃もろはが、女性を睨み据える彩乃を映し出す。

「はあああああ——ッ！」

女性は右手で逆手に持つたくなくいを身体みの左側に構え、彩乃の腹部めがけて真一文字に薙ぐ。

その動きをよんだ彩乃はひゅっという口笛のように短く鋭く呼吸をし、両足に力を込めて地面を蹴り、後方へと跳ぶ。女性のくなくいは獲物にありつけず、空を切り裂く音だけを上げる。

「っあああ！」

続いてくなくいは下から上へと縦に振り上げられる。彩乃は僅かに身体をのけ反らせつつ、再び軽く跳んで後退。またもくなくいは彩乃の身体ぎりぎりきりぎりで空を掻き切り、ふわりとなびいた彩乃の黒髪を数本宙に散らばらせた。

僅かに宙で舞っていた桜の花弁が、くなくいの動きによつて起きた風に乗って蒼い空へと飛翔する。

「くっそおおおッ！ 当たれえ——！」

反狂乱の叫びとともに、右足を大きく一歩踏み出す。女性は踏み

出すと同時に右手をぴんと真つすぐ伸ばし、くないを前方へ突き出す。が、またも彩乃は身体を少し横に反らしただけで、やすやすとくないをかわす。足に力を込め、身体をのけ反らせて後方へ大きくジャンプ。そのまま両手で着地し、さらに両手に力を込めて身体を僅かに内側へ丸めながら再度跳ぶ。小さく風を巻き起こしながら着地。そのまますくつと立ち上がり、身構えながら敵を睨む。彩乃の着地によつて起きた風に、地面に積もっていた薄紅の花弁が彩乃を取り巻くようにして躍る。

「どうしたのかしら？ 貴女、とっても弱いですよ？」

クスリとまた、彩乃は一笑。

「黙れえッ！」

女性は額とこめかみに血管を浮き出し、彩乃へ唾を飛ばしながら吠える。

彩乃は女性を挑発するようにして、困ったような表情を作る。

「私は本当のことを言っているだけなのですが……？」

「ガキがほざくなああ——！」

女性は地面を抉るほど強く足を踏み出す。くないを突き刺すつもりなのか身体の前につくなくないを構え、彩乃めがけて弾丸のように突進する。

ひゅつと彩乃は口笛のような息をし、地面を強くしっかりと蹴る。

「ああああああああッ——！」

裂帛の気合とともに突進してきた女性をあつさりとかわし、彩乃の身体は胡蝶のように宙を舞う。

女性の頭上を身体の前で両手をクロスさせた彩乃が、背面跳びの要領で跳ぶ。

皆が蝶のように飛ぶ彩乃を見つめる中、視線を集めている少女は背筋を使って僅かに反らしていた身体を伸ばし、横に一回転した。続いては腹筋を使って身体を前方に曲げ、小さく身体を丸めた状態で音も立てずに地面へ吸い込まれるように着地。彩乃が降り立ったそこは、

「白胡！ さっき言ったとおりによろしく！」

「分かった、アルよ」

クリーム色の髪を持つアンドロイド、白胡の右隣だった。荒い呼吸を繰り返している女性を睨み据えたまま彩乃は立ち上がり、白胡が自分へ差し出した物をゆつくりと慎重に手に取る。白胡の細い腕によって持ち上げられていたそれは、かちやりと心地よい小さな音を立てながら彩乃の手におさまる。

——彩乃の手がしっかりと握ったもの。それは、黒光りする鞘に覆われた、刀だった。

「ひっ………！」

「……っ！」

「………！」

「——うん」

艶めく黒鞘に収まっている刀に、全員の視線が注がれる。腰が抜けているのか、未だ立ち上がれずにいるユーフェミアは口元を押さえながらも小さな声を上げ、海棠は驚きで目を睜り、美桜は陰しくも興味深げな顔つきで彩乃を見つめ、蓬は楽しそうな表情のまま頷いた。

「な、に——！」

女性は双眸を見開き、後方に降り立った彩乃を見つめる。

刀をその右手に握り横に構えている彩乃の立ち姿は凛々しくも美しく、それが握られていることに、一片の違和感もない。まるでそこにあることが当たり前であるかのように、すらりと伸びる刀は彩乃の手に収まっている。

彩乃の左手が、黒鞘を軽く握る。刀は右方向へと引かれ、イイイイ……ンと刃を振動させながら彩乃は刀を鞘から滑らかな動きで抜き放った。己の白刃を露わにした刀からは、ため息の様な息吹が聞こえるような気さえする。

時が緩やかに進んだような気さえしたが、彩乃が白胡のそばに降り立ってから僅か十数秒ほどしか経っていない。

黒鞘を彩乃は後ろの白胡へと渡し、右手で柄を握る刀を空を切り裂きながら振るう。刀は彩乃の動きのままに滑らかな軌道を描き、鋭い唸りを上げる。

彩乃は刀を身体の前で構え、そつと右手に左手をそえる。視線は女性に注がれたままだ。

「覚悟することね。お馬鹿な刺客さん」

「その口をいい加減、閉じてやる！」

憤りによって動きが大きくなり、無駄な力も入れ過ぎている女性はかなり体力を消耗しているのか、肩で息をしている。その黒い瞳は、獲物を狙う獣のように鋭い。

「はああああッ！」

女性は唸り、勢いよく走り出す。土が、女性のはくわらじの裏から飛び散る。

「——っ」

彩乃は女性を見すえたまま、自分めがけて駆ける女性を迎え撃つかのように地面を蹴る。

「はあ！」

女性が、間近に迫った彩乃の首へとくなくいを横へ薙ぐ。

「これで、終わりだああ！」

光線を放つようにして閃くくはないは、残像を残しながら流れ――

時が、止まる。まるでスローモーションの映像を見ているかのように、ゆっくりと時が流れる。

淡い桜色の花弁。閃く白刃。ほとばしる鮮血。目に沁みる空の蒼。大きく開かれる瞳。

「——がはっ！ ああああああ——！」

鼓膜をつんざくような、鋭い悲鳴。派手な音を上げながら、身体が傾き地面へ向けて倒れゆく。返り血に濡れた、真つ赤な刃。彩乃の首や頬にかかる、赤い雫。

「うっ、あ。げほっ！ ぐッ。ゴホッ！ ゴホッ！」

女性の口から溢れだす、大量のどろりとした粘り気のある血。

鋭い光を放ち続けている、彩乃の瞳。その手に握られているのは、赤く濡れた刀。

時が、景色が、スローモーションから解放される。

「くっ、そ……。何故、こんな、小娘、に私がああ——！」

地面に倒れ、腹から真紅の血を流す女性は脂汗をかいた顔で彩乃を睨みつけながら、絶叫する。

先ほどの戦闘時、自分の首を狙うくないを体勢を低くして逃れた彩乃は、ガラ空きになった女性の腹部を刀で横に薙いだ。くないは最後の最後まで彩乃の血を浴びることはできず、先ほど抜かれたばかりの刀が女性の血にまみれることとなったのだった。

「うっ、ぐっ。はあ……。はあ……。くそっ——。何故……。何故……。私が、負けたっ、んだ……。うっ。はあ……。はあ……。」

女性は荒い呼吸を続け、虚ろな瞳から、一滴の涙をこぼした。

誰も、何も言葉を生み出しはしない。人々は沈黙し続けることを選択し、口を閉ざす。

「——それはな」

ふいに沈黙を破ったのは、のんびりとした緊張感の欠片もない声だった。

女性の荒い息が響く中。ふいに上がったその声に、皆が視線を声の主へと向ける。声の主、蓬は地面に横たわる女性をじつと見つめたまま、ゆっくりと口を開く。

「君を切った黒髪の少女、彩乃が、君が最初に捕まえていたユーフェミアちゃんを——本物の守り主を、守るために戦ったからだよ」
道に身体を伏せているユーフェミアが、はっと目を見開く。

「私は、騙さ、れ、たのか……」

女性は苦しい呼吸の中でやっとそれだけ言い、蒼白の顔に自嘲気味の笑みを微かに浮かべた。

蓬は、瞳孔が開きかけているかのように虚ろな女性の瞳を見つめ、静かに言葉を紡ぎ始める。

「誰かを守ることは、決して容易いことではない。守ることは、殺すことよりも断然^{だんぜん}難しい。でも、誰かを守ろうとする気持ちは、他の何よりも強いんだ。自分の身や命より、他者の身と命を思う強い心。大切な人を守るのだという、ゆるぎない決意。恐怖を押しつけて、行く手を阻むたくさんの壁に挑む勇ましさ。そんなものが集まってできたのが、？誰かを守る気持ち？だ。その気持ちは、決してやわなものではない。——彩乃は、そんな気持ちを持って刀を振るったからこそ強かったんだ。ユーフェミアちゃんを殺す、という気持ちだけしか持っていない君よりも、はるかにね」

ユーフェミアは、返り血に汚れた彩乃を見上げ、その蜜色の瞳を潤ませた。そんなユーフェミアの反応に、彩乃は困ったような微笑

みを浮かべる。

女性は二人のやり取りを一瞥した後、ふんつと小馬鹿にするように鼻で小さく笑った。

「こんな、こと、で……、私が、改心する、と、思う、なよ……。私は、刺客、だ。殺しを、する、だけ、だ……。絶対に、私は、お前を、その、金髪、女を……殺し、秘宝を、奪って、みせる……！」

女性は最後に一度だけ血交じりの咳をこぼし、そのまま霧のようにふつと姿を消した。後に残されたのは、赤黒い溜まりをつくり上げている女性の血と、地面に刺さったままの一本のくれないだけだった。

女性の姿が完全に消えた後、美桜はすぐさまユーフェミアへと駆け寄った。が、ユーフェミアは美桜の進行を手の平を差し出して止め、桜の木に寄りかかりながら自分で立ち上がった。

ふいに刀を握る彩乃の右手が力なく垂れ、刀の切っ先を地面に突き刺した。それはまるで、突然刀が重くなってしまったかのように見えた。彩乃は安堵したかのような、自分へ押し寄せる疲労感に顔を歪ませているかのような表情をする。

「彩乃……」

ユーフェミアのか細くも凜とした声が、彩乃の耳へと僅かに、しかししっかりと届く。彩乃はふつと、視線を桜の木の下のユーフェミアへと向ける。桜が風に散る中、ユーフェミアは涙を浮かべた瞳で、桜にも負けぬ美しく綺麗な笑みを浮かべた。

「ありがとう、ございました……。貴女には、とても感謝しています」

ユーフェミアは桜の幹から身体を浮かせ、深々と腰を折った。礼を言われた彩乃は、照れているのか顔を赤く染め、その表情を隠すかのように僅かに俯けた。

海棠と蓬が笑顔で二人を見つめる中、

「——彩乃さん」

彩乃の数メートル近くまで歩み寄ってていた美桜が、顔を赤く染めている少女の名を呼んだ。

その声には気のせいか、僅かな敬意がこもっているように思えた。
「うん？ 何だい」

彩乃はいつも通りの、少し年寄りくさい軽い口調で返事をする。
その右手には、まだしっかりと刀の柄が握られている。

美桜は切れ長の瞳で静かに彩乃を見つめ、口を開く。

「私は、貴女の行動力と力量、そして何より——主様を守るその心の強さに、感動いたしました。同時に、主様をお命を守ってくださいったところに感謝いたします。そこで、私からの提案なのですが——守り主と、秘宝の守り手の指名を、貴女に譲りたいと思うのです」
美桜の言葉に、彩乃、海棠、ユーフェミアが一樣に息をのんだ。
蓬だけは、すべてを見透かしたようなその瞳で薄く笑っただけだった。

美桜が見つめる中、彩乃は、

「えっと、それは……え？ だって、いいのかい？ あたしゃあんなとの勝負に負けたんだよ」

「ええ。そうです。しかし、先ほどの戦いをこの目でしっかりと見、貴女ならば守り手になることができるのでは、と思いました」

「えっと……え？ でも……。そりゃ、嬉しいし、守り手になりたけれど……」

彩乃の戸惑いながらも肯定するような言葉に、美桜は双眸を細める。

「では、貴女には守り手となる意志はあるのですね」

「——ああ。意志は、ちゃんとあるよ」

「——それは、守り手になるということが、どんなに厳しいことが重々承知の上での言葉ですか」

「もちろん」

彩乃は力強く頷く。その右手は僅かに汗ばみ、刀の柄が湿り気を帯びる。

「では――。今日、この場で、私は貴女に守り手の役目を譲り与えます。守り手たるもの、その身と命にかけて、守り主と秘宝を守りなさい」

彩乃は、鼻から大きく息を吸い込んだ。春の甘い香りが彩乃の鼻孔をくすぐり、肺の中をその香りに満たす。何処か遠くで、うぐいすがその軽やかな鳴き声を上げた。

「ああ。あたしは、この命をかけて、ゆうちゃんを、ユーフェミアを、守って見せるよ」

彩乃の落ち着いた、しかし強い響きを含む声。その声に、美桜が小さく顔を歪める。まるで、彩乃のことを心配するかのように。

顔を歪めたままの美桜は、唇を重たげに持ち上げ言葉をもらす。

「――では、彩乃さん。もう一つ、貴女に伝えなければならぬことが、あるのです」

美桜の苦しげに吐き出された言葉に、彩乃は怪訝に顔を傾ける。

「何だい。ゆうちゃんのためなら、あたしや何でもしてみせるよ？」

桜の薄紅色が、五人と一体を包み込む。皆の髪が様々な動きで、風になびく。

さらりと流れる桜の花弁。ユーフェミアを気にしながらも、少しでも彩乃との距離を縮めるために美桜は前へ歩み出す。美桜と彩乃の間に幾枚もの花弁が流れ、二人の距離が二メートルほどにまで狭まった後、

「——彩乃さん」

美桜は静かに彩乃へ視線を向けた。その視線は決して厳しく鋭いものではなく、優しさに似た柔らかさを浮かべながらも、深い憂いを帯びたものだった。

彩乃は物悲しげな美桜の瞳と沈んだ口調に何か不穏なものを感じ取りながらも、まっすぐに怯むことなくその視線を受け止める。

「——何だい？」

「守り手となる代わり、貴女は大切なものを一つ、犠牲にしなければならぬのです」

「犠、牲……？」

彩乃は、訝しげに首をかしげる。心拍数は不安によって僅かに上げられており、その頬は朱を失っている。

美桜は入江家を訪問して来た時とは一変して、強気で冷酷な雰囲気をつかり失っていた。今その身体に纏っているのは、憂いばかりが色濃く染み出している雰囲気。しかし、その雰囲気を美桜が纏おうとも、不自然でアンバランスだとは思えなかった。むしろ、暗いその雰囲気はぴたりとあっている。それはまるで、美桜が最初に纏っていた強気で冷酷な雰囲気はただの偽物であつたかのように。本当に纏うべき雰囲気は、この陰鬱なものであるかのように。

静かに言葉を発する美桜は、ゆっくりと頷く。

「はい。それは——主様、月倉ユーフェミア様との、友人関係です」

彩乃の眉間が、深く皺を刻む。「え……？」という疑問の声が、彩乃の口からふいにこぼれ落ちる。

彩乃の戸惑いをそのままに、美桜は言葉を紡ぎ続ける。

「守り主と守り手は、あくまで主と僕^{あかししもへ}。その二人の間に、友情があつてはなりません。友情、愛情……。そういった類の感情は、咄嗟の冷静な判断力に一瞬の迷いを生み出す可能性があります。迷いは最大の敵です。どんなに些細な迷いであろうとも、それは変わりません。——守り手は、守り主を友人としてではなく主として接さねばならないのです」

「——つてことは、つまり……あたしとゆうちゃんは……友達で、居ちゃいけないって、ことなのかい……？」

彩乃の声は掠れ、意気消沈したかのように力がなかった。彩乃の瞳を見つめる美桜は、目の前に立つ少女の瞳から明るい光が少しずつ失われていくことを知りながら、残酷にも小さく頷く。

美桜の返答に、彩乃の瞳は悲しみに沈む。明るく宿っていた光の代わりに、悲しげな悲哀に満ちた暗く重い色が瞳を満たし、しかし決意を秘めたような鋭い光だけは失われずに灯り続けていた。

「——そうかい」

以外にも落ち着いた声音で、彩乃は静かに答える。その視線は下へと、地面へと落とされる。

切っ先が僅かに地面に刺さっている、右手でしっかりと握っている刀を、彩乃はそつと地面から抜いた。血に濡れた白刃は、太陽の光を浴びて美しく怪しく閃く。彩乃は黙って顔を俯けたまま、すぐ隣に立つ白胡へと横向きにして握った刀を差し出した。碧眼を持つアンドロイドは、彩乃を心配げに見つめながらも刀を受け取り、彩乃の体温がまだ残る柄を血の通わない冷たい手の平で握る。

「——ユーフェミア様の一番近くに居た者として、ユーフェミア様、海棠さん、彩乃さんの三人の友情を断ち切らなければ、ユーフェミア様が守り主になった時、三人ともが不幸になるということは分かっていたことでした。だから冷たい態度を装い、三人の友情を否定

するようなことをしたというのに……。やはり、彩乃さんは、守り手になるべきではないのかもしれませんが——」

美桜の口から語られる真実に、彩乃はしっかりと首を振った。

「いいや——。あたしは——」

中途半端に言葉を切る彩乃。その視線はやはり地面へと注がれたまま、上がりはしない。

「……………」

海棠が心配げに見つめる中、彩乃はゆっくりと前へ踏み出した。その足取りは確かなもので、躊躇いは微塵も感じられない。ただしっかりと、前へ——ユーフェミアの方へと踏み出される。

美桜の隣を俯いたまま彩乃は通り過ぎ、その身体はユーフェミアへと近付いていく。

桜と風を纏いながら、彩乃は桜の木のそばに立ちつくしているユーフェミアの一メートル手前まで歩み寄った。彩乃はそのまま顔も上げずにゆっくりと前方へ身体を傾け、そして——静かに膝を折ると、ユーフェミアへと跪き、深々と頭を下げた。

「……我が命をかけて、私は貴女をお守りいたします。——主様」
「……………」

ユーフェミアは絶望したかのように顔を歪める。

しばらく沈黙を続けていたが、やがて重たげに口を開き「はい——」と掠れた声で、短く小さな返事をした。

何の喧騒もない、虚しいほど広い田畑と山だけが広がる静かな田舎。舗装もされていない道や畦道が伸び、畑のそばに藁ぶき屋根の家々がぽつぽつと建つ。

春風と薄紅桜の花弁に包まれている景色の中、沈黙の人々が一件の家の前で立ちつくしていた。

その重苦しい沈黙を破るようにして、一匹の雲雀うさぎが甲高い鳴き声を上げながら、遙かな蒼穹へと向けて高く高く飛び上がった。

*

*

*

その後、ユーフェミアと服を着替えた彩乃は秘宝を守っていると
いう屋敷へと旅立ち、美桜さんは中心都市へと帰り、某は砂漠の薔
薇を求めて旅立った。

これが本当にハッピーエンドだったのかは、誰にも分からない。
彩乃にとって、ユーフェミアを守れることは幸せなことであろうが、
その願いを叶えるために彩乃はユーフェミアとの友情という大きな
代償を払うこととなった。

ユーフェミアを守るはずであった美桜さんはその任務を失い、今
は何処で何をしているのか某には分からない。

他人の気持ちは、結局他人には分からないものだ。某には彩乃の
気持ちも、ユーフェミアの気持ちも、美桜さんの気持ちも分かりは
しない。逆に、某の気持ちは誰にも分からないことだ。

しかし——一つだけ、分かることがある。それは——

某は、彩乃のために旅立ったことを少しも後悔していない、とい
うことだ。

*

*

*

「北にオアシスがある砂漠の街……。やはり、ここで間違いないようだな」

人氣が全くない、崩壊した砂上の街。家はすべて破壊されており、残っているのは石の壁の残骸のみ。元壁の下部分だけが砂に突き刺さり、たくさんの家の壁が奇妙なストーンヘンジを作り上げている。海棠は僅かに残った家々の壁から、崩壊する前の美しかったであろう街の面影を見出だしながら、密やかなため息をついた。

「……本当に、徹底的に破壊してくれたな」

乾いた砂と、その上に散らばる石壁の残骸を踏みしめながら歩む海棠は、悲愴に暮れるように顔を歪める。

「これでは、砂漠の薔薇の手がかりさえつかめないではないか。――確かな情報筋から、ここに砂漠の薔薇が祀られていると大金を払ってまで聞きだしたというのに。……確か、街の中心の大聖堂に祀られていると言っていたな」

街の中心へと足の先を向ける海棠は、まるで自分の言葉に呆れるようにして大きなため息を漏らした。

「街の外れがこの有り様だ。中心部にある大聖堂など、もつとひどいことになっているに決まっているではないか。砂漠の薔薇も祀られたいたのだし……」

海棠は双眸を細め、歩みを止めずに周りに広がる瓦礫の街を眺めた。見晴らしは大変良いが、景観としては大変悪い。荒涼とした砂漠の風景は、胸の中の虚しさをただ掻き立てるだけで、他の何も与えてはくれない。

海棠は本日三度目のため息を漏らしつつ、歩を進める。その時、

「？」

地を踏みしめる足の先に、何かを蹴ったような感触が伝わってきた。どうやら石ではないらしく、それは硬くはなかった。訝しく思った海棠は視線を下げ、まじまじと足先を見つめる。見た感じ、それは縦に長い石壁の残骸に見えた。が、それは木の枝のように細く、丸く立体的で、何より先端が五つに枝分かれしている。

最初、それが何であるのか分からずに眉をひそめていた海棠だったが、

「——あ」

唐突に、その正体を悟った。それは、殆ど砂に埋もれて干からびた、人間の腕だった。

海棠は、地面に埋もれる腕を見つめ——自分が今踏んでいる砂の下に埋まっているであろう人間の死体を思い——憂いているとも思える表情で、痩せ過ぎているかのように骨ばった腕を見つめる。

「……この人たちは、一体どんなことを思いながら、死んでいったのだろうか……」

海棠は沈鬱そうに口を開くと、誰に問いかけるでもなく囁く。漆黒の瞳は陰り、まるで大切な仲間を死から助け出せなかったかのうに、海棠は申し訳なさそうな暗い顔で頭を下げる。

「すまないな。某がもう少し早くここへ辿りついていたら、砂漠の薔薇の略奪を阻止できていたかもしれないのだが……。いや。それは傲慢すぎる考えに過ぎぬな。某一人では、結局——どうしようもなかったか……。某自身も砂漠の薔薇を求めているのだから、結局この街に歓迎はされなかっただろう」

海棠は首を振りつつ視線を上げ、しっかりと前を向く。瞳はすでに憂いに沈んではいない。そんな海棠を、まだ低い場所に位置する太陽が静かに見返していた。

街の中心。そこに立つのは、一つの大聖堂。もともとこの街の人々は神への信仰が厚く、他者のための願いを叶えるという神聖なる

砂漠の薔薇を深く尊び、大切に守っていた。

もとはと言えば砂漠の薔薇は数万年も昔、今でも謎が多い一人の魔術師が石膏や重晶石でできる本物の砂漠のバラを模して、とある砂漠の街で創ったものだ。その魔術師は今でも生きているなど言う噂もあるが、それが本当かどうかは誰にも分からない。

そして、砂漠の薔薇を創った砂漠の街というのがどうやらこの街らしく、しかし世間では砂漠の薔薇を生み出した街はすでに崩壊したという噂が流れているため、その事実を知る者はほばいない。そのため、この街に砂漠の薔薇があるということを知っている人もごく僅かだ。

——そう、海棠は信頼している情報屋に聞いた。大金を払って。

「——くそつ。イライラするな。せっかく情報を聞いたというのに……今度こそ、彩乃の病を治せると思ったのに……」

海棠は俯きながらやり場のない怒りを砂にぶつけ、ブーツの先で乾いた砂を蹴る。砂はあっさりと舞い上がり、風によって流される。俯いたままの海棠は本日何度目かのため息を落とした。ため息は地面に吸い込まれるようにして落ち、海棠の瞳も陰る。

「——次の街に行った方がいいのだろうか……。砂漠は危険だからな。早めに次の街へ旅立とう」

海棠は半ば諦め気味に言葉を漏らし、そして、その身体が、ふいに大きな暗い影に覆われた。

scene 31

いや、覆われたのではない。海棠が、砂の上に落ちる大きな黒い影の中へと入ったのだ。

「え——？」

海棠は意味が分からず、視線を上げる。視線は砂を黒く染める濃い影をしっかりと見、影を落とす建物を捉え、そして——

その瞳が大きく睜られ、薄く開いた口が驚愕に息をのんだ。

あつたのだ。街の中心に。

——砂漠の薔薇を祀っていたといわれる、大聖堂が。それも、破壊されていない綺麗な形で。

「嘘だ……。何故……。幻では、ないよな……？」

海棠は信じられないという風に口をポカンと開き、大きく開かれた双眸で大聖堂をしっかりと見つめる。

街は壊滅状態だというのに、大聖堂だけはまるで別世界のもののように綺麗なまま、静かにそびえる。唯一破損しているのは、入口の両開きになっている木戸のみ。そこだけは、見事なまでにバラバラにされていた。扉のなくなった大聖堂の入り口から見える赤い絨毯が敷かれた中の床に、木端微塵になった木屑が四方へ散らばっている。

「扉を壊したのは侵入を円滑にするためだとして……何故、大聖堂を壊さない？　このように、街を壊しておいて……」

海棠は後方に広がる街を振り返り、そこに広がるあまりに寂しく残酷な光景に双眸を細めた。僅かに残る壁の残骸を良く見ると黒くすすけた部分がある。そこから、街はおそらく炎上か爆発によって崩壊したのだと分かる。どちらにしても、火が関係していることは明らかだ。

燃え盛る炎。人々を飲み込み、残虐にもその身体を焼いていく。大半の者は煙によって中毒死しただろう。炎に焼かれたためのシヨ

ツク死、または肉がただれるほど焼かれて死に至ったか。そのどちらかによる死亡原因もあるかもしれない。何にしても、苦しみながら死んだことに変わりはない。

炎。悲鳴。腐臭。熱風。

人々の泣き叫ぶ声が耳に届き、腐臭が風とともに鼻孔を刺激したような気がし、海棠は荒涼とした街並みから視線をそらした。その瞳が捉えるのは、黒くすすけることなく建っている白壁の大聖堂。「本当に、分らない……。砂漠の薔薇を狙い、この街を破壊した者は一体何を考えていたんだ？」

海棠は眉をひそめながら、歩を進める。向かうは大聖堂の中。そこにはすでに砂漠の薔薇はないだろうが、少しでも砂漠の薔薇の手がかりが見つかるかもしれない。そんな淡い希望を捨てきれず、海棠は大聖堂へと足を踏み入れた。刹那、

「ぐっ——！」

その鼻が、肉が腐ったようなひどい腐臭に襲われる。海棠は反射的に右手を伸ばし、首に巻いている砂よけのための布で鼻を覆った。その顔は先ほどよりさらにしかめられ、吐き気が喉元まで込み上げる。

臭いばかり気を取られていたために海棠は腐臭の原因が理解できずにいたが、やがて漆黒の瞳であるものを捉えた。それは――

あまりに残酷な死を辿った、人間の死体。

赤い絨毯に赤黒く染みを作り上げる血の量は半端ではなく、中心に伸びる絨毯の敷かれた通路を挟んで綺麗に並べられた木の長椅子や、白い石でできた壁にも血は飛び散っている。

壁の高い位置に取りつけられているステンドグラスから色鮮やかな斜光が降り注ぎ、大聖堂内の残酷な光景を照らし出す。あまりに美しい虹色の光と、不気味な赤黒い染みは大変アンバランスに見える。

血を生み出す死体は、長椅子に隠れているものもあれば、絨毯の上に転がっているものもある。それぞれがまちまちの格好で、同じ

息をしないものとして横たわる。死体はすべて、刃物のようなもので切り裂かれたような跡があり、身体はほぼ原形をとどめていなかった。人間、というよりは血によって赤く染められた布を纏う肉の塊、と言われた方が頷ける。

中心の赤い道を行った突き当りの壁には大きな十字架が掲げられており、その十字架が交差した中心の部分は不自然な穴が開いていた。

「——なるほど。ここに、砂漠の薔薇が埋め込まれていたわけだな」
少しだけこの残酷な風景から立ち直った海棠は、ブーツをはいた足で乾いた音を響かせながら通路を歩む。足音は反響し、静寂に満ちていた大聖堂に音が蘇り始める。

海棠の足はやがて、その身長よりはるかに大きな十字架の前で止まった。十字架は木でできているらしく、僅かに朽ちていた。丁寧に白く塗られているが、その塗装も所々がはげている。何より、中心で地味ながらも神々しさを放っていたであろう砂漠の薔薇が欠けている。十字架の中心にあるのは、虚しい穴のみ。

海棠は未だに布で鼻を覆ったまま、左手の人さし指でそっと十字架の穴をなぞった。指にざらりとした堅い木の感触が伝わる。

海棠は指を空洞に添えたまま、瞑想をするように瞼をそっと下ろした。しばらく瞳を閉ざしていたかと思えば、すぐに漆黒の瞳を露わにする。その瞳には、僅かばかりの希望が宿っていた。

「——よし。まだ魔力が僅かに残っている。砂漠の薔薇を盗んだ犯人も、そう遠くへ行っていないはずだ」

海棠は口元をほころばせながら、しかしすぐにその笑みを消し去った。顔に浮かんでいた喜色は一瞬で消え、表情が曇天の空のように暗くなる。

「だが——犯人に追いついたところで、どうやって奪い取る？ 街を一つ破壊できるほどの相手に、某は勝てるのか……？」

自問し、すぐに首を振る。

「無理だろうな。力尽く奪うことは不可能だな。だが、このように

残酷な者がまともに話を聞くと考え難い。……一体、どうしたら良いのか」

憂いに沈む海棠の声。ひっそりと独り言を並べていたそれは、ふいに途切れる。

突然訪れた静寂。海棠は指を十字架に空いた穴から離し、身体を反転させ後方を振り向く。足を動かした際に生まれた乾いた音だけが、沈黙の中に余韻を残す。

「……なあ。おぬしは、どう思う」

ふいに問いを口にした海棠の視線の先。そこには、海棠側から見て右の列に並んでいる木の長椅子がある。海棠はその中の一つを一心に見すえているようだ。

沈黙。重く、息苦しいと感じるほどの静けさに満ちた空気があたりを包む。

「……なあ。そこに隠れている子供。何か答えてはどうだ？ この中に足を踏み入れた時点で、おぬしの気配には気付いている。姿を現せ。別に某はおぬしを取って食ったりはしない」

海棠の問いは、沈黙によって抹殺された。

呆れたようなため息。眉をひそめている海棠は、仕方ないという風に首を振ると長椅子の中の一つへと足を一歩前へ出した。軽い足音が大理石の中に反響し、

「動くな！」

それかき消すようにして、叫び声に近い声が響き渡った。

虚しくも鋭く反響する幼い子供の声。血に染まった大聖堂の中に、高音の音が満ちる。それはやがて、吸い込まれるようにして消えた。声を発した者は、唐突に長椅子の影から飛び出してきた一人の子供だった。小豆色の短髪を覆うようにターバンを巻き、褐色の肌と鳶色の瞳を持ち、白い布を纏うような形のいかにも砂漠の住民といった服装をしている。

子供らしい高い声をしたその子供は――

両手で、一丁の銃を握っていた。

銀色のバレルと木製のストックでできた、子供が持つには大きい銃を砂漠の民の子供は重たそうに両手で持ち上げるようにして持っている。銃口の狙いは、手が不安定に揺れるため上手く定まっていない。

「言っとくけどな、兄ちゃん。オレを、甘く見んじゃねえぞ！ 銃だって、初めて撃つわけじゃ、ないんだからな！ オレは男なんだから、銃だって、撃ったことくらいあるんだ！」

子供は、銃を持つ両手と身体を支える二本の足をあからさまに揺らす。銃口は海棠を捉えたり捉えなかったりしているというのに、すでにその右手の人差し指は引き金へとかけられていた。

初心者丸出しの子供は、しかし視線を海棠から外そうとはせず、子供にしては厳めしい表情ででガンを飛ばす。

「……少年。悪い冗談はやめろ。銃は初心者が持つものではない」「うるせえ！ オレは、初心者なんかじゃ、ない！」

子供は叫び声を上げ、その小さな身体に力がこもる。刹那、子供も気づかぬ間に自然と力が入っていた指が引き金を引き、銃口が火を吹く。

空気を揺るがすような銃声が大聖堂の中に放たれ、子供の叫び声をかき消した。短いはずの銃声が、長く長く尾を引く。その音に重

なるようにして、激しい破壊音があたりを包み込む。

完璧な静寂がなかなか訪れない大聖堂の中、

「……つと、危ないなあ」

緊張感が僅かに欠けているような、蓬の声の響きに似た海棠の声が上がる。声は穏やかさを含んではいたものの、その顔は真剣そのものだった。目は恐怖と焦燥に似た感情をうつしており、顔はこわばっている。その表情を消さぬまま、銃口に狙われていた無傷の青年は肩越しに後ろを振り返る。

子供が放った弾丸は的である海棠から大きく反れ、大聖堂の白壁に新たに傷を生みだしていた。弾丸は硬い石の壁をいとも容易く破壊し、煙を巻き上げる貫通した穴をあけていた。煙の向こうで、壁の穴越しに砂漠の砂が垣間見える。

海棠は表情をいくらか和らげると、感嘆の口笛を小さく鳴らした。「凄まじい破壊力だな。ということは……」

海棠は顔を反転させて正面に向き直り、やはりな、と呟く。

「つ……」

海棠の視線の先には、目を丸くしたまま銃を持った子供が赤い絨毯の上に尻もちをついていた。銃口からは、火薬のにおいを巻き上げる白い硝煙が立ち上っている。

「反動も、大きいだろうな。しかも先ほどの発砲は予期せぬことときた。ま、狙いが定まらないうちから引き金に指をかけていたのだから、仕方のないことか」

海棠は淡々と言葉を紡ぎ、信じられないという風に己の手の中にある銃をまじまじと見つめる子供へ一歩近寄る。

「少年。大丈夫か？」

ポカンと口を開けていた子供は、はつと口を引き締める。

「うつ、うるさい！ お前なんか、心配なんてされたくないんだよ。手前^{てめえ}なんか、死んじまえばいいんだッ。糞つたれ！」

罵詈雑言の数々を並びたてる子供に、海棠は呆れたような眼差しを向ける。

「ひどい言い草だな。人を突然撃つておいて、その言い方はなんだ？ 某は何もしていないだろう？」

「とぼけるな！」

子供は銃を手にしたまま、素早く立ち上がる。立ち上がった瞬間に足をふらりと揺らしたが、しっかりと床の上に立っている。子供は重いであろうに右手だけで銃を握ると、それを闇雲やみくもに振り回しながら海棠に訴え始めた。

「お前が、街をメチャクチャにしたんだろツ！ オレは見たんだからな！ お前は魔術師で、魔術の力を使って、街を壊したんだろツ！」

銃を振り回しているのではなく、銃に振り回されているようにさえ見える子供に、海棠は真剣な眼差しを向ける。

「——少年。早とちりをするな。某が魔術師だということは認めるが、某は街を壊してなどいない」

「五月蠅い！ 五月蠅い！ 黙れツ！ オレは見たんだ！ 若い男がこの街を大きな爆発で壊して、砂漠の薔薇を奪ったのを！」

子供の必死な発言に、海棠は双眸を見開く。

「少年！ おぬしは、砂漠の薔薇の盗み主を見たんだな？」

「五月蠅い！ それがお前なんだろツ！」

「違う。某は、街の破壊や爆発などといったことに魔術を使ったりはしない！」

海棠は焦るように言葉を素早く発する。

明らかに苛立ちを見せ始めた子供は唸るように叫び、銃をしっかりと両手で握りなおした。

「ふざけんなあ——！」

銃口が、海棠を捉える。黒々とした目のような銃口に射竦められた海棠は、両目を見開いたまま息をのむ。

言葉になっていない叫びを上げながら、子供の指が意図的に引き金を引く。海棠を捉えている銃口は唸りを上げ、硝煙とともに弾丸を撃ちだす。金の空薬莢が不気味に閃きながらはじけ飛び、銃を握

る子供の腕が反動によつて大きく上へと跳ね上がる。小さな身体はそのまま後ろへと倒れそうになりつつも、数歩たたらを踏んだだけで尻もちをつきはしなかった。

「――っ痛」

海棠は顔を歪め、焼けるような痛みに裂かれた右頬を、反射的に右手で抑える。頬を抑える右手の指に、どろりとした生温かい感触を感じる。頬に触れされていた右手をすぐに離し、目の前へと移動させる。

「やはり、か。少し頬を掠めていったな」

頬を抑えていた右手は、真っ赤な鮮血で汚れていた。

銃を持った子供は、真紅に染まった海棠の頬と右手を見ると息が詰まったかのように呼吸を中断した。戸惑いに睨られた鷲色の瞳を見る限り、不気味なほど鮮やかな真紅の血に怖気づいているらしい。「全く。後で手当てをしなければならぬな」

海棠は右手を口元まで持つてくると、そこに付いた血を真っ赤な舌で舐めた。口の中に、錆び臭い鉄の味が広がる。

銃口を下へと向け、おろおろと視線を彷徨わせている子供を見せると、海棠は厳しい眼光で子供を睨みつけた。

「少年。おぬしは、こんなことがしたいのか？」

瞳とは裏腹に、声は以外にも落ち着いている。海棠の唐突な問いに顔を上げた子供は、一瞬で海棠の眼光に射られ言葉を失った。

鋭利な刃物のような瞳で睨み据える海棠の瞳に、砂漠の民である子供は畏怖の念を抱き顔をこわばらせる。

「おぬしは、人を傷つけるようなことがしたいのか？ 子供。質問に答えよ」

海棠は瞳の冷酷さを和らげぬまま、感情の淡々（あわあわ）しい冷たい声音で言い捨てる。その右頬に真紅の血が流れ、縦に一筋のラインを流れるように引いた。

子供は瞳に焼きついて離れない鮮血の紅蓮に一瞬息をのみ、魅入られているかのように視線をそらさずそれを見つめる。しかし、その視線は決して海棠のそれとぶつかることはない。

海棠は鮮血を食い入るようにして見つめる子供から、その手に持つている銃へと視線を下げた。

「少年。銃とは生き物を傷つけ、大切な命を奪う代物だ。そのように危ないものを、おぬしのような子供が持つな」

海棠の諭すような声音に、子供の手の平に力がこもる。

「だって……。だって……。復讐してやりたいんだ！ オレの住んでた街を、こんなつ、メチャクチャにしゃがって……。！」

子供は俯き、ぼろぼろと瞳から涙をこぼし始めた。涙腺から溢れる透明な雫は子供の頬を止めどなく流れ、それを止めようと手が白くなるほど握りしめた左手の拳で懸命に涙をぬぐう姿は、その子供の幼さを改めて感じさせるものだった。

瞳から次から次へと落ち続ける涙は砂をはじきながらその上に落ち、淡い黄土色の土を濃く染めていく。

海棠は必死に涙を抑えながら肩を震わせてしゃくり上げる子供のそばへ寄り、膝を折って視線の高さを同じにした。

「少年。その悲しみは、大変理解できる。大切な者を失うことは、自分の身体の一部を失ってしまうかのように、悲しく辛く苦しい。

だが、復讐をしようと考えてはいけない。――某が、この街を壊した者ではないということは、分かってくれたか？」

呼吸さえも苦しい子供はこくりと小さく頷き、泣き声ながらに訴える。

「それっ、は、分かって、る……。けどっ、何っ、で、だよ……。だって、家族、もっ、友だ、ちも、家、もっ、街っ、も、全部、壊されたっ、ん、だぞっ……」

「ああ。しかし、この街を壊した者を殺せば、その破壊者を大切に思っている人から、おぬしが恨まれ、殺されてしまうかもしれない」。海棠は射るような鋭い視線を和らげ、子供に優しく語りかける。その話の内容は決して優しいものでも、平和的なものではないのだが。

子供は徐々に収まってきた涙をぬぐい去り、力が抜けたかのように拳をすんと下へ下ろした。

「でも……」

「復讐は復讐を呼ぶ。復讐は、連鎖するものなんだ。ここでおぬしが殺しを行えば、次々に復讐の輪が広がるのだぞ」

「けど、オレを大切に思ってくれている人は、もう、いない……。だから、オレが殺されたって、復讐は広がったりしない」

真っ赤になつた目を真っすぐに海棠の瞳へと向け、子供は同じ高さにある漆黒の目を真剣に見つめる。真っすぐな、決意を秘めたような鳶色の瞳に、海棠はふっと柔らかな笑みを向けた。その笑みは、見た者もつられて微笑んでしまいたくなるほど、温かで抱擁感のある笑みだった。

笑顔を崩さぬまま、海棠は言葉を紡ぐ。

「そうだなあ……。もしおぬしが殺されてしまえば、次は某がおぬしのために復讐として殺人をするかもしれないな」

海棠の優しい笑みの中からこぼれた言葉に、子供は目を見開く。

「そんなん……。別に、いい！ オレのために復讐なんて、するなよっ」

「ほら」

海棠は子供の鼻先に、弾き出すようにして人さし指を突きつけた。子供は先ほどよりやや目を開き、僅かに顔を引く。

驚いている子供の反応を楽しむかのように、海棠は笑いながら言葉が続ける。

「おぬしがそう思うように、この街の人たちもおぬしが復讐をすることなど、望んでいないのではないか？」

「えっ……。あ——」

海棠は、最初の厳しい視線からは想像がつかないほど明るい眼差しで子供へ向けて微笑み、言葉に詰まっている子供の頭に巻かれた、少し黄ばんだターバンへポンツと手を置いた。

「わっ！」

子供は小さく悲鳴を上げ、海棠の手を捉えるようにして自分の頭へと左手を伸ばす。海棠は小さく笑い声を上げながら手を離し、服についた土埃をはらいつつ立ち上がった。

「まだ言っていないかったな。某は、海棠という名だ」

「は？」

唐突な自己紹介に、子供は疑問符を頭上に浮かべる。

「某の名だ。おぬしは、なんという名だ？」

s c e n e 3 4

子供は名を問われているのだと気がつき、疑問符をかき消す。

「あ、……えっと、ヤナ」

子供は何故か恥ずかしげに口ごもりながら、僅かに俯く。海棠は口元に薄く笑みを浮かべながら、長い髪を揺らして頷く。

「ヤナ、君だな」

「……ああ。あんたは、えっと、？カイドー？だよな？」

問うような視線で見つめてくるヤナに、海棠は口元に浮かべていた笑みを苦笑へと一変させた。

「……うーん。少し発音が違うが、名前は合っている」

海棠は「まあ、いいか」と独り言ち、「とりあえず外に出よう」とヤナに提案する。

ヤナは黙したまま首だけを動かして頷き、それを確認した海棠は外へと歩を進める。

血生臭い大聖堂の中に伸びる赤い絨毯の道をぬけ、海棠とヤナは熱と粒子を孕んだ乾いた風にあおられる。海棠の長い髪は滑るようにして風の中で泳ぎ、ターバンの隙間から出ているヤナの短い髪は小刻みな動きで激しくなびく。

砂交じりの新鮮な空気を短い呼吸である程度吸い込んだ海棠は、早朝より鮮やかに色付いてきた青空を見上げ眩しさに双眸を細めた。漆黒の瞳は、中点へと向かって行く太陽を静かに見つめる。太陽は重圧を与えるかのように、じりじりと砂漠に立つ者をその熱で焦がす。

「そろそろ気温が危ないな……」

海棠は視線を下げながら背へと手を伸ばし、上着に付いているフードを掴むとそれを目深にかぶった。天で輝く太陽から地上へと下げられた視線は、瓦礫と砂しかない街をぼんやりと見つめるヤナへと向けられる。

「ヤナ君」

「……えっ？ あ、な、何だ？」

ヤナははつと我に返り、自分より背の高い海棠を瞬時に見上げる。海棠の視線は、ヤナの瞳よりやや下へと向けてられている。その瞳が捉えているのは、ヤナの手に握られているままの銃だった。

「それは子供が持つには物騒だからな。某が持つておく」

「え？ でっ、でも……」

ヤナは眉をひそめて海棠を見つめる。右手で握る銃の引き金には、相変わらず人さし指がかかっていた。

「おぬしは初心者だろう？」

「ちっ、違う！」

「では、何故引き金に指がかかっているんだ？」

「え？」

ヤナは意味が分からないという風に小首を傾げ、腕を視線の高さまで持ち上げ右手人差し指をかけている銃の引き金を見る。海棠は笑いを堪えるように顔を歪め、ヤナの持つ銃を指さした。

「引き金は、的に狙いを定めるまで指をかけてはだめなんだ。銃を扱ったことのない某でも、それくらいの事は分かる。本当はおぬし、初心者なのだろう？」

海棠は馬鹿にするような笑みではなく、柔らかく労わるように微笑んでヤナを見る。その小さな身体にそぐわぬ銃を持つ子供は、虚をつかれたかのような表情で海棠を見上げる。

「知らなかったのか？」

海棠の問いに、ヤナは恥ずかしげに瞼を伏せながら殆ど分からないほど小さく頷いた。

「……そうか。あ。くどいようだが、某はこの街を壊してはいないからな」

「それは、分かった。よく考えたら、街を壊したヤツはカイドーより髪が短かったしな」

ヤナは俯いたまま小声で告げる。

海棠はヤナの言葉に僅かに双眸を見開いて驚きを見せ、

「……そうか。うん。分かってくれたのならば、良かった」

微笑みを消さぬまま頷いた。

「ああ。じゃ、じゃあ、ほらよ。でも、ちゃんと返してくれよ」

「分かつてるさ」

顔を上げたヤナは、渋々といった表情で海棠へと銃を差し出す。

その右手の人差し指は引き金にはかけられておらず、銃身に沿うようにして真つすぐに伸ばされていた。海棠はそれを確認した後、爆発物を取り扱うかのようにそつと銃を受け取った。

「では。預かっておくからな」

海棠は指を真つずぐにしたまま、腰に巻かれたベルトの背中側へとそれをさした。

「……なあ、カイドー」

銃を収めた手を視線で追っていたヤナは、遠慮がちに海棠へと問いかける。

「うん？ 何だ」

「……カイドーも、この街に砂漠の薔薇を探しに来たのか？」

「あ、ああ。まあ、な」

海棠の遠慮がちな返答に、ヤナは小さく俯き顔をしかめた。

「じゃあ、カイドーもこの街を壊したヤツと、同じなのか？」

「あ。いや、某は力技で砂漠の薔薇を奪うつもりはなかった。某は、大変な病にかかっている妹の病を治すために、砂漠の薔薇を求めていたんだ。——きつと、砂漠の薔薇を盗んだ者も、誰か大切な人のためにこうしたんだろう」

ヤナはさらに顔を大きく歪め、睨みつけるように鋭い眼差しを漆黒の瞳へとぶつけた。

「この街をメチャクチャにしたヤツを、カイドーはかばうのか？」

「違う。たくさんの命を奪った破壊者を許すことはない。しかし砂漠の薔薇は、自分ではない誰か他の人のために使わなければならぬ。だから、盗んだ者にも大切な人がいて——」

「盗んだんじゃない！ 強奪していったんだ！ みんなを殺して、街を壊して！ それに、砂漠の薔薇には——っ」

激情に任せ、罵るようなぞんざいな口調で言葉を吐き出していたヤナは、口にははいけないことを言ってしまったかのようにふいに口をつぐんだ。

他人の言葉を途中で遮っておいて、途中で発言を止めてしまったヤナに対して海棠は眉をひそめ、

「砂漠の薔薇には、何だ？」

言葉の続きを促した。

「——何でも、ねえよ」

ヤナは低い声音でぶっきらぼうに呟き、海棠の瞳から逃れるようにして黄土色のサラリと乾いた砂の上に視線を落とす。

海棠は疑うように双眸を細め、静かな声音で問う。

「おぬし。砂漠の薔薇の何を知っている？」

「……………。何にも、知らねえよ」

「——口を割らぬ気が。…………ま。言いたくないのならば、無理な詮索はしないでしょう」

「ああ。そうした方がいいぜ、カイドーさん。…………この世には、知らない方がいい真実もあるってもんだ」

ヤナは視線を下げたまま、ため息のような小さな吐息をついた。

燃え盛る太陽が、刺し貫くような熱を発する。地へと降り注ぐ日光は、容赦なく人々の身体を焼く。

砂と瓦礫に埋もれる崩壊した砂漠の街。そこに立つ二つの人影は、双方とも黙っている。空気はからりと乾いているというのに、何故かその場の空気はじつとりと重みを持ってるように感じられた。それは絡みつく汗のせいであるかもしれないが、二人の表情からこの場が緊迫していると感じ取ることができる。

「——ときに、ヤナ君」

二人のうちの一人——フードを目深にかぶり、口元から鼻にかけてを布で覆っている青年、海棠が重苦しい沈黙をあっさりと切り裂いた。

「何だよ」

「某と、旅をしないか？」

先ほどのぴんと張り詰めた系の様な空気からは想像もできないほど、あっけらかんとした海棠の声に、

「……はっ？」

驚きと戸惑いを入り混じらせた顔で、ヤナは素早く地面から顔を上げていた。海棠の穏やかな光をたたえた黒い瞳と、ヤナの困惑に歪められた鳶色の瞳がぶつかる。

「ああ。共に旅をするといっても、この砂漠を越えた先にある街までだ。ここにいてもおぬしには、その、住むところがないだろう？」

「まあ……。そう、だけど」

ヤナは再び視線を砂の上に落とす。鳶色の瞳が、淡く陰りを帯びた様に見えた。

海棠は鋭くヤナの微妙な感情の変化に気がつき、空元気な声で言葉を発する。

「ならば、次の街でおぬしの引き取り手を見つける。まあ、引き取

り手といつても、孤児院になるんだが……。某は、おぬしを引き取る孤児院を探す手伝いをする。どうだ？ この提案は」

「どうだって言われても……。その……。ここではもう暮せねえし、ありがたい申し出だけだよ……。その、カイドーと旅をするんだよな？」

迷っているようなヤナの言葉に、海棠は小さく首を傾けた。その漆黒の瞳は、何故か面白そうに笑っていた。

「何だ？ 何か不満か？」

「え……。つと……。ああ！ もういい！ カイドー。次の街までオレ様の護衛をさせてやる。感謝しろ」

ヤナは頬を薄紅に染めながら、良く言えば威勢よく、悪く言えば偉そうに海棠へ右手の人差し指を突き付けた。

ヤナの上から目線な態度に半ば呆れながらも、海棠は確信するように頷く。

「では某が、しっかりと次の街まで送り届けよう。確か、商業が盛んな豊かな街だったな」

「ああ。砂漠の商人がよく訪れる街だ」

「そうか。——それからもう一つ。旅を共にする代わりに、砂漠の薔薇を奪った者の情報を教えてもらいたい」

先ほどまで浮かべていた笑みをかき消し、真剣な表情で海棠はヤナへと話を持ちかける。海棠の問いに、ヤナは一瞬眉をよせた。

「え？ それは、でも、オレは何もそいつのことなんて知らないぜ？」

「しかしおぬしは、先ほど某と犯人の容姿が違うと言っていたな」

「まあ、な」

「ということは、おぬしは犯人の容姿をある程度はしっているということだな？」

「まあ、な」

「それならば、犯人の容姿だけでも教えてもらいたいんだ」

今や海棠の顔には、神妙な表情しか浮かんでいない。

「……それが分かったら、カイドーはどうするんだ？」

「某は、砂漠の薔薇を求めている。おぬしから犯人の容姿を教えてもらい、もしその容姿と合致する者がいたら、某は何としてでもその者から砂漠の薔薇を貰う」

「どうやって？」

「……できるならば、話し合いで解決したいが、無理ならば——力づくで奪うつもりだ」

海棠の瞳が、陰りとも殺意ともつかぬ不気味な闇に覆われる。

低い海棠の声音にヤナは戦慄を感じ、背と頬に冷や汗を流した。

「——ま、カイドーの役に立つならそれでいい。でも、カイドー——死ぬなよ」

「おぬしに心配されるほど、某は弱くないと信じている」

「過信は怪我のもとだって、親父から教わったことがある」

「そうか。忠告をありがとう」

海棠はふつと瞳の闇を和らげ、ヤナに微笑みかける。ヤナは僅かに目を見開いた後、視線をそらすようにしてふいっとそっぽを向いた。

「さつ、さつさと出発するぞ。早くしねえと昼間になっちまう」

「ああ。……ヤナ君。本当に、これで良いのだな」

唐突に神妙な声を上げた海棠に、ヤナはきょとんと視線を返す。

「良いのかって……何が？」

訝しげに問うヤナに対し、海棠は気落ちするようにして肩を落とした。

「ここを離れ、次の街へ移り住むことが、だ。少しも迷いはないのかと、某は言いたいんだ」

ヤナはああと手を打ち、あっさりと言う。

「んなことかよ」

「んなことって、おぬし」

「オレはもう、ここに未練なんざねーよ。確かに今まで住んできた街を離れるのは辛いし、自分だけ生き残ったって事実、なかなか

受け止められるようなもんじゃねえよ。けどさ……せつかく、生き延びたんだ。オレだけでも生きてかなきゃ、死んじまったみんなに叱られちまうよ。だから——生きるためにオレはここを離れる」

小さな子供のものとは思えない、ゆるぎない決意と悲壮をたたえた立派な瞳。煌めく鳶色の瞳に真つすぐ見つめられている海棠は、ふいににっと笑いヤナの髪をターバンごと乱暴とも思える手つきでかき回した。

「ぎゃっ！ 何すんだよッ！」

「ははっ。小さき愉快な子よ。その決意、某は気に入ったぞ。おぬしは——某の妹の瞳に、とても似ている」

ヤナは少々不機嫌そうに、しかしほんの少し喜色を灯してクスリと笑い短い小豆色の髪の上からターバンを巻きなおした。

海棠は微笑んだまま、ふいに瞼を下ろすと布越しに時間をかけて大きく息を吸った。乾いた熱い空気が、海棠の肺を満たす。微かな音をせわしなく立てながらフードは風に揺れ、痛いほどの日差しが砂漠に降り注ぐ。

しばらく瞳を閉じたまま、海棠は荒涼とした街へ黙禱をささげる。ヤナは僅かに頭を下げている海棠を見習って、自分も同じように瞼を閉じた。

沈黙の時間が緩やかに流れる。風と砂の流れる音に満たされている、崩壊した街。太陽はくつきりと濃い影を、砂の上に作り上げていた。その時、ふいにすべての音が止んだ。先ほどまで流れていた風さえも沈黙する。

——それはまるで、街が風が砂がすべてのものがこの惨事を憂い、瓦礫の街へ黙禱を捧げているかのようだった。

s c e n e 36

静かな砂漠に、風が再び流れ始める。音が戻り、砂が流れる乾いた音や布が揺れる微かな音が蘇る。

「……さて。行くか、ヤナ君」

「——ああ。行こう、カイドー」

瞼を上げた海棠は、自分の胸部ほどまでしか身長がない小さなヤナを見、瞳を開いたヤナは小さく微笑んで視線をそらすように俯いた。その小さく細い肩が、ふいに震える。小刻みに身体を揺らすか弱いヤナの姿を、海棠は僅かに目を見開いて憂いを帯びた表情で見つめる。

静かな時間が流れる中、震えるヤナの頬から小さな水の玉が転がり落ちた。雫は太陽の光を反射して煌めきながら落ち、乾いた砂にほんの少しの水分を与えた。

僅かに色濃くなった砂へ視線を落とした後、俯いたままのヤナを見て海棠はふっと笑う。

「何だ？ 泣いているのか？ 水分は取っておけよ」

おどけた口調でヤナをからかうように海棠は言葉を発する。水が大変貴重になるこの砂の地で、水分を無駄にするようなことはできない。

海棠に茶化されたヤナは、むっとして顔を上げる。その顔は、僅かに赤い。

「うつ、うるせえ！ 砂が目に入ったただだッ」

「ふうん。そうか」

海棠はにたにたと笑い、ヤナはむすつとしたまま不機嫌そうに海棠を見上げる。

「まあ、おぬしがそう言うのであればいい。——では。そろそろ出発するぞ。ちゃんとついてくるんだぞ。某は、方向感覚だけはいいいんだ」

自信満々に明朗とした声音で発言した海棠を胡散臭げに見つめながらも、ヤナは小さく口元だけで笑う。

「ンじゃオレは、方向感覚に自身があるというカイドーさんに、道は任せるとしよう」

ヤナは海棠へと向けている顔に、晴れ晴れとした笑みを浮かべた。その顔にはもう、涙は欠片も存在していなかった。

ヤナの笑顔を認めた海棠は小さくしかし強く頷き、陽炎を揺らめかせながら漠然と広がる砂漠を歩み始めた。砂につく大きな海棠の足跡を辿りながら、ヤナは海棠の後ろを歩み始める。

「——なあ、カイドー。さっき？砂漠の薔薇には——？って言いかけてた言葉の続きだけだな」

ヤナは前方を行く海棠には聞こえない囁くような小声で、ぼつりともらす。

「実は——砂漠の薔薇には、自分の欲のために使える方法があるんだぜ。カイドー。お前は、それを知ってたか？」

「うん？ 何か言ったか？」

ヤナの低く小さな声を僅かに聞き取った海棠は、肩越しに振り返って怪訝そうに問う。

「——いいや。何でもねえよ。ただの独り言だ」

ヤナは首を振りながら誤魔化し、駆け足で海棠の隣に並んだ。

水分を微塵も感じさせない砂漠。瓦礫があちらこちらに点在するそこに、大きめのものと小さめのものの二組の足が、並んでへこみをつけていた。へこみは風に流される砂によってかき消され、やがて完全に見えなくなる。

*

*

*

夜闇に浮かぶ美しい蜜色の月は、完全な円形よりやや欠けている。歪んだ円形の様な形をした月は金色こんじきの煌々と光る部分と、クレータ―を形成している影の部分とがはっきりと分かれていた。空に光を放ちながら浮かぶ月は、満月のときほどではないにせよそれに近いほど明るい月光を、闇に覆われてた砂上へと落としている。月の光は、瓦礫と化した砂漠の街をくつきりと浮かび上がらせる。

「フフフツ。ずいぶん派手に壊してくれたじゃない？」

「そうですね。まあ、いかにも彼女らしいですが。大聖堂を壊していないというのもまた、彼女らしいですね」

「すでに壊された街に関心や興味など必要だ。とにかく、今はあいつの手がかりを探すんだ、ファイヴ、ナイン」

「……おなか、すいた」

荒れ果てた街の残骸の中。そこに、四つの影があつた。四つの影は全員、薄汚れた白いローブをフードをかぶって纏い、砂よけの布を口元に巻きつけている。

「はい、はい。もうー、いつもマジメさんなんだからー。セヴン
はー」

「ファイヴ。その語尾を伸ばす口調は止める。ベタベタして気持ち悪い。ついでに、無駄に多い言葉数も減らせ」

ファイブ、と呼ばれた二十代前半に見える女性は、毛先が緩く巻かれた長い栗毛を揺らしながら、セヴンと呼んだ男性を振り返る。その拍子に、首からかけている色とりどりの宝石で飾られたペンダントがファイヴの豊かな胸の上で躍り、月に反射して矢のような鋭い光を放った。

ファイヴは妖艶なほど真っ赤な口を尖らせ、視線の先に立つセヴンを睨む。

「個性を尊重することは、とっても大事なのよー？ 分かんないのー？」

「そのセリフをお前が言っても、自己中心的な考えを持った奴が自分のいいように、もっともらしい言葉を並べ立てているようにしか聞こえないのは、オレだけか？」

肩に軽くかかるほどの、男性にしては長い銀髪と切れ長の目を持つ、長身で瘦躯そうくな体つきをした二十代半ばほどのセヴンは、ため息交じりに言葉をこぼす。

「奇遇ですね。実は私も、自己中心的な考えを持った人が自分のいいように、もっともらしい言葉を並べ立てているようにしか聞こえなかったんです」

「ひつどいじゃなあい、二人ともー。セヴンはともかく、ナインまであたしの敵ー？」

ナインと呼ばれた、黒い長髪と静かな眼差しをした十代後半ほどに見える少女は、その目にかけている黒縁眼鏡の位置を右手で小さく上下させて直し、丁寧な口調を崩さないまま淡々と言葉を紡ぎ始める。

「確かに個性は大切です。しかし、あなたの場合は都合のいいように言葉を使っているだけではありませんか。それでは言葉が可哀そうです」

「えー。ひどーい！ あ！ ねえー。シックスはどう思ってるのー？」

艶めく栗毛を揺らしながら、ファイヴはシックスと呼んだまだ幼い少女を振り向く。シックスは柔らかな白髪のショートボブをした、十歳になっているかなっていないかというほどの幼い女の子だった。シックスへと期待を込めるファイヴに、セヴンは冷ややかな視線を浴びせる。

「シックスが、まともな意見を言うわけないだろう」

「五月蠅いわねー！」

ばつさりとセヴンに言われてしまい、ムキになるようにファイヴは口調を荒げ反抗した。

「あなたが五月蠅いんですよ。もう夜半じゃないですか」

ナインは呆れたような小声で呟き、星がちりばめられた漆黒の空を見上げる。

「……………」

ファイヴ、セヴンが黙したまま見つめる中、白髪の少女は、

「……おなか、すいた」

しゅんと顔を曇らせて、両手で自分のお腹を包み込んだ。

ファイヴの問いに対して的外れな答えを返したシックスを見つめ、ファイヴはがくりと肩を落とし、セヴンはふんと鼻を鳴らす。

「お遊びはここまでだ。そろそろ仕事に戻るぞ」

セヴンのその一言で、個性云々の話は打ち切りとなった。

それまで天を仰いでいたナインがふいに視線を下ろし、虚ろな眼差しでぼんやりと虚空を見つめるシックスを見る。

「——シックス。彼女の匂いは残っていますか？」

ナインの問いかけに、シックスは首をふらりと持ち上げ、くんくんと小さな鼻をひくつかせた。

やや上の方を向き、鼻を上下させていたシックスはふいに視線を下げた。虚ろな表情のままで、シックスは操り人形のような不自然な動きで、ことんと首を傾ける。フードの下に隠れる白髪が、さらに揺れる。

「いっぱい、する。ちの、におい」

「……じゃなくてー。それは死んだこの街の住人たちのにおいじゃない。ナインが言ったのは、彼女のにおいのことよー?」

ファイヴの呆れた声音にシックスは再度顔をもたげ、鼻を動かす。さほど高くない小さな鼻を小刻みに動かすシックスの姿を、ファイヴとセヴンとナインは静かに見守る。

しばしの静寂の後、シックスの鼻の動きがふいに止まる。

「する、するよ。かのじよの、へんなにおい。におい、あと、ふたつ、にんげんの、する。まじゅつしと、ただのにんげんの、ことものにおい」

思いがけないシックスの答えに、ファイヴ、セヴン、ナインは驚きに顔を見合わせる。

眉をひそめたセヴンは、物思いにふけるようにして顎に手を当てる。

「魔術師と子供……? まさか、この街の生き残りか?」

セヴンの小声に、ファイヴは顔をしかめる。

「ええー? こんなにメチャクチャなんだよー? 生き残りなんているわけないじゃない」

ファイヴの言葉に、シックスを見つめていたナインが視線を上げる。

「しかし、可能性がないと言い切ることはできませんね」

セヴンは顎に手を当てたまま、ふと思いつきを言葉にする。

「魔術師と子供の旅人が通ったという可能性もあるな」

「魔術師と子供が同じ行動をしているとは限りませんよ。無関係の二人だという可能性もゼロではありません」

セヴンの言葉に、ナインが訂正を加える。

「でもさー、シックスがおいを嗅ぎ取れてるってことは、ここに長居をしてたってことなんじゃない？　ってことは、まさかこの街の住人ー？」

「はたまた、つい最近までここに居たか、ですね。しかしこの辺りに人影はありませんし、気配も感じられません」

「ということは、やはり街の生き残りか？」

セヴンの言った結論に対し、ファイヴは口を尖らせ小さく首をかしげる。

「あたしはアリエナイと思うけど、それが妥当な考えなのかしらー？」

「もしくは、私たちのように砂漠の薔薇を求めてこの街へ来た旅人ということも考えられますね」

ナインの言葉を最後に、再び沈黙が流れ始める。

その沈黙を破るようにして、ふいにシックスが何かのメロディーを紡ぎ始める。

「おーなかいっぱいのみたーいなー。まっかなちーをーのみたーいなー。にーんげんーはどこにいーるのかなー」

でたらめな歌を、シックスはリズムにのせて小さく身体を揺らしながら、可愛い声で上手に歌う。

静かな地に静かなシックスの歌だけが流れる。

シックスの歌に交じって、ため息交じりのセヴンの声が上がる。

「……そうになると、かなり厄介な話だな。我々の目的は、彼女の殺害と砂漠の薔薇の略奪。これ以上の仕事は増やしたくないんだがな」
「げー。ライバル出現ー？　面倒くさいなー。ライバルの抹殺も仕事のうち？」

げんなりと肩を落とすファイヴ。その肩に乗っていた栗毛が、身体の動きとともにこぼれる。

ファイヴの言葉に対し、ナインは眼鏡の位置を直しつつ小さく頷く。

「そうなりますね。魔術師と言っていましたので、砂漠の薔薇の魔力を感じ取ってここまで来たのでしょうか？　もしかすると、砂漠の薔薇は今その魔術師が持っているということもあり得ますね。街の様子から見て砂漠の薔薇を奪ったのは彼女だとして、彼女からさらに魔術師が砂漠の薔薇を奪ったのであれば可能性は否定しきれません」

ナインの淡々とした説明に、ファイヴとセヴンの顔が曇る。

「もしその魔術師がライバルであれば、少しでも早く始末しなければならぬな」

「そうねー。魔術となると、かなり厄介ねー」

「大丈夫です。こちらには、空腹のシックスがついているのですから」

「わかいーちーとーやわからーいおにくーがおいしーよー。こどものほうがーいーいーなー。おしょくじへーいこーうー。アハハハッ」

高らかな笑い声で歌をしめたシックス。暗い夜空へと大きく開けられた口からは、月の光に反射してきらりと不気味に光る鋭い牙が覗いていた。

ファイヴ、シックス、セヴン、ナインは全員同色の鮮血を思わせる真紅の瞳を、明るく輝く月へ向けて微笑んだ。

蜜色に煌めく月は己が照らす地上でこれから巻き起こる、世界の破滅と人々の苦悩の物語をまだ、知らない――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4037i/>

砂漠の薔薇

2011年11月5日16時09分発行